

奇譚クラス

◆ 新しい風俗文芸誌

11



成人向
NCK

奇譚クラブ

1971

11

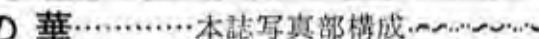
THE KINGS CLUB



11月5日 1971

定価 一〇〇〇円 (送50円)

三 隆



專の華

~~~~~女体緊縛の華~~~~~

・本誌写真部構成

堅縛女体の光と影……………銅像郭 樹 成

### ·編集部構成

一、本行在 1998 年 12 月 31 日以前，凡在本行开立存款账户的客户，其存款账户余额在 100 元以上的，本行均向其提供存款余额对账单。

~~~~~

女性モデル募集

勇敢な女性の出現を望む

○本誌の内容充実刷新のため、並に本誌の文献資料性向上のため、女性の写真モデルを募ります。本誌の女性読者の方で写真モデルとして活躍を望まれる方は、どうか勇気を奮つて

Copyright © 2004 John Wiley & Sons, Ltd.

1

での謝礼を差し上げます。

○応募されました方々の個人的な秘密は絶対に漏洩致しませんから御安心の上御応募下さい。尚その際、お好みの傾向を出来るだけ詳しくお書き下されば幸いです。

○誌上掲載を原則としておりますが、若し掲載を望まれない方がありましたら、その旨添記して下さい。御都合に依つて分譲用又は助手介添え或はプレイのみの出演をして頂きます。その時の報酬については改めて御相談に応じます故御照会下さい。

○モデルに關してのお申込みは、年令、略歴の他に身長と体重をお書き添え願います。写真と同封下されば尚結構ですが、若しお手元に適当なものがなければ、なくとも差支えありません。

申込先 大阪市住吉郵便局私書箱第41号

晚出版株式会社編集部宛

あ元写歴 改演て添掲 詳さ対

今月号のハイライト『二人のマダム』

○十一月号の誌上に登場した二人のマダムの責められていた姿を直接印刷紙に焼付けた極鮮明なフォトにて、お楽しみ下さい。

開股縛りの強烈さ

福井 桃三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
爛熟した色気に満ち溢れた全裸の肢体から滲む開股縛りの凄さ。

逆エビ責めに喘ぐ

福井 桃三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
逆エビ縛りで前面を露呈した女体が軋々として悶えるところ。

一直線の開脚縛り

福井 桃三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
踊りで鍛えた柔軟な肢は真一文に開かされて責め抜かれる。

菱縄縛りの種々相

福井 桃三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
きつちりと皮肉に喰ひ込む厳しい菱縄が悶える度に描く花模様。

抜きとるズロース

福井 桃三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
純白のズロース、それも後手に縛られた上に剥ぎとられてゆく。

遅ましき臀部強調

福井 桃三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
脂ぎって肉の乗った臀部を惜しげもなく晒して緊縛女体は行く。

後手縛りを見せて

福井 桃三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
身動きの出来ない厳重な後手縛りで全裸の姿態は羞恥にもがく。

赤裸々な羞恥責め

福井 桃三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
剃貝のように前面を晒し或は両脚を高々と挙げ徹底的に責める。

悦虐涕泣のポーズ

福井 桃三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
縛られた全身からにじみ出るM愛好マダムの涕泣を見よ。

柔肌に喰ひ込む縄

福井 桃三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
牝豹のようなしなやかな肢体も縄によっていびつのようになる。

高手小手縛り哀感

江口 淑三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
マダム淑子の裸身のすべてを緊縛によってあからさまに暴く。

苦悶するエビ縛り

江口 淑三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
女体の神秘を探る縄は油汗を流させながら体臭をかきまくる。

翻弄されるマダム

江口 淑三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
縄尻を握られて振り回される縛られた女体は法悦境を彷徨う。

愁いある目と猿轡

江口 淑三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
歯と歯の間に猿轡を噛まれたマダムの目は妖しく輝く。

悦虐天国への階段

江口 淑三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
床の上に投げだされた女体は、みずみずしい芳香を放って泣く。

いたぶられる媚態

江口 淑三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
まかせきつた全裸の女体は縄の媒介によって火と燃えたぎる。

紅閨へのいざない

江口 淑三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
向うに見えるのは閨の室か猿轡の白さも鮮かにマダムは濡れる。

後手高手小手三態

江口 淑三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
変幻きわまりなきポーズの型に依り高手小手の縛りも変化する。

開股縛りの醍醐味

江口 淑三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
手摺りを利用した開股縛りによって女体の魅力がたまらない。

強烈股間縛り点描

江口 淑三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
双臀に深々と埋まれるように喰ひ込る股間縛りの見事な描写。

強烈足吊りの苦痛

江口 淑三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
厳しく締めつけられる縄にも増して揃えた足を吊られる激痛は凄く。

T字型生理帯着用

深田 菊三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
T字型の生理帯を着用し始めより終りまでを連続写真に纏めた。

前開型バンド着用

深田 菊三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
前開き式のメンスバンドを着用しているところを連続撮影した。

◎御注文はすべて前金にて略号御記入の上、大阪市阿倍野局私書箱第14号天星社宛お申込み下さい。送料当方負担にて急送致します。

女子大生前田真知子天然色緊縛フोट

本誌上に姿を現して以来、その手記と共に非常な人気を博しました。美貌の女子大生前田真知子嬢のカラーフオトは、広くファンの方々から要望されていまして、この新しく特写の機会を持ちましたので好事家のお目にかけます。

柱縛りと脚挙縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
前田真知子 略号八〇〇円
肉づきのよいふくよかで美しい太腿を引き上げられて柱に全裸で縛られたM女の本領をあらわす。

麻縄高手小手首縄

大手札三枚一組 一〇〇〇円
前田真知子 略号八〇〇円
黒ずんだ麻縄が真白い柔肌に喰い込んでピンク色に染まった美しいカラーでまた格別である。

荒縄強烈エビ縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
前田真知子 略号八〇〇円
トゲトゲとした荒縄で情容赦なく強烈なエビ縛りに責められたば流石のM女も白肌を赤く彩る。

荒縄悦虐羞恥責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
前田真知子 略号八〇〇円
赤い絨氈の上に荒縄でぎゅぎゅと縛られた全裸の女体が芋虫のように浅間しくうごめいている。

悶える強烈海老責

大手札三枚一組 一〇〇〇円
前田真知子 略号八〇〇円
高手小手に縛られた上二つ折りに屈曲させられた女体は秘所もあらわに畳の上を転々と悶える。

柔肌をくびる縄目

大手札三枚一組 一〇〇〇円
前田真知子 略号八〇〇円
正面と側面と横臥と、その姿勢は変れども全裸の美しい女体に厳重に掛った縄目はむごたらしい。

緊縛女体をいびる

大手札三枚一組 一〇〇〇円
前田真知子 略号八〇〇円
身動きも出来ない縛られた裸身を目の下に思ひつかまされ、たぶるのS男子の本望である。

羞恥を晒す女体柱

大手札三枚一組 一〇〇〇円
前田真知子 略号八〇〇円
立柱に棒縛りになった女体は、加虐者の思いのままに、その嗜虐心の欲望の犠牲となつて哭く。

◎右に掲げました総天然色のカラープリントは、美人女子大生前田真知子嬢の一糸まとわぬ緊縛フオトばかりです。必ずや女体緊縛フオト蒐集家の方のお気に召すものと信じます。

☆深田菊子浣腸悦虐責めフェチフオト

〔悦虐浣腸写真〕

溶液を圧入される

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号八〇〇円
エネマと硝子シリンドラーで浣腸液を圧入される時の姿態と表情。

全裸で受ける浣腸

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号八〇〇円
三種の浣腸器具でお尻を突っ立てたあられもない姿で施す浣腸。

イルリの嘴管挿入

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号八〇〇円
二千CCのイルリガイトルからドクドクと注ぎ込まれる溶液。

刺す浣腸器の恐怖

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号八〇〇円
百CCの硝子製ポンプの先端がズブリと突き刺さる浣腸の恐怖。

自ら施す浣腸悦楽

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号八〇〇円
強制されて自分自ら浣腸器を握って施す浣腸の羞恥と被虐悦楽。

体内に奔流する液

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号八〇〇円

尻つき出した四つ這いで浣腸液はグングンと体内に奔流する。

浣腸を楽しむ美女

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号八〇〇円
羞かしい浣腸もやがては自ら慰め楽しむ悦の小道具となる。

〔オシメ着用写真〕

オシメからカバー

大手札十二枚一組 二〇〇〇円
深田 菊子 略号八〇〇円
浣腸のあとオシメを装着する。ム製のオムツカバーを装着する。

おムツに排便する

大手札十二枚一組 二〇〇〇円
深田 菊子 略号八〇〇円
オムツを当ててカバーを着けるまでの段階を順序を追って見せる。

生ゴムのオムツへ

大手札十枚一組 一八〇〇円
深田 菊子 略号八〇〇円
ヌメヌメとした生ゴムのカバー。オシメとの奇妙な組合せ。

◎以上発表しました浣腸写真の要望によりまして、フェチア種のS Mに興味をもち、深田菊子嬢を悩まして作成しました。郵便局私書箱第14号天竺社宛へ、略号記載の上、どうぞ。



黄 泉 鳥・画

女体緊縛の美しさ

奇ク主催の読者座談会に出席したとき話題が『女体緊縛の美しさ』に移り、私は「縛られた女の美しさは、諦めきった表情、即ち諦観美にある」と語ったことがある。参加した十人ばかりの出席者の面々が語った言葉も私には極めて興味深かった。

ある者は「猿ぐつわに口を掩われた女の目なざしに哀れさ」を感じ、また、ある者は「厳しく縄で縛しめられた肢体に被虐の悲しさ」を見出していた。それは哀憫美であり、被虐美の発見であった。「可弱く美しい女に対する縄による残酷な仕打ちには象徴的なもの」という意見から残酷美を解する人もあった。

集まる者、すべて「女に対する縛りの美しさ」を愛し且、求めている者ばかりなので勢い、その語り口には我田引水的なものが多かったが、「女は縛ってこそ益々その美しさを発揮する」という意見が当然のことながら圧倒的だった。

「何故、女は縛れば美しく見えるのか」また「何故、女を縛りたくなるのだろうか」という疑問についても、いろいろと話し合ったが、私は「むごたらしさ」の中に包含している象徴的な残酷美に憧れるのではないかと思っている。

(勝浦春雄)



第一楽章 アレグロ

奇ク誌上でもかなり有名な先輩M氏に連れられて、石原道代さんを初めて撮ったのは、まだ桜の咲いている頃だった。SMが生甲斐だといって、エネルギーにその道にはげ

石原道代の四楽章

マゾヒスチックレディ

ロマン派生

んでいるM氏と違って、ロマン派の私はどうも不徹底のところがあり、経験回数も、M氏に遠く及ばなかった。

今日の責め道具を一杯詰め込んだカバンをさげてM氏と二人待ち合わせの場所に向かう車中で彼は、石原さんについての予備知識を少しばかり話してくれた。石原さんが、とても知的な美人であること。良いところの奥様だったが御主人を亡くし、子供さんも居ないので気楽にピアノの個人教授をしていることなどである。

私は、そういう人が、どうして私のような第三者が同行することを承諾したのか、いや

その前に、どういう経路でM氏と知り合ったのが不思議でならなかったのだが、M氏が口を濁すので、それ以上しつこくは尋ねなかった。

約束の時間に丁度ぴたりと落合った私達は近くのレストランに入ったが、私は注文も上の空で石原さんの方をチラチラと見ながら石原さんとM氏の会話に、きき入った。

石原さんは年の頃三十才位か、大柄でシャボンと胸をはった姿勢がとても良く、容貌も服装も端正でキチンとしていて、どこにも崩れた感じはなかった。どうみても、上品なピアノの先生という感じで、これから我々二人の

前で、ひどい写真をとられる女性という風には見えなかった。ただその話し声が甘く優しい感じでセックスアピールがあり、聞きようによってはマゾヒスチックなムードをにじませていた。私達が、大急ぎで食事をとっている間、石原さんはニコニコ微笑を浮かべながら、レモンスカッシュを、ほんの少し呑んだだけで、殆ど何も口にしなかった。

「石原さんは、後のことを考えて食べないんだよ。ちゃんと覚悟をきめて来た証拠だな」
M氏は適確に指摘する。そういわれてみれば確かにそうらしい。石原さんは、緊張して胸が一杯になり食物が喉を通らないという顔ではなく、これからのことを想像して楽しんでいるような余裕が、表情に現われていた。

ホテルの入口を三人連れで通るのは仲々照れ臭いもので、私は一番後からオズオズとついて行った。女中に顔をみられるのも、なんとなく恥かしいので下を向いていたが、M氏は平気の平左である。石原さんもそれほど照れてはいなかった。

「やれやれ、汗が出て来ましたよ」

私は、部屋に入ると、やっと落着いた。

「別に悪いことをしてるわけじゃないし。三

人連れだと普通の旅行者だと思えますよ」

M氏はニヤニヤ笑いながら、そんなことを云った。

石原さんが風呂に入っている間に我々は、それぞれ持参の責め具や、撮影用品などを広げて準備にとりかかったが、M氏の持物の豊富なことには、いささか驚かされた。一寸挙げてみるとカメラ二台に8ミリ一台。ストロボにシネライト。革の拘束具を頭のとっぺんから足の先まで一揃い、ビニールのブーツから、山のような大量の縄。その上、数種類の洗腸具から医療用の肛門鏡、腔鏡、鼻鏡から開口具。その他、大小さまざまな品物が後からあとから出て来る。私の方は平凡な品物ばかりで、とてもM氏に太刀打ち出来ない。もともと助手のようなつもりで来ているのでM氏のペースに合わせることに覚悟をきめた。

風呂から上がった石原さんは、流石に一寸ためらっているのか、しきりに歯をみがいている気配である。しかし、石原さんが、今どんな気持で歯をみがいているのか想像すると急に、いじらしいような感情が湧いて来るのを禁じ得なかった。

やがて、薄い下着一枚で我々の待つ部屋に入ってきた石原さんは、先ほどの一寸取

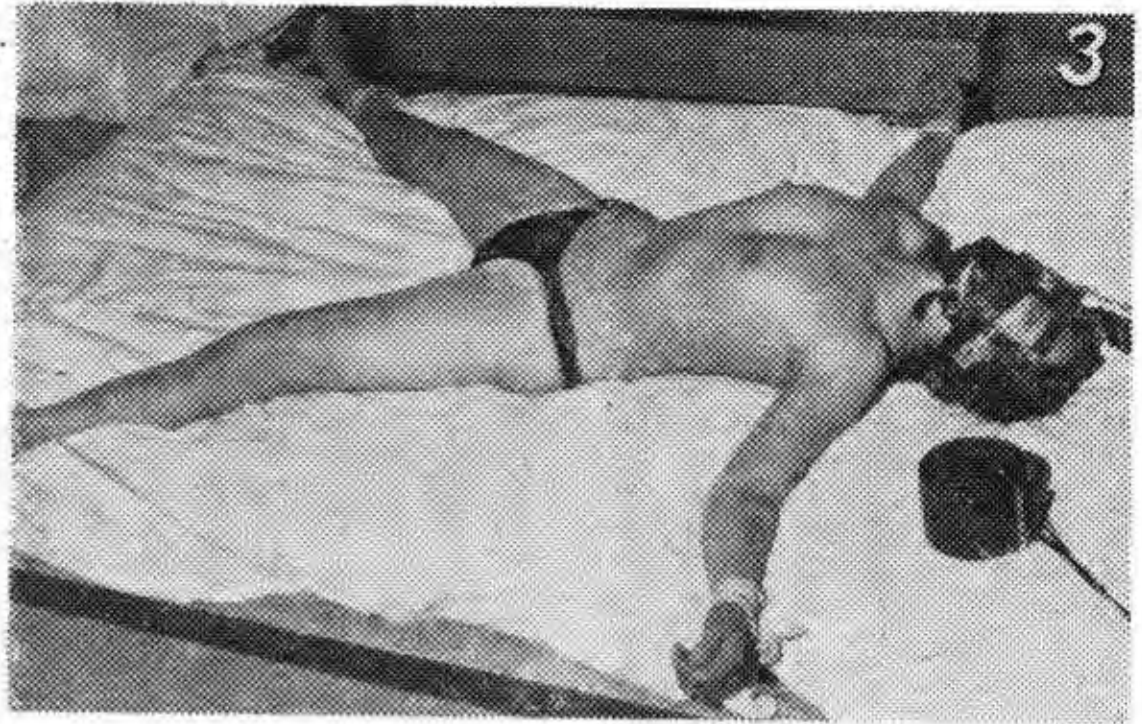
り澄ました感じと違って、ひどく妖艶な雰囲気、ただよわせていた。

「じゃあ、最初は軽いききますか」

M氏は、まず私の持参した紐を使って、下着の上から縛り始めた。

「こんな風でいいですか。猿轡は豆絞りが好





きなんでしょう」

M氏は色々と気を使ってくれる。

「そんなにいちいち気をつかつては、気分が乗らないでしょう。どうぞ私にかまわないでMさんのペースでどんどんやって下さい。私はその間に、適当に写真を撮らせてもらえれ

ば、それで満足ですから」

「じゃあ遠慮なくやりますよ」

「あのう、私にもえんりよしないで、自由にやって下さいね。そちらが照れると、私まで照れてしまいますから。普断のことは一切忘れて、お好きなようになさって。それから痛くてもそれがいいんですから、ドクターストップはなしね、ね」

石原さんにまでそう云われて、私も度胸を据えた。ようし、どんな風になっても止めてやらないぞ。

M氏が無造作に石原さんの下着をはぎとると、石原さんはウツとうめいたが、別にさからわなかった。

低いベッドに仰向けに寝かせると、四肢を十分に引き伸ばして大の字形に縛り始めた。私も負けずに反対側の手首と足首を縛った。二人掛かりで、グラマーな女体はたちまちのうちに礫にされてしまった。私の縛った縛り目を点検していたM氏が

「駄目だね、こんなにゆるくっちゃ。もっと確かり縛って下さいよ」

と云った。私としては、この辺が限度と思っただけなのにきつく縛ったつもりだが、M氏には気に入らないらしい。一旦ほどこいて、また

きつく縛り直した。石原さんはアッと声を出したが、痛いとは云わなかった。

続いてM氏は、皮の猿轡をかませた。子供の握りこぶし大の皮の袋が、石原さんの口に詰めこまれ、皮バンドが固くしめつけた。その上、鼻から頭の方にも皮バンドをかけ、あごも動かさないように固定してしまった。その間、石原さんは自ら首をもたげたりして、M氏の作業に協力している。

M氏は、石原さんの猿轡にゆがめられた頭を自分の膝の上に乗せ、鼻孔を指や舌でいたぶっていたが、やがて小さく切ったガーゼを両方の鼻孔に、詰め込んだ。口が完全にふさがれている上に、鼻孔にまで詰め込まれてはたまらないだろう。急に呼吸が荒くなる。

「大丈夫ですか」

「これ位ならば大丈夫ですよ。少しは息が通るようにしてあるから」

M氏は慣れているようだ。私は少々心配だったが、唇の色などが変わって来ないから、まあよからうと黙っていた。

石原さんの両脚の間にどかっと坐り込んだM氏は、今度は腔鏡を使った。なかなか手付きは良いのだが、横向きままで、上下逆に開いたりするので、私は知ったかぶりをして

使い方など一寸コーチをする。(写真①)

石原さんの呼吸は一きわ荒くなった。私は息苦しいのではないかと心配になり、頭をのぞき込んだが、そうではなく、早くも陶醉して、マゾの喜びに浸っているのだった。ただ先程M氏が縛り直した手首は、やはり、きつすぎたと見えて、青黒くチアノーゼになって来ているので、M氏に気づかれぬよう、そつとゆるめてやった。

M氏は腔鏡を外すと、今度は二本の突部のついた皮の貞操帯をとり出して来た。長さ十二釐ほどの太いのと、細いのの二本の皮の突部には御丁寧にギザギザまでつけてある。悪魔の不貞操帯か、天使の貞操帯かわからないが、私は、その二本の突部をコンドームで覆い、輪ゴムでとめた。それは滑らかにするためと、危険な細菌感染を避ける用心でもあったが、結局は強引さを要した。

石原さんは、しきりに体を動かそうとするが、ピンと四肢を張られているので、殆ど動けない。(写真②、③)

私達二人はしきりにストロボを光らせた。ただ、皮の貞操帯は見事にその機能を發揮して、悪い事は一切出来ないし、写真を撮っても、普通のサポーターをしているのと同じに



変わり映えがしない。そこで少しゆるめて、半分くらいずらして写真をとったが、これは公表出来るわけもない。

大の字に引き伸ばしていたしめを解くと手首、足首に、縄の跡が深く刻み込まれていた。特に先程ゆるめてやった左の手首はしびれているようで、石原さんはしきりにさす

ったりもんだりしていた。しかし、顔面に装着した革の箱口具は外してやらないので、何も訴えなかった。

M氏は、ビニールの黒いブーツをはかせ始めたが、サイズが少し小さかったのと、靴下をはいていないので滑りが悪く、二人がかりで、無理矢理にはかせたが、かなりきつかった。その上、ジッパーを上げるのも、はみで来る腓の肉を無理に押し込めながら、一寸刻みに締め上げねばならなかった。さぞ、苦しかろうと思うのだが、石原さんは一向に止めてくれと云う素振りも示さずに、むしろ自分から、なんとかブーツを履こうと協力をするくらいだった。

次に胸から腹にかけても革具で締め上げるのだが、これもグラマーな石原さんには一寸小さすぎるのを、無理して締め上げるため、ジッパーが壊れそうになる。革具の間からは白い肌が赤く染まって盛り上がって来る。両足を折り曲げてゴムロープで縛り、頭上で縛った両手とつなぎ合わせる。黒いブーツと黒いゴムロープでは写りが悪かったが、そこまで考える余裕はなかった。(写真④)

貞操帯の上から足でふんづけたり、三脚で叩いたりすると、その都度、石原さんの猿轡

された口から悩ましいうめき声がもれる。そんなところを、M氏の8ミリが追う。

ゴムロープを一旦ほどくと、革具はそのままに今度は立たせて、鴨居に、万才型に両手を挙げさせて縛った。下半身には再びゴムロープがきつく巻きついた。首に、ビルマ美人のようなハイネックの首枷をはめられた石原さんは、下を向くことも出来ない。じっと目を閉じて荒い息をしている石原さんは、もう苦痛の世界から陶酔の世界に、すっかり入り込んでしまったようだ。(写真⑤)

革具を全部外して一息入れると、石原さんは再び風呂に入った。縛られていないと、二人の男性の前に全裸の姿態をさらすことは耐



えられないようだ。

私達がフィルムをつめ代え終わっても石原さんは仲々風呂場から出て来なかった。M氏は太い長いロープを手にとると

えんりょえしやくなく、風呂場に侵入し、石原さんの両手を腕組みさせて、前手に縛り始めた。従いて入った私は、長いロープの端を持ってぐるぐると廻し、M氏の緊縛作業を手伝った。

手を縛り終えると、石原さんを仰向けに寝かせ、両足を別々に思い切り開かせて縛り上げた。M氏の好んで行なう縛り方のように、手慣れた縄捌きでぐいぐいと締め上げると、さしもの長い縄もすっかり女体に巻きつき、丁度おしまいになった。前手縛りなので、タイルの上に転がされても肉体的にはさほど苦痛はないようだが、いかにもひどいスタイルにされた彼女は、真赤に上気して視線も定ま

らないようだった。M氏は黒い紐で目隠しをすると、まず温いシャワーを全身にまんべんなく浴びせた。太い縄が水を吸ってドス黒くなり、まるで黒い蛇が白い裸身に巻きつき、締め上げているようになった。(写真⑥)

M氏はゴム製のポンプ式の浣腸器をとり出すと、洗い桶一杯の微温湯をどんどんと注入し始めた。あまりに注入のスピードが速いので一寸心配だったが、する方もされる方も慣れていくようなので、私は黙ってカメラをかまえた。恐らく二リットルは入ると思う洗い桶の湯が、すっかり石原さんの腸の中におさまってしまった。流石の石原さんも苦しうに身をよじっているが、しかしまだまだ排出する気配はなかった。M氏はシャワーを水にして彼女の下腹部に勢いよく浴びせかけた。石原さんは、身震いしたが、歯をくいしばって我慢をしている。M氏が、彼女の下腹部を踏みつけても、石原さんは、まだこらえている。M氏は石原さんの我慢強さに、何か挑戦されているような感じがしたのか、部屋から医療用の肛門鏡を持って来た。いくら強情我慢の石原さんでもこれには敵わなかったらしく、ドーンと大量の液体が排出されたが、固形物は殆どなく、臭いもさしてしなかった。

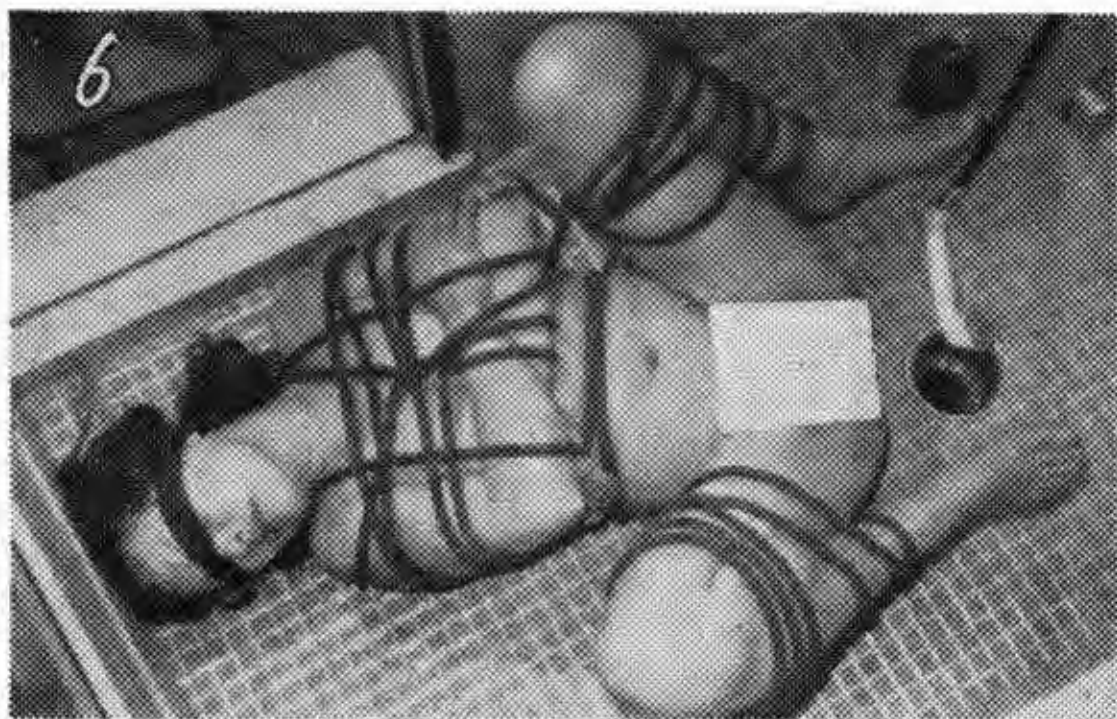
彼女は、この浣腸責めに備えて、何食か食事をとらずに来たか、或は、私達に会う前に自分で浣腸して、来たのかも知れない。これぞマゾヒスチックレディのみだしなみの極致なのだろう。本当のコプロ趣味の人は別として、多くの浣腸ファンは、あまり汚なかったり、臭かったりするの嫌いなものではなからうか。相手の、そういう気持ちまで察して、責められる準備をしてくる女性は、いわばマゾヒスチックな一種のおしゃれなのだと思う。このおしゃれこそマゾレディのレディたるゆえんかなと、内心で感服してしまった。

ともあれ、すっかりM氏のペースでプレイが進み、私は極めて消極的にアシスタントを勤めたり、写真を撮ったりしていた。M氏はそんな私に氣を使って

「えんりょしないでどんどんおやりなさい。

私だけがプレイをしていたのでは、私にとって新しいやり方が出て来ないでしょう。まあ折角二人でプレイするのだから、お互いの持ち味を出し合いましうや」

などと云ってくれる。しかし、そう云われても、細かいところで好みの違う二人が、主導権を争うようなことになっては、結局、気まずいことになるのは必定なので、矢張り主



役と脇役は、はっきりしていた方が良くと考え、その日は私の好みは殆ど持ち出さなかった。

第二楽章 アンダンテ

私は石原さんの端正な容貌と甘い声、そし

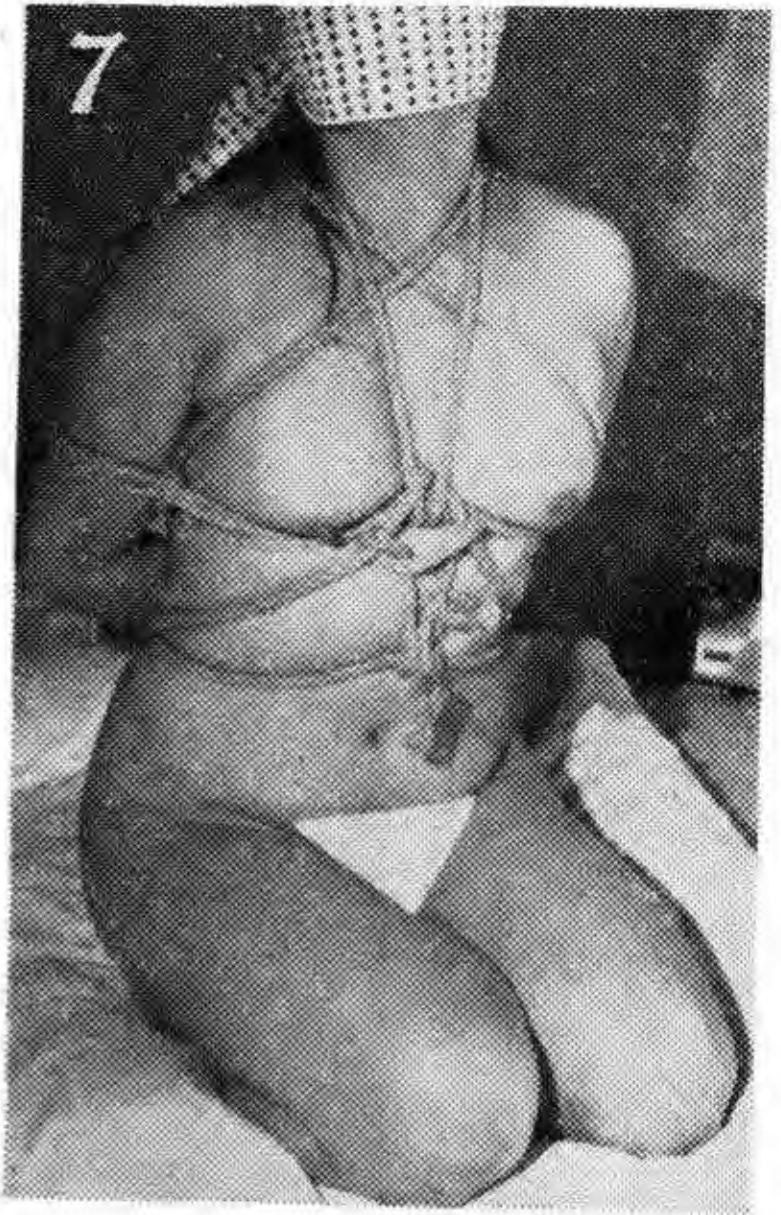
てプレイ場面での思い切った大胆さが、すっかり大脳の奥底に灼き付けられてしまった。いやそれにも増して、彼女の心の内面的なマゾヒズムにすっかり酔わされてしまい、いささか酩酊気味の数日を過ごした。M氏と一緒にプレイはとても楽しかったが、やはり脇役は主役を夢みるものである。私はM氏の了解を得て、石原さんに一対一のプレイを申し込んだ。

多少いきさつはあったが、とにかく話はうまく運んで春の終わり頃、待望の日がやって来た。その日の彼女は、僅かばかりの季節の移り変わりを敏感に反映して、明るい洋服を着ていた故か、前よりずっと若く美しく見えた。

二人連れだから、ホテルに入るのもさほど照れずに済んだし、一度彼女のすべてを見てしまったという安心感から、その日はスムーズにプレイに入って行けた。

お茶を置いて女中が立ち去ると、私はいきなり彼女の両手を後ろにねじ上げて、後ろから、ぎゅっと抱きすくめた。耳たぶに、そつと口づけをしてから、小声でささやいた。

「こらっ、お前は俺の事をすっかり悩殺してしまった。これは殺人罪に該当する。よって



今日これから、嚴重取調べの上、ひどいお仕置をするから、覚悟して神妙に致せ」

「私はそんな、だいそれた人殺しなどした覚えは御座居ません。無実です。どうぞ、お許し下さい」

「覚えがないなどと、白々しい女だ。世の中の男性を何人も悩殺しておいて、しらばくれるとはけしからん。ようし、云いたくなければ身体に聞こう。白状するまで、たっぷりといじめてやるぞ。まず風呂に入って、身体を清めて来い」

こちらの勝手なセリフに調子を合わせて、

適当に受け答えをするところなど、彼女は、仲々の役者でもある。

彼女が入浴している間に、私は部屋の作りや小道具などを考え合わせて、責めのプランを考える。あらかじめ、大凡のプラン

は考えて来たのだが、吊るのに適当な所があるかどうか、縛りに向いた柱があるか、椅子やテーブルの形はどうかなどによって、多少はプランを変更しなければならぬ。浴場の水音をききながら責め方を考え、照明の用意をしたりするのは、とても楽しい時間である。

彼女は、例によって齒を磨いてから、薄物をまもって出て来た。私は無言で、今着たばかりの下着をはぎとると、後手に縛りはじめた。細引きを乳房の下に回し、首から斜めに下げた縄で乳房を吊り上げるブラジャー型に

縛った。大きな乳房が一層強調されて見事に盛り上がった。豆絞りの猿轡を噛まずと、湯上がりの桜色の被縛体を抱きかかえて鏡台の前に正座させた。

彼女は鏡に写る自分の姿を羞らって、しきりに横を向いたり下を向いたりして、一向に正視しようとしなない。そこで私は、彼女の後から、豊かに伸びた髪の毛をぎゅっとつかんで、無理矢理に正面を向かせた。彼女は目をつぶったりするが、それでも薄目をあけて、自分の縛られ姿をチラチラと見ていた。しかし太股はピッタリと密着させ、命令してもどうしても開こうとしない。(写真⑦)

「ようし。自分で開かないなら、嫌でも開くようにしてやる」

私はあぐらをかかせて、両足首を縛り合わせる。その縄尻を首に回そうとしたが、それでは自分で鏡を見られないので、太股から腰に巻きつけようとした。彼女は私を挑発するように抵抗するが、縛れないほどひどくは暴れない。なんとか縛り上げると、再び鏡の前に引き据え、鳥の羽根のブラシで、あちらこちら、なで廻しながら何かと話しかけた。

「どうだ、ブラジャー縛りは」

「いいようです」

「何がいいのだ」

「あのう、形が」

「本当のブラよりも良いだろう。街を歩くときも、縄のブラをしている」

「はい、でも……」

「でも、くそもあるか。これは一体なんというものだ」

「あのう、おっぱいです」

「そうか、それじゃこれは何という」

「あの、おへそ」

「それじゃ、これは？」

「……あのう、猿轡をされていますから、云えません」

「こいつめ、ふざけているな。今まで喋っていたくせに」

「ムムム……」

「それじゃ、猿轡をとってやるから云ってみろ」

「あのう、あのうムニャムニャ……」

「もっと、はっきり云ってみろ」

「私のお猫さんです」

「どうやって使うものだ」

「存じません」

「これで男を殺すのか」

「違います」

「それじゃあ、これは誰のものだ」

「私のものです」

「Mさんのものだろう」

「そんな。ひどいわ」

「それじゃあ、俺のものか」

「違います。私のものです」

「この強情女め！」

とばかり、仰向けにつき倒したポーズが、写真⑧である。

彼女が所有権を主張するお猫さんの喉をな

ぜてやると、ゴロゴロとは云わないが、御機嫌斜めならざる声をあげる。

次いで両足のあぐら縛りを解き、右足は折

り曲げて足首と太股と一緒に固く、くくり上げ、左足首を縛った縄尻を鴨居にかけて、片

足吊りにしたのが写真⑨である。大型のヴァ

イプがお邪魔するのはもちろんのことだが、アヌス責めを好む彼女のために、細型ヴァイ

プの先を少々細工して、アヌス用を作って持

って来たので、彼女は昔の侍のように、大小二刀ということと相成った次第である。



彼女はしきりにうめき声をこらえようとす

るが、次第に声が高まってくる。

「あの、猿轡をはめて……」

「そんなに猿轡がお好きなのかい」

「いじわる。でも、猿轡して。ねね、きつく

きつく、お願い」

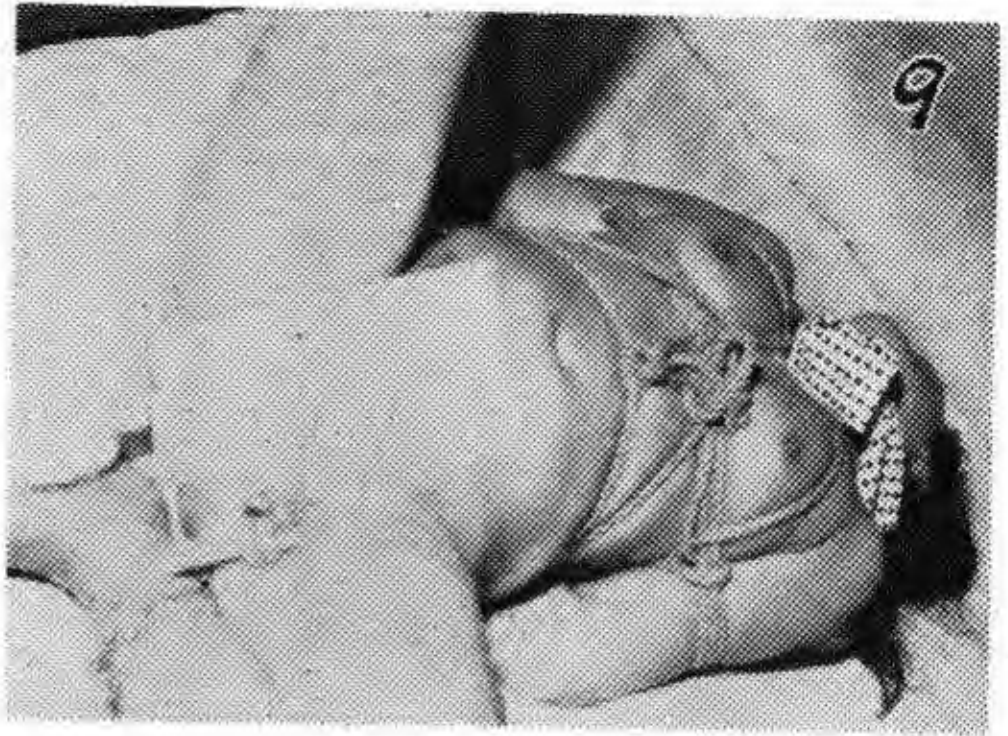
私は用意して来た脱脂綿を千切って、ぐい

ぐいと彼女の口に押し込んだ。普通、脱脂綿

は口の中にケバケバが残るので女には嫌われ勝ちのものだが、この際は彼女自ら猿轡の御

所望なのだから遠慮はいらない。十分に詰め

込んだ上から豆絞りの手拭できっちりと蓋を



すると、彼女のうめき声は大分押えられた。それでも低いうめき声と息苦しそうなあえぎが、一層ムードをかき立てる。

私は色々な角度から、彼女のあられもない姿と、悩ましい表情をカメラに納めた後は、黙ってこの素晴らしい女体の観賞に時を過ごした。

やがて片足吊りの縄だけゆるめ、猿轡を外

してやると、私は縄つきのままの彼女を抱きかかえて、色々と話しかけた。

「この前みたいに、二人の男の前で縛られるのは、どういう感じがする」

「一対一だと、相手に対して、色々と感情が湧くでしょう。それが一寸わずらわしいの。

だけど二人の前だと、もう本当の生贄にされてしまっ、何か動物にされたような感じなの。もう他のことなんか考える余地がないので、かえってM的にジーンと来るわ」

「じゃあ、もっと大勢の前で、例えばストリップ劇場みたいな所で責められたら」

「プライバシーの問題がなければ、是非責められてみたいわ」

「じゃあ二人で、どこか遠い所のストリップ劇場にでも出演しようか」

「考えるだけでもゾクゾクするわ。マゾ女、道代の特別残酷ショー、なんてポスターをベタベタ貼ってね。ううん、感じちゃう。……

でも、それが仕事となったら、マンネリになって面白くなるでしょうね。やっぱり普通断はピアノの先生で、時々こうしてマゾ女に変身する方がいいんじゃないのかしら」

「デキルとハイドだね。そうだね。僕もプロにはなりたくないな。アマチュアが、何かと

苦勞しながら君のような素晴らしいプレイメイトにめぐり合って、胸をドキドキさせながらやって来るところがいいんだな。仕事でなくて趣味だからいいんだよ。これは高尚な趣味だぞ。そうそう、この前に撮った君の写真を

持って来たよ。見せてあげようか」

「見せて。どう、よく写ってる？」

「よく写りすぎてるんだな、それが」

私は、あまりあからさまに写っているのを避けて、数枚を見せてやった。

「そっちのも見せて」

「こっちはひどいんだよ。いいかい」

「恥かしいけど、見たい」

「ようし、よく見ろ。そしてここにキスをし

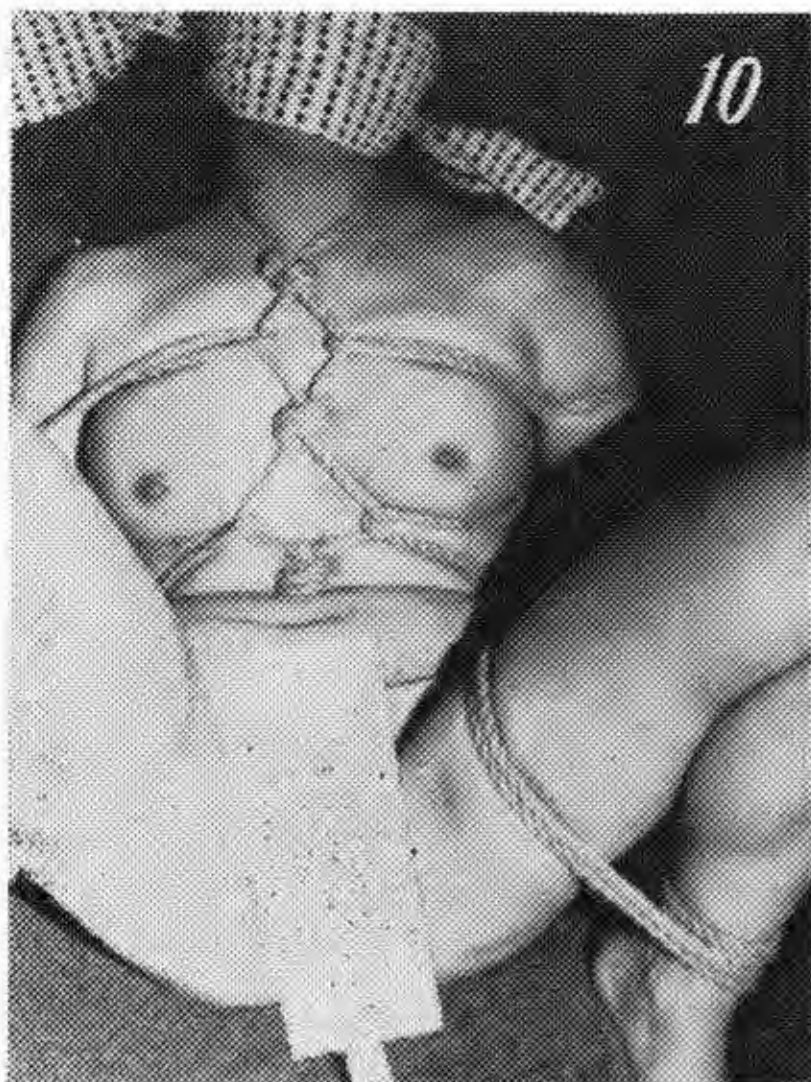
ろ」

写真⑥のようなのを何枚か、縛られたままで居る彼女の目の前につきつけた。彼女は目を伏せたり、また上げたりしながら、自分のひどい写真を見ていた。

「さ、あまり興奮がさめて来ないうちに、もう一責め、するかな」

「どうぞ。あなた様のお好きなようになさって下さい」

「馬鹿に素直だね。一対一では感情がからんでわづらわしいと云ったのは誰だ。悪いこと



を云った罪により、椅子縛り開股責めだ」

胸の縄をほどいて、まだ縄目の跡のくつきり残っている上半身を、改めて菱縄に縛り上げる。乳房の谷間に、小さな菱形を二つ縦に連ねたが、彼女の大きな乳房に押されて、下の菱形は三角形に、変わってしまった。椅子の上に坐らせると、足首と太股を左右別々にきつく縛りつける。彼女はまたしても、無益な抵抗を試みたが、その抵抗は私の力を一層強くさせる効果しかなかった。

「若し、口に脱脂綿をつめるなら、濡らして

入れてね」

「そうだな。素直にするならば、お慈悲をかけてやってもいいが、ビールで濡らすか、ウイスキーがいいか、それとも私の……」

「どうか、水で濡らして下さい」

「なに？ お小水で濡らしてくれ？」

「違います。ただの水です」

私は、水を含ませた脱脂綿をギュッと絞って、彼女の口に大量に詰め込んだ。

「さて、では試験といこうか」

彼女の間に自分の椅子をひきよせ、二本のヴァイブを交互に使って反応をうかがう。ジッと彼女の顔を見詰めると目をそらし、顔をそむけて表情を見せないように努めている。しかし明らかに目がうるみ、顔が紅潮して来る。(写真⑩)

私は彼女の縛りつけられている椅子をそのまま仰向けに倒した。下になった腕が一寸痛そうだったが、もう彼女には痛みを感じる余裕はなさそう

だった。

激しいプレイを終えてお茶を飲みながら、よもやま話をしている時の彼女は、いかにも頭がよくて、こちらの話にピンピンと敏感に反応してくる。SMにしても、社会的な教養にしてもなかなかのもので、プレイを除外して、会話をするだけでも楽しいような人柄だ。

まさに、レディ、或は、スーパーレディと呼ぶにふさわしい、上品でしとやかな女性である。このレディが、ついさきほどまで、あんなみじめな姿にされてのたうっていたとは誰も想像出来まい。

彼女を縛り上げた私自身ですら一寸信じられない気分だったが、このカメラの中に証拠が入っているのだ。夢ではないぞ、と自分に云い聞かせていた。

彼女は駅の階段の下まで送ってくれたが、そこでニコリ微笑んで、えしゃくすると、さっと身をひるがえし、未練気もなく人混みの中にとけ込んで行った。

——(おわり)——



カット・志羽 利也

懸賞入選創作

黒い血が流れる

ゆい 狷 介

押し殺したような呻き声を聞いたような気がして、目を覚ました。

そのまま再び眠りに入ろうとすると、今度は、もっとはつきりと聞こえてきた。

確かに、姉の声である。

姉は、十九で結婚して、間もない。

三十に近い姉の夫は、母の言うところでは「東大出のお役人で、エライ人ですよ」ということであった。

その頃、私は小学校に通っていたが、遊びに来て泊まっていたのだった。

始めは、姉が悪い夢にでもうなされている

のかと思ったが、隣室から明か明かと光が洩れているし、その上、時々信さん（信隆というが、母に倣って、そう呼んでいた）の低い声も聞こえる。

「しっ、聞こえるじゃないか」

囁くような信さんの声を聞いたとき、私は隣室を覗いてみる気になったのである。

眩い光の下、の異様な光景が、寝呆け眼に飛び込んできて私を驚かした。

部屋中いっぱい夜具が敷かれ、中央には程良く重ねた座布団を置いているので、そこ

だけが一段、高くなっている。

その上に、信さんと姉が、互いの頭と足を逆方向に、抱き合って呻いているのだ。

信さんは、ワイシャツにネクタイ、靴下だけという奇妙な風体で、姉は、両手を回して信さんの腰に赤いマニキュアの爪を立てている。

いつも手入れしている姉の長い髪が、波打つように揺れ、苦しげに喘いでいるのがわかるが、こちらからは、乳白色の両腿が見えるだけである。

信さんは、体を少し浮かせると、空いた方

の手で、薄いピンクのネグリジェを姉の首の近くまで、たくし上げ、盛り上がった胸を驚かすに似た。

そのまま、グイグイと締め上げる。柔らかな乳房に五本の指が深々と喰い込んで、今にも破裂してしまいそうである。

「あ、あっ、つうう……」

姉の悲鳴に似た呻き声と殆ど同時に、信さんが起き上がった。

ワイシャツを脱ぎながら信さんは、酔ってでもいるのか、少しふらついた足どりで、押入れの襖を開けると、中から、古びた黒い靴を、ひっぱり出した。

縄の束が四つ。細い革紐、タオル、すりこ木、本二冊。他に二、三の筒状の物——一つ一つを確かめるように取り出す。

その本を手にとると、せわしげに頁を繰って、あちこち写真のところを眺めている。

姉は、まくれ上がったネグリジェを直そうともせず、まるで放心したように半開きになった唇の周りが、乱れ広がった口紅で赤く染まり、その色に似た胸の二つの蕾が、呼吸のたびに大きく上下していたが、やっこのことで気怠そうに起き上がると、三面鏡を広げて手早に口紅を拭いたり、髪を直したりし始め

た。

信さんが、背後から鏡を覗き込んで、何事かを囁く。

と、姉は、悪戯っぽく微笑んで縄の束をほぐしている信さんに背を向けると、フワリとネグリジェを脱ぎ捨てて、生まれたままの姿になった。

そして、一段高い座布団の上に横坐りになって、両手首を後に回すと、軽く眼を閉じている。

まず、最初の縄が二の腕に掛けられ、ぎゅっと引き絞られるのが、わかった。

姉の丸い肩が反射的にビクッと動いた。

両手首が背中中に固定され、尚も余る縄が、ふくよかな胸の隆起を避けて、三重四重に絡みついてゆく。

「あ……あっ」

信さんの膝小僧をてこに、キュッ、キュッと締めつけられるたびに、小柄な姉の上半体が右に、左に、大きく揺らぐ。

新しい縄が背中から股間を通して、胸の谷間で結ばれた。上下の縄に締めつけられてプツクリ突き出た乳房が、よけいに大きく見える。

肩を掴んで背後に引き倒された姉は、声も

なく崩れて、仰向けに長々とその肢体を晒したのを、しばらく見下ろしていた信さんは、細い革紐をピンと張るや、意を決した表情で姉の腹の辺り目がけて一閃、打ち下ろした。小気味良く肉の弾ける音、と同時に悲鳴がほとばしって、打たれた箇所を庇うのか姉の下肢が海老のように折れ曲がる。

今度はさらに強烈に、艶めかしくも白く輝く双臀を目がけて……。

「ひいっ！ つううっ！」

ビュッと唸った革紐の尖端がどこに触れたのか、姉は、一際高く悲鳴をあげてググーッと全身をのけぞらせ、その勢いで反転するとドサリと俯伏せになってしまった。

背中に、しっかりと緊縛された手指が、空しく虚空を掻きむしっている。

間髪をいれず革紐がその背中に、そして、ふくら腔にも……。

「あうっ！ ……くくく」

姉の全身は、電流が走ったかと思うほど、一打ち毎にのけぞり、折れ曲がり、突っ張り回転して、激しく躍動する。

目を見張るようなエネルギーである。

だが、その鞭音を気にするのか、信さんは握りしめていた革紐を、まだ未練げに部屋の

隅にやった。

そして、ハアハアと肩で息をしながらも、すりこ木を手取る。

鞭打ちの余韻がさめやらぬまま、姉は、荒い息を吐いて、ひくひくと喉や鳩尾の辺りを痙攣させている。

よく見ると、その波打つ白い肌のあちこちに、数条の鞭跡が、血を噴いたように、くつきりと、あらわれている。

と、いきなり、すりこ木の先が、その朱の跡を、なぞって走った。

「ひっ、ひいっ——」

あわてて身をよじる姉を、膝頭が容赦なく押さえつけ、非情な、すりこ木が執拗に朱の跡を追う。

「たすけて……いやっ、いやあっ」

あまりの激痛に耐えかねて、ほとんど絶叫に近い。

無言だった信さんが、始めて姉の耳元で何か囁くと、姉は、眼を閉じたまま、喘ぎながらも首を横に振った。

上下の縄に締めつけられて、痛々しく飛び出た乳房——。

今度は、すりこ木の尖端が、その乳房に襲いかかるように突き立てられた。

乳首がすっかり埋没して、うっすらと静脈の浮いた乳房が、風船を歪めたような無残な形を晒している。

「いいい……ううむっ」

絞り出すような低い呻き。薄赤く色づいた肢体が、それに合わせて、くねくねと妖しく躍動する。

むしろ、そのさまは、あまりにも柔軟な肌が食虫花のように、襲いくる、すりこ木に吸いついて離れないかに見える。

眉間に、しわを寄せた姉の、せつなそうに歪んだ唇の端に唾液が光って、ゆっくりと頬をつたう。

いましめを解かれたあとも、姉は、すぐに起き上がれず、指先で軽く縄目の跡をさすっている。

その表情を見た途端、私は、おや、と思っ

た。——笑ってる！

本当に、そう見えたのだ。

つい今しがたの、地獄とも思える責め苦に涙さえ流して必死に耐える表情は、どこかへ消え失せていた。

今はただ、ぼんやりと、童女のような不可

解な笑みを浮かべている。

私は、何ともいえない気分襲われて、音をたてないように、そっと寝床にもぐり込んだ。

——姉ちゃんが笑ってた。確かに笑ってた。でも、どうしてだろう……。

今見たばかりの一部始終を、息づまる思いで頭に描き返しては、私は寝床の中で、そのことばかりを考えていた。

不思議で仕方なかった。だが、まだ姉も一緒に暮らしていた頃、姉の、そんな表情を見たような気がする。

あの日は、夏も終わりに近い、そう——土曜日。

私の家から歩いて僅かの所に、かなり大きな溜池があり、毎日のように、手製の竹竿と蒸籠瓶とを持って、モロコダの、小さな鮎だのを捕りに行っていた。

その日も、蒸籠瓶を沈めにかかったが、ふとしたはずみに手から離れて、水底深く沈んでしまったのである。

それは、私の宝物の一つであった。

ペソをかきながら、諦めて帰った私は、離れにある姉の部屋の前に立った。

まっ先に、姉に話そうと思ったのである。私は、八つも年上の姉に、尊敬に近い念を抱いていた。

涙を拭きながら、縁側から廊下に出がって障子を開け、

「姉ちゃん、ぼくの——」

と、言いかけると、

姉が、怯えたような短い叫びを發して、紺色のセーラー服の胸許を素早く掻き合わせるのが、同時だった。

ほんの一、二秒、いや、一瞬のことだったが、このとき妙に、姉の表情が「笑って」いたように感じたのである。

「びっくりしたわ。……き、急に入ってくるんだもの」

上ずった声が、喉にひっかかっていた。

見廻してみると、姉は学校から帰ったところらしく、机の上に鞆が置いてあるし、まだカーテンも引かれたままで部屋は薄暗い。

「どうしたの圭ちゃん、泣いたりして——」

その声はすでに平静をとり戻していたが、姉は、まるで沈黙を恐れるかのように次々と話し続けるのである。

「母さんは、いないのよ。保土ヶ谷に行くって。姉ちゃんもお友達と約束があるのだけど

いい？ お留守番たのむわね。……ああ暑い暑い、ほら、こんなに汗が——」

言いながら、落着いた仕草でセーラー服のボタンを掛け、スカートを直している。

私が、姉の足元に小さく丸められた真っ白なパンティを訝しげに見つめていると、それも取って、坐ったままで足に通した。

「いやねえ、圭ちゃんたら。そんなにジロジロ見るものじゃないわ。ねえ、あっち向いてよ——」

つと立ち上がったそのとき、ポトリと固い音がして、何かが姉の足元に転がった。

一瞬、姉は、さっと狼狽の色を浮かべた。が、別に何の変哲もない、細長い小芥子である。

私が、それ何？ と問いかけるより先に、「あ、駄目よ。借りものだから……お友達によ」

むきになって隠そうとはせずに、姉は、さりげなく言っただけなのである。

これでは疑惑の生じる余地もない。今思うと、実に巧みな誤魔化し方だった。

ほとんど私は、この出来事を忘れかけていたが、あの、姉の「笑って」いたような表情

だけは、妙に心の隅に残って消えなかったのである。

それが今、信さんに責め苛まれる姉の表情に、まさまざと甦って、私は、おや、と思ったのだ。

隣室の物音や呻き声は、止んでしまったわけではない、それどころか、さっきよりも、いっそう激しさを増したほどである。

暫くは、それを聞くたびに生々しい光景が思い出されて、私は、めくらめくような胸苦しさを覚えていた。

やがて隣室は寝静まったが、私の方は、窓の外が白々と明けるまで、闇を凝視していなければならなかった。

○

それから五年——

小説というのは便利である。色々なことがあっても、五年の歳月が、たったの一行で済んでしまうのだから。こんな真似はスーパーマンといえども出来まい。

ともかく私は、高校に進学し、受験勉強に追われながらも、暇をみては、古本屋で怪しげな本を漁る毎日が続いていた。

しかし、半ば飽き、半ば惰性であった。小さい頃見た、一葉の挿絵ほどの感慨も、

なかったのである。

それは、たしか「デカメロン」という表題のついた月刊誌で、一頁目位のところに、大きく白黒で印刷されてあった。

——地下室らしい場所で、天井から太い鎖が垂れ、その鉄の輪に、裸の豊満な女が両手首を嵌められて爪先立ちしている。

ただそれだけの挿絵であったが、私は、眼も飛び出るほどの衝撃を受けた。

言うまでもない。そこに、あの夜の、姉の姿態を再発見したのだ。

私は、憑かれたように、そんな挿絵や写真を探して歩いた。味気ない受験勉強の現実とは裏腹に、どうも黒い欲望が満たされぬまま、胸の内にくすぶり続け、日増しにその領域を確実にしてゆくばかりであった。

私はすでに、麗子を知っていた。

同年の彼女は、私よりもずっと大人びて見え、彼女の方から近づいてきて、そしてすぐに関係をもった。私は情けなくも、いつもリードされっ放しであった。

私に煙草を教えたのも、彼女である。

麗子は、自意識が強く、勝気な反面、粘っこく甘えてくるようなところもあって、くだらない身の上話をとりとめもなく続けては、

一人で悦に入っている。

私は、そんな麗子をもて余し気味だったのだが、水泳とバスケットで鍛えた、彼女の動物的な肉体に対する興味だけで、ずるずると半年近くも繋がれていたのだ。

そして、もう一人の少女——真由美。

彼女は幼馴染みに近い。一年下である。

市の有力者の一人娘で、いわゆる深窓に育ち、幼い頃は、めったに家の外に出ることもなく、たまに見かけても、必ず付き人が一緒であった。

まるで、人形のようなイメージがあった。

とても私には縁のない娘だと思っていた。

偶然に再会した電車の中で、私がそのことを話すと、彼女は、

「ユミも一緒に遊びたかったの」

と、いくらか寂しげに微笑んだ。

自分のことを「ユミ」と呼ぶ癖は、そのままだし、抜けるような色の白さも変わっていない。やはり、どこか甘い匂いの漂う、人形であった。

私と真由美は急速に親しくなっていた。

それに反比例して、麗子から心が離れてゆくのは、どうしようもなかった。

ある日、私は思いきって麗子に電話するこ

とにした。

そして、期末テストが近づいていること、二人共まだ学生で、いつまでもこんな関係を続けてはいけないことを、少し改まった口調で、言った。もちろん、真由美のことには一言も触れずに。

受話器を置くと、少なからずホッとしたものである。だが、麗子を、いや女を、私は甘く見すぎていたのだ。

それからたったの二日後に、麗子から電話がかかった。

「あ、圭一君？ あたし……仲井真由美じゃなくって悪かったかしら。ウフフ」

私は自分の耳を疑った。彼女が、知る筈のない名前を、はっきり口にしたのだ。

この二日間、彼女は血眼になって、それを調べたに違いない。

「知ってるんですよ。あなたとのことを話したわ、全部よ。彼女、泣き出しそうだった。フフフ……ねえ、聞いてるの？ 今、彼女もいるのよ」

「ええっ？ ど、どこにだ！」

「いつもの神社よ、来るのね？」

「よし、すぐ行く」

いつもの神社というのは、私と麗子の秘密

の場所である。私は、夕暮れの道を一目散に走った。

勝ち誇った麗子の顔と悲しげな真由美の顔が、交互に浮かんで消える。

今さら悔んでみても、どうにもならなかった。とにかく、私は走った。

神社の裏手に、人けのまったくない、大きな墓地がある。

その林立する墓石の陰に、完全に自由を奪われて身動きもできない姿の真由美が、仰向けに転がっていた。

真由美の両足が一方は古びた墓柱に、一方は鉄柵に、それぞれ薄汚れた荒縄で、しっかりと繋がれ、ほとんど極限にまで、無残に開いている。その膝から胸許にかけて、セーラー服の上下が無雑作に被せられているが、これも麗子の仕業であろう。

片方だけ脱がされた黒いストッキングが、真由美自身のパンティと一緒に、猿轡の役目をしている。そして両手首は、揃えて頭上に高々と掲げ、後方の木の幹に繋がれているのだった。

僅かに生えた腋毛が白い肌に映え、それは日頃の彼女が、決して見せたことのない、淫

靡な素肌であった。

麗子は、木の幹に寄りかかって、私の表情を窺っている。

「これだけ括るのに、もう散々だったわ。いい気味ね」

勝手に私を自分の味方と決めて、そう言った。女のエゴイズムとは、そういうものかも知れない。

彼女は、運動選手らしく上背もあり、男に劣らぬ体格だが、いかに小柄とはいえ、真由美の必死の抵抗には手を焼いたのであろう、首筋と手の甲に、ひっ搔かれた跡もあって、血が滲んでいる。

こうして縛っておいて、この場所で私としたことを、微に入り細をうがって、言って聞かせたに違いない。

もう事態は絶望的だった。

くそっ！ 何もかもこれでお終まいだ。もうどうにでもなれ。恋もクソもあるか！ どっちみち、みんな終わったんだ――

悪魔が、そう囁く。

眼の前に真由美がいる。しかも、逃げられはしない。

私は欲情していた。が、それより、麗子が今から何を始めようとしているかにも、興味

があった。別にそれを促す意味でもないが、私は、麗子に視線を送った。

と、彼女は真由美を睨みつけると、頭髪をグイと掴んだ。真由美は、臉をかたく閉ざして、ただ必死に屈辱に耐えている。

いきなり、その胸許を覆っていたセーラー服が、むしり取られる。

眩しくも胸の双房が、ブルンと躍り出た。下半身の覆いも、あっけなく剥かれた。

一瞬、体を強ばらせて彼女は、両腿を合わせようとしたが、足首に絡みついた縄がピーンと張っただけである。

手首と、両足と、三方の縄は意外なほど強靱に絞られてあって、僅かに体を振らせることしかできないのだ。

顔をそむけて、小刻みに震える真由美の猿轡の奥から、絶え間ない嗚咽が洩れる。

すべてを無防備に晒された、新鮮な処女の肢体であった。だがそれは、清純で繊細な、あの人形的な少女からは、とても想像できなかったほどの、熟れかけた「おんな」の肉づきである。

どうしようもなく自ら滲み出してしまう、そんな淫靡な雰囲気こそ、真由美は羞らっているのかも知れない。

私は、今度は意識して、促す意味で麗子に視線を送った。(オマエ、ハヤクニヤントカシテミロ、ニャロメ！)

すると麗子は、片手で真由美の髪を掴んだまま、ピシッとその頬に平手を飛ばし、その熾烈な音に自分でも、さらに火がついて、「こ、こうしてやるっ！」

とヒステリックに叫ぶや、やにわに立ち上がった、腰のベルトを抜き放つ。太くて黒光りのするビニールのベルトである。

彼女は、大きくモーションをつけて、力任せに一撃した。

「グエーッ」

獣じみた悲鳴を鼻孔から洩らして真由美は猿轡の顔を苦痛に歪める。恐怖に見開いたその瞳は、信じられないという意味にも、とれる。

そして、強烈なもう一撃――。

バシッと、太いベルト鞭が、まともに真由美の胸の上に炸裂して、その、二つの白い肉塊がプルンと揺らぐ。

麗子は、狂ったように乱打し始めた。

ウム、ウム、ウム、と掛け声よろしく、満身の力を奮ってベルト鞭を宙に舞わせるのである。身動きもならぬ同性の真由美に対して

ありったけの憎悪が込められた、凄じい形相であった。

透きとおるように滑らかな真由美の肌が、腹といわず、太腿といわず、みるみるうちに醜いミミズ腫れになってゆく。

もう、悲鳴は声にもならなかった。猿轡の口許から、クツ、クツ、と苦しげな呼吸が洩れるだけである。

その真由美の腹に片膝を乗せて麗子は、黒いストッキングの猿轡を外しにかかった。

そして、フウフウ喘ぎながら命令する。

「これぐらいでどう？　もう麗子サマの前に現われません。二度と、圭一君の前にも現われません」――さあ言っつてッ！

「麗子サマ」とは可笑しいが、本人は真剣のようである。

唾液でグシャグシャになったパンティを、

真由美は自分で吐き出すと、余程苦しかったのであろう、暫く咳込んでから、

「も、もうぶたないで……お願い。ほどいて縄を……手が……い、痛い」

か細い声で喘ぎ喘ぎ、哀願する。

「駄目っ、駄目よ！」

「ああ、か、帰して……ユミのこと許して」「駄目だって言ってるでしょ！　さあ、言っ

て。はっきりと言うのよ。それとも、もっと痛い目にあわせて欲しいの？　まだ、ぶたれないの？――」

と、麗子。

真由美は、いやいやをするように首を振ると、再び喉を震わせて泣き始めた。

「フウッ、思ったより強情ね。いいわ、そのかわり、もっと羞かしい目に、あわせてあげる。二度ともう、顔も見せられない位にね。……下品で、とっても、いやらしい女だってことを、あたしたちの前で――」

淫らに光る瞳を意味ありげにみると、言い終わらぬうちに、真由美の素肌に手を伸ばすのである。

「あっ！　いや――離してっ」

逃れようとして、縛られたまま、身を左右に揺する真由美。

麗子は、熱っぽい息を吐きながら、押さえつけるように、のしかかってゆく。

「ちっとも嫌がることないでしょ。おとなしく……ね、こうして……」

「やめて、ゆ、許してっ」

「ただの雌だってことを……こうして……」「いっ、いやあッ！」

一年しか変わらない二人が、まるで大人と子

供ほどにも隔たって感じられる。

男を知り、女のつばを知り尽くした麗子の指が、純真無垢な少女の肌を這い廻って、摘まむ、ひっぱる、捻る、こね廻す。そして、吸う。

むしろ男のそれよりも、粘っこく、嗜虐的な責め方である。

「ああっ……お願い、そんなこと……」

真由美は、必死にもがき、身をくねらせるが、もとより冷酷な荒縄はビクともしない。

キュッとくびれたその胴だけが、上下左右に激しく躍動している。そんな動作の暗示する意味さえ、少女は知らない。

「あら、いやあね。ウフフッ」

真由美の胸元に呵責の手を這わせながら、麗子は、さも愉しげに卑猥な言葉を囁き、さらに大胆な攻撃を仕掛けてゆく。

そのしなやかな指が、白く波打つ腹の上を蜘蛛のように走り降りた。

「ああッ！ か、か……勘忍……して」

絶え入りそうな哀願を洩らして真由美は、ギュッと形の良い下唇を歪め、噛みしめる。始めて知らされる、疼くような自らの肉体と必死に闘うかのような、表情であった。

すでに夕闇が辺りを包み、いつ果てるとも知れぬ微かな嗚咽と、荒い吐息だけが、唯一の現実かも知れなかった。

女同士の凄惨な闘いを眼前に、私は、痴呆のように立ち尽くしていた。

真由美を救おうともしなかった。いや、それどころか、私自身が麗子に乗り移って、真由美の肉体を蹂躪しているのかも……。

徒勞であることを悟ったのか、真由美は、もはや抵抗を止めていた。

と、みるみる顔面が紅潮し、全身が、今まではとは違い、徐々に積極的な呵責甘受の兆しを、みせ始めたのである。

何かが、まさに爆発しようとして、小刻みに震えているような、抗し難い、動きに見えた。

半開きの唇からは、断続的な呻きが、ごく自然に流れ出る。

そして、遂にギブアップ——

一瞬、真由美のその表情！

——私は仰天した。声も出なかった。全身の血が、音をたてて逆流する。

無我夢中で駆け寄ると、私は麗子の後髪を掴んで力いっぱい、引いていた。

無様に、仰向けに、すっ飛び、突然の事に

目を丸くしている麗子に構わず、私は真由美のいましめを解こうと焦っていた。強く荒縄に噛まれた、その手首から先は、すでに白く変色している。

ほどなく——背後で麗子の鳥のような叫び声が聞こえた。と思った途端、ドスツと響くような衝撃と共に、呼吸が止まった。長いこと、止まっていた。

そして、やっと少しの空気を吸い込んだとき、喉の奥で奇妙な音がした。

生温かい液体が、背中からゆっくりと横腹を廻って、じわじわとシャツを濡らしてゆくのがわかる。

真由美が叫んだ。が不思議に何も聞こえない。ふり返ろうとしても、痺れるような鈍痛に襲われただけだった。

腕の力がすっかり抜けて、自然に真由美の胸に、のめり込んでゆく。

シャツがヒヤリとつめた。

血だ——。どす黒い血、悪魔の色。……

これでいい、これでいいんだ……流れてしまえ……もっと流れ出る……そうだと……最後の……最後の……一滴……まで……。

写真はいち竹一浩氏投稿のもの

<誌上通信>— (上)

小竹一浩様まいる

夫婦プレイに想うこと

柴利好



1

八月号で小竹一浩様の愚生宛の御寄稿「奴隷妻について」衷心より有難く拝読させていただきました。私が、かねがね貴兄に承りたいと念願していた事項にし、逐一、御解説下さいました御厚情を感謝致します。

殊に緊縛による肉体上の影響、縄跡の状態について、詳しく且、具体的に御高見を拝承

できたことを喜んでおります。例月誌上を飾る数々の作品では、緊縛方法こそ微に入り、細を穿って述べられてはいるものの、その殆どが、縛り放し、締め放しです。その結果が肉体上に及ぼした影響とか、その事後処理などにまで触れた記述が、余り見られないのが不思議に思える位です。この意味からも、貴見は非常に実務的であり、信憑し得られる貴重な資料として、今後の実践や勉強に極力役立てたく存じます。

「全身ロープの撚り目の鮮やかな縞馬の様な裸身」とは、如何にも経験豊かな貴兄らしい実感の籠った適確な表現です。しかも「十年も縄を手にしていながら、じっくり観察したことも研究したこともない不熱心さ」との、余りにも謙虚なお言葉には痛み入ります。「再度の機会」を約束して下さいました御芳誼に深く低頭し、その日の到来の早からんことを否、再度といわず幾度でも御交信の栄を賜わります様に、お待ち申し上げます。

それにしても、同号二四六頁題下の写真で御見受けする、雪枝夫人の緊め肌の艶やかさの何と美しいことでしょう。矢張り本ものは違ふと、つくづく、感じ入りました。頭から顔一面に被せられたパンティーの緊張度。そして、その中で固く嵌められているであろう猿ぐつわの苦しさに歪む夫人の面ざしを想像するにつけても、単なるモデルからでは到底

受けられない感動が犇々と迫って来ます。

二四七頁の二葉では昨年投じた拙稿「SO Sドキドキイズ」の風船玉を思い出しました。締め縄で縦横に深々とくびられた下腹部の形状が、そっくりなんです。

この縄パンティーは奴隷タイム用の普段着でしょうか？ それとも何か特別のお仕置用なのでしょうか。若しかしたら奥様は、このパンティーを穿いた（締めつけたといった方が良いかも知れませんが）俤で外出したりなさるのでしょねえ。

2

「奴隷妻」という言葉は、人それぞれの受取り方に、多少ずつ感覚的な差違があることは当然だと思います。夫婦間のS・M生活を、プレイそのものに重点を置く見地からすれば、「奴隷」の語感が、非常に重々しく、のし掛かって来ますから、ドライで甘美な悦虐という思考から外れた感じがします。そうかといって「スレイブプレイ」では、プレイの語感が強過ぎる故か、いささか陽気過ぎて、今一つ、マゾヒスチックな情緒に訴える要素が乏しいようです。

全てを捧げ尽したM妻自身の立場からすれば、「奴隷」という語意、語感から連想される諸々のイメージが、一層、そのM性向の発展、高揚に役立つと思われれます。何故なら、

進んで全日制奴隷に甘んじられる女性にとって「奴隷」という言葉は、その持つ非情冷酷な本質的意味とは裏腹に、憧憬的、情緒的で、ロマンチックな響きさえ持つと思われるからです。橋本二郎氏の主張に見られる「奴隷妻に於ける夫への奉仕の観念」とは、単なるプレイ妻に止まらない、心底からの恒常的奴隷妻意識であると解釈されます。

小竹様御夫妻は、プレイの新鮮さを保つために、今では鎖や縄の二昼夜以上の常用を避けた「定時制」を堅持なさっておられるそうですが、その事由の各項目は、何れも一々御尤至極と首肯できます。このことでS M日記の中で雪枝夫人に対する激しい緊縛が、二昼夜を限度として終了していたことが良く諒解されました。一口に二昼夜といえれば簡単なようですが、実際に四十八時間も縛られ放しにされるのは、どんなに苦しいことでしょう。夫人のM性が偲ばれる所以です。

ところで、山本富子夫人の場合は、どうでしょう。夫人は胴鎖の痕跡が、素肌に沈着することに反って欣びを感じられ、締めつけの苦しさや、肌の痛みさえも耐え忍んでおられる様子です。その上、富子夫人は、小竹兄が御指摘になった「社会生活に伴う諸心配」とも、真っ向から対決なさいました。これは勢いの赴く処、避けられない過程であり、この

懸念さえあります。それにも拘らず、己むにやまれない夫人のM性の業の、何と凄まじいことでしょうか。

これら、お二人の悦虐生活を比較して見ますと、所詮は定時制奴隷妻と、全日制奴隷妻とは別箇のものとして、区別して考えるべきではなからうかと、思うようになりました。一般論として私は小竹兄が実行しておられるプレイライフを当然のこととして納得支持致します。けれども、さりとて山本夫人が辿っておられる、殉教的とさえ思われる一途なスレイブライフの尊さを、否定し去る決断もつき兼ねます。これは私自身が本質的にはMであり、且、M女性に対する熱烈な讃仰者だからなのでしょう。少なくとも、私には、この「奴隷妻」という言葉の中に、本来の意味合いとは別箇な、甘美なニュアンスが感じられ限りない、魅力を覚えすにはいられないのです。

3

吊るし責めに於ける、縄掛けの強弱に関する小竹兄の御卓説には、流石、兄なる哉と敬服致しました。雪枝夫人に対する吊るしに至る過程での、細やかな御配慮と、その実行の逐一は真の悦虐プレイヤーにして初めて行ない得る秘術であり、情愛の深さに他ならないことであらう。

前号「吊るし責め」の中で私が「縛り方が緊くても緩くても吊ってしまえば縄目の苦痛は同じである」と、突き放して申しましたのは、単に緊縛の物理的一面のみを強調し過ぎており、正直、言葉が足りませんでした。少なくとも当然、一言、触れなければならなかったプレイヤーの心理的重要性を顧慮することを忘れ、直接的な肉体上の影響にばかり気を取られておりました。深く不明軽卒を恥じる次第です。尚、このプレイヤーの心理の重要性については、後段で述べます。

処で小竹兄が逆吊りをなさる場合、一本のロープで吊るさず、必ず両足、別々に縄掛けなさる用心深さも諒解されますが、私は逆吊りの一方法として、副縄を一本、使って事故防止を図っていますから、御参考までに御披露しますと、被吊者を梁の直下に立たせた時副縄で胴を緊縛して腹部で縄止めし、その縄尻を梁に掛けて、立った俥の姿勢で半吊るしの状態にします。そうして置いてから、本吊るし用の縄で両足首を揃えて縛り、梁に縄尻を渡して引張ります。この本吊り縄を引張る過程で、両足が上に引き上げられ、身体は一旦、副縄で仰向けの胴吊りになって支えられますが、空中で一回転するというわけですが被吊者の手を予め自由にさせ、この副縄を被吊者自身に持たせて、身体を持ち上げるようにさせ乍ら本吊り縄を引き絞ると、吊り上げ

の作業が、なんの苦労もなく、楽々と逆吊りを完成することができる関係で、私は専ら愛用しています。ただ、副縄を使うと、外見上一本縄の吊るしのような美観は得られませんから、それを望む時には、逆吊り完成後、副縄を外し、降下の時に再び副縄を締めるようにしていますし、自縄自縛による逆さ吊るしを、楽しむ場合も応用しているわけであります。

4

全ての縄目が柔肌に埋没する程の厳しい雪枝夫人への緊縛に対して、小竹兄は「肥えた牝豚なので皮肉に喰い込んでいくワリには耐えられるでしょう」と、さり気なく申され更に胴鎖を一カ月も締め続けるまで訓練された成果について「女性には確かに鈍感で忍耐強い」と、至って、あっさりといわれておられますが、果たして、そんなものでしょうか。

雪枝夫人は十余年の長きに亘る飼育によって、疼痛嗜好が第二の本性として身内に定着し、それが弥が上にも発情された時「中途半端にしないで、もっと思いきり緊しく縛られたい」とまで、おねだりになる程の、悦虐願望者になられているのだらうと推測致しますが、この嗜虐心理を内面から支えているものこそ、御夫君への限らない献身と純愛の真心であるに相違ないと存じます。

三月号での雪枝夫人の悦虐フォトを拝見しまして、嚴重に締めつけられた革の胸広の二つの開口部からポツカリと飛び出した乳房には、夫々の根元に深々と乳輪が嵌められており、乳首は一つ一つを細紐で縛って、重しがブラ下げられているのに、「相変わらずだなあ！」と嘆息したことでした。何故なら、嘗て四十三年十月号で拝見した乳房責めを想い出したからなのです。その時に行なわれた乳房責めの凄まじさは、他に類例がない程、苛酷に思われ、その印象が脳裡に灼きついているのです。

女性の急所を、その付根の部分で、あんなにまで厳しく絞りに絞って、それから乳首に重しまで、ぶら下げた折檻では、仮にその所要時間が、さ程、長くはないにしても、奥様の苦痛の程が偲ばれます。両乳首を細紐で繋いで、陶器製の一種の罫子を吊るした重し責めについて「罫子の重みで乳房はキューツと伸びたように見えた。ちぎれそうな、この時の状態をフォトで見て戴けるかどうか」と、兄は述べておられますね。ええ、見ましたとも！ 確かに拝見しましたよ、ブラリと樽柿のように垂れ下がった両乳房の形状を。今、旧号を取り出して改めて拝見して見ても、切なさで息が詰まるようです。その時、奥様はこの恰好で部屋中を二回りも四ツ這いで引き回され、やっと、この乳房責めを許されたと

か。

こうした折檻は、勿論、しょっちゅうのことではありませんまい。しかし、こうしたことが何回も繰り返されて行く内には、恐ろしい乳癌の因にでもなりはしないかと、それが私には心配なのです。渡部好美夫人は特に乳首責めの愛好者で、クリップや注射針で責められることで、強度のエクスタシーを得ておられる様子です。それでも、辻村氏によるクリップ責めでは「乳房が干切れそう。クリップをとって」と悲鳴を挙げておられます。そして、阪東太郎氏による同氏夫人へのクリップ責めでは「痛みが頭のとっぺんまで走るようだった」とのルポを拝見しています。伊藤晴雨翁は、女体の単なる緊縛についてさえも、縄は乳首を避けるようにと諭されておる位、そこは女性の急所なのです。雪枝夫人が、細引で幾重にも巻き絞られた御自分の乳房を、心から愛しむように両掌で握っておられる、如何にも心配気な御様子を拝見するにつけても、こうした激しい折檻が将来、業病の因になりませんように祈らざるを得ません。それにつけても、巴里のある踊り子は、両乳首に穴を明けて鎖で繋ぎ、それを呼び物にしているそうですが、世の中には大変なM女性もいるものですねえ。

健康上の問題に関連して今一言、述べさせて戴きます。その肉体が、どんなに緊縛に慣

れ、苦痛に耐えられる超能力を備えている場合であっても、過度な緊縛が遠因になって、健康を害することは当然、考えられることです。雪枝夫人の胸腰部に喰い込む縄目の緊しさを拝見しながら、下半身の血行停滞がもたらす、「静脈瘤」の顕現を恐れます。「静脈瘤」は殊に膝の裏側辺りに良く出る、ある程度老化の必然的現象の一つかも知れません。が、美容の上からも、そうしたことが起こらない今の内から、下肢の体操を常時、根気よくお続けになれば、相当程度の効果が挙がるのではないかと思います。

こんなことをいうと「やれ縛れの、責めろの」といふ乍ら、今更、忠告めいた事をいうなよ」とお叱りを受けるかも知れません。けれども小生位の年配になると、それだけ身体のこと、何にも増して、気掛かりになるものなんです。これを要約しますと、次第に激化するプレイと健康の維持との接点を、何処に求めるかの問題です。これは、各プレイヤーのSM嗜好と、体力の限界との兼ね合いです。から、個人差が甚だしく、一概に決定推論できる訳ありません。その意味からも、貴御夫妻が早くから定時制を堅持されている事実

5

SM Pといい、奴隷妻といい条、虐められ

苛げられる側としても、当然そこに精神的喜悅や肉体的快感が伴わなければならないのは当然で、そうでなければ、プレイともいえず被虐の生活に堪え切れるものではありませんまい。

近頃、とみにSM技倆を積まれた阪東氏も「夫婦プレイは互いに楽しみながらでないという意味がない……性に合ったプレイ」をすると言言しておられます。同氏は、この温かいプレイ信条があればこそ、当初は全くM性のなかった奥様を、たった一年の短期間で立派に飼育に成功されたのでしょう。嘗て藤村美香氏は、継母の折檻に耐え乍ら「苛酷なお仕置を受けながらも、辛抱は無理に我慢することではなく、喜んで耐えてゆくこと」であると悟られていました。この方の経験は、SMプレイとは異質のものではありませんけれども、このM女性の悟入の精神こそ、奴隷妻の生き方に対して多くの示唆を含むものではないかと思ひます。

そこで雪枝夫人に一つ注文があるのです。羞恥に甘え、悦虐に酔い、御主人への愛に咽ぶ真の奴隷妻ならでは味わい得ない一女性としてのお氣持を、是非共、拝承致したく存じますが、御承知戴けないでしょうか。これについて小竹兄からも、何分のお口添えを賜わりますようお願い申し上げます。

(未完)

含 頭 礼

オーケストラの演奏が終わると、人々は、おそろおそろ、顔をあげた。

有明が、一寸、手を振って見せた。

表年寄という役名、つまり表の王宮（マスタートの公殿）を管理する責任者——といっても、まだ三十になっていないであろう、美しい女性が立ち上がって言った、

「マスタートのお許しが出ました。皆さん、夫々の席でお楽にしてよろしいということでございます」



第三十八回

居並ぶ文武百官は、始めて上体を起こして玉座の方を向いた。そして、夫々の官位に応じて、二品以上は裸女の椅子に、三品以下は片膝を立てた姿勢をとった。丁度、朝鮮の妓生などがチマの下でとるスタイルである。

俗名を伊原直子という、この表年寄は、この国での最古参であった。五年前、ネプチューン号による組織的な大量捕獲作戦がスタートするまでは、それこそ、骨身をけずる思いでコレクションが行なわれたのである。それでもそのとき既に百三十一名の女囚がいた。そして、肉体番号の制度が定められたとき、全員がA—という分類番号を刺青された。し

前号まで「有明の独裁する秘密国家では、世界中から誘拐されてきた美女が、その材質に応じて五段七階級に分類され夫々の立場で有明に絶対随順し奉仕している。第五階級E以上に与えられる肉体の自由は、数々の試練や修行にパスすることを前提とする。お手付きのジャンヌは、かつての学生運動の闘士の名に恥じない頑張りを見せて、美事、初お目見えの資格を獲得した。彼女の夢は、有明の正妻である貴和やエミー司令、その他の寵妃たちに伍し、有明のなさけを辱くすることである。しかし、この道は、まだ遠く険しい。

たがって、F—一三二号以下は五年前のコレクテッドだが、それより若いナンバーは六年以上のキャリアを意味する。A—〇二一という伊原直子の番号は、まさに誇るに足るべきもののなのである。

「只今より、断根式を終了した婢位、七名の初お目見えをとり行ないます」

玉座に向かって、跪坐のまま、礼拝した伊原直子が言った。

「まず今回、特別首席審問官を、ご依頼申し上げます。ご報告を、お願い申し上げます」

星エミー司令と同列の中段に二匹組みの第二種椅子を賜わっていた素晴らしい金髪の女性がスッと立ち上がって、玉座に最敬礼をしてから正確な日本語で言った。

「審問の結果を申し上げます。本日ここに、お召しのお許しをいただきました婢は七名でございますが、夫々、所定の手続を経まして最終審問の段階に到達いたしましたものでございます。最終審問廷におきましては本職立ち会いのもとに断根式を滞りなく相済ませましたことを謹んでご報告申し上げます」

やや甲高い、すばらしく澄んだ声音は、あ

の覆面をした首席審問官に、まぎれもなかった。

サラ・ロスタンは二十五才。若い頃のグレタ・ガルボを思わせる細っそりした美人だった。そのくせ、盛り上がった双の乳房は、日本人には到底、期待出来ぬボリュームを持っている。日本語の巧みなのは当り前で、純粹のフランス人でありながら、数奇な運命のため日本で育ったからである。彼女の両親はレジスタンスの犠牲になってノルマンディでドイツ兵に殺されてしまった。有名な上陸作戦の前日だった。彼女を助けたアメリカ人記者タイラー氏によると、まだ誕生日を迎えたばかりのサラは、乳房をあらわに、凌辱されて倒れていた若い母親の死体に、わけもなく取りすがって、無心に冷たい乳首をしゃぶっていたという。この光景は、タイラー氏にとって個人的なショックであった。彼は、これを書かなかつたけれども、それ程、彼の受けた衝撃は、ひどかったといえよう。彼は未婚だった。しかし、彼は敢てサラの養父となる決心をしたのである。故郷のアイオワに居た両親も、サラが全く身寄りのない孤児であることを知って息子の決心に賛成してくれた。かくて、サラはアイオワに送られた。ところが

タイラー氏は、次に日本に特派されることになってしまった。いろいろな経緯を省略して結論だけをいうと、タイラー氏は東京で日本女性と結婚し、日本に定住することにしてしまったのである。夫妻はアイオワからサラを連れてきて、日本で育てることにした。

サラは美しい少女に育った。立川のアメリカン・スクールでも一番、成績がよかった。大学へ行く時になって、両親は生まれ故郷のフランスで大学教育を与えようと考え、サラも喜んで、それに従うことにした。サラの経歴はフランスの要路からも大いに同情を寄せられた。彼女は政府の奨学生としてソルボンヌの政治科に入学を許された。ここで彼女はアフリカ問題に関心を寄せる。あるとき研究のためガボンを訪れて有明を知った。彼女が日本人に関心を抱くのは極めて自然だった。彼女は有明を愛してしまった。有明の妻、貴和は、すでに死んだことになっていたので、有明は表面、男やモメという次第。ただ、星恵美子を始め、ライバルが多く、サラも、その渦中で猛烈にセリ合ったものである。

そして、彼女も、父母の墓のあるノルマンディ海岸で覚悟の「水死」を遂げる。死体はあがらなかったが、海岸に残された遺書と遺

品で、それと認められた。日本から飛んできた義理の両親は、泣き泣き、その遺品を実父母の墓の傍に埋めてやった。

サラの声が続いていた。七人の名を、一人一人、呼びあげるのである。

「肉体番号D—一九六号。俗名、沢可奈。二十二才。BBABDと判定いたしました」すると、下座で松谷綾子

が沢をうながして立ち上がらせた。立ったままグルリと一回転させる。地上で体操選手であっただけに、しなやかな中に強靱なバネを秘めた女体の動きは、見ていても快い観物であった。一回りし、胸をはってフィニッシュした上で、爪先だけで跪ませる。膝頭を浮かせ、両膝を一ぱいに広げるのである。その姿勢は丁度相撲取りが仕切りを始める前に、とるのと同じであった。前に三十センチ角ぐらいの鏡が置かれた。約三十

度、傾斜していて、真中に直径三センチ程の丸い穴が、あいている。実は、この中に精密なテレビが内臓してあって、股間の大写真しを有明の手もとにある受像器に送る仕掛けである。事実、有明は沢の肉体番号、D—196という刺青文字を明瞭に読みとっていた。その上で、矢張り、ちょっと手をあげて合図をした。有明と貴和は銅クラスの婢奴に対して

声をかけることは、公式には、やらない。そこで、他の女官たちが、有明の合図を読みとって代行することになる。

「畏れ多くも《含頭礼》をお許し下さる。謹んで作礼しなさい。」

伊原が改った調子で命じた。

沢の身体に、三十度の傾きをもって正対していた鏡、その真中に、あいていた円孔から

金色の棒が十五センチ程、突き出してきた。その純金の彫刻は、正しく有明のシンボルそのものだった。余談になるが、これを作らせるとき、実物と寸分、違わないことを望んだ有明は、わざわざ立体写真に撮らせたのだという。

「サ、教えられた通り、お口づけさせていただくのです」

松谷が、側から小声で注意してくれた。

羞恥で全身を染めた沢可奈の裸身は、せきれいのように慄えていた。教え込まれたように開股爪先跪坐の姿勢をとったのだけれど、馴れない悲しさ、まことに不安定なのである。それでも、ジリジリ



とにじり寄って、黄金に輝く彫刻の先端に、身体を、ソッと触れさせるのだった。そのとき、彼女の総身から、サッと血の気が去って電気に撃たれたように緊張するのが、ありありとわかった。しかし、それもホンの一瞬であって、再び身体中、前よりまっかになったかと思うと、彼女はハッと、崩れ落ちるようにして、鏡の前に、ひれ伏すのであった。

大きな声で例の永劫隷従の誓いを唱える。さすがに、アマゾン女兵として鍛えられているだけに、多少うわずってはいたけれども、とにかく、よく通り、だれの耳にも胸を打つような真剣さが伝わっていった。三つの誓いを唱え終わると、いよいよ含頭礼のメイン・イベントになる。沢は、最初おそろおそろ黄金の先端に唇をあて、やがて、彫刻をローバに頬ばるのだった。

沢の動作が、他の六人にも微妙な反応を生じさせた。就中、ジャンヌは、嵩ぶる心の動きをどうすることも出来ない。一旦受けたマスターのなさけ、それが、この国では、どのように貴重なものであるかを痛感すればするほど、欲びと誇らしさがコミあげてくる。それが又、現実でのフラストレーションに変わって、はげしい激情が嵐のように彼女を翻

弄するのだった。沢が有明のもの（ジャンヌは、すでに彫刻と本物とを区別する冷静さを失ってしまった）をローバいに含んだのを見て、ジャンヌは思わずカーッとなってしまう。下半身が熱して、ドロドロに溶けて行くような感覚を、どうしようもなく、ただ歯を喰いしばり、顔をそむけて、こらえるのが、やっとだった。

沢可奈は、もとの座に引き下がった。

伊原表年寄が厳然とした口調で、

「マスターはD—一九六号の含頭礼を、ご嘉納下さった。これより武官府訓練連隊付を命ずる」

と配属を伝達した。

「ご命令、謹んで、お受け申し上げます」

額を床に、ぶつけながら、沢が軍人らしくハッキリした声で、お礼を言上する。

「次ぎ、肉体番号E—一〇二号。俗名、富田茂子、二十一才。B A B B Dと判定いたしました」

サラ首席審問官が報告する。

一九六五年度、ミス・ユニバース日本代表に選ばれた美人である。容貌は有明の好みではないけれども、群を抜く肉体美には文句が

つけられなかった。

沢が、やらされたのと同じことをして行かなければならない。

まず、ミス・ユニバース、コンテストの時のように一回転して、自分の裸身を、すみずみまで衆目の中に曝し、次に開股爪先跪坐の姿勢から、鏡に自らの肉体番号を映して見せる。

有明の合図を受けて、伊原が含頭礼を作礼するようにうながす。そこで、黄金の彫刻を口に含む。口中の体温がバイメタルに作用して、芯部の小穴から白葡萄酒が少量、噴出してくる。いわゆる「聖液」である。それを一滴もこぼさないようにして、口を離すのである。

彼女は伊原から、

「これより表下使いを命ずる。お係りは夕霧のお局様」

と、いいつけられた。

銀クラスの宮廷女官は総称して「お女中」と呼びならされている。一人の上臈が夫々、局（ツボネ）を持ち、その局に、すべての女官や婢奴が属することになる。別に、定員も定数もないが、現在のところ十二局があって源氏物語の巻の名を冠する仕来りである。

局の居住区、長局は上臈を首長とする共同体で、マスターおよび貴妃の命令以外は不可侵である。すなわち、長局の統制は上臈の権限であり、このため或程度、賞罰権も認められているのである。

ワ
ル
ツ

次に呼び出されたのは、橋本志保という津田塾英文学科在学中のところを攫われてしまった十八才の可憐な美少女だった。まだ十分に発達していない乳房。やや固目の腰線は少々ボーイッシュな、シルエットをつくっていた。拒むことを許されぬ、この国の掟に、シクシク泣きながらも、定められた通りするしかない。

橋本志保が含頭礼を済まし、もとの位置に戻ると、四番目が立ち上がった。野崎和美二十四才、名大医学部でインターン中を捕獲された。五番目が安藤敬子、二十一才の闊秀画家。六番目が月岡和子、二十才の新進歌手。夫々、命じられた作法で美しい裸身を有明に捧げる含頭礼を終わり、三人とも揃って文官府で、各々の特技を練磨することを命じられた。橋本志保は教育部に、野崎和美は佐野絹

代が部長である厚生部に、安藤敬子と月岡和子は共に学芸部と、各自の配属が定まった。

いよいよ、ジャンヌの番が廻ってきた。これは、彼女の一人合点だったかも知れないけれども、F-七五三号と彼女の名がサラ・ロスタンによって呼び上げられた瞬間、有明の目がキラリと光ったように思われた。そう思った途端、カッと全身が火照ってきた。ファッション・モデルのように恰好よく一回転しようとしたが、足がもつれ、危く転倒しそうになってしまった。思わず手について支えようとした。ところが、後手縛りでは不可能である。かえって、ますます重心を外して、若し松谷が支えてくれなかったら、とんだ赤恥をかいてしまったかも知れぬ。はずかしさに一層、素肌が熱してくる。慌てると何もかも駄目になるものだ。跪坐をしても爪先だけでは平衡がとれず、思わず片膝を床に落としてしまった。

「おちついて。しっかりするのよ」

松谷が小声で、はげましてくれた。

齒がカチカチ音を立てているのに、フト気がつく。咄嗟に、何やら激しいものがコミあげてきた。じれったいような、物狂おしい感

情の津浪が、ジャンヌを押し流した。アッと間もなく、彼女は両膝を床につけ腰をペタンと、おとししてしまった。バランスを失った故か、それとも、目に見えぬ煩惱のほむらが、彼女を駆り立てたのか。ひややかな感触が、ジャンヌを正気に戻す働きをした。呆然としていた彼女は、鏡の上に坐っている自分に気がつく、はげしく狼狽して立ち上がるうとした。ところが六〇度の角度でスッと体をひけばいいものを、逆に前方へ体を突き出したから、たまらない。それが台座を持ちあげる結果となってしまった。激痛が走って、彼女は悲鳴をあげた。

額を床に打ちつけて詫びるジャンヌから、伊原直子は、有明に視線を移した。さすがに彼は失態の原因を正確に評価していた。始めて有明が口を開く。ジャンヌには直接、声をかけるわけに行かないので、伊原に向かって話すような形になる。

「今度だけは許してやれ。あの者には私との思い出があるのだ」

「ありがたい思召でございます」

一礼した伊原が、ふたたびジャンヌの方を向いて、

「落ちつきなさい。大切な作法を乱してはなりません。最後までシャンとして作礼を続けて下さい」

たとえ、どんな事情があっても、定められた通り儀式を、とり行なうのが年寄の役目だった。だから、ジャンヌが仕出かしたような失策は許せないと思っている。有明の寛大さが不服だった。だからといって、一旦、語られた有明の言葉は絶対だった。金言だった。誰も異議をさしはさむことは出来ない。

一方、この有明の言葉は、ますますジャンヌの慕情を、えぐる。伊原直子に向かって言ったという形式ではあっても、当然、彼女の耳に入る。婢奴のお目見得にマスターが口添えをすること自体、どんなに破格のことか、今の彼女には痛い程、わかっていた。ドツとこみあげてくる涙を、どうしようもなくなっていた。泣きむせんでいては、誓いの言葉を唱えることが難しい。タドタドしく、それでもヤットのことで宣誓が終わる。伊原は不明瞭な暗誦の仕方に不満ではあったが、有明の気持を察して大目に見ることにした。

涙と鼻水を拭くこともできず、見栄も何もかなぐり捨ててオイオイ泣いているジャンヌを松谷が、やさしくうながすのだった。

後手縛りのまま膝行して、黄金彫刻の先端に唇を近づけてゆく。少し、すっぱかった。切なくなつて涙がもう一度あふれ出てくる。そのとき、口の中に葡萄酒が射出された。ジャンヌの口一ぱいに香しい甘さが拡がっていった。有明が手元のボタンを押すと、無線仕掛けで数ccの酒を誓願者の口中に噴射できるようになっている。

伊原直子が立ち上がって、うやうやしく玉座に最敬礼をすると、

「これをもちまして、D—一九六号ほか六名のお目見えを終わりました。わたくし共一同ありがたい思召しを帯して、この者たちを受け容れ、いっそう、み心に叶うよう、訓練いたすことを、お誓い申し上げます」

と言上した。これも決まり文句ながら、新しいメンバーを育てる責任は、古い者に負わされているということが、よくわかる。

有明が微笑みながら、深くうなずいた。七人の方へ向き直った伊原が、有明に代わって申しつけた。

「おまえたちに、五体の自由を許す」

松谷が素早く動いて、七人のいましめを解放した。長いこと、後手縛りに馴らされてき

た連中だから、かえって自由になった手のやり場に困ったような風であった。

「さあ、おまえたちは人間になった。立ち上がらなさい。そして歩いて行きなさい」

玉座に向かって平伏していた七人は、やがて立ち上がると、松谷に先導されて退出して行った。

これで婢位七名のお目見え式は終了したことになる。

今日の式では銀のクラスへ進む者がなかった。ひきつづきFオペレーションの論功行賞が行なわれた。

武功第一は、いうまでもなくエミー司令、星恵美子だった。しかし、貴妃たちは、すでに、最高の名誉と権力とを享有しているので改めて進級するなどということはない。それでも、中世スペイン製の宝石をちりばめた素晴らしい宝剣が贈られることになった。マスターの持物を拝領するのは大変な名誉だった。感状を意味する金メダルも授与されたが、それに宝剣を与えた旨が刻みこまれていた。同時に、スイス銀行の個人口座に、百万スイスフラン（約八千三百万円）が振り込まれたことが発表された。地上に帰ることのない女官

たちに、地上の金を与えることは無意味のようであるが、これにも、有明の深い読みがある。第一、人間固有の所有欲を無視することは必ずしも得策ではない。第二に、これはアイロニーではあるが、地上で豪奢な生活を送るに十分な金を私有させてやると、彼女等は不思議に、地上に心移さなくなる。第三に若し有明が死ねば、この国家は解散されるかも知れない。そんなとき、地上へ帰った女たちが先ず、必要とするのは金であろう。第四に、スイス銀行の預金は勿論、匿名で各人毎に作られているが、各人のサインの他、有明のサインでも引き出せるようになっていているから、刑罰を受けた者などは、容赦なく、とられてしまうのである。

三品以上の高官の賞勲は、階を登って、有明、手ずから授けられる。エミー司令は一旦階下で伏礼をしてから、壇を上がり、有明の



爪先に唇をつけ、さらに、本当の含頭礼をする。これが許されるのは一品以上に限られている。

高橋副長は三品相当の中佐から、二品相等の大佐に昇進し近衛待従官を命ぜられた。これは彼女が、最もエリートコースを進んでいると見てよい。彼女も矢張り、金メダルを授与され、一時金五十万スイスフランを下賜された。彼女の資格では、有明の爪先に接吻を、するところまでである。

高橋淑子は感激のあまり、美しい頬を濡らしていた。たとえ、爪先であっても、兎も角、マスターの身体に触れることが許されたからである。ひきつづいて、数名の将校にメダルと一時金十万スイスフランの下賜が発表され、有明に代って、エミー司令がそれらを授与した。

玉座の階下から、一メートル毎に含頭礼を作礼する位置が定めてあり、夫々、一品、二品から、五品にいたるまで、段々と遠ざかってゆく。婢位者が含頭礼をす

る位置は、さらに下がって六メートルになる
ということとは前述した通りである。

最後に有明の訓示があった。全員が起立し
て傾聴する。

「わが国の女どもは、悉く美しくなければならぬ。身も心も美しくなければならぬ。美しいということは健康であることを意味する。

健康であるためには、鍛えられなければならぬ。鍛えるということは、責められるべきことである。美しい女体は、責められるべきことである。美しい心は辱かしめられなければならない。諸君らは私のこの意思に副って、女ども

の材質を向上させる責任がある。そして諸君ら高級幹部は、その師表とならねばならぬ。いつもいうことではあるが、幹部諸君は、清く、賢く、美しく、所得を求めず、ただ努力

精進せよ」というターゲットの実践者でなければならぬ」

有明の言葉が終わると、全員が平伏して異口同音に、

「おお、マスター！」

と叫ぶ。

その声が一堂に響いている間に、伊原表年寄が、

「尊いみ教えを守り、われら一同、一層、努力精進いたします」

全員を代表して奉答するのである。

ニコニコして伊原に向かって、うなずいた有明は、ガラリと調子をかえて、

「皆の者、堅苦しい儀式は終わったぞ。これからは愉快に、くつろぐがいい。立ち上がってよいぞ」

ホッとしように人々が緊張を解いた。

裸女のオーケストラが静かにワルツを奏ではじめた。文官と武官が夫々向き合った二列が出来た。そして、その列が割れて、音楽に乗って動きはじめた。

曲は、チャイコフスキーの舞曲「ファウス」から、武官が男役となり、文官が女役としてリードしながら、ゆるやかな旋回を繰り返して流れて行く。

廷臣、又は高官と称せられるのは、この国では三品までの官位の者をいい、その人数は

①府中（宮廷府）

イ、表（おもて）十七名

一品 年寄1、上臈2

二品 中臈6

三品 客会訳4、目付2、唱頭2

口、奥（おく）十五名

一品 年寄1、上臈4

二品 中臈4、風呂頭1

三品 御次（おつぎ）10

ハ、東の対（ひがしのつい）十一名

一品 年寄1、上臈2

二品 中臈4

三品 御次4

ニ、エスデルの対 八名

一品 年寄1、上臈扱7

②文官府 一品長官1、二品部長4、三品課長10 合計十五名

長10 合計十五名

③武官府 一品幕僚長1、二品大佐5、三品中佐15 合計二十一名

中佐15 合計二十一名

以上、八十七名が現状である。この他、四品以下の表女中が、これにサービスをすることになる。その数三十六名（お錠口6、小頭10、末20）

彼女たちは、或は酒を運び、或は料理を運んで、いそいそと、高官たちに給仕をしているた。

飲をなす酒宴は、音楽と酒、それに美しい裸女群像が織りなす艶めいた色気に、次第に熱っぽさを増し、いつ果てるともなく、続いていった。

懸賞応募レポ

ハンブルグの

白い女王

前田 和穂



カット・矢川祥彦

ザンクト・パウリ警察の横の怪しげなバーや飲食店の立ち並ぶ、だらだら坂を上りつめストリップ劇場の角を曲ると、そこに「ヘルベルトシュトラッセ」つまり「飾窓の街」の青い鉄の扉があった。

有名な青い門には白いペンキで文字が書かれていたが、ものの本によると「未成年者立入禁止」とあるのだそう。そう思ってみると、そうとも読めるドイツ語であった。

私は、しばらくの間、その前に佇み、白い文字を眺めながら、ある種の感傷にふけていた。考えてみると、ここまで随分、長かった。日本とドイツとの距離も勿論そう。しかし、もっと長いのは、時間または歳月の話

である。性に目覚め、やがて自分の内に潜むM性を自覚してからでも、すでに二十年に近い。自分の求める対象が、始めは漠然とモヤモヤしたものから、霧のベールを剥がすように具体化し、やがてそれが固定化し、尋ね、探し求め出してからでも、もう十数年を経ている。しかし日本では遂に求められず、とうとう、ここ迄やって来た。表面的な理由とはにかく、今回の旅行の真の唯一の目的は「白い女王」への行脚だったのだ。ときめく胸をおさえ、私は体を扉の間に押し入れた。

「飾窓の街」の第一印象は、古くそして落着いていた。くすんだベージュ色の、古い木造の二階建が道の両側にいくつもいくつも建ち

並び、その真上の暗い裸電球の街燈が、いかにもヨーロッパを感じさせた。夜中の一時を回る時刻なのに漂客は三々五々と連なり、ザワザワという、静かなざわめきが絶えなかった。女達は飾窓という名にふさわしく、大きく広い窓内で、薄暗い照明を背景に、派手だが極端に短いミニスカートから、はみ出た長い足を、これみよがしに客にみせびらかしながら、あるものは煙草を喫み、腕を組み、小さな声で誘いをかけていた。

何物をも見落とすまいと、注意深い視線を左右に配りながら、百米も過ぎた頃だったろうか。思わず「ハッ」とさせられた。真先に目に飛び込んだ黒いブーツ。そして黒いブラ

ウスに同色のスカート。派手な衣裳の女たちの間にあって、黒一色の服装は、かえって目立った。

『いた！ ついに見つけた』

吸い寄せられるように近づいたが、女はもう五十に手が届くような大年増だった。西洋の中年女に多くみられるようにビヤ樽のように肥え、ブラジャーとコルセットで、溢れるような肉を無理に押えつけていた。だが、私は悲観するどころか、逆に元気づけられた。ドミナは正しくこの街にいたのだ。希望に励まされて、更にゆっくりと歩み続けた。

街の出口の扉までに、長靴をはいたドミナ達は三、四人ぐらい居ただろうか。そして最後の一人は、出口のすぐそばの飾り窓の内にいた。横をむいた彼女は、静かに近寄った私に気づいた様子はなかった。

淡い光に照らされた彼女は、二十五才前後に思われた。太り肉の体を包んだメッシュの黒いセーターと黒皮のミニスカート。磨き抜かれた黒い長靴。肩まで垂れた豊かなブロードの髪。そして何よりも心に灼きついたのはぐっと吊り上がった眉毛と目尻、そして真赤な分厚い唇。それらが造る顔立ちが、整ったなかに、いかにもドミナの冷たさと残酷さを

現わしていた。

私は、いったん、そこを離れた。しかし脳裏に残る彼女の面影は、長い間、抱き暖め続けてきたドミナのイメージに、そっくりだった。というよりも、イメージそのものであった。『私』のドミナは『彼女』以外にありえない。私は、そう確信した。

だが新しい一抹の不安は残った。たとえそうであっても、私の欲求を彼女にどう伝えるのか。また彼女はそれを理解し、満たしてくれるだろうか。

私は、街の出口の青い鉄扉の前で、しばらく佇んで、この新しい不安をどう解決するかを考えていた。それに、誰でもそうだろうが未知の世界に踏み込むときに必要とする決断の時間が、欲しかったからでもあった。

しかし今更この期に及んで躊躇する理由はまったく無かった。私はもう一度、彼女の窓の外に立った。きちんと真正面に立ち止まると、

「グッドイブニング」

と英語で呼びかけた。だが緊張のあまり、声がかすれていた。もう一度、

「ハロー」

と言い直した時、ものうげに、こちらに向

きを変えた彼女は、それでも

「グッドイブニング」

と答を返してよこした。

「いくら」

「三十マルクよ」

「OK」

私の答がはっきり聞こえたのだろう、彼女は黙って顎を入口に向かってしゃくると、足組みをゆっくりと解いて立ち上がった。その時に見えた長靴のつま先に打ちつけた鋲が、妙に印象的であった。

玄関の内部に入った時の彼女は外からの印象と異なって意外に暖いものだったが、すぐそばに立つと、予想外に背が高く、体が大きかった。彼女は、多分「よく来て呉れた」とでも、言ったのだろうか、何か挨拶めいた言葉をお口にすると、西洋人に特有な大きなゼスチュアで両手を拡げてみせ、大きな腕を私の肩に回して、抱きかかえるように奥の方へと導いてくれたが、昔風の頑丈で大きな鍵でドアを開けている間、私はまた、私の希望をどう表現しようかと考え続けていた。

だが、部屋に入った途端、内の様子に思わず息をのんだ。やや色褪せた白い壁には、長短の皮鞭が五、六本、柄を上にして、きちん

と吊り下げられ、その隣の木のテーブルの上には、四、五点の革製の拘束具と、その前に十本ほどの白身の枝笞が束にして置かれていた。またベッドのアームには、数本の皮紐が無造作に掛けられているのだ。

鞭、紐、責具、これらの拷問具が外に何の飾り気もない部屋にかえて調和して、初めての訪問客に無気味な威圧感と恐怖感を与えていたが、ただわずかに、ベッドの枕辺に置かれた鏡台の上の化粧品のみだけが、女の部屋らしさを表わして、こんな雰囲気と幾分か和らげていた。この部屋こそ、まさしくドミナの部屋であり、それにふさわしい小道具類であった。

先ほどの心配は、もうとくに吹き飛んでしまっていた。私は、ただ彼女の命令に従っていさえすれば何も喋らなくても、彼女自身のやり方で十分な満足を与えてくれるに違いないと確信した。

彼女に、片隅に置かれた古びたソファに腰かけるよう合図をされ、何となく落着かぬ腰を下ろしながら、私は先に問いかけた。

「英語、出来る？」

「エエ、一寸ね」

という、答があったが、彼女の英語ときた

ら、ロンドンでも、まるっきり通じなかった私の英語よりも、まだ、ひどかった。

「お酒、おごつてよ」

「どんな」

「シャンペンよ」

私は渋った。シャンペンには、ヨーロッパの各地でひどい目に遭っている。彼女自身のための費用ならとに角、酒一本で百マルクもとられる訳にはいかない。

私の様子を見て、察したらしい彼女は

「心配しなくても、たった十五マルクよ」

これを聞いて私は、とたんにOKした。

「それから、私のお金を頂戴」

私は先ほどの三十マルクを覚えていた。しかし、あえてもう一度、聞き直した。

「いくら？」

「七十マルクよ」

どういう計算で三十が七十になるのか、はっきり判らなかつた。しかし、たとえそれが百マルクでも二百マルクでも、五百マルクだって惜しむつもりは全くなかつた。私は、黙って百マルク札を差出した。彼女は律儀に三十マルクのおつりを返してよこしたが

「チップだよ」

と、十マルク札二枚を渡し直すと、いかに

も嬉しそうにお札にチュッとキスすると先ほどの百マルク札と一緒に、はりきったブラジャーの内にしまい込んだ。

注文の酒の来る間、まだ物珍しげに部屋を見廻す私に、一緒に来てみるという身振りをした彼女は、テーブルに歩みよって、そこに置かれた責具の使い方を真似てみせた。これらは広幅の皮手錠、ブラジャー様の乳枷、それに硬い皮製のコルセットなどであった。彼女はコルセットの内側に手をやると、私にも触れてみるというゼスチュアをした。そこには五ミリほどの鋭い針が、ピッシリと植え込まれていたのである。

シャンペンというにはほど遠い、不味いアルコールのグラスを一杯ずつ空けたとき、彼女はゆっくりと立ち上がって着物を脱ぐように指図した。腕組みをして私を見守る彼女の右手には、いつの間にか白い枝笞が握られ、その表情には笑顔が消えて、初めに受けた印象通りの冷たく厳しいドミナのそれに戻っていた。

鋭い監視の目のもとに一枚ずつ着物をとってパンツ一枚が残った時、ちよつとした恥らを感じた。だが、笞の先がのびて軽くパンツに触れ、それがスツと下へ降ろされた。私

は厳しい笞の意思を感じとって、羞恥心を脱ぎ捨てるようにパンツを脱ぎ捨てた。笞が黙って窓ぎわのベッドを指し、それがぐるっと廻って裸の臀に直接ふれた。ピタピタと軽く二、三回、叩かれ、まるで家畜が追い立てられるような調子で、私はベッドへと追い立てられていった。

白い清潔なシーツの敷かれたベッドに這い上がったとき本能的に俯伏せに寝そべった。が、彼女は、まるで亀の子でも扱うように手荒く仰向けにひっくり返すと、手慣れた手つきで、私のシンボルの根元を細い革紐で固く縛り上げた。ついで大きな掌で私の小さな乳房を、押えつけると、何事かを問いかけてきた。意味は良く判らなかったが、適当にイエスと返事すると、さきほどのブラジャーのよくな乳枷を肩を通して装着し、背中強く締めつけた。そして最後に、両方の手首と足首を革紐の先につくった輪に通すと、手早くベッドの四隅のアームにくくりつけた。彼女の作業は、いかにも熟練していて、それはアツという間の出来事だった。しっかりと縛りつけられた両手足、ことに上半身と下腹部の強い緊縛感が、激しい緊張感とミックスして、ある種の快感を呼びおこした。

私はフト、このようにして男が、今迄に何人くらいこのベッドに縛りつけられていたろうかと思ってみたりした。

突然に、部屋の静かな空気を破って「ヒュッ」と鋭い音がした。不自由な首をひねって音の方向を見たとき、そこに鞭をかまえるドミナの雄姿があった。

つり上がった目は、一層つり上がってみえた。長靴をふんばって左手を腰に置き、右手には、短い柄から数本の皮紐の出た房鞭が、しっかりと握られて、まさに振り上げられようとしていた。私は一瞬、目を閉じ、顔をシートの中に沈め、全身の筋肉を硬直させて、ドミナの鞭を待ち受けた。

長い長い間、想い、望み、憧れ、待ち焦れたドミナの鞭、それは甘い快いか。はたまに痛いか恐ろしいか。私は、ただひたすら、「ドミナの鞭」を待ち受けた。

嵐のような、ひとときが過ぎ去った時、壇に残った酒を飲みながら、私達は下手な英語で言葉を交し合った。彼女は日本は知っているが大阪は知らないといい、一度、日本へ来ないかという問いに「行きたいけれど何しろ遠いし、それにもっと稼がなくてはね」と言

いながら、センターテーブルの上に置かれた貯金箱を振ってみせた。そして日本人は大好きだと、お世辞もいった。

彼女の顔からは、さきほどの厳しい表情は全く消え去って、むしろやさしい微笑さえ浮かんでいた。脱ぐ時とは全く反対に、何くれとなく着物を着るのを手伝ってくれた彼女。汚れをきれいに始末してくれた彼女。痛みの残る臀を押えていた私に、大したことはない

と鞭あとを鏡でみせてくれた彼女。そんな彼女に「おふくろ」にも似た近親感を感じた私は、その大きく厚く盛り上がった胸に飛び込んで抱きしめられたい欲望をこらえて、すりへったカーペットに跪いた。そして良く磨きこまれた長靴の先に、長い長いキスをした。彼女はそんな客の態度に慣れているのか、黙って受け入れてくれ、今度は何時、来るかと問い、私が四、五日経ったら又、来れるかも知れないと言うと、必ず又こいと力をこめて握手してくれた。

掌に残る暖みと、ヒリヒリする尻の痛みとを土産に、私は人影の残る街へ出た。ハンブルグの真夏の夜は、日本の秋のように爽やかで快かった。

M

派

交

友

録

(21)

鬼 山 絢 策

カット・岡 たかし



計算外の羞恥

倉田由起さんと馬場氏の写真は、フィルム二本、撮ったけれど、最初の一本は、まるで

でも真相は、馬場氏の苦しみは、ほんものでも、それは由起さんからの圧迫によるものでなく、抑えきれぬ激情を、無理におさえるための苦悶だったのであるが、写真を見た上では、そういうところまでは分からない。

つまらないが、二本目の後半、約七、八枚の分は意外に秀作ができあがった。目をかたくつぶり、眉をしかめている馬場氏の表情がよかった。苦しみを必死にこらえる、真に迫った顔である。

ただ、全体の調子が幾分、軟調に仕上がったが、どうも昼間、撮ると、写真電球を使っても軟調に仕上がることが多いのは、どういうわけか？ しかし、由起さんの太腿が実にいい感じに撮れている。馬場氏の顔の上に、おおいかがぶさるように、稍、平べったくひろがり、その腿の陰影が異常な逞しさを見せて力感が溢れている。

腰の坐りも、いつも由起さんは最初の頃は腰を浮かし気味で、何か安定感に乏しかったのが、近頃では馴れてきて、ドッシリと、いかにも落ちついた感じで、女王の貫録を十分に見せている。

由起さんの顔は、笑顔が実に美しいが、緊張した時の表情も、きりりと締まって、サジスティックであり、下の男性の表情とピッタリ、マッチしている。

女性の尻に敷かれて陶醉している表情は、Mのフォトとしては、もっともオーソドックスであるものが、比較的、多い。だが、このように男性が苦悶し、女性の加虐から逃がれようとしている方が、この頃では却って迫るものがあるように思えてきた。

馬場氏が何故、由起さんの押圧を拒否したのかについて、私は私なりに想像し、理解したつもりだったが、あとで聞いてみると、それは少し相違していることが分かった。

ともかく写真が仕上がったので、馬場氏に電話で報せた。馬場氏は私の電話を一刻千秋の思いで待っていたらしく、今夜、会いたいと言ってきた。生憎、私はこの夜、九時頃まで用があるので明晩と言ったが、九時すぎでもよいから会いたいというので、新宿のスナック喫茶で待ち合わせることにした。

私が仕事を終わったのは十時近く、大分、遅れて約束の場所へ行ったが、馬場氏はビールを飲んで待っていた。

馬場氏は写真を喰いいるように、じいっと

見つめていた。時には傍を通る人に対する神経さえ、忘れるほどだった。

私も仕事を終わった解放感から、ウイスキーを飲みながら写真の出来ばえや、今後、もし撮るとすれば、男性のモデルとしては、こういうポーズが欲しい、といったことを話した。

私は、ここで例の、馬場氏が何故、拒否したかについて、馬場氏に訊いてみた。

「あなたの表情が、よかったですね。この表情は、ほんものですよ。誰しもピークを過ぎた直後は、虚脱感におそわれて、いつとき嫌悪に、はしるものですからね」

「ええ、いや、この時のぼくの場合、逃がれようとした理由は、嫌悪感からきたものではありませんよ」

「ほう。では、何だったんですか」

「ぼくは、ぼく自身がピークを過ぎても、女性の立場を察して、それほど嫌悪感はないのですよ。ノーマルなセックスの場合でも、すぐ女性から離れるというようなエゴはしません。このようなプレーの場合でも、女性が続行すれば、それに従って行きますよ」

「では何故、あの時、拒んだんですか」

「いや実は、お恥かしい話ですが、ズボンの

外へ、にじみ出やしないか。それを奥さんに見られるのが恥しかったからなんですよ」

Mの人種にも、羞恥はある。

いや、M派の人々は人一倍、羞恥には敏感なのである。そして、もっとも羞かしいさまを、敬愛する異性に見られて、羞恥のどん底に落ちる——それがM派の願望である。身をきざまれるほどの羞恥に苦しみながら、しかもなお、より醜いさまに身をおとしこんで行く。それがMの宿命であり、使命であると確信する。M心理とは、そういうものでありながら、一面、ある種の羞恥は絶対に秘匿したいという意思が働く場合があるのである。それは、いろいろあるけれど、M派に比較的、多いものの一つに「予想外の羞恥」がある。

女性に屈辱を受けることは、覚悟して臨んだことである。そして本人の、およそ想像していた、または期待していた羞恥に対してはよく耐え、更には、より醜態を望むのであるが、思わざる羞恥に対しては、心の準備ができていない故か、ハッと「ほんとうの羞恥」を感じるのである。

よく美女の前でオナニーをして見せる男性が居る。これはMである。

自分の恥かしい行為を見て、笑ってもらい

たいという観念が働いている。しかし、これは本人が計算して行なった演技である。Mといえども、美人の前で突然ズボンの尻が破れて下着が、のぞけて見えるような醜態をさらした場合は、顔を赤くして急いで、かくすものである。

もっともM派の中には計算外のハプニングな羞恥に対しても、瞬間的に、これをMの屈辱に切り替えられる神経の持ち主も居ないわけではない。けれども、その人には、その人なりに又、別の面で秘匿したい羞恥があるものなのである。

馬場氏の場合も、計算外の羞恥が、あらがいを示したのであろう。

しかし、私は更に言葉を継いだ。

「あなたのような心理は確かにM派に共通なものですけどね。しかし、人によっては思わざる羞恥もすぐそれをMの枠の中に切り替えられる人も居るのですよ。あなたには、それができませんか」

「サア、いま考えれば切り替えることができないように思うのですが、あの時は、どうしてできなかったのでしょうか。やはり初めてで予想外に強烈なショックを受けていたからでしょうかね」

「いや、そうじゃない。分かりました。突如あなたに羞恥感が、おそった、その原因は、ズボンのしみ、それ自体にあるのですよ」

「そりゃそうですか——」

「いや、分からないかな。つまり、興奮の絶頂から氷点下に急降下していた。その状態にあったから、羞恥があらわれたのですよ。つまり氷点下にある時、一時、あなたはMでなく、常人に立ち戻っていた。だから、もしズボンにしみが出ない時の状態であつたら、つまり、興奮時であつたら、他の突発的な羞恥に対しても、あなたは耐えられ、そしてそれをMとして切り替えられたはずですよ。だから原因はズボンのしみ自体が、あなたを、そういう心理にさせたというわけですよ」

「なるほど——おっしゃられてみれば、そうかもしれません」

私達の会話の内容は、いつも、こういった調子なのである。

人のせいにするな

馬場氏の人柄が大体わかったので、私は社の電話番号を知らせた。

すると毎日電話がかかってくるのである。

もっとも、かなり遠慮深く、私が忙しいような時は、すぐ電話を切ったが、私が仕事に疲れて、いつとき気分を転換したいと思うような時に掛かってくる電話は大変、好都合である。

彼は相変わらず二回目の撮影を、せがんでくる。

しかし私は忙しかったし、由紀さんも馬場氏に対して気乗り薄のように見えたので、お茶を濁していた。すると彼は昼休みに是非、会いたいと電話してきた。

会社の傍の喫茶店までやってきた馬場氏は「とても、いいものがありますよ」

と言って風呂敷包みをテーブルにおいた。開けて見るとそれはライカのM3だった。

当時、M3ができたばかりの時で、カメラ雑誌のニュースで知っては居たが、まだ市販はされていない時で、現物を見るのは始めてだった。

「フーム、すばらしいですね」

ファインダーを覗いてみると実に明るい。

「これ、弟のところから三日の約束で借りてきたんです。鬼山さん、これを使って撮って見ませんか」

そう言えば馬場氏の弟さんはカメラ屋で、

私も前に一台、買ったことがある。

「じゃあ、これ、商品なんでしょう。傷ついたりすると、たいへんだな」

皮のケースも、ピカピカである。

「大丈夫ですよ。これを使って傑作を撮って頂けませんか」

確かに、製作意欲をそそる逸品である。しかし私は、それよりも馬場氏の熱意に衝かれた。

こんなにまでして私を動かそうとしているのかと思うと、その一途な情熱に私も燃やされた。

「三日の間に何とか都合が付きませんか」

「いや、このカメラは、うっかり傷でもつけたら、引き取らなきゃならないから、まあ敬遠しておきましょう。やっぱり手馴れたやつの方が使いやすいですから。とにかく、由起さんに連絡してみます」

由起さんとは大抵、電話の連絡で済ませている。その日、電話して、馬場氏が是非もう一度、と言っているが、どうかと言うと、果たして気のり薄な様子だったが、久し振りで一度、会いたいと言うので夕方、銀座の白桃という喫茶店で待ち合わせた。

六月に入ったばかりで、この日はうすら暑

い日だったが、由起さんは白のレースのワンピースに真珠のネックレス、白のパンプスという白づくめの服装で現われた。上品で清楚なスタイルの、この女性のどこに、あのよう激しいSが、ひそんでいるのかと思われるくらい、別人の感じがした。

「毎日、退屈でしょう。それに、さだめし、お淋しいことでしょうな」

「何、言ってるの。会う、そうそう」

「旦那さん、いつ、お帰りになるんですしたかな」

「いいわよ、あいつのことなんか」

「便りがありますか」

「いま、ロスに居るらしいわ。ブロンドの女の子でも抱いてるんでしょう」

「ブロンドヴィナスにいじめられてるかな」

「いいわよ、もう。あいつの話は、よし、よし」

「実は、この間の馬場氏が、もう一度、是非お願いしたいと言ってるんですがね」

「フン……」

ハンドバッグから煙草を出したので、私はライターで火をつけた。

「とても熱心なんです。この間は心の準備ができていなかったの、つい、そそうして

しまったけど、今度は頑張ると言ってます」

「アハハハハ」

由起さんは男のように太い声で笑って煙を輪に吹いた。

「あたし、今日、お酒が飲みたいわ」

「そうですか。イタリア料理でも食べに行きますか」

六本木の「サンタ・ルチア」という店へ行った。ここはベルモットを主にしたカクテルの、うまい店である。

どうも由起さんは気乗りしない故か、OKしてくれない。そうなる妙なもので私は何とかもう一度、馬場氏とのコンビで撮ってみたくなった。だが、二度も切り出しているのに返事してくれないので、何とか別の手を考えようと思ったが、ふと、この間の写真の終わりの方を二、三枚、封筒に入れて持っているのを思い出した。

「そうそう。この間、撮った写真、御覧になりますか」

「イヤよ、こんなところで」

「どうします？ 気乗りしないようですね」

「それより、あなたは、どうなの？ 撮りたい？」

「そりゃ、撮りたいですよ」

「だったら、その人のせいにしないで、もう一度、撮りたいと、おっしゃいよ」

「あ、わかりました。申し訳ない。是非もう一度、お願いします」

由起さんは、いたずらっぽく笑った。ようやく御機嫌が直ったらしい。

金色の獅子頭

どうも昼間というのは気分が出ない。

二度目は、大塚のピースホテルで夜の八時から始めた。

いつも旅館の一室に三人が、おさまるまでは苦勞する。由起さんは三人で入るのは嫌だと言う。馬場氏の場合は、少し、おみきの入ってる方が調子が出るのではないかと思ったので、今夜は私と馬場氏が二人で先にホテルへ行って、一ぱいやることにした。八時近くになって、私が大塚駅前の「じゅん」という喫茶店に電話して、由起さんの来てることを確かめてから、ホテルを脱け出して迎えに行くという、ややこしい方法をとった。

今夜の由起さんは、腕のつけ根まで、あらわした黒のブラウスに黒のアカーデオン・プリーツ、黒いアメジストのネックレスと、全

部、黒づくめでやってきた。こうすると、またグッと妖艶になる。メイクアップも黒のアイライクが濃い目に入れてある。

今夜は洋室を選んだ。由起さんが現われると馬場氏は椅子から退いて、じゅうたんの上に、きちんと膝をつき、両手について平伏した。

「先日は、ほんとうに失礼いたしました」

「あら、お先に一ぱい、やってんのね」

「その方が馬場さんの度胸が据わると思っていますね」

「いえいえ、別に飲まなくても今日は大丈夫です」

「フフ……」

由起さんは小馬鹿にしたように馬場氏を見下ろして笑った。

「一ぱい、やりますか」

由起さんが椅子に坐ると、馬場氏が徳利を両手に持って、おじぎをしながら酌をする。バカ丁寧さに由起さんはクスクス笑い出す。

由起さんの相手を馬場氏に委せて、私は準備にとりかかった。今日はロープをテーマに縛りのシーンから進めてみようと思ったのでベッドの角に立っている柱を中心にして、焦点を、きめた。

「馬場さん。暑いでしょから、今日は裸になつてくれますか」

「えっ？ 裸ですか」

今日は大丈夫というから、最初の度胸だめしである。だが、口ほどにも似ず馬場氏は大いに慌てた。

「イヤ、全部でなくても、いいですよ。ブリーフは、つけて結構です」

「ぼく、猿股なんです……」

猿股とは、また古風である。馬場氏は裸になるのを躊躇した。こんなことが何で恥かしいのかと思ったが、これは、あとで馬場氏が打ち明けた話であるが、馬場氏は、この夜、この前の「腹痛」の醜態に備えて、猿股の下に、自製のプロテクターをつけて、外ににじみ出るのを予防してきたのだそうである。その仕掛けは、ズボンの上からでは分からないが、猿股一つになると、分かるのではないかと、そのために躊躇したのだということだった。

ともかく、その心掛けには感心した。

ともかく馬場氏は、猿股一つになった。膝の上まである半ズボンみたいな猿股で不恰好だったが、やってる時は猿股の下は装備は、全然、気がつかなかった。

読者ギャラリー 『最高のもてなし』 岡 たかし



馬場氏を柱にロープで縛って、由起さんは最初ブラウスとスカートのままで、木刀で殴る場面から入った。木刀の先で喉を突いたり馬場氏の肩へ足をかけて、木刀を口の中へ突っ込んだりするシーンを数カット撮ってから由起さんもヌードになってもらった。

「今日は洋室で、よかったわ。あたし、こん

なの持ってきて見たんだけど……」

由起さんは、ピカピカ金色にひかるアクセサリーを出してきた。それは、若い女の子などがワンピースのバンドに使う、金色の金具を綴り合わせたものだが、正面のところに、かなり大きな獅子の顔の飾りがついていて、その金色の獅子だけは別の飾りだったのを、

バンドにつないだものらしかった。

大して気乗りしないようなことを言っていた由起さんだが、これだけ凝ったものを手製で、つくってきている。由起さんも、このプレーが好きな証拠である。

由起さんは、最初のうちは乳房を、あらわすのを、ためらっていたが、この頃は自信がついたと見えて、平気で出すようになった。今夜は目の前でヌードになり、その金のバンドをつけた。

恰度、獅子頭が彼女の体の上に乗っかっている。

「ウム、こりゃ、いいですな。女王の権威を象徴していますね」

最初は、煙草の火で頬を焼く場面から入った。

由起さんは馬場氏の肩へ足をかけて、獅子頭をグイと鼻先へ突きつけた。

「大丈夫？ フフ……」

小馬鹿にするように馬場氏を見下ろして言ったが、馬場氏は目の上の獅子頭に威圧されて声も出ない。

私はポルモールを一本、抜いて由起さんに渡し、ライターで火をつけた。

ひと口、喫った由起さんは煙草を持ち変え

て、馬場氏の頬にもって行く。

「ほんとに、ひつつけて、いい？」

馬場氏は目をつぶり、眉がピクピクと動いた。火を押しつけられることを観念した表情だった。

「ウーム、やっぱり傍へ持つて行っただけじゃ迫らないな。由起さん、おっつけて見て下さい。火を消して」

由起さんは柱に押しつけて火を消し、頬や額に押しつけた。

「ヘイ、そんなとこですな。次へ行きましょう」

「煙草のおっつけ、終わりね」

「煙草は、そのまま喫って下さい」

消した煙草に火をつけた。

「あ、そうだ。口の中へ煙草を突っ込むところを、ひとつ行きましょう」

馬場氏に大きく口を開けてもらった。今度は、あかあかと火がついている煙草が、口の中へ慎重に差し込まれた。馬場氏の額に汗が浮かんでいる。

「ハイ、結構！」

撮り終わって煙草を口から抜き出す時、

「アッチチ……」

と馬場氏が顔を、しかめた。

「あ、ごめんなさい。熱かった？」

唇の内側に火が、くつついた。

「いいえ、いいんです。大丈夫です」

「すぐ直るわよ、こうすれば」

由起さんは獅子頭を持ち上げて、スムーズに押しつけた。

「やけどの妙薬なのよ」

昔から、そう言い伝えられている。だが、妙薬の出どころが、場所が場所だけに、あまり実験した人は少ないだろう。

煙草の火というものは、たいへんな熱度があるから、かなり熱かったろう。馬場氏がピクリと身をふるわせたほどだから、やけどしたのではないかと思ったが、由起さんのコンパが、ぴったり重ねられると、馬場氏は声も出さず、しずかに目をとじた。

「よく舐めておけば治るわよ」

由起さんは故意にやったのではないだろうが、シャッターの音が済んで気を抜いた瞬間に火が触れてしまったのだろう。だが、慌てず騒がず、当意即妙に次のシャッターチャンスをくり出して行くところなどは、由起さんも、すっかり奴隷扱いが巧くなったものである。

やる気が出てきた

馬場氏は公言通り、今夜はよく頑張った。はじめは手加減して責めていた由起さんも馬場氏が素直に従ってくるので、安心して自分の気持を、そのまま出してきた。

だが写真の上から見ると馬場氏の表情は、いまひとつ、ものたらない。多くは目を閉じて観念しきったような表情が多いのである。

「馬場さん、目を開いて下さいよ」

時々注意すると、酔っぱらった時のようなトロンとした眼差しで、目の前のものを、伏目勝ちに眺めている。

「もっと視線を上に向けて。由起さんの顔を見て下さい」

言われた時だけチラリと由起さんを見上げるが、由起さんと視線が合うと、まぶしそうに目を落としてしまう。

縄を解いて、じゅうたんの床の上で由起さんが椅子に腰かけて足で責める場面を撮ったが、これは全然、馬場氏はハッスルしない。

由起さんの腰かけている椅子の足二本を、馬場氏の胸と腹の上に乗せ、由起さんの足で顔を踏みつける場面も撮ったが、ここでも、

さのみ苦しそうな顔も見せない。

「今日は、よく我慢するわね。まだ、おなか
は痛くならない？」

馬場氏は恥かしそうに笑って、由起さんを見上げた。

「おなか痛くしても、いいのよ。なおるまで
待ってあげるから」

馬場氏の頑張りと対照的に、由起さんと私はS的になってきた。由起さんは、この前、
もろくもノック・ダウンしたのが、今夜は意
外に頑張るので、ノック・アウトしてやりた
くなった様子だった。私は私で、とりすまし
た表情ばかりでは写真に変化が出ないので、
もう少し苦しい表情を馬場氏に演技してもら
うか、それでなければ由起さんに、もっと本
気で責めてもらって、本当に苦しむ表情にさ
せるか、どっちかに注文を出そうかと思っ
ていたところである。

だが由起さんの動きに私の求めるものが出
てきたので、私はポーズの変化だけオーダー
を出して、そのまま撮り続けることにした。

由起さんは馬場氏の顔を足の間にはさんで
かなり強く締めつけた。

由起さんの太腿は、つきたての餅のように
やわらかく、すべすべしている。はさまれて

も、真綿で包まれたように快い。だが、ひと
度、力が加わると、真綿はゴムのチューブの
ように弾力が加わり、更にはタイヤのように
硬くなって締めつけてくる。

馬場氏の顔が赤くなった。やや禿げ上がっ
た頭髮も乱れ、いくらか変化がついてきた。

同時に由起さんの太腿に変化が起った。

丸味のある太腿が、スポーツ選手の太腿の
ように、例えば棒高飛びの選手がバーを飛び
越える瞬間のように、太腿の中間に凹みがで
きて、逞しさを見せてきたのである。

かなり、よい線が出てきたと思った時、フ
イルムが切れた。

「少し休憩しましょう」

馬場氏は、よく耐えているが、このへんが
潮時だと思ったのである。

「今度はベッドを使いましょう。この前、撮
らなかったから」

私はライトをパチパチと消し、セットを外
しにかかった。

「あたし、ちょっと、ひと風呂、浴びてくる
わ」

そう言えば今夜は、まだ由起さんは風呂に
入っていないかった。

馬場氏は、さすがに疲れた様子で、グッタ

リしていたので、私一人でライトの位置を取
り換えたり、邪魔な椅子やテーブルを隅へ寄
せたりした。

「今日は、よく我慢しますね」

「ええ、いや実は一回、まいってるんですけ
ど、我慢して通したんです」

由起さんが居ないと馬場氏はリラックスし
て、私に何でも打ち明ける。

「ぼくも、ちょっとセットし直してきます」

馬場氏は洋服のポケットから何やら白い布
を持ってトイレへ入って行った。新しいサポ
ーターと取り替えるためである。

由起さんがバスから濡れたままで、とび出
してきた。

「ここのお湯、ぬるいのよ。夏だからいいけ
ど、冬だったら、風邪ひいちゃうわ」

水滴を身体一ぱいにつけている。大きな湯
上がりタオルでサッサと大まかに拭き、股を
拡げて足を拭いた。馬場氏がトイレから出て
きて、チラと由起さんを見た。

ホテルに置いてある浴衣の柄が面白いので
由起さんにも馬場氏にも着てもらうことにし
た。

「やっぱり、あのバンドは、だめね。金具を
素肌に、じかに着けるのは。ホラー！」

なるほど、お臍のあたりに金具の喰い込んだ跡が、ついている。最初のうちは面白いアクセサリーだと思った金の獅子頭も、しまいには邪魔ものになってきた。

「今度は服を着た時に、それを着けてもらおうんですね。じゃあ、お二人ともベッドへ上がって下さい」

床の上では、じゅうたんが敷いてあるとは言え、由起さんの膝小僧が痛むことを考えてやらなかったのである。

由起さんは左手を腰に、右手を馬場氏の額に当てて跨がった。

スプリングが軟いと見えて、圧しつけられた馬場氏の頭は、ベッドの中へ半分ぐらい潜った。

由起さんは本腰を入れ出した。

レンズから目を見ずして見ると、かなり凄まじいが、カメラから覗くと、下の顔が、ほとんど埋没してしまっているし、由起さんの激しい動きも捉えることができないから、こういうところはカメラと肉眼とでは、かなり相違する。こんな時には8ミリが、いいと思った。

「ウッ！」

と馬場氏が声にならぬ悲鳴をあげた。

これに勢いを得た由起さんは太腿に力をこめて、責めつけた。

だが、カメラは馬場氏の表情が入らないので、サッパリ魅力がない。

私は片づけた椅子を引っ張り出して来て、その上に乗って、俯瞰のアングルを、とってみた。

「由起さん。その手を離して下さい」

由起さんは返事をしなかった。手も、どこさなかった。

馬場氏の鼻が埋まり、遂に目までも、かくれてしまった。

馬場氏が再び、うめき声を洩らした時、由起さんは手を離し、こごまっていた身体を真直ぐに伸ばした。そして、私の方を見て笑った。その顔は、

「やったわよ——」

と言っていた。

私は、カメラに正面を向いて坐ってもらうように言った。

由起さんが腰を上げた時、馬場氏の泣き出しそうな顔が現われた。私は、すかさず、このチャンスにシャッターを、きったのだが、これは、あとで伸ばしてみると、完全にブレてしまっていた。どうも慌てると六〇分の一

秒のシャッターではブレを作ってしまう。

由起さんは、一気に馬場氏をノックアウトしてしまったのだ。いきなり口と言わず、目と言わず、強烈なストレートやスイングや、下から擦り上げるようなアップカットの連続攻撃を受けては、今日は、かなりタフだった馬場氏だったが、ひとたまりもなくダウンしてしまったのだ。

それから二、三カット撮ったが、ダウン直後では死人を弄んでいるような感じで、力が抜けてしまったので、今日は、そこでやめた。

時間も十一時を、かなり廻っていた。

由起さんだけ先に帰して、馬場氏と新宿で一ぱい、やることにした。

「お一人で帰してしまって、いいんですか」

また馬場氏は変な質問をする。まだ由起さんを私の女房だと思いこんでいるのだ。

私は面倒くさくなって、もうどっちでもいい。女房と思うなら思わしておけと言う気持ちになっていた。だから、その時も、

「ええ、構いません」

と答えた。これで、ますます馬場氏は私達が夫婦だという、想像を確かにしたようだった。

ナミオM画廊 『ポーズ研究』 春川ナミオ



飛躍するM

その夜、馬場氏は、一ぱい飲み屋で、痛飲した。

馬場氏の酒が強いのを今更ながら知ったがこの夜は快く酔っぱらった。

酔うと大胆になるのか、かなり卒直な意見を出してきた。

「今日の写真は、きつといいのが出来るでしょうね」

「いや、案外、平凡かもしれませんよ。むしろ数は少ないけど、この前の終わりの方がいいかもしれませんよ」

馬場氏が意外そうに、その理由を聞いてきたので、私も卒直に、馬場氏の表情自体に不満があることを述べた。私としては既に、このような写真は何回も撮っているの、ポーズや表情に新鮮味を求めるのだが、馬場氏としては今夜、初めて本格的にプレーしたので写真よりも、プレーそのものの興奮が再燃したようだった。

「しかし、今日は驚いたなあ。奥さんの、あの猛烈な攻撃には」

「でも、よく頑張りましたよ、今日は」

「ほんとに鬼山さんが羨ましいですよ。ああいう素敵な奥さんは滅多に居ないでしょう。今度やる時は、どんなのを撮るんですか」

「サア、別に」

「ぼくは奥さんがトイレに行くたびに、もったいないと思うんですよ」

馬場氏は私の顔色をうかがう様に言った。

私は内心、ちょっと驚いた。

それは何も馬場氏が由起さんのユリンを欲しがることに對して驚いたのではなく、つい先頃まで由起さんの太股が、ちょっと触れただけでダウンしてしまった馬場氏が、今夜は前回に比べると実にタフになった。そればかりか、今度はウロの世界に入りたいという、

その飛躍的な欲望の進行に驚いたのである。

「今夜、そう感じましたか」

「ええ、奥さんがバスへ入って行かれたでしょう。あの時水洗の音が聞こえたんですよ。惜しいなと思いましたよ」

バスを使っているのに、水洗の音を聞き分けるとは、かなり敏感である。

「今度の時、飲まして頂けるでしょうか」

「レンズの前で、やってくれますか」

「ぼくは、いいですけど、奥さんが御承知なさるか、どうか……」

ウロのシーンは、これまで一回、撮ったところがある。由起さんがバーのママだった頃、ねだられて飲ませてやったことがあり、またからかってやる意味で飲ませたことがあると言っていた。ただし、これは、みなコップ飲みである。

旦那さんはMだが、ウロの方は、あまり興味が無いのだと言うが、それでも何回かは味あわせてやったという。これはCからUの連続動作だった。

私の紹介したM派の人物には、カメラの前では一回だが、私の見てないところで、もう一人に与えている。従って経験は豊富の方である。ただしこれは、この当時の時点のはな

しである。その後、また大分、増えた。

だから、由起さんは恐らく気軽にOKするだろう。しかし私は、

「サア、どうですか」

と一応、もったいをつけるつもりはないが、あいまいな返事をしておいた。

「あ、それから鬼山さんのプレイを拝見したもんですな。何なら、ぼくがカメラの方を担当してもいいですよ」

これも、私の気持を、さぐるような目つきで言ってきた。

「もちろんフィルムは、あなたに差し上げますが……」

これは前に一度、やったことがある。が、どうも具合が悪い。先に私がモデルになって塚崎君というカメラのこなせる人に撮ってもらったのだが、行きつくところまで行ってしまつと、疲れてしまつて、それから塚崎君と交替したが、さっぱり意欲が出ない。私としてはプレイも大切だが、写真も大切である。写真の方が、うまく行かないと、あとで悔いを残すのである。だから、それから先は写真の方をやって、ある程度、撮ったところで、今度は私がモデルになろうと考えたのだが、これも実際には、うまく行かなかった。時間

がなくなってしまうたり、その場になると奇妙に、その気になれなくなってしまうのである。その理由は、写真の製作の方に気持を注ぎこみすぎているためか、人が口をつけたものを、あとから頂くというのが、何か不本意な気分になってしまうのである。プレイだけなら、1対2で交互にやる事もできるが、そこに写真というものが介在すると、なかなかそうは行かなくなるのである。写真をスナッパ程度の、軽い気持で撮るなら、できるのであるが、私には、そういう軽さに切り替えることができない。だから、仕方がない。

だから、馬場氏に対しても、

「できたら、やってもらいます」

と言った。馬場氏は、かなり酔っている。こんなに酔ったのを見た事は初めてである。酔っぱらいの常で、同じことを繰り返して言うようになったが、それは由起さんの讚美の繰り返しであった。

「あんなに魅力のある人は始めてですね。しびれるような、と言いますが、ほんとに、あの方に押さえられた時は、こっちの唇がビリビリと、しびれましたね。やけども、あの方の言われた通り、あの甘い蜜で一ぺんに直ってしまいましたよ。ああいう方を奥さんに持

たれた、あなたが、うらやましい。しかしね
 しかしですよ。セラシーは感じませんよ。む
 しろ、あなたの方お二人を尊敬する念の方が強
 いんです。ぼくは、あなたの方御夫婦が、どん
 な風にして愛し合うかを見たいんです。そし
 て、ぼくは、そのあとで、奥さんに奴隷とし
 て御奉仕したい。いま、そういう気持ちに、か
 られているんです」

馬場氏は、おだやかな笑いを浮かべながら
 こんな風に話した。馬場氏の表情は少しも交
 わっていない。こともなげに静かな口調で言
 ったのである。

しかし、私にはショックだった。馬場氏を
 少し甘く見ていた、せいかもしれない。まだ
 極く初歩のMだと思っていたのである。

事実、彼はMの行為やプレイに対して、体
 験したことはなかったようである。彼と淀橋

のスタジオに行った時が、初めてかもしれな
 い。だが、あの時は彼は、単なる傍観者だっ
 た。だから、ほんとの「初体験」は由起さん
 との第一回の撮影の時が、そうであろう。由
 起さんに触れられただけでリビドーに達して
 しまった彼が、今夜は、もう数回の経験者の
 ように振舞った。

しかも、その直後にもう、こんなことを言
 い出すのである。普通、五、六回は、単に女
 王と奴隷という関係だけで十分、満足するは
 ずである。それが単に二者関係だけでは飽き
 たらず、複数のMを希んでいる。

私は、馬場氏に不安をさえ、感じた。

私でさえ——と言っては、おこがましいが
 少なくとも馬場氏よりは経験が深いと思う。
 その私でさえ、写真なら写真に偏執的な興味
 をもつならば、モノクロからカラーで撮影し

て見たいという欲望は、かなり強かった。更
 には8ミリで、もう一つ進んでMのストーリ
 ーを作って、後世に残すようなものになりたい
 と考えている。だが、その進行性を抑えてい
 るのだ。それは臆病かもしれない。しかし、
 もともと私は欲望を抑えることには少年時代
 から馴れている。諦めているわけではない。

徐々に手順を、踏んで行こうと思っているの
 だ。馬場氏の言った、複数によるプレイも、
 空想の上では少年の頃から考えていた事であ
 る。しかし、実際に移行することは考えてい
 なかった。そういう意味で、馬場氏の発言に
 は、内心ショックを受けたのである。

私は返事をせずに馬場氏の顔をながめた。

馬場氏は本心から、それを希望しているの
 か彼は由起さんとのプレイが断絶するのを恐
 れている。そのために新しいアイデアを提供
 するつもりで言ったのかもしれない。今夜は
 彼は泥酔している。単に空想していたことを
 しゃべっただけなのかもしれない。イザとな
 れば二の足を踏むのではないか。私は、そん
 な風にも考えて、返事ができなかったのであ
 る。馬場氏も顔は笑っているが私が何という
 か返事か返事を待っているようだった。

天星社刊

《限定版グラフィア写真集》 在庫案内

山原清子「刺青の魅力を探ぐる」一部一〇〇〇円（送共）略号「美？」

◎刺青の女王の魅力を抉り出し、その美しさを最高度に発揮した緊縛フォト結集版。

M写真集『女王様に飼育される日々』一部一〇五〇円（送共）略号「M特」

◎男性が色々の女王様に奉仕し、飼育される生態のかずかずを網羅した写真資料。

◎この写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いいたします。



カット・緑 JOE

便秘マニア……アブ雑誌をいくら探してもこんな言葉は、みあたりません。

一般の方になら、なおさら、妙にひびくことでしょう。何しろ、新聞、雑誌で、便秘治療薬や、浣腸の広告が、目に入らないことが不思議なくらい、便秘からのがれようというのが、普通の考え方なのですから……。

便意がありながら、いくら努力しても排便出来ないときの苦しさ。そのまま放っておけば、絶えず、直腸に異和感が意識される、いらだたしさ。更に日が経つにつれて、おこる下腹部の重くるしさ、圧迫感。そんな感覚に

欲びを感じる人間がいるなど信じられないことに違いありません。

私にこんなくせがついたのは、いつ頃からか、はっきりした覚えがありませんが、フロイド流に考えれば、幼児性欲の固着と云うそうですから、三、四才頃からそんな傾向があったのかもしれませんが。或は子供の頃から便秘がちだった私は、普通の人以上に直腸が意識された結果、いつのまにか、肛門性感が発達してしまったとも考えられます。

子供の頃、硬便の排泄が苦しくて、トイレで泣いていて、母に掘り出して貰ったり、外出先で便意を訴えない様にと、両親と外出するときなど、きまってトイレに行かされ、出

告

白

私は便秘マニア

笠井勢津子

ないと浣腸されたりした記憶は、小学校を終わる頃まで続いたものでした。もっとも初潮をむかえる頃からは、身体の調子も整ってきただのか、それほど、ひどい便秘に悩まされることはなくなりましたし、また、生理時の苦しさは、便秘どころではありませんので自然忘れていたともいえます。

高校二年のときでした。体育の時間に足首を捻挫して、十日程入院して治療を受けました。歩行が出来ない為、人手を借りての用便は死ぬほどの恥かしさでした。いくらカーテンを引くとはいえ、狭い病院内では、ベッドを接している同室の人には、その物音まで聞かれてしまうのですから……私は、とうとうこのようにしてトイレまで通ったものでしたが

恥かしいことには毎夜、看護婦さんが大小便のあった回数を聞いて控えてゆくのです。とうとう五日間、排便0の日が過ぎました。「このお薬を飲んで下さい。だめなら明日、浣腸しますから」

と、渡された粉薬を飲んだ翌日です。ごく微かな便意があり、喜んでトイレに立ちましたが、いくら、りきんでも、どうしても出て来ません。でも「だめだったら浣腸」と云われたのがこわくて、必死で頑張りました。

浣腸——あの便意をこらえる苦しさもそうですが、どうにも我慢出来ないのは、薬を入れられるときの、やりきれない屈辱感なのです。それも、母の手でならまだ我慢出来ますが、病院で、しかもあんなきれいな看護婦さんにされるなんて、とても堪えられません。

「困ったワ」と考えているうち、まるで鉛筆の様な細い便がやっと出て来ました。ホウと一息つく、それが内部で刺戟となったのでしょうか、にわかに腸がグルグルと蠕動を始め、少し軟らか目の便がつづいて来ました。

でも、そのときの苦しさは、どう表現したらよいのでしょうか。まるで直腸から結腸にかけて、棒を入れて、かきまわしている様な痛みに、思わずウーンと、いきんでしまいました。

た。そして、その苦しみの度に少しずつ途切れながら排泄がつづきます。全部、終わるまでに三十分以上も、かかったでしょうか。そして、やっとの思いでトイレから出たときのなんともいえない快さ……。全く筆舌に尽せない快感でした。

でも、この体験がストレートに便秘を楽しむまで進んだわけではありません。次の体験は修学旅行のときでした。

女ばかり三百人も集まったら、どういうことになるか想像がおつきになるでしょうか。

一日中、時間に追われ放しで、面白くもない神社仏閣とバスとの往復。あいまにかけつけるトイレは、どこでも満員。皆、便意と尿意とのたたかいに、くたくたに疲れて、宿について一睡りしたかと思うと、もう朝で、食事もそこそこにトイレに立つ頃、もう外ではバスがエンジンをつかして待っている……。

トイレは、どこでも長い行列です。待ち切れなくて、戸をたたきながら、

「ちょっと、早くしてよ。バスが出ちゃうじゃないの……」

「待ってよ、いま入ったばかりじゃない。そう簡単には、いかないわよ」

「こんな忙しいとき、ウンチなんかしてるこ

とないでしょ」

「あら、昨日から我慢してるのよ。外へ出たら、もう全然アウトじゃない」

そうかと思うと、中でしきりに独得音をさせている戸の外で

「もういいんじゃない。早くかわってよ」

「それが出来ないのよ、おとといから、したいのを我慢してたから硬くなっちゃったのね」

「ああッ、あたし、もう我慢、出来ないわ。一寸でいいから、代わって頂戴」

と云った調子で、色気もなにもあったものではありません。

私などはじめからあきらめていますので、ほとんど便意も、おきませんでした。一日で終わりと云う六日目に軽い便意がありました。私の便秘は、どうも六日目位が限度らしいのです。現在では浣腸しなければ排便出来なくなっていますが、それでも、六日目あたりには便意が起きるようです。

このときも出してしまいたいと思ったのですが、何しろトイレの外は、ずっと行列を作っているし、仕方なしに我慢することになりました。一日中、肛門から直腸にかけて栓でもつめられたような圧迫感。ふとしたはずみにグーッと潮が満ちて来る様なに痛い便

意。一寸、我慢すると、かすかな圧迫感を残してスーッと引いてゆく感覚。その感覚に何とも云えない快感を覚え始めました。便秘することによって一種、異様な快感を知ったのは実にこのときからでした。

翌日は直腸部の宿便が硬化したのか、もう便意と云うより、肛門に軽い異物感があるだけになりました。それはまた、たまらない快感でもありました。

家に帰って、疲労でぐっすり寝込んでしまった翌日、都合のよいことに、一人で留守居することになりました。トイレに行っても、もう排便することは出来ません。そこで久しぶりに、本当に久しぶりにイチジク浣腸を使うことにしました。子供の頃、浣腸から逃れようと懸命にトイレで、いきんだ事などを楽しく、思い出しながら、薬箱をあけました。そこには、あれほど私を怖がらせたイチジク浣腸が、まだいくつが残っていました。恐る恐るその一つを取り出し、容器の両側にプップと小さな穴を開けてからパンティを下ろし、四つに這いました。

もう次に起こることの期待で、ズキンズキンとこめかみに血液が上がりまします。でも母にされたときと違い、一人では四つ這いの姿勢

では無理とわかりました。そこで座ぶとんを敷いて横向きになりました。直腸に薬液が入り込むたまらない快感……次の瞬間に起こる激しい便意……。内容物が、充実しているのか、今までの浣腸とは比較にならないほど、強烈でした。

その便意を、じっと堪えている快感……。でも一人での我慢には限界があります。トイレに立って、時計を見ると三分と堪えられず手を離してしまいました。サーッと激しい勢いで、ほとばしる薬液……。しかし便は出て来ません。お腹をかきまわす様な苦しみがつづいて、やっと石の様に硬化した便が親指ほどの大きさで出て来ました。私は急いで、もう一つのイチジク浣腸を手に入れました……。

宿便が、浣腸をこれほどまで快適にすることを知った私は、それ以来、意識して便秘することになりました。便秘しているときの感覚自体、段々と快感を覚えてきましたし、何よりも、それが浣腸の快感につながることで飲びました。

週末の夜半二時、家人が寝静まっているとき、一人で浣腸を楽しむのが、もう長い間の習慣となり、今では、自然便を出したくとも浣腸にたよらなければ出すことは出来なくな

りました。でも、それを困った習慣とは思っておりません。

偶然の機会からアブ雑誌を知って、浣腸マニアと云われる人が随分、多い事を知りました。そのうちの数人の男女と誌上で知り合いましたが、私の様に、便秘そのものにまで快感を覚える方には出会いません。

連日の便秘と浣腸で、直腸が刺激に対して鈍感になったのでしょうか。最近ではグリセリンの原液でも、それ程、感じなくなりました。といって、ドナンですと強すぎて、プレイとしては物足りない面がありました。最近イチジクの浣腸の重症用としてAが発売されたので早速、使ってみました。グリセリン—55%プルロニックF68—3%という事でしたが、丁度グリセリンとドナンの中間位の強さで適当な効き方をするので、一度で、とりこになってしまいました。これを使って、自分で耐えられる限界を越えて、ひとの手でさえつづけられたら、一体どんな結果になるのだろうか、つい想ってしまいます。もっとも、本誌に多く登場する縛り、ムチ打ちなどの様な、一連の責めとしての浣腸などは、便秘マニアの私にとっては全く無縁なものではないのですが……。

(おわり)

団鬼六作



決定版

● 瞠目のサディズム小説総集篇遂に成る！

『番号「花決定版」』定価一、〇〇〇円(送200円)』

昭和37年8月号に端を発してより絶讃を博し続ける「花と蛇」の文字通りの決定版が堂々八百有余頁の超豪華本として完成致しました。驚異的な人気を生み出したこの長篇サディズム小説は、現在尚「奇譚クラブ」誌上に連載中でありすが、過去四回の特集にも拘らず数多くの要望にお応えして、今回の総集篇発刊となつた訳であります。八カ年の集積を味読して下さい。

／＼内容主要見出し一覧／

第一章 発狂する美人 第二章 美人の失墜 第三章 美人の失墜 第四章 美人の失墜 第五章 美人の失墜 第六章 美人の失墜 第七章 美人の失墜 第八章 美人の失墜 第九章 美人の失墜 第十章 美人の失墜 第十一章 美人の失墜 第十二章 美人の失墜 第十三章 美人の失墜 第十四章 美人の失墜 第十五章 美人の失墜 第十六章 美人の失墜 第十七章 美人の失墜 第十八章 美人の失墜 第十九章 美人の失墜 第二十章 美人の失墜 第二十一章 美人の失墜 第二十二章 美人の失墜 第二十三章 美人の失墜 第二十四章 美人の失墜 第二十五章 美人の失墜 第二十六章 美人の失墜 第二十七章 美人の失墜 第二十八章 美人の失墜 第二十九章 美人の失墜 第三十章 美人の失墜 第三十一章 美人の失墜 第三十二章 美人の失墜 第三十三章 美人の失墜 第三十四章 美人の失墜 第三十五章 美人の失墜 第三十六章 美人の失墜 第三十七章 美人の失墜 第三十八章 美人の失墜 第三十九章 美人の失墜 第四十章 美人の失墜 第四十一章 美人の失墜 第四十二章 美人の失墜 第四十三章 美人の失墜 第四十四章 美人の失墜 第四十五章 美人の失墜 第四十六章 美人の失墜 第四十七章 美人の失墜 第四十八章 美人の失墜 第四十九章 美人の失墜 第五十章 美人の失墜 第五十一章 美人の失墜 第五十二章 美人の失墜 第五十三章 美人の失墜 第五十四章 美人の失墜 第五十五章 美人の失墜 第五十六章 美人の失墜 第五十七章 美人の失墜 第五十八章 美人の失墜 第五十九章 美人の失墜 第六十章 美人の失墜 第六十一章 美人の失墜 第六十二章 美人の失墜 第六十三章 美人の失墜 第六十四章 美人の失墜 第六十五章 美人の失墜 第六十六章 美人の失墜 第六十七章 美人の失墜 第六十八章 美人の失墜 第六十九章 美人の失墜 第七十章 美人の失墜 第七十一章 美人の失墜 第七十二章 美人の失墜 第七十三章 美人の失墜 第七十四章 美人の失墜 第七十五章 美人の失墜 第七十六章 美人の失墜 第七十七章 美人の失墜 第七十八章 美人の失墜 第七十九章 美人の失墜 第八十章 美人の失墜 第八十一章 美人の失墜 第八十二章 美人の失墜 第八十三章 美人の失墜 第八十四章 美人の失墜 第八十五章 美人の失墜 第八十六章 美人の失墜 第八十七章 美人の失墜 第八十八章 美人の失墜 第八十九章 美人の失墜 第九十章 美人の失墜 第九十一章 美人の失墜 第九十二章 美人の失墜 第九十三章 美人の失墜 第九十四章 美人の失墜 第九十五章 美人の失墜 第九十六章 美人の失墜 第九十七章 美人の失墜 第九十八章 美人の失墜 第九十九章 美人の失墜 第一百章 美人の失墜

第二十二章 身代金奪取の失敗 第二十三章 涙の宣誓 第二十四章 連命の逆転 第二十五章 奇妙な三々九度 第二十六章 飼育される白い動物 第二十七章 悪魔と悪女の悪業 第二十八章 屈辱の地獄 第二十九章 逃走の恐怖と失敗の結末 第三十章 悪鬼達の残忍な所業 第三十一章 落花無残の修羅場 第三十二章 淫らな美女の調教 第三十三章 すすまじいショーの展開 第三十四章 汚水にまみれた宝石 第三十五章 華々しき美女の屈伏 第三十六章 対峙する美女と美女 第三十七章 あくどい陥穽 第三十八章 羞恥図絵の展開 第三十九章 清純な令嬢の屈辱 第四十章 人身御供の令夫人 第四十一章 深窓の美少女とズベ公 第四十二章 小夜子への執拗な調教 第四十三章 変性色事師の登場

第四十四章 生れかわるスター京子 第四十五章 激しいスターへの訓練 第四十六章 低脳男と令夫人の結婚 第四十七章 愛弟子を調教する静子夫人 第四十八章 羞恥と屈辱の日本舞踊 第四十九章 悪魔たちの哄笑 第五十章 地下室の羞恥と汚辱地獄 第五十一章 珍芸を開陳する令夫人 第五十二章 淫靡な時代劇ショー 第五十三章 華々しきショーの展開 第五十四章 野卑な妾二人のいたぶり 第五十五章 ズベ公達の邪悪な責め 第五十六章 屈辱の中に泳ぐ奴隷たち 第五十七章 悪党の執拗ないたぶり 第五十八章 文夫と小夜子の屈辱的対面 第五十九章 勝ち誇る悪党一味 第六十章 中国伝来の秘法 第六十一章 緊縛された美女の涕泣 第六十二章 新しい餌食への触手 第六十三章 苦痛と屈辱の生地獄 第六十四章 恐怖の責め続く 第六十五章 結末なき責めの結末 第六十六章 甘美な拷問に悶える夫人 第六十七章 新しい機軸の到来と静子の狂態 第六十八章 あくなく汚辱に泣く美女 第六十九章 ニューフェイスに飼育開始 第七十章 肉体の悪魔に魅せられた女 第七十一章 熱気を帯びたマゾの競演 第七十二章 女盛りの妖美な肉体 第七十三章 優雅な木馬夫人の崩壊 第七十四章 美女と野獣の奇妙な闘争

お申込は大阪市住吉郵便局私書函第41号。T558 暁出版株式会社宛

懸賞入選創作

荒

遊

会

(下)

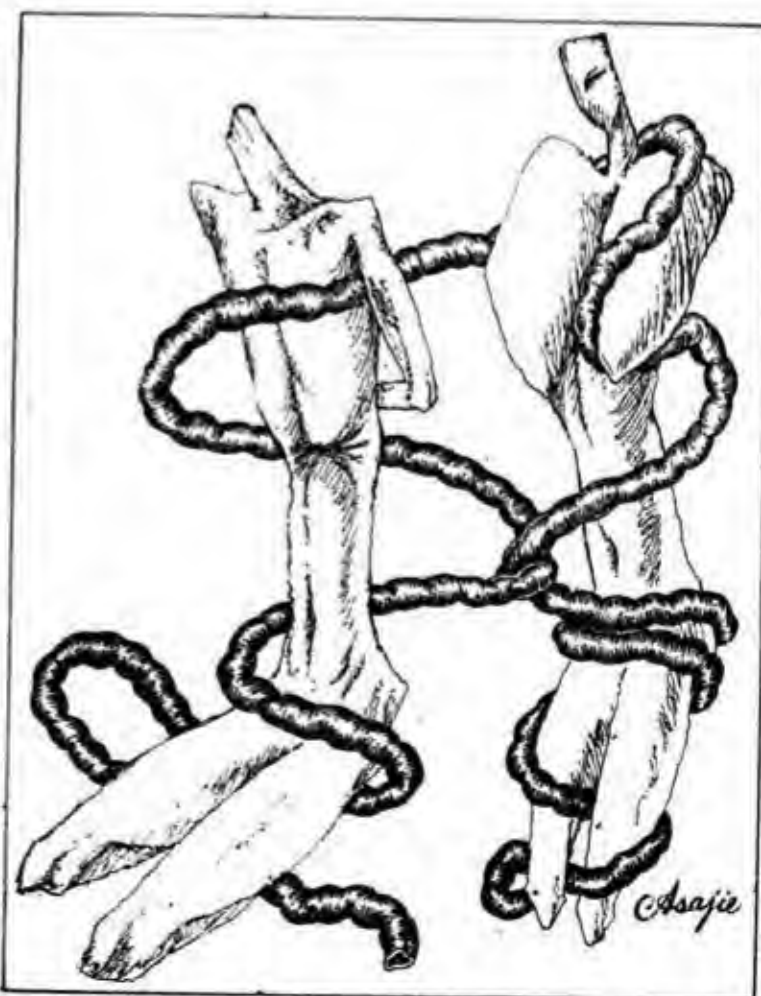
神^{じん}

久^{ひさし}

3

H氏の女房、という人は、今まで時々番台に坐っているところを見たことがあるが、それは大層、魅惑的な女性だった。(尤もKは彼女に対して、まるっきり官能を感じていない様なのだ)この女性は年は二十七、八の太り気味で、しなやかな肌あい、母性的で頼りがいのある顔形、ぱっちりとした優しい黒目、すがり付きたくなるような胸のふくらみ、はら

はらするような大きな尻……もう、どこにいった、おれの氣に入らないようなところがあった。彼女が番台にいる時など、おれは耐えがたく、むらむらと官能して、なかなか服を脱ぐことができないのだ。恥かしいような嬉しいような、混乱したこの氣持！我慢できなくなって、大急ぎでトイレに飛び込む。それでも腫れが引かない時には、しかたがないから風呂には入らず、そのまま、ぼんやり下宿に戻ったことが、何度かあった。あ、おれは自らを慰める時、いつでも彼女の



カット・室井亜砂路

悩ましの姿を思い浮かべていたのだ。その輝かしい女性を、H氏は仲間を引き入れようと言うのだ。おれは彼女のことを八奥さんVなどと言ったことはない。ただの一度だってない。うむ、いつだって八奥さんVなのだ。少なくとも、自分ではそれだけ、あの人を尊敬しているつもりになっている。おれは、すっかり、はしゃいでいた。それで、この困難な条件を進んで受け入れてしまったのだった。誰か一人以上の素質ある女性を連れてくる様に、という困難な条件を……

今考え直してみれば、どうやら早まった、という気がしないわけでもないのだが。

熱泉亭に着いた。

入口は閉じられているので、おれたちは裏木戸から入った。これもいつもの約束のうちなのだ。Kが一番最初に木戸をくぐり、次に△妹△が入った。おれは一番、後から、

『さて、今日はどんな恐ろしい罰を受けることになるだろうか』

などと、ぼんやり考えながら、続いて入っていった。

出迎えてくれたのは△奥さま△だった。

「さあさあ、いらっしゃい」

弾んだ声が耳の穴にもぐり込んでくると、おれは、たちまち、うっとりして、尻の奥がもぞもぞ、うねり始めた。△奥さま△は袖無しのブラウスに、長めの暗色のスカートという、ごく大人しいみなりで、おれたち三人の前に現われた。

Kは彼の△妹△を紹介した。△奥さま△は△妹△と形式的に会釈し合ったが、ふむ、初対面にしては奇妙な挨拶だった。まるで、互いに避け合っているような……おれの考えでは、この二人は体質的に気が合わないのに違いない。

しかし、そんなことは、どうでも良いことだ。もし、この△妹△がこの会に馴染めないようならば、さっさと追い帰してしまえば良いのだから。ふむ、おれはこの少女には殆ど興味がなくなった。△奥さま△と比べてみると、何て見劣りがすることだろう。全く、目ざわりなくらいだ。Kは、なぜ、こんな少女を連れてきたのだろうか……。

△奥さま△が、おれの顔を見て言った。

「あら、あなたには、どなたもお連れがいらっしゃらないの？」

「ええ」

と、おれは答えようとしたが、急に何やら喉が詰まって、声にならなかった。

「でも、他にお相手が太勢いるから、構わないと思いますわ。主人に、あなたを仲間外れにしないように話してあげますわね」

「おや、……」Kが口をはさんだ。「他にも女性がおられるんですか！」

「ええ、あたしのお友だちを連れてきてありますの。あなた方みたいに、お若い方はいないけれども。ふふふ、とても親切な方たちばかりなのですよ」

「そいつは、ありがたい！ その中には瘠せつばちの御婦人もおられるんでしょうね？」

しかし△奥さま△は笑って答えなかった。おれたちは浴室に通された。

先客が大勢いた。おれたちが扉を開けるやいなや、今まで騒がしかった話し声が、ぴたりとやんだ。中に入ると、女ッ気で、むんむんしている。三十才前後の女たちが、ふむ、数えてみると全部で六人もいた。彼女たちはしかし今のところは、きちんと衣服を身に着けていた。

おれは胸をときめかせながら、ちらちらと観察した。予想通り、ひとくせも、ふたくせもあって、しかも頭が切れそうな女性ばかりだった。少なくとも、素朴そうな婦人は一人もいなかった。迫力に満ちた女性たちばかりだった。衣服からして、そうなのだ。別に高級品だというわけではなさそうだが、ともかく少女らしい素朴な着こなしとは、わけが違う。恐ろしく猥雑で、しかも、気品があるのだ。

彼女たちは何もかも心得ているのに違いない。でも、何と言ったら良いのか、……迫力がありすぎる。こちらが逆に強姦されそうなふむ、そんな恐怖さえ感じる！ 数が多いからだろうか。ちよっ、男が三人、女が八人！ どう考えたって不つり合いだ。それに、おれ

の好みからすれば、△奥さま△ほど素敵な女性
性は一人もない。そうだ、ただの一人だっ
て、いやしない。彼女たちは、いわば△おば
さん△といったところなのだ。ふむ、でもま
あ、しかたないだろう。

おれたちは黙りこくって、部屋の隅に立っ
た。△おばさん△たちも黙ったまま、おれた
ちを、じろりじろりと見つめ始めた。全く、
その目付きが好色で、しつこいこと！ Kも
おれも、へいこうして縮こまって、横を向い
てしまう。しかし△妹△は一向に平気らしく
て、△おばさん△たちと対等に睨めっこを続
けている。

まもなく△奥さま△と一緒に、H氏がやっ
てきた。H氏は欲びに震える声で、やや大げ
さに皆に挨拶し、この交遊会（荒遊会）を、
ただちに今から始めることを宣言した。

出席者は、全員、互いに自己紹介をし合っ
た。遠くから、わざわざ？ やってきた女性
もいたが、大部分は隣近所の住人ばかりだっ
た。このあたりは住宅地だから、こんな女性
が案外、多いのかもしれない。でも、こんな
に地縁的な集まりになってしまつて、世間に
知られて大事になつたりはしないだろうか。
ううむ、世間！ 実際、これほど警戒すべき

存在はないのだ。おれたちのように真面目に
エロ行為に没頭する人間を、いとも易々と撲
殺することができるのは、この世間だけなの
だから。おれは少々不安を覚えた。

「ところで皆さん！ 今日ここに、一人の約
束を守らなかつた会員がおります。少なくと
も一名以上の御婦人を連れてくるべし、とい
う約束を守らなかつたわけです。これは重大
なことです。この会員の処置について、今か
ら、ただちに決めたいと思うのですが」

ああ、おれのことだ！ 困つたことになつ
たものだ。

H氏が、ひとりでしゃべりまくつた。△お
ばさん△たちや、KやKの△妹△は、どうし
たわけか、まるで猫のように大人しかった。
興味がない、といった態度なのだ。すると△
奥さま△が突然、皆を元気づけるように、は
きはきと言つた。

「あたしは、何らかの違約に対する罰を与え
てやつて、うんとこらしめてあげるのが良い
と思いますわ」

そして、おれの顔を、まじまじと見つめ、
心から嬉しそうに微笑した。おれは驚いた。
驚いて声も出なかつた！ ああ、あの優しそ
うな△奥さま△が、こんなサディストだとは

思いもよらなかつたからなのだ。

「うむ、では皆さん！ そういうことにしま
しょうか。賛成の方は挙手してください。多
数決で決めたいと思いますから」

とH氏が言うと、Kが口をはさんだ。

「おお！ 待ってください。ここでは民主主
義、つこは通用しないんですよ！」

「ほう？ では、誰か専制君主でも決めて、
他の者は哀れな奴隷にでもなれ、ということ
なのですか？」

「いいえ、そうではない。断じてそうではな
いのです。重要なことは、われわれは世間の
すき間に住んでいるということなのです。そ
う、つまり、この会の秘密を外部に洩らすよ
うな者があつてはならないのです。全員が結
束しなければならぬのです。だから、ただ
の一人と言えども、この会のエロ行為に異議
を抱く者があつてはならない。つまり多数決
であつてはならないのです。なぜなら、多数
決というものは常に少数の反対者があること
を予想していますからね。そうではなくて、
われわれは全員でエロ行為をすべきなのだ。
全員一致！ 全員一致で始めなければならな
いのです」

「なるほど。しかしそれでは、処罰される者

と処罰する者とが、全く同じだけの権利を持つことになるわけではないでしょうか？」

「その通り。それでなければ、いけないのです。それでなければ今に、きっと裏切り者が出ます。処罰される人間は、自分が処罰されるべきだという固い信念を持った上で、進んで処刑されるべきなのです。それでこそわれわれは歴史を超越して△意味▽そのものになることができるのです。そうでしょうが」

「ううむ。しかし、もし全員一致ができなくなって、統一したエロ行為ができなくなったとしたら、どうなるのです？」

「その時は、しかたがない、解散するのみです。始めから人材を集め直して、もう一度やり直すしかないでしょう」

Kの言葉に刺戟されたのか、△おばさん▽たちは急に活気づいてきて、盛んに論争を始めた。まるでインテリ女性ばかりだった。それも、ふむ、かなり過激思想の持主が多いのだ。結局、Kの意見が多くの支持を得た。反対者は一人もなくなった。尤も、全員一致というのはKが考えているほど完全なものではない。おれみたいに気の小さい人間は、結局は損をすることになるわけだから……。

おれを処罰するための提案が、次々となさ

れている間、おれ自身は、むっつりと黙り込んで、ひたすら△奥さま▽の美しい、ふくらはぎに見とれていた。

△おばさん▽たちは、こんなことを言っている。

「裸で立っていてもらって、その周りから一斉につねってあげたら面白いと思いますわ」

「それよりか、お尻を叩いてやったら、どうかしら？」

「でも、あの人は痒せすぎているから、あまり良い音はしないわよ。それよりも、あたしは荒縄で、きりきりと縛り上げてあげたいと思いますわ」

「あら、あら。痒せている人を縛ってみたくて、ちっとも面白くはありませんよ。それよりあたしは、あの人を男性として集中的にいじめてあげたいわ」

「え？ というと一体、どんなことなさるかしら？」

「引張ってやったり、叩いてやったりするのは、どうかしら」

「そうそう。それから、何かで、ごりごりこすってやったら、どうでしょう。たとえば紙やすりとかタワシとかで」

「まあ！ ひどいことなさるのね。皮が、む

けてしまいますわよ、そんなことしてあげたら」

すると△奥さま▽が言った。

「あたしの思うところによりますと、この人はマゾヒストなのです。だから、できるだけ意地悪くいじめてあげるのが、かえってこの人のためになるのじゃないかしら。ですからね、ふふふ、あたしは鞭で打ってあげるのが良いと思います。そうですわ、それも革の鞭が良いでしょう。この方を大の字にはりつけにしておいて、まず男性としての攻撃目標がハッキリするまで、優しくかわいがってあげるの。そうよ、この役はあたしにやらせて頂きたいわ。準備ができたなら、目標を目がけて皆で順々に打ち倒してやるのよ。まあ、一人当り五十回も鞭打ってあげたら、この方は飲んで涙を流すに違いありませんわ」

冗談じゃない！ そんなことされたら、おれは、たちまち死んでしまう！ 何て残酷なことを言い出すのだろう。あれほど優しい物腰をしていると言うのに。

△おばさん▽たちは△奥さま▽の残酷な提案に驚いたのか、急に、しんとしてしまった。すると、今まで黙りこくっていたKの△妹▽が立ち上がった。

「あたしは、奥さまのお考えに賛成できませんわ。そんなことなさら、きつと後悔なさるでしょう。ええ、あまりにもひどすぎますもの！」

おれは、Kの△妹▽がおれの弁護をし始めてくれるのかと思って、何やら複雑な気分に変わった。

「おや、おや。あなたは随分、この人の肩をお持ちになるのね！ 鞭打ちと言っても、たかが女の力ですもの、大したことありませんわよ。せいぜい……」

「ええ、せいぜい、ひどい事になりますわ。」

あたしたちは一生、恨まれるようになりますわ。あたしは絶対に反対です！」

「なら、あなたは、どうしたら良いとお考えになるの？」

「あたしは、ええ！ あたしのお腹やお尻から出てくるものを、たっぷり食べさせてあげたいと思っていますの」

「あらあら。あなたは、まだお若いのに、大したものなのね。すっかり見直しましたわ」
やれやれ、ひどいことになったものだ。皆はどうしたわけか、ことごとく△妹▽の意見に賛同し始めた。排泄物を飲み食いするのであれば、ひっぱたかれるよりは、ずっとまし

かもしれない。でも△妹▽の尻から出てくるものでは、どうも気乗りがしない。ちよつ、彼女の好意には応えてやっても良いとは思ふのだが、しかし、一向に食欲が湧きそうにないのだ。

そこで、おれは△妹▽のものではなくて、△奥さま▽のものを試食してみたい、と言ってみた。すると、おお、△妹▽は、たちまちふくれつつらになった。

△奥さま▽は、その顔とおれの顔とを見くらべて、笑い転げた。その末に、ああ、おれに向かつて優しく「だめよ！」と言ったのだ。△妹▽は恨めしそうな目付きで、おれを見やう。結局、彼女の提案に全員が賛成したのだった。

4

皆、丸裸になって、浴室に立った。

△妹▽は思っていた通りの瘡せっぽちで、とくに胸がべしゃんこで、あばら骨が、ぎらぎら透けて飛び出していた。不幸中の幸か、しかし彼女は醜くはなかった。

おれは、ひんやりする水色のタイルの上におお向けに寝転がった。△妹▽は膝を立て、

おれの顔の上に位置するように、腰を落としたり。皆は笑いさざめきながら、おれの苦しむ様子を覗き見ようと、ひしめき合う。

……もしH氏やKが、こんな目に会わされるとしたならば、彼らは、どんな顔をするだろう。ちよつ、彼らは、まるで興味がないみたいな顔をして、遠くの方から覗いている。実際、彼らは、おれの処罰を決めようという時になると、全く無口だった。

今まで司会をしていたH氏が無口になったことが、そもそも奇妙だった。しかしそれ以上、あのおしゃべりなKが無口になったことは不思議だった。ふむ、それは、こう言うことなのか。処刑される人間が、おれであつて、彼らや彼女らでないからこそ、興味を失って無口になったのだ。もし自分自身が処刑されるんだしたら、いやでもなんでも興味を持たざるをえない。しかし今は違う。罰せられるのは他人なのだ。しかも男なのだ。男という△無意味▽が罰せられるというのにすぎないのだ。うむ、これがもし妙齡の麗人が処刑されるのだとしたら、彼らは、がぜん色めき立つに違いない。両眼を真赤に充血させ、息をせいぜい切らせ、よだれを、だらしなく垂らしながら、

「尻の皮が、ずたずたに破けるまで、鞭打ちすべきだ！」

などと叫び狂ったのに違いない。きつと、そうなのだ。△おばさん△たちにしあって、そうさ。もし、ぽちゃぽちゃした娘をいじめることになったなら、必死になって身の毛がよだつような残酷な刑罰を主張するのに違いないのだ。ちよっ、おれは、なんて冴えない存在なのだろう。

「さあ、お願い。口を開けて下さい」

と△妹△が叫んだ。きつい声だった。おれは、しぶしぶ、その通りにした。そのとたん暖い液体が、ぶつかってはじけ、ひどく、むせ返った。見物人が笑い出した。おれは腹が立ってきた。ちよっ、おれがもう少し行動的だったら、このつるつるの肌に、いきなり噛みついてやるのだが、でも残念ながら、ふむおれは極めて従順だった。おれが、むせ返っているうちに△妹△の貯水槽は大方、流れ出てしまったようだ。おれは、舌を伸ばした。

△妹△は、くすぐったそうに腰をねじった。

さて、それからが大事だった。△妹△の骨ばった薄い尻は、ほど良く冷えていて、本物のりんごのようだった。ふむ、△妹△の特技は、おれの下宿で拝見済みだ。Kは三センチ

とか言っていたが、本当なのか？ どうもこの感じでは、もつとありそうさ。少なくとも五センチぐらいある。興奮して調子良くなりすぎたのだろうか。と、おお、硬めの赤土。

なんてことだ。なんて息苦しいんだろう。おれは、がまんしながら、その息苦しさと闘い、飲み込んだ。それから、押し戻してやろうとした。ちよっ、△妹△は、くすぐったがって、けらけらと笑いこけた。

おれは漸く処罰から解放されて、ふらふらとよろけながら、壁ぎわまで這っていった。

「ごめんなさい。本当に、ごめんなさいね。辛かったでしょう。ああ、可愛そうに」

などと、△妹△は妙に優しい声で、ささやきかけてくる。腰を下ろして壁にもたれかかると、彼女もまた一緒に横に坐った。どうも馴れ馴れしすぎる態度で、ちよっ、薄気味悪いほどだ。骨だらけの肌をおれにすり寄せてきて、歌うように、つぶやいた。

「あなたが好きなの！」

げっ！ おれは突然、吐き気を覚えた。彼女から逃げだしたかったが、急に胃が破裂しように痛みだした。苦しい。息もつけないほどだ！ 身をよじるように咳込みながら、さっき食べたばかりの栄養物を、げろげろ吐

き散らした。△妹△は一瞬、とまどったが、たちまち落着き払った母親のようになって、おれの背中をさすり、片手の指を喉の奥にまで突込んで嘔吐の手だすけをしてくれた。

それだけなら実にありがたいことなのだがしかし彼女は、手だすけしながら、甘ったるい言葉を次々と、おれの耳にそそぎ込み続けるのだ。ちよっ、その声を聞かずに、吐気は、いよいよ激しくなった。ああ、今日は休んで寝ていれば良かったのだ。などと、つまらない後悔の念も起こった。ふむ、おれは苦しさも手伝って、わざと、大きな塊を△妹△の膝上に落としてやった。しかし彼女は、それを悪意の表現だとは気がつかず、あるいは気がつかないふりをしながら、ちよっ、ますます、おれを子ども扱いにし始める。まるで母親気どりののだ。

この時、太った△おばさん△が一人、おれたち二人の方へやってきた。ありがたい、これでこの少女から逃げだせる、と思った。だが、そんなことには、ならなかった。ふむ、△妹△は、おれを独占しようと、思ったのか△おばさん△と厳しく睨み合った末、「この人は今とても弱ってるの。あたしが、ちゃんと看病してあげますから、任せていた

だきたいわ」

などと言うのだ。ちよつ、＼おばさん＼は結局あっさりと諦めて、向こうへ行ってしまった。おれは、ますます＼妹＼が嫌いになった。彼女は、看病するふりで、隙をみて様々ないたずらを始めたのだ。ふむ、もちろんけしからぬ、いたずらだ。まるで人形でもいじっているような調子で。そのあげくには、「ねえ、ねえ、元気になってちょうだい。ほら、今度は、あたしをいじめても良いのよ」と言う。おれは、なかば諦めた気分であつてつけがましく、吐気がとくに収まらなかつた後にも、げろげろとノドを鳴らし続けてやつた。

向こうを見やると、おれたち二人とは、まるで違つて、皆々陽気に興じている。

Kは風船玉を見せびらかし、＼おばさん＼連中のうちの一番、瘡せこけた女に揉ませ、同時に二人の＼おばさん＼たちを両わきに抱き寄せていた。そのうちの一人は赤ちゃん持ちらしく、両乳房から、しとしとと白色の液体が、にじみでて肌を伝わり、床に落ちていく。Kは、いきなり彼女を引き倒し、その活動している乳房に飛びついた。でも、あまり味は良くないらしく、Kは複雑な表情をして

乳房から放れると、元のように坐りこんで、べらべらと独白を始めた。

「おお、ほっそりした奥さま！ おれは、いつでも、あなたのような魅惑的な御婦人を想像しながら官能するのです。そう、そうしないことには、この風船がふくらんでくれないのです。ええ、そうです、これこそが、おれの、ただ一つの生きがいなのですから。尤もこれがあるために、苦しむことだつてありますがね。え、どんなことかつて？ ううむ、たとえば夢を見るでしょう、おれは毎朝、見るんです。それもね、いつでも決まらなかつた一種類の夢しか、見たことがないのです。ある型に、はまっていて、その型から一歩も、はみだそうとはしない、そんな頑固な夢なのです。そう、つまりね、この風船玉が眠っている間に、ぐんぐん大きくなって、部屋一杯に、拡がってゆく。いや、それどころではなくて、それは地球の大きさと同じくらいまで大きくなり、更には宇宙と同じだけの大きさになってしまう。気が遠くなるような話ですがね。それにひきかえ、おれの肉体は、ぐんぐん縮まってゆく。目に見えないほどに縮まってゆく。ほこりのようになってゆく。でもね、決して消えてしまうことはない、小

さくとも、ちゃんと存在しているのです。巨大な風船と、目に見えないからだ。これくらい不つり合ひで、不安で、不愉快なものはない。それは苦痛なのです。ああ、からだ中が風船の重量に、ぐいぐい押しつけられていて、骨がばきばき折れ始める。物凄く苦痛なのです！ 風船は楽しくふくらんでゆくのに、おれ自身は、苦しみながら縮まってゆくのです。こんな馬鹿げたことつてありますか！

だから、おれは、おれの肉体であることをやめて、風船玉そのものに成り切ろうと努力する。そう、そうすれば、あらゆる感觸が快楽そのものになるからです。ところが、そうはゆかない。残酷にも、そうはゆかないんだ。おれは、いつまでたつても、おれの肉体なのだ。おれは、おれ自身から、離れられないのだ。つまり、風船玉そのものになることはできない、風船はおれの意志に無関係に、ぐんぐんふくらんでゆく。気が遠くなるくらいの速さで、ふくらんでゆき、小さくなったおれ自身を押し潰そうとするのです」

瘡せた女は、Kの口元を不思議そうに、そして面白そうに見詰めている。

「そう、風船玉は、おれの意志に無関係なのだ。意志に無関係！ このことが重要なので

イメージ『腹話術人形』 室井亜砂路



す。官能は、おれが意志した時に起こるものじゃない。そうなんだ。それは、なかば自動的に起こるのです。奥さまの清らかなお乳から、とろとろしたミルクが垂れ流れる瞬間におれは奥さまの魅力のとりことなって、たちまちこの風船がふくらんでくるのです。だから人間は、より官能的に、より欲情的に教育されなければいけない。そう、より色情的になれるように心を訓練するのです。無意識の心を官能的に馴らさせてゆくのです。いいで

すか。だから、こういうことだって言える。つまり、おれは、この風船玉が、かってに膨張してゆく忌しい夢を改造するために、ただそれだけのために、こうして奥さまと、ほほえましく、たわむれているのですよ。奥さまのお乳から噴き垂れる新鮮なミルクを見て嬉しんでいるのですよ……と。おわかりでしょうが！

Kは誰に対しても、だいたい同じことを言うらしい。おれに向かっても、これと同じよ

うなことをよく言うのだ。ふむ、相手が聞こうが、聞くまいが、そんなことに構いやしない。彼は、ただ話したいことのすべてを話すのだ。しつこいと言うか何と言うか……ところで、その話の内容だが、いつも似たり寄ったり、常に同じところで、ぐるぐる廻っているだけ。一向に進歩の跡が見られないのだ。この夢の話に当たって、彼はこれ以外の別な夢は、ただの一度も見ることがないというのだから、ふむ、何とも奇妙なことなのだ。

H氏は八お婆さんVたちの尻を一行に並べてみて、細々と品定めをしていた。子供を産んだ女の尻というものは、一目見てわかるものだ。脂がこってりと乗っていて、腰がまるで、ずん胴なのだ。でも、おれは青くさい少女の尻よりも、こうした丸々と肥満した厚い尻の方が好きだ。ちよっ、この趣味もまた、Kとは正反對らしい。この女性たちの中では、何と言っても八奥さまVの尻が、ずば抜けて素晴らしい。ひとときわ白くて、なめらかで、うむ、それに丸々と厚く盛り上がっていて、巻尺で測れば一メートル以上はあるだろう、その曲線が絶妙なのだ。H氏もこの事実

に気づいているようだった。
H氏は八奥さまVを四ツ這いにはわせて、

いきませてみた。この時、おれは始めて知ったのだが、奥さまVもまた、腸を飛び出させるという、特技Vを持っていたのだ。ふむ、その出かたが物凄い。みるみるうちに、ぐーんと伸び出てきて、おお！ 五十センチ近くも飛び出して漸く止まった！ まるでしっぽのようなぐあいには太く垂れ下がり、それが、ぴくぴく息づいているのだ。

おれは驚嘆した。ふむ、早速立ち上がって近くに寄って、じっくりと見学しようと思つた。だが、妹Vが放してくれない。ちよつ、おれは面倒になった。それで、坐ったまま、眺めやることにした。

ふむ、実際、大したものだ。あれだけになるには、人並みならぬ苦勞があつたのに違いない！ 見ているうちに、おれは、とてつもなく欲情したが、妹Vはおれの欲情の原因に氣がついていたので、あまり、良い顔はしなかった。ちよつ、彼女は、あきらかに、奥さまVに嫉妬しているのだ。

「お婆さんVたちも、また驚きの目を見張り、奥さまVの素晴らしい、特技をほめちぎつた。Kは驚きのあまり貧血して、ああ、自慢の風船玉が、するすると、しぼんでしまったほどだ。ふむ、この妹Vでさえも、ぼかん

と口を開けて嘆息している。おれをひつつかまえていた腕が、いつのまにか、ゆるんでしまっている。H氏は得意満面でこう言った。「さて、皆さん！ これから、この長々とした女房のしっぽに浣腸してやろうと思うのだが、いかがなものでしょうか？」

皆は我を忘れたように、口々に賛同の叫びを上げる。奥さまVはそれまで、立ったり坐ったり、膝を閉じたり開けたり、しっぽを引張ったり丸めたりしながら、様々な魅惑的なポーズを見せてくれたが、H氏の「浣腸」という言葉を聞いたとたん、嬉しげな嘆息を上げて、夫の胴体に抱きついた。

「よろしい、御期待に答えて、早速やりましょう！ ところでね、この尾っぽは、とても敏感にできているので、人工的な小道具は、一切、必要ないのです。はっはっは。ただ、こうすれば良いのです」

H氏は奥さまVのしっぽを片手で、ひょいとかみ上げると、その先端を自分にとりつけ、もう一方の手で奥さまVのむっちりした乳房をつまみ上げ激しく爪を立て、更に顔を近づけて接吻を始めた。ふむ、一分たつたかたないうちに奥さまVのノドから熱い吐息が、もれ始めた。やがて、がっくり

前のめりになったH氏は、五十センチのしっぽをとり外し、その先端を、しっかりと握りしめた。奥さまVは、あお向けに寝転がり両足をきちんと揃え、H氏に握られている自分のしっぽを見て、満足そうに微笑んだ。

それから五分……漸く、浣腸の効果が現われてきた。尾っぽは、もっこりもっこり収縮し、ユーモラスな、ぜん動を始めた。

奥さまVは油汗を噴き出し、うめき声を発して、全身を断続的に、そり返らせる。いや大変な迫力だ！ 腹の筋肉が、ぴくぴくんと引きつり、静脈が、いまにも破裂しそうに浮き出てきた。しっぽは真赤に、はてっっている。見物人は、じっと息をひそめ、よだれを垂らしながら、ただひたすらに見守る。

十分近く経った時、H氏は漸く握りしめていた、しっぽを解放した。すると奥さまVは、からだを丸めて両腕で支えて腰を持ち上げる。素晴らしい曲線を持った尻が丁度、天井を向いた。ところが、どうだ。おお五十センチのしっぽは倒れることなく、艶々とふくらんだかと思うまに、空中に、ちゃんと直立したのだ！ 突然、はじけるような巨大な爆発音が響きわたり、噴水のような勢いで、煮えたぎった栄養物が、どっと噴き出した。流

動体は一メートル近くも噴き上がると、周りに立っていた見物人のからだに、ぴしゃぴしゃ降りそそぐ。でも八おぼさんVたちは、ただ歓喜するばかりで、むしろ進んでそれを頭から、ひっかぶろうとするのだ。ああ、それでも栄養物の大部分は八奥さまVの肌に降りかかった。大きな赤土の塊が顔に向かって落ちてくると、いきなり、信じられないほどの大口を開けて、ぱくりと、飲み込んでしまった。

まるで人間放れしている芸当だ。まさに超人類だ。おれとは大違いだ。何て素晴らしいんだろう！

五十センチの、しっぱは爆発作業を終わるやいなや、不意にしょぼくれて、ゆらゆらと揺れたかと思えるまに、タイルの床に、ぺったりと倒れ落ちた。八奥さまVは全身で大きく息づきながら、播き散らした栄養物を自分のからだに塗りつけてくれるようにと、見物人に頼み込む。八おぼさんVたちは大喜びだった。

たちまちにして、輝けるような美人が誕生した。八おぼさんVたちは、それを見て我慢し切れないほど羨ましくなってしまうらしい。浣腸の用意がなかったために、皆でんで

に排泄を、おっ始めた。ちよっ、いくらなんでも、これでは臭くてやり切れない。おれは八妹Vを突き放して湯をひっかぶり、汚れをどしどし落とした。

湯船に飛び込むと八妹Vも後から続いて入ってきた。おれは、いやだったが、彼女の好意を無にするのも悪いと思ったし、また、わざわざ苦痛を遠ざけようとするだけの気力もわかなかったのだ。からみついてくる八妹Vの手を払おうとはしなかった。まだ、少々胃の調子がおかしい。それに、今日は疲れた。ひどく疲れたのだ。先に、早めに帰って、もう寝てしまおう。もう六時か、丁度、良い時間じゃないか。実際、今日は休んだ方が良かったのじゃないだろうか。何か、すっきりしないところがある。悪い夢でも見ているような気分だ。頭が、ずきずき痛む。風邪でもひいたのだろうか？

H氏も、Kも八奥さまVも、脂ぎった八おぼさんVたちも、皆それぞれ、どろんこ遊びの最中だ。転げまわって、たわむれ合っている。何て罪がないんだろう。ふむ、大いに楽しむが良からう。では、ごゆっくり。

おれは衣服を着け、裏木戸に向かった。振り返ると、やっぱり八妹Vが寄りそって、つ

いてくる。やれ、やれ。とんでもない相手に気に入られたものだ。

その時、木戸の外側から不意に、がやがやと男たちの話声が響いてきた。はて、何となく聞き覚えのある声だ。おれは木戸の鍵を開け、ふらりと外を覗いた。しまった！慌てて木戸を閉じようとしたが遅かった。いきなり、戸口近くにいた大男に掴まって、外に、ずるずると引き出された。

八妹Vは反射的に飛びのいたらしく、からくも男たちの魔手を逃れたようで、さっきの浴室へかけ込んでゆく後ろ姿が、ちらりと見えた。

おお！実に素速なことだ。世間がこれほど素速いとは考えてもみなかった！おれはたちまち顔を数回、殴られて、気が遠くなっていた。

それでも、浴室の方向から八妹Vの叫び声が伝わってくるのが、わかった。ちよっ、絶望的な響きだった。

「大変よ！大変なのよ！あなた方の御主人が大勢、殺気立って、ほら、そこまで、もうそこまで来ていらしてるのよ！」



カット・志野 春秋

連載創作

幻想帝国

花影 叢

平康里に虹人（ホンレン）という女がいた——女といっても娼妓ではない。何軒もの大棧の持ち主で街の有力者だった。

ホルワット將軍がハルピンを去った後、清の黒竜江將軍が入ってきたのだったが將軍は瀋陽にいて、北滿はそれまで匪賊だった連中が巷に入り、勝手気ままにふるまった。田類希將軍も緑林出身で、匪賊たちにはお頭と呼ばれていた。

一時ハルピンの独裁者だった田將軍の虹人は第四夫人で、芸人あがりだという。あきら

かに漢族でも満州人でもなく、西域のペルシヤ系の血をひく、ちよつとみると洋鬼——ヨーロッパ人のように見えるスラリとした長身と高い鼻をそなえた容貌に朗らかな灰青色の瞳をもっていた。

出逢えば、大抵の者は腰を低くしてお愛想をいい、ご気嫌をとっていたが、影ではその口で「女怪」と呼んでいた。

家主への借金の肩がわりで売られたリーナは、虹人の持ち店で、李納と呼ばれることになった。

虹人などは、とても手のとどかない、抑ぎ見る存在で、日常、顔が合っても口をきくことなどなかったのだ、

「女怪」

といわれる、いわれもリーナは知らなかったのだが、そのうち、あの事件がおきた。

清朝が没落して、満州には張作霖が勢力をはったのだが、ハルピンの田將軍が突然、軍に追われて反逆者の烙印をおされ、逃げる途中に殺された。

同行していた虹人は捕えられて、引き戻さ

れ、ハルピン城外で処刑された。

田將軍の屍体には灯芯をさしこみ、火をともし、脂の燃え尽きるまでさらしておかれることになった。人間の蠟燭にされるわけだ。

これを支那人は、

「薰蛾」

と呼んでいた。

三国志演義のなかの憎まれ者の独裁者、董卓がクーデターで殺され、街の辻にほうり出されると、誰かが脛に灯芯をさしこんで火をつけた。人民の膏血をしぼりと、肥えふとった脂身は、三日三晩の間、辻に灯をともしつづけたそうである。

こういう物語の場面は、支那人たちの間に生きていて、ことあるごとに再現されるのだった。

田將軍が、薰蛾の刑にあうにふさわしい悪役かどうかの判断は、リーナには手に余ったが、まるでお祭りのような巷のさわぎと、特に女たちの興奮が強い印象として残る。

いよいよ虹人が処刑される日には、日ごろ郭のなかに閉じこめられている娼妓たちにも見物に出かける許しが出て、朝早くから弁当を作り、男衆の興をしたてて鳴り物入りでくりこむ、という騒ぎだ。

まだ新米で、いろいろ芸をしこまれていたリーナは外出の自由もなく、女たちの持ち帰る噂話に耳をそばだてるしかない。

今では影口ではなく公然と「女怪」と呼び捨てられる虹人は、城外の広場で穴を掘られてそのなかに立てられた木の先をとがらされた串に下から突きさされるように縛りつけられて、さんざん苦しんだあげく青竜刀で首をとばされるのだ、という。

かつて平康里に一人の学者が滞在していたことがある。手なぐさみに女の易をみる。それがよくあたると評判をとった。ところが虹人を見たところ何もいわない。後でだれかが聞きこんだところによると、虹人はただならぬ死をむかえる運命があらわれている、という。五十九人の男を一度にむかえた後、首を失い幽鬼としてさまよう……

田將軍を追跡した騎馬隊が、六十人編成の一旅団だったが、兵士達は將軍をみつけると簡単に銃槍でいも刺しにしてしまい、同行の虹人を殺した。まだ若い隊長の李司令だけが狂態にみまきもなかったそうで、即ち五十人の男を女怪は、むかえたのだった。

何やら神仙の風格のあった易学者の言葉が思いだされて、あらためて評判になった。

虹人処刑の青竜刀をふるうのが、また凄味のある美貌の青年司令、李旅団長で、そのことも役者の揃った名舞台の人気を呼んでいるのだった。

白壁のようにお白粉を厚塗りし、蒼いくまどりをした俳優——伶人たちの登場を胸をわくわくさせて待ちうけるような、それらを語る女たちの口吻だ。

ハルピンの城は、駅や埠頭を中心にした新市街と離れた東南郊にあり、城内は街の繁栄から取り残された場末になっていた。泥づくりの支那風の家がごたごたとかたまった、きかない街だ。城外というと、さらにそのむこうで畠にもならない湿地が広がっている。

見物といっても一日がかり、棧敷までができていて屋台店が出る、という大がかりな処刑ショウだ。

薰蛾にあった田將軍の、黒こげになった残骸のかたわらに掘られた穴には、すでに杭がたてられていて、虹人が虫のように腰を土中から串ざしにされ、縛りつけられている。

見ていたところで、既に息たえたもののようにピクリとも動かない女体なのだろうが、見物の女たちは飽かずに、黒こげの物と棒つきの物を眺め、口はいそがしくひろげた弁当

のごちそうを咀嚼し、かん高い声で、噂ばなしを、くり返すのである。

後で考える易学者といい、五十九人の兵士たちといい、美貌の李司令といい、どうも眉唾ものの話なのだが、くるわの女たちは例外なく無条件にそれらの実在を信じていた。

こうした役者がそろわないと、また舞台がひらかれないのだ。

女の肢態が白日のもとに白くなまなましく棒からたれさがり、五十九人の黒装束の兵士たちが舞台まわしの黒子をつとめ、やがて李司令が登場すると、劇はクライマックスに達する。

青竜刀が陽にきらめき、何度もうち振られたあと、やがて鋭く一閃されると、首が血の帯を引いて、スルスルと宙にうかぶ。

現実でありながら非現実的な一瞬において見物の人間たちの官能が凝結する。開放されないまま、ひとつの様式にさだまった官能の炎が、燃えたまま凍りつく。

まだ朝が早いようだ。カチューシャにとつては、ついぞ起きだしたことの無い時間だったが、もう一度寝るには、寝たりてしまっている感じがあった。支那人の正月（旧暦）そ

れから女の正月（十五日）が過ぎると、ぐつと夜が短くなってくるが、シベリアの春は、まだ遠い。今年は月餅も食べなかった、と起きぬけから思いだしている平康里の連想から支那人たちの、妙に人なつっこい賑やかな祭りの雰囲気を感じだしていた。

いつもは一人ベッドだが、今朝は男が寝ている。イワノフなどは朝まで寝かせておいたことはないし、その点のけじめはつけておくカチューシャなのだが、今度に限って、男を夜のうちに追い出す気がおこらなかった。

なんといっても、眼ざめて、かたわらに男のからだの温みがあるということは、女にとって倅がそこにある感じだ。

しかし、こうした習慣をつけてしまう危険は、カチューシャも身に試みている。

娼家の客や旦那であつたら、もともとそういう感じはおこりようがないのだから、どうでもいいことだが、普通の男には、うっかり気を赦してしまう。

実際、男に手もなくだまされて、血の出る様な思いをしてためた金をまきあげられる女たちを、余りにも多く見すぎてきた。

元来、浪費家でのんだくれの女にしても、アルコールッ気が切れて、まじめに働いてい

るのを見かけると男ができてくる。いくら働いても、いずれは男のバクチの元手ぐらいにしかならないことだろうし、とは女も心得ているはずなのだが、物腰がいそいそしてしまふのも浅ましい。

多少かかわりのあつた男たちにも溺れなかつたことが、カチューシャの現在となつていく。その点では、彼女は自身の意志力、感性を信じていた。

とにかく、どろ沼の淵に手をかけて這いあがつてきたのだ。まだ沼の瘴気プンプンのからだが、もう沼には落ちない、という自信がある。実感がある。

フランク・ドゥナンというこのアメリカ人は、たしかに沼の住人ではない。これからカチューシャが住みかえようとしている、清潔な石鹼の匂いのするような世界の人間であることは確かだし、その意味では、将来に役にたつ人間だという直感があつた。いささか功利的な直感が、すなおに好意とつながりあつた感じなのだ。

イワノフは、ドゥナンを危険物あつかいにしていたが、危険なことはわかるが、そう言う人のいう事などきいてはいられない。

『あたしは虹人にはならないのだ』

読者ギャラリー 『生 餌』

小川 茂正



と思う。支那人の見世物にされ、首を切られるのは真っぴらだ。うまくここを乗りきって、逃げだすこと。さして難しく考えることはない。

妙な時、虹人を思いだした。不吉といえは不吉だが、官能がひとつのことを会得させ、かわりある記憶をひきずりだしただけのことだろう。

平康里でアクロバットをしこまれた。陶製の両端があいた壺へ腰を通すのだ。前からは顔と足と腕がでて、後ろから尻がとびだす。殻を背負った虫のようになり、ひじから先の腕を使って床を這い、はしごを登ったり、台上にそのままさかさまに立ったりするのだ。芸人は、それで綱わたりまでするらしい。

日本人が、

「文福茶釜の綱わたり」

だといって、手を拍ってよろこぶそうだが、文福茶釜というのは狸という動物だそうで、ずいぶん芸を馬鹿にした話だ。

カチューシャがしたのは、それほどの芸ではない。突きだした尻をなぶられて、腕でちようしをとりながらゆるく振りたてたり、お尻のくぼで棒をはさんだり、卑猥な余興の見世物になるのだった。

その頃は背は高かったが、ひよろりとほそく、腰もはっていなかったリーナで、壺へ入り、蛇のように手足をくねらせても、サマになった。むろん慣れてもくるしい。壺と腰が一体になった重みが、腕を責めつけてくる。しかし、その間も顔は、あどけない微笑を、たやしては、いけないのだった。

かけあいの道化役のような男がいて、ギャグを演じて見物を笑わせる。見物の酔客などが、興にのった勢いで二人の間にわりこみ、演技中のリーナに悪さする。道化役のもっている鞭をとりあげ、リーナの壺から出た部分を突っついて来たりしても、演技を途中で投げだすことは赦されていない。

平康里に棲んだ二年間、リーナは調教を毎日うけた。演技のない日でも屈伸運動をつづ

けていないと、からだが固まって、いざという時に壺に入らなくなってしまうのだ。娘っぽく肉がつきはじめる食事制限された。

単に娼妓として店に出るより、そうした特技を売り、そのうえに、からだを売った方がいい値段になるのだ。といって、だれでも特殊な芸が身につく訳ではない。十八才を越えはじめから男を知っている様な娘は、しこみようがない、ということだ。

バーをはじめから、そんな経験を土台にして、女たちにストリートにからだを売らせるより、演技をおぼえさせ余興をやらせるように、しむけた。芸のできない者は、形もなにもない裸踊りで、おわりに

「パンザイ」

と叫ばせた。これはパトロンの元曹長氏のアイデアである。レコードによく使ったのが

「カチューシャ可愛いや」

別れのつらさ

という例のうただ。

毎日の訓練が切れると、とたんに肥りはじめた。ロシア人としては骨の纖い方だったが南方系の姑娘や日本人の女とくらべれば、どうしようもなく張った腰と胸で、肉がつきはじめると急にふくれあがるように固く重いか

らだつきになり、もう足を胸にあわせて壺に入れるどころか、胴をもぐりこませるだけでも、むずかしくなってしまう。それでも腰をたてたまま、てのひらまで床につくし、大抵の女より、からだは柔らかい自信がある。それで昨夜、自分のからだを痛めつけたい衝動の命じるまま、アクロバットの形をとって、そのまま男に縛りつけるよう頼んだのだった。

はじめ、カチューシャの一人相撲のような勢いに一方的に押され気味で、遠慮というより、たじろいでいた男が、ある段階から急に積極的になった。腹をたてたように、力で、ぐいぐい責めつけてくる。

「ひいひい」

泣きだす声が、自分でもわかる蓮葉な嬌声になって、はずみがついた男を煽りあげていた。男は、飲ました媚薬がききはじめたのかもしれないが、自分の方がぐらぐらするほど酔っているのがわからない。

酒は、ふつう飲まないが、バーをはじめてからは稼業がら、つき合い程度はする。時々気分が悪くなるが、乱れることも、深く酔うこともない。

カウンターで、相手が新聞記者だという意

識で話しながら、つい少し量を過ぎたようだが、酔いに身をとられるほど飲んだおぼえはなかった。

にもかかわらず、確かに異常に酔っているのだ。からだはアクロバットの形がとれるほど柔らかくなり、しかも腰が入っている。

そんな状態をはっきり意識していたわけではないが、頭の隅に醒めた部分があり、自分を不思議がっていた。しかし、その意識は、衝動のままに動くからだを、まったくどうにもできないのだった。

ぐるぐるまきに縛りあげられてしまった。筋肉が動かせなくなると、とたんにくるしくなり、床をごろごろ転げた。そこを踏みつけられる。ひしゃげた二つ折れのからだだが、余計にひらたく無理やり押しつぶされる。

「グエー」

と胃腸がとびだしてしまいそうな嘔吐感がつきあがる。実際に少し胆汁のような液を吐いたようだった。

「ああ、赦して」

といってしまうが、ロシア語のためドゥナンには通じない。縛られる前も踏みつけられたが、その時は圧迫感が腰を強く責めてきて痺れたような感覚の底に質量感のある快感、



カット・岡 たかし

懸賞応募告白記

悩ましい誘惑

錦 成 人

私は、ついに私の秘密を告白する決心をしました。私は、できるだけ正直に自分のしてきたことを、さらけ出そうと思います。ですが、なにぶんにも筆が拙いものですから読みにくいかと思いますが、ご勘弁願います。

私は幼い頃から、この秘密を胸に秘めながら、悩み苦しんでいました。私は、自分のことを、なんていやらしい異常な人間なのだろうと思う、こんないやらしいヤツは生きる資格はないのではないかと、思ったこともあり。人前でも、常に犯罪者のような、後ろめたさを感じて、おどおどし続けていたのです。そういう私が、この雑誌を見つけた時、

いかに歓喜したか、皆さまならば、お察し下さいますでしょう。私のような性癖をお持ちの方が他にもいらっしゃるのだと思うと、つくづく嬉しくなり、むちゃさえしなければ悲観することはないので、心強く生きられるようになりました。

×

×

今から考えますと、私のこの性癖は小学生の時から、あったようです。私は小学生の時すでに女の人が縛られたり、鞭で打たれたりしている絵などを好んで、いえ、むしろ探し求めて眼にしていたように思います。

その頃から、縛られる快楽を、本能的に憶

えてしまっていたのでしょう。今でいう鍵っ子で、私は家の中に、ただ一人のことが、しばしばありましたが、そういう時、私は裸になって両手を後ろへ回し、縛られているような格好で、自分がいじめられているところを想像して、畳の上を転げ回って遊ぶことが、楽しいことになっていました。

始めのうちは、刺激の強い遊びでした。しかし、だんだんそれだけでは飽き足らなくなってきました。そこで実際に、ヒモで自分自身を縛ってみるようになりました。前よりもずっと刺激が強く、かなり興奮しました。けれどもそれは、不器用な私にとっては、なか

なか困難な作業でした。もう何分もかかって滅茶苦茶な縛り方しかできませんでした。それでも自分では、結構満足していたのです。

× ×

中学生になると、やり方が少し大胆になってきました。まず家の中でプレイ（ここから私の奇癖をプレイと呼ばせてもらいます）していたのを、家の外へと移行しました。外といても、私の家の裏通りの、しかも家のすぐそばです。そこで、裸になってプレイするのです。

夏の夜、私は寢床の中で、その夜の冒険のために胸をドキドキさせながら、時間の来るのを待っていました。やがて十二時頃になります。すると私はソートと、それはもう息も止めんばかりにして床を抜け出すのです。そして家の脇から道路へ首だけ出して用心深く見回します。私の家の裏通りは、昼でも車や人の通行の少ない所です。従って深夜ともなれば、めったに人など通るものではありません。それでも私は、しばらくの間は首だけ出して左右を交互に見、また猫のように耳をすまします。どんな小さな音でも聞き逃がすまいというのです。そして、どうやら何の音もしなくなると恐る恐る出ていきます。それか

ら道路の真中に立って、もう一度、見回します。

そのようにして誰も来ないかを念入りに確かめてから、ゆっくりと、パジャマを脱ぎます。脱いでいる間も用心しています。そして肌着を脱ぎ、ブリーフも脱いで素裸になります。そして、そのまま両手を後ろへ回して、縛られたような恰好で、地面に転がるのです。頭の中では、小学生時分とちがって自分ではなく、うら若い娘が恥かしい素裸にされて縛られているところを、想像するようになっていたのです。

その間、絶えず耳をすましています。すこしでも車の音や足音がしたら、さっと、着物を持って家の脇へ逃げ込みます。そして、また静かになったら、出て行ってプレイを続けるのです。また時々、どうしてもたまらなくなり、ヒモか何か持って出て、道路上で実際に自分を縛って転がることもありました。

ところが、それにも満足できなくなってきました。そこで今まで自分の家のそばでやっていたのを、やや離れたところへと足をのばすようになりました。

私の家の回りは、だいたいが静かな所なので、その点、好都合でしたが、家から離れた

所へ行く時にはパジャマではなくて、半袖シャツにズボンをはいて行きました。しかし、そのシャツとズボンの下は素肌です。すぐ脱げるようにという配慮もあったのですが、見つけたりそうになった時、すぐ着ることが出来るように考えていたようでしたが、何よりも被虐的だったからです。

それから、始めから素裸で、出て行くこともありました。これは、かなりスリルがありました。またブリーフだけ穿いて出ることもありました。これは、かなりエロティックな感じがしたものです。

また、全く趣きを変えて女装の真似ごとをしようとして一生懸命になったこともあります。でも衣裳もないし、顔にも自信がないので諦めてしまいました。

私の学生時代は、だいたい、これまで書いてきたようなプレイをくり返して、おもに想像することを楽しんでいたのですが、私が会社へ勤めるようになると、前述のようなプレイは、殆ど止めてしまいました。それは私が真面目になったということではありません。実は、もっと実感的で面白いことを始めたのです。面白いなどと言いましたが、常識から見れば、実に、けしからんハレンチな軽犯罪

です。朝晩の電車の中で女性の身体に触れるのが、何よりの楽しみとなったのです。何のことはない「痴漢」です。

実行する以前は、いかにささやかな痴漢行為とはいえど、少なくとも社会人としては、犯してはならない犯罪なのだから、何か、とても大それたことをするみたいに思っていました。ところが、どうしてもその誘惑に勝てずに、やり始めると、私の頭の中からは、犯罪などという語が、どこかへ消し飛んでしまったようなのです。

始めは、手が自然に女性のお尻に触れるようにしていただけなのですが、だんだんと大胆になって、指先でソーツと撫でるようになりました。そうして、毎日触れているうちに気づいたのですが、やはり何人かは、触れても、すぐに逃げることはせず、ある程度までは拒まないという女性がいます。痴漢にいたずらされることを期待している女性も、たしかに居るようです。でも、そういう女性を見分けるのは、たいへんなことで、たいていはこちらを睨んだりするので、私はこそそこそと逃げ出さなければならず、未だに、お尻を目標にして、成功したことはありません。ただ一度だけタイミングよく相手が動いてくれて

ほんの瞬間でしたけれども、パンティのふちに指が届いたことがあります。その時の太腿の柔らかかったこと……。

その日は、一日中、なやましくて、仕事がかどらなかつたことをおぼえています。

そういったように、始めのうちは、お尻に目標をおいて専念していたのですが、あまり収穫もなかったせいもあって諦め、今度は、女性の手を握ろうと、し始めました。手ならずとチャンスは多いと思ったからです。でも、手の場合も、やはり、そう簡単ではなかつたのですが、お尻同様に、ある程度は拒まない女性はいます。一度、こういうことがありました。

夏のことですが、朝のラッシュ電車の中でノースリーブの女性の手に触れてみたのですが、拒まないで図に乗り、そろそろと腕を握ってみたのです。それでも拒みません。私はもう、うれしくなってしまう、思いきってギョツと強く握りしめました。しかし、女性には握られた腕を動かしてもせず、じいっと背を向けたままなのです。私は、きっとこの女性には触ってほしいのにちがいないと自分で決めて、こんな柔らかな肌を縛ったら素敵だろうと思ひながら、腕のつけ根から手首まで、い

たる所を撫でたり、握りしめたり、軽くつねってみたりしました。また、その女性の手に私の手を絡ませてみたりしました。それでも彼女は、手を振り払ったり、振り向いてにらんだりしようとはしないのでした。そのかわり何の反応もありません。

そうしているうちに私は、いいことを考えつきました。それは、指で、その女性の腕に「スキダ」と書こうという考えです。そうすれば、いくらなんでも何か返事があるだろうと思つたのです。始めは早く、それから、ゆっくりと「スキダ」「スキダ」とカタカナで何回も何回も書きました。でも、私の期待に反して女性は、これといった反応を何も示してくれないのです。私は、あせりました。必死で書きまくりました。でも、とうとう降りる時まで、その女性は何の反応も示さずに、腕を私に預けたまま知らん顔を、し続けてしまいました。

まあ、この場合など実に運が良かった方でそれがあの女性の痴漢撃退法だったのかは知りませんが、その後、こういう女性には一度も、めぐり会えませんでした。

そうやって私が、電車の中での悪事を繰り返しているうち、ある時、逆に他の男性に私

が、いたずらされると、いうことがありました。始めは何か感違いしているのじゃないかと思ったのですが、どうもそうではないらしいのです。ヘンなヤツだと思いましたが、同じヘンなヤツ仲間の私はひどく興奮してしまい、ぼうとなつてされるに任せたのですが、後になって、私に腕を預けっぱなしにした女性のことを思い出し、その気持がわかったような気がしました。それ以来、また触れてくる男性はいないかと期待していたのですが、

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	三千元

☆規 定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文獻味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

とうとう、ありませんでした。

とにかく私は、会社を辞めるまでは、毎日のように、そういう痴漢行為にふけていたのです。恐ろしいもので、それが習慣というより日課のような、気持になったものです。よくも警察沙汰にならなかったものと思います。しかし私は、こういった行為、或は前述のようなプレイをすると、後で必ず重苦しい罪悪感に責められたものです。自分でもやっではいけない、やっではいけないと思

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

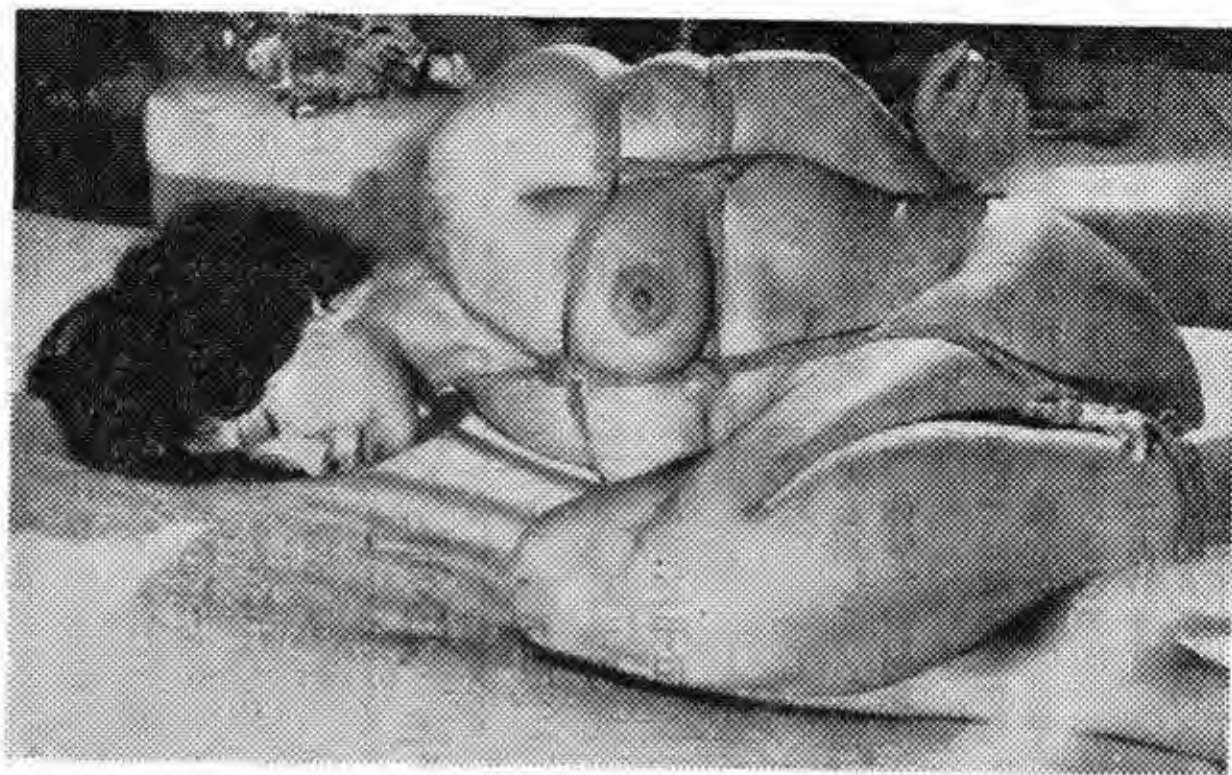
一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

ながらも、どうしても衝動的な誘惑に負けてしまふのでした。情けないとは思いますが、自分自身を制することができないのです。

今になってよく考えてみると痴漢行為は別ですが、私の行なってきたプレイは常に対象が自分自身でした。対象が自分自身ということは、結局、サディズムとマゾヒズムをいっぺんに、味わっていたわけではないでしょうか。一人二役というところですか。しかし、やはり、そうなると快楽の範囲も狭くなるようです。そこで相互プレイというものが必要になってくるのでしょうか。

私は、この雑誌を知る前は、こんな私の性癖は、私だけの忌むべき性癖だと思っていたので、堂々と他人との相互プレイを楽しんでいる人達が居られることを知った時は、信じられないほど驚きました。そして最近、時々誰か他の人とプレイをしたいと思い、居ても立ってもいられないほどの気持に駆られる時があります。ですから、ここで誰か私の相手になってプレイして下さいと頼めばいいのでしょうか、気が小さいのでしょうか、どうしても言い出せないでいます。結局、私には、真に皆様の仲間にしてもらえる資格はないのでしょうか？



自分の身の上のことは、今まで洗いざらい書いたのだから、これからは、何か自分の身の上が変わった事が起こらないかぎり、告白の文章は書くまいと思っていた私ですが、ま

△告

白▽

行く川の流れ

荒尾慶子

たまた、拙いペンを走らせてみたくなり、机に向かつてしまいました。

平凡でおだやかな生活を続けております私にとって、気象の変化は私の暮しにとって、一つのアクセントになって暮しに張りを与えてくれます。梅雨明けの宣言があつて、それから、灼熱の太陽が輝く真夏が訪れたかと思う間もなく、戻り梅雨とかで、再び梅雨のように、よく雨の降る毎日が続きました。

きまって毎日のように、夕方より激しい雷鳴が襲ってきては、やがて、それは車軸を流

すような豪雨となりました。殆ど、そんなとき、私は自分の部屋に一人で静かに机に向かつておりました。雷鳴は、この七階の部屋にはよく響き、そして夕暮れともなれば窓から雷光が、つんざくように飛び込んできます。

私は特に雷が嫌いとか恐ろしいとかは思いませんが、たった一人で部屋におつて窓の外側を滝のように流れる雨の音を聞いているのは淋しいものです。しかも、夜なんか、独りでカラーテレビを見ているのも、話し相手がないだけに侘しくなりません。

自分の存在を認めてくれるものは、誰ひとりいないのだと思うと、やるせなくて人恋しい気持ちが、ひしひしと胸に迫ってきます。

そんなとき、私は机の上にある電話の受話器を無意識のうちにとっています。親しいお友達の家へ、なんの用もないのにダイヤルを回してしまいます。

「大変な雨ネ、雷も鳴ってるワ。そちらはどう？ 稲光りが、とっても凄いのよ」

とりとめもない長電話で、お友達の声が聞いているだけで、私の孤独感はいくらかは安らぎます。その相手が実家の母であったり、義母であったりはしますが、未だに男友達で親しく電話するような相手はありません。

ばんだい号事件、全日空機に自衛隊機が衝突した事件、それに台風19号九州を襲う。そういったショックな事件も、私は自分の部屋でひとり胸をわくわくさせながら、テレビにかじりついていました。

亡き夫の喪に服している私が、お墓参り以外は、そうやたらに外出したり歩き回ってはいられない——と、そう心にきめてはいても、夫のお位牌だけを胸に抱きしめて、ひとり暮らしを続けているということは、やはり心淋しくてならないのです。

戻り梅雨が明けますと、連日三十度を越す暑い日が続きましたが、それでも空の色になんとなく秋めいたものを感じるのは、私の目の錯覚でしょうか。

窓越しに外を眺めると、入道雲が石鹼の泡立ったように、むくむくとした真白い盛り上がり、如何にも男性的な力強さで逞しく見せております。一定の形のように見えていてそれでいて、その形は少しも固定してはおりません。じっと見つめておきますと、時々刻々と、その形が変化してゆきます。

山の頂のような、とがった上端からであったり、脇腹のような窪みであったり、時には人の顔に似た顎のあたりであったり、そんな個所から徐々に形がくずれ、変化してゆくのです。時には、もくもくと近くの入道雲が湧き上がってきて、もう一つの雲に合体することもあります。

太陽の光りに映えて、まぶしいくらい白く輝いている入道雲は、美しく、そして真夏の明るさを、よく表しております。でも、一ときも同じ形でいない無常感は、

『明日ありと思う心の仇桜、夜半に風の吹かぬものかは』

という歌の心を私の胸に痛いほど知らせて

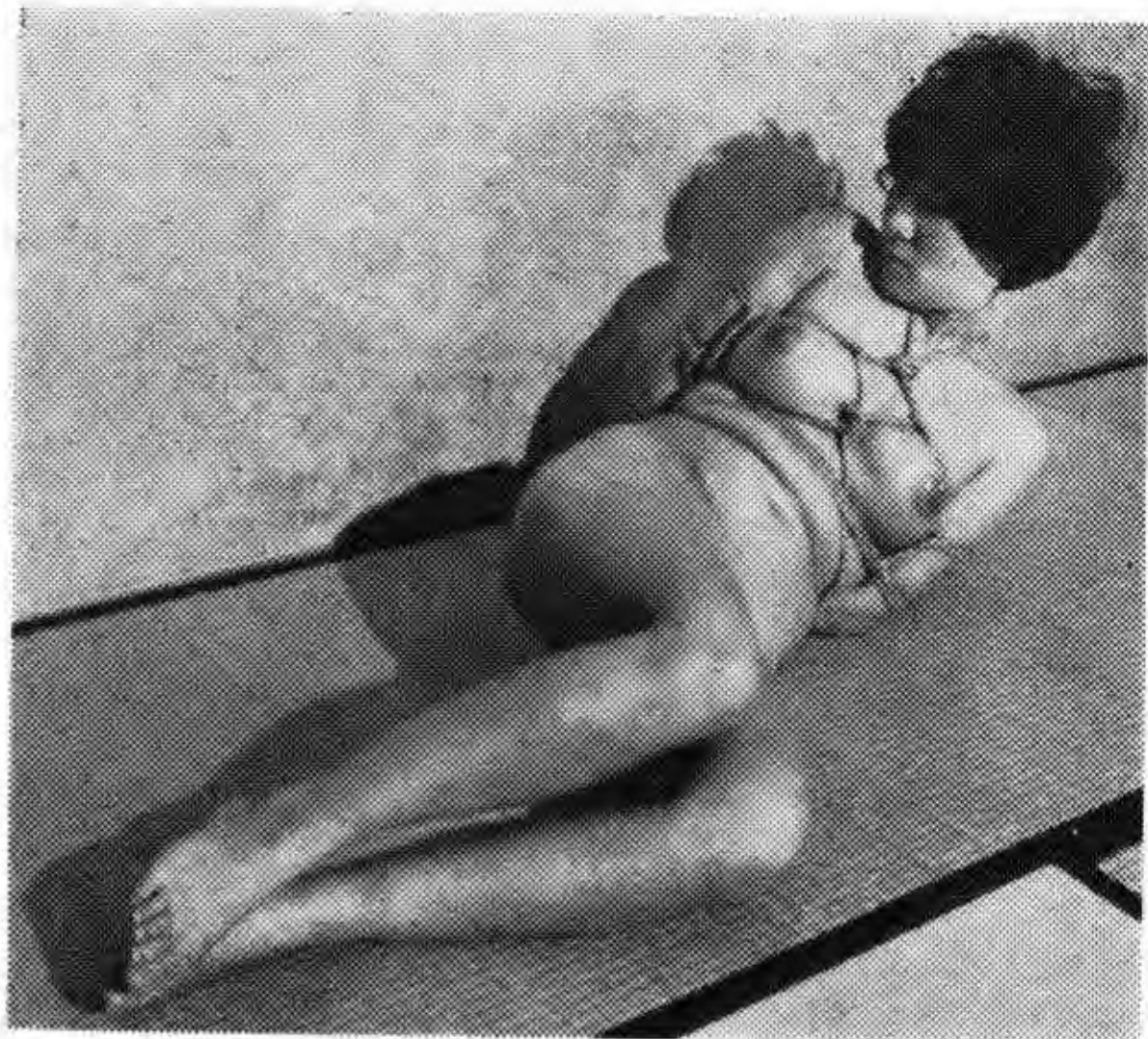
くれます。共に白髪までもと、一生を誓い合った夫の急死は、私の心に人の世のはかなさというものを、しっかりと植えつけてしまいました。

ぼんやりと窓の外を眺めている私の目に映った入道雲も、私の心を慰めてくれるどころか悲しみを増すばかりです。

鴨長明が方丈記の冒頭で「ゆく川の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず」と無常感をうたっておりますが、時々刻々として過ぎてゆく時間というものは、もう二度ととり返すことは出来ないのです。

それは理屈としては、よくわかっておりながら、私は、時、場所、事柄などが、過去に経験したことに少しでも似通ったときに、胸がしめつけられるような悲しい気持ちに襲われて、思わず涙ぐんでしまうのです。

例えば、朝、目覚めたとき、「ああ、何力月前は夫と一緒に楽しく朝餉のお膳に向かって御飯をよそってあげていたのだワ」と思うと、もうたまらなくなつて、思わずベッドの上に泣き伏してしまうのです。それは時間ばかりではありません。夫との半年間の生活で思い出に残るような品を、ふと手にしたときその感触が私に過去を思い出させるのでしょ



う。私は全身がふるえるようなショックを受けて立っているのも、やっとなのです。

これは私の感傷癖かもしれない。私が夫と一緒に住んでいた家を引き払って、このマンションに越してきたのも、余りにも強い夫

の印象を少しでも忘れたかったのです。夫を失った悲しみから解放されたかったのです。

でも、ここへ移ってきて、心の痛みや悲しみが安らいだかと申しますと決して、そうとばかりは言えません。たった一本の電話線が孤独で淋しい私のお城である個室と外部をつなぐパイプである外は、まるで尼僧のような外部と隔絶した生活を続けておりますのでいつ何どき、淋しさからくる過去の悲しい思い出が発作的に襲ってくるか、わからないのです。

そんなわけで、私が七月号で『流れる雲に身を托して』そして、九月号で『地平線の彼方に』という拙い告白の文章を発表するようになったり、編集部の緊縛モデルになったりしましたのも、悲しさや淋しさをまぎらわす一つの方法だったのかも

しれません。

それから、あと、私に寄せられました反響の便りは、私を大変慰めてくれましたが、九月号の文章が発表されてから頂いた九通の便りの中に、二通のお手紙が私の心を激しくゆさぶってしまいました。

一通は、やはり九月号で申しましたI・Y様です。私は弁解じみたことを申し述べたいとは思いませんが、でも、女の心の悲しい性を書かないことには、いたたまれないような気持で、このペンを走らせております。

I・Y様からのお便りは、次のようなものでした。

○

拝啓

荒尾慶子様

9月号の貴女の手記は、私にとってまさに「青天の霹靂」でした。と、言いますのは、梅雨の間、私は毎日、郵便箱をのぞいておりましたが、梅雨があける頃になると、さすがうぬぼれ屋？の私も、心の中には貴女に対する「忘れ残りの雨」がふりつづいておりましたけれど、どうやら、この一世の賭に敗れ去った自分の姿を、認めざるを得ませんでした。

もともと、俗な言葉で言うならば「他人の褌で、すもうをとる」というやつ。「奇ク」という舞台上で貴女に魅了され、緊縛パートナーを願うとは全くもって「虫のいい奴」と、いささか恥じ入っておりました。独力でさがそうとしても、貴女以上の女性が一朝一夕に発見できるわけはありませんけれど。

貴女は私の写真を男性的な魅力と評して下さった。私は、貴女のこの一語だけで、「男冥利につきる」。貴女が、まぶしいばかりの裸身をさらしておられるのに、私が仮面のままで手紙を出せば、礼を失するというもの。又、着衣のままでは不公平？ になると思いセルフタイマーをかけてから、素早く、アロハをはぎとったのです。

私が、いささか気障なポーズで肉体を誇示した理由のもう一つは、しなやかな筋肉をもった「狼」に見られたかったのです。三十を過ぎれば、私も「羊」になるでしょう。しかし今の私は「仕事」と「家庭」を後生大事に考える「羊」と見られることに屈辱を感じるのです。……と、生意気なことを言いまして、も今の私に「金」も「権力」もあるわけではありません。しかし、ただ「気概」と「肉体」



だけでも、「狼」的でありたいと、たえず思っているのです。

貴女は相反する自分の気持ちに悩んでおられます。それが貴女の最後の決断を躊躇されるところのものならば、私はどうでしょう。私にも違った意味での相反対の心があります。

風の朝、月あしたの夜、三島由紀夫先生の心意気

を忍んで万魅の涙を注ぐ私が、本当の「私」なのか、貴女に対して緊縛プレイの野心を抱く私が本当の「私なのか」、私は貴女以上に私の心が「空恐ろしい」。率直に言いますれば、今、私の心は「三島由紀夫」と「荒尾慶子」の二人によって占められている。私の心は乱れに乱れるのです。

私の一身上のことを少し書きます。

現在、私が働いている会社は大学時代にアルバイトをしていた所で、そのまま継続しているのです。敢えて他所に就職を求めなかったのは、しばらく働いてヨーロッパ外遊という希望があったからです。出発の予定は五月でしたけれど、思うように儉約ままならず、少し延びましたが、秋には目標に達せられます。私が今、迷っているのは、秋に出発すると丁度アチラは零下何十度という厳寒にぶつかるから、雪解けまで待つべきかどうかと言うことです。行程はシベリヤ大陸横断、北のヘルシンキから南下してマルセーユに至るつもりです。モンキーホンダに乗って、街頭似顔絵書きをやりながら半年程の計画です。

私の結婚観を言いますと、処女でなければどうしてもいやな場合もあるうし、子供を二人連れだ未亡人でもかまわない場合もあるうということです。全ては惚れた度合で決せられると思います。男性の心理としては、誰しも処女性を望むでしょうが、相手に身も心も惚れ切ってしまうえば、そんなことに執着していても仕様のないことです。

本当の結婚と言うものは、男女が互いに惚

れ合って、どうしても離ればなれに暮せなくなった状態に落ち入った時がいちばん自然です。適齢期に達したからとか、世間体とか、社会の慣習上とかからの結婚には不自然なものを感じます。永遠の半身像を一生かけて探し求めても、真の愛すべき対手がいなければどうしようもないことです。

貴女は亡くなられた御主人を精一杯、愛された。そのことで今後、貴女が負い目や、ひき目を感じられることは何もないはずです。むしろ誇るべきことです。貴女が恋をされようと再婚されようと、私は貴女に真の処女性を認めます。精神的にも、肉体的にも……。

貴女が手記で記されたプレイ上の願望は全て私の胸に藏しました。私は、きつく緊縛した貴女が恥かしげにさらけ出す可愛い童女にそっとやさしく、いや、荒々しく *bliss* の出来る日が一日でも早く到来することを切に願います。

緊縛写真と手記からでさえ、何と素晴らしい女性であろうと詠嘆しているのに、現実私に私の眼前に出現されたら、私の驚き、喜びは天にも駆け登ることでしょう。

敬具

八月一日

I・Y生

私はこのお手紙を読んで大変複雑な気持ちになりました。I・Y様のことは、私とて一日も忘れることはありませんでした。本当に今すぐにでも飛んでゆきたい気持ちを押さえることが出来ないくらいでした。

娘時代は「嫁入り前の娘が——」といって一人での外出も母からやかましく言われておりましたのに、僅か一年ほど経った今では、泊りがけの外出でも誰一人監視する人のない自由さなのです。思えば、今すぐにもどこへでも行けるのです。時間も金も今の私には不自由はありません。

いつ、どこへでも——行ける自由さがあります。でも、私の心に、果して奔放な自由さがあるでしょうか。

私は恥かしいことを経験しました。

その日は、窓を開けていますと、そよそよと微風が七階の部屋に吹き込んできます。

しなやかな縄が二の腕にぐっと喰い込んでいました。手首が背中中で組合わされて、もう細くなるくらい、縄がかかっている、それが首筋に近くなるほど高々と上がっているの



す。ですから、二の腕がはりさけるくらい盛りあがっているところを、力いっぱい締めつけていますので、その縄の喰い込み方は、恐

好で、私は時間をかけて、丹念に毛を剃られています。

それは大変長い時間のようにも、また短い

ろしいくらい、きついのです。痛さは少しも感じません。しびれていて、その縄の感触が大変快いのです。こう、なにか上半身が締めつけられているようで、両手の自由がすっかり、きかないということが、こんなに素晴らしいものと、感心しました。それでいて、下半身は全く自由なのです。足をバタバタすることも、歩いたり、立ったり坐ったりすることも出来るのです。

両手の自由を束縛されたというところが、こんなに私の心を昂ぶらせるものであるということ、私は始めて知りました。

両手の自由がきかない私は、全く他人まかせで、私の大好きな剃毛を施されています。両足を思いきりひろげさせられて、その部分を高々とつき出した格

時間のようにも思いましたが、消えいりたような羞かしさが、いたたまれなくて、その羞かしさが、一層私の手足をしびれさせました。あるべきものが他人の手によって、徐々に失われてゆくという変身の楽しさ。

両足の自由は許されていますので、恥かしければ、私は脚をばたつかせて抵抗することは出来たのですが、彼の手握っている剃刀が自分の肌を傷つけるかもしれないという懸念で、私はすっかり観念したように、大人しく彼のなすがままになっていました。

と、言いますのは口実で、本当は剃毛されたいのが本心なのです。私は縛られて剃毛されるだけで、燃え上がってしまっています。

石鹼水をつけて抱立たせたあと、ひんやりと肌に感ずる剃刀の冷たさ。さく、さく、と自分の持物が刈りとられてゆく快さ。

彼の視線が、その作業を施している部分に集中していると考えただけで、私はぞくぞくとした衝動に全身がびくつくのです。

でも、私の両手の自由は後手に縛られているので、完全に奪われています。どんなに羞かしくても、私はすべて他人まかせにしていなければなりません。

長い時間をかけて、ゆくりと弄びながら

すべすべとした童女のように変身させられた私は、二十三才の成熟した女から、十数年前の幼女に返ってしまったのです。

剃刀をテーブルに置いた彼は、そんな私を強く抱きしめて接吻の雨を降らせました。

口づけから始まって、彼の口は私の全身に及びました。私は擦ったさに、身体を海老のように曲げて、彼の口を避けようとしたが、執拗な彼の口は私の肌という肌を、しっかりと捉えて逃がしません。やがて、童女の部分で止まりました。

そのとき、私は自分の体内に押し入ってくる逞しいものを感じ、一瞬、失神するようなショックを覚えました。

それは、もう、女でなければ感ずることの出来ない強烈な粘膜の刺激でした。いや、内臓的な刺激といった方が、よいかもしれせん。身体の奥底から爆発的に、噴火山のように噴き上げてくる強い快感でした。

私はそのとき、何が起ったのかわからず途惑っておりましたが、ただ、その強烈な快感がいついっまでも続いてほしいと願う貪欲な期待が、頭の隅をよぎりました。

そよ風が私の頬の上を吹いていました。

室温は二十八度ぐらいでしょうか。それで

も私の肌は汗びっしょりでした。

私は自分ひとりでベッドの上で寝ていました。窓の外の陽はまだ高く、白い雲だけが四角い窓で切った額ぶちの中のように、ゆっくりと流れ動いています。

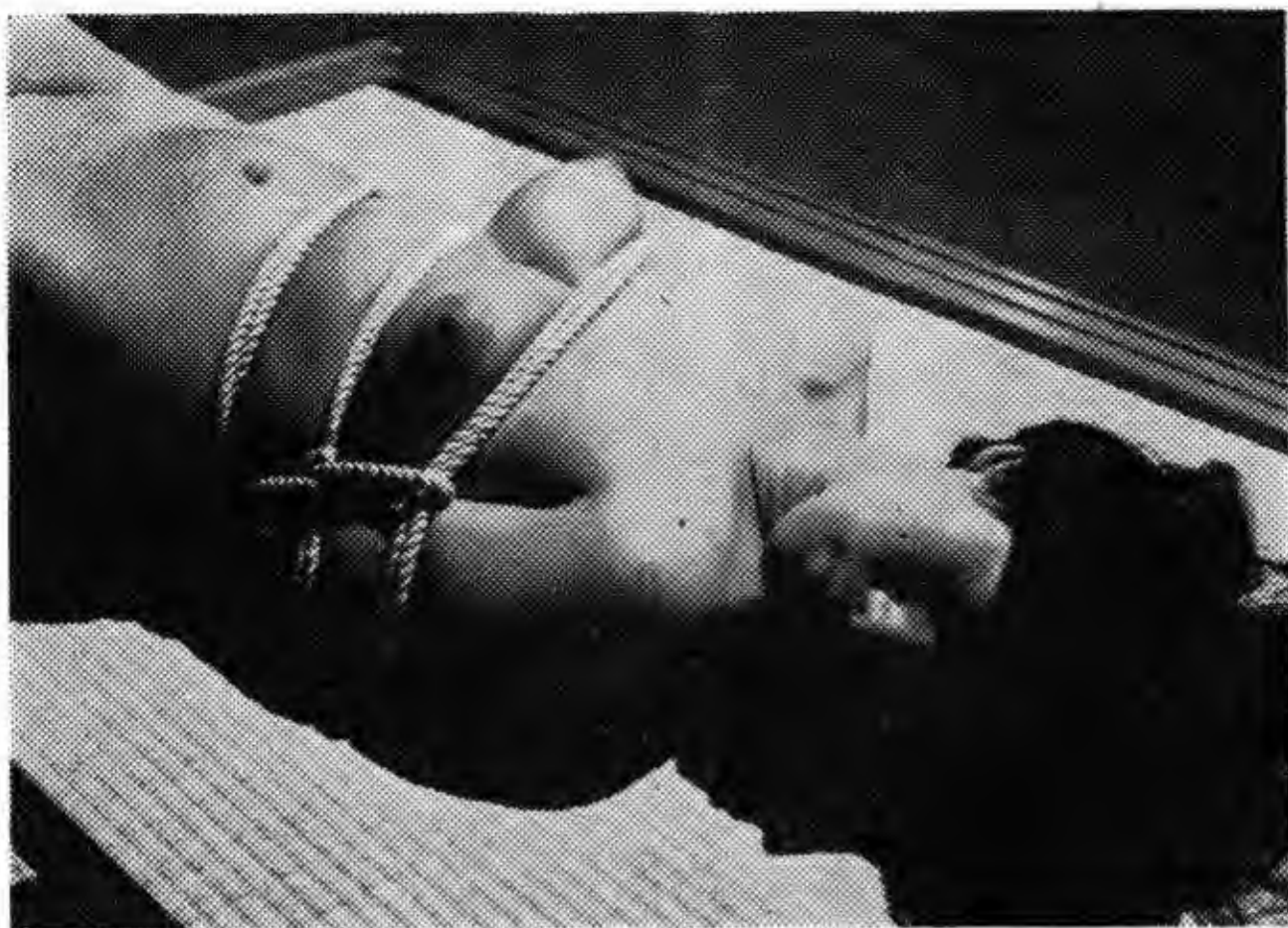
私は転寝のひととき、羞かしい夢を見てしまったのです。

でも、私はその余韻を失ってしまったのが惜しくて、じっと、そのままベッドの上に寝ていました。ふんわりと雲の上に乘っているような気持で夢うつつの状態でした。

覚めているのか、夢の中なのか、自分自身でもはっきりしません。ただはっきりしているのは、彼の姿は今ここに見えませんが確かにI・Y様だったように思います。



お写真を拝見しただけで、まだ一度もお逢いしたことの無いI・Y様のことを夢に見るなんて、私はなんという女でしょう。



しかも、こんなみだらな夢を見るなんて、私はなんとエッチな女でしょう。そう考えただけでも、私は顔が真赤になって、穴が

あれば入りたい気持です。

でも、私は夢うつつのなかで、ベッドの上に乗っかっていました。全身がふんわりと雲の上に乗っかっているような、この夢心地の境地から放れたくなかったのです。

全身が汗ばんだまま、私はじつとベッドに埋まるようにしていました。

静かな午後ひとときです。森羅万象が一瞬すべて停止してしまっただけのような静寂な感じを私は受けました。

I・Y様、私は決して貴男様のことを忘れていたのではありません。忘れていどころか、余りにも強烈な思慕の情が、私をして行動にうつらせようとする心と、それに相反する自制の心とを起こさせていました。

I・Y様の足もとへ飛んでいって、思いのたけを打ち明けた上で全裸の私の身体を投げだして縛られてみたいという気持がはやるのですが、また反面、一度は結婚し

たことのある自分の身の上のことを考え、自身の貴男様の前に裸身を晒すことの恥かしさが先に立ってしまうのです。

今は私は旧姓の荒尾に返っておりますが、戸籍上では、はっきりと林敏夫の妻として、結婚生活を経験した記録が残っております。そればかりではありません。私の身体の上にも、亡き夫の烙印がはっきりと押されているのです。ですから、私がI・Y様をお慕いすればするほど、お伺いしにくくなる気持は、お察しいただけるでしょうか。

私がお部屋にばかり籠っておりますので、両親や兄達が、お勤めに出てはどうかと、すすめて下さいました。丁度京都の東山に住む叔母がお茶とお花のお師匠さんをしているので師範の免状を持っている私に、手伝いがたら来てくれないかと言ってきました。

本当は私はピアノの先生だったら、してみたいと考えていました。私の娘時代愛用していましたピアノは、お嫁入りのとき、持ってゆく予定でしたが、ピアノの運搬は特別な運送店でないとは出来ないとかで実家へ置いたままになっていました。実際は結婚してからはピアノを弾く暇なんかはなかったのですが、兄が結婚した今、私が愛用していたというだ

けで、練習にも行けないであります。

金というものは皮肉なもので、夫と事業をしておりましたとき、あれほど金ぐりに苦勞をし、銀行で融資をしてもらったり、手形を割ってもらったりするために、苦勞をして定期預金をしていたのだが、今頃になって満期になったと銀行から通知がありました。

今頃になって、そんな定期満期の金が何百万円入ってきたところで、今の私にとっては少しも嬉しくはありません。今の私には、何の使い途もないのです。先日にも相続税の打合せで税理士さんがみえられて「貴女名義の財産が二千八百六十万円になっています」と知らされましたが、私は只、うつろな眼で、その沢山並んだ数字を見つめているばかりでした。

I・Y様の他に、私の心に残ったお手紙は本誌にも度々文章を載せておられる城章夫様からのものでした。やはり、I・Y様と同じくカラーのお写真を同封されていましたので親しきを持って拝見することが出来ました。差し出された日付が、同じ八月一日になっていますが、私には奇縁に思えました。

前略

○

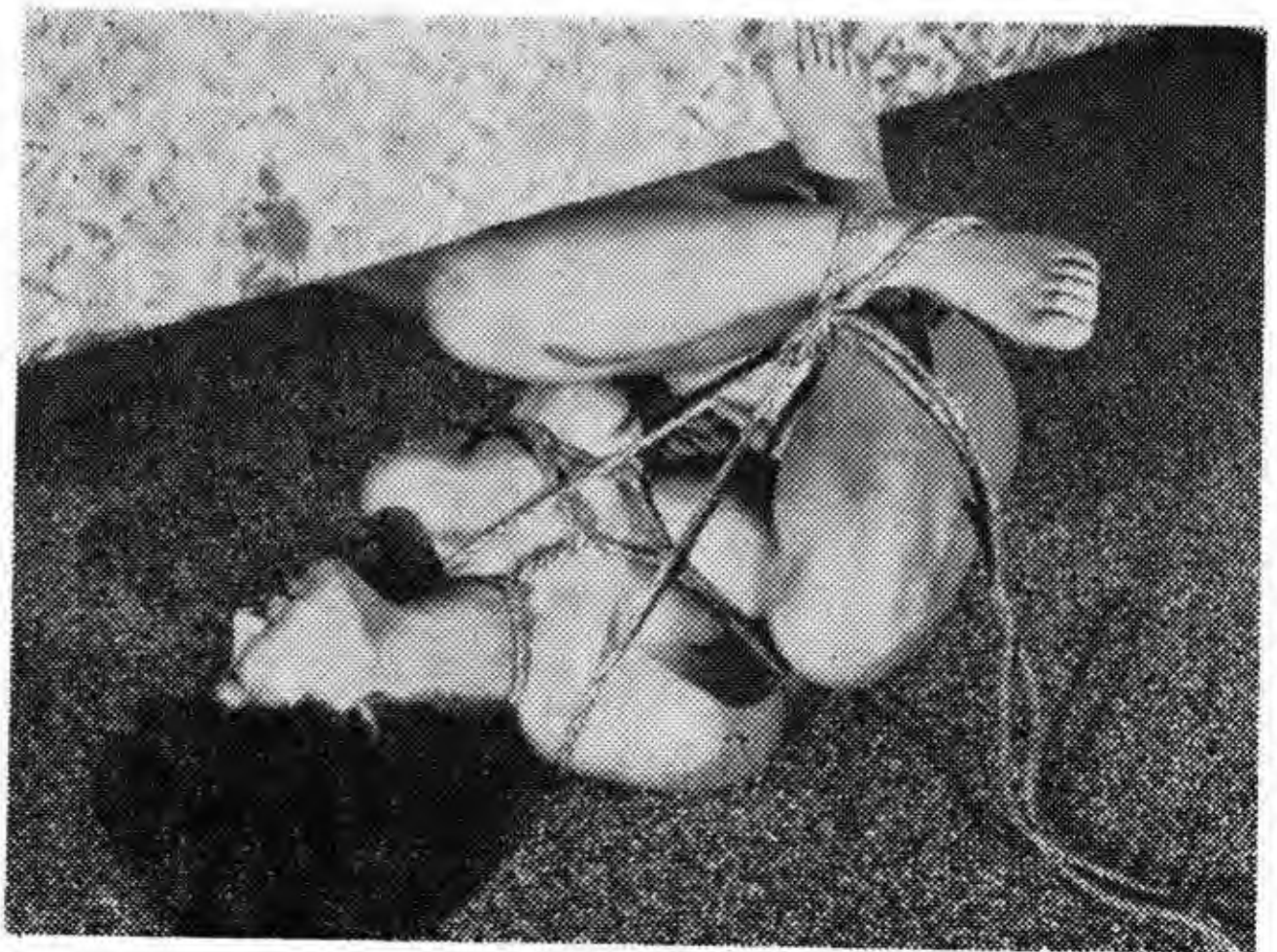
とつぜん、お手紙を差上げる非礼を、どうぞ、お許し下さい。

『奇ク』七月号のあなたの手記を拝見してからというものの、あなたのことが、ぼくの頭にこびりついて離れなくなってしまいました。

何よりもまず、ぼくの心を捉えたのは「流れる雲に身を托して」という題でした。なんという美しい言葉でしょう。そこには溢れるような詩があり、人遙かにして遠いものVに対する激しい憧れが満ちています。

ぼくは感動を抑えきれず、早速、あなたへの呼びかけの文を書き始めました。あなたの手記に盛られている豊かな詩趣にふさわしいように、ぼくは散文詩ふうの呼びかけを書こうとしたのです。

書いては消し、消しては書き、どうやら満ち足えるような文章を、やっと書きあげました。「流れる雲に身を托して」というあなた



の題に照応するように、その散文詩ふうの短文は「ぼくは雲だ」と題されました。「ぼくは雲だ。めくるめく陶酔と惑溺の国へ



おまえをいざなう白い雲だ』ということばで
その呼びかけは始められています。
それを書きあげると、ぼくは直ぐさま『奇

をあげたて開いてみると、そこには、また
あなたの手記が載せられていました。そして
その題の素晴しさ。

ク』に送りました。幸い
それは編集部採用する
ところとなり、さる八月
号の『奇クサロン』に掲
載されました。

それから、ぼくは待ち
ました。あなたからのお
答を――。

ぼくのつたない文章は
あなたの胸に、きつとい
くばくかの共感を呼びお
こしたに相違ない。あな
たは必ずや、なんらかの
御返事を下さる筈だ。ぼ
くは、そう思いこんでい
ました。

しかし時は過ぎ、日は
流れ、あなたからは何の
おたよりも頂けぬままに
いつか奇クの九月号が、
発売される日になってしま
いました。早速、その一冊

『地平線の彼方に』――

ああ、あなたは、またもや、ぼくの心臓を
ぎゅっと握んでしまいました。

あなたは、やはり詩の美しさを理解し、愛
する人なのですね。雲といい、地平線といい
あなたは、いつも手のとどかないところにあ
るもの、遠く遥かなるものに憧れる、心豊か
な詩人なのですね。

しかし、その手記を拝見して、ぼくは少々
がっかりしてしまいました。

あなたは、ぼくの『雲のいざない』につい
ては、ひとことも触れては下さらなかった。
あなたは、あれをお読みにならなかったのだ
でしょうか？ お読みになっても、なんとも、
お感じにならなかったのでしょうか？

そこで、ぼくは奇クを通してではなく、失
礼ながら、あなたに直接呼びかけようと決心
したのです。どうぞ、ぼくの非礼をお許し下
さい。

何はともあれ、いちどお目にかかる機会を
作って下さいませんか。

土曜日のおひるにでも、食事をいっしょに
しながら、いろいろと、お話しようではあり
ませんか。その結果、あなたとぼくの心が触
れあわなければ、そのまま右と左に別れれば

いいのです。

あなたは大阪、ぼくは東京に住んでいます
が、昔とちがって、今は新幹線によって、た
った三時間で結ばれています。ぼくが大阪に
でかけてもよいし、あるいは、あなたが東京
にいらしても結構です。

折返し、お返事を下さいませんか。土曜日
なら、いつでも結構ですよ。あなたのお好き
なレストランと時刻をご指定下されば、早速
大阪へ出かけて行きましょう。

それとも、あなたが東京にいらっしゃいま
すか。東京にも、素敵なレストランがありま
すよ。あなたの乗っていらっしゃる「ひかり」
の番号（列車番号と車輜番号）をお知らせ下
されば、その列車が着く時間に、東京駅のプ
ラットホームまで、お迎えにあげます。

何れにしても、おひるの食事をいっしょに
しながら、一、二時間ほど、お話ができれば
幸いです。その上で、そのまま別れて、二ど
とお会いしないか、それとも、また次の会合
をお約束するか——それは、その時しだい
ですね。

どうか、あまり固苦しくお考えにならず、
気軽にお会いしてみようではありませんか。
ところで、ぼくは、あなたの二つの手記を

通じて、あなたのことは、かなり存じあげて
いるわけですから、こんどは、ぼく自身のこ
とを少々、お話し申しあげましょう。

——（中略）——

ぼくが望むのは、相互の理解と信頼の上に
立ったSMプレイなのです。お互いに楽しみ
樂しませ、世の常の人の知らぬ異端の欲びに
惑溺しても、ひとたび、それから覚めれば、
お互いの人格と生活を尊重する社会人であり
たい——それがぼくの理想なのです。

ともかく、いちど、お会いしたい。

お目にかかって、お話を——あとは、
その時のなりゆき次第。

どうぞ、そういう機会を、いちど作って下
さいませんか。

これで、どうやら、申しあげたいことは、
みんな申し上げました。

あとは、あなたからの御返事を待つばかり
です。どうかぼくを失望させないで下さい。

八月一日

城 章 夫

荒尾慶子様

○

城章夫様からのお便りを拝見して、このよ
うにまで、私のような者を思っ下さる幸せ

をしみじみと感じ有難く思いました。

でも城章夫様が考えておられるような魅力
的な女では決してありません。私の書いた文
章の題名から、詩を解するように買いかぶっ
ておられますが、私は詩を勉強したことはあ
りません。ただ、このマンションへ移ってま
いりました当初、僅か三間にすぎないながら
トイレ、バス、ベランダがついた部屋が大変
珍しく、椅子に腰を下ろして、ぼんやりと窓
の外を眺めたものです。

七階の私の部屋からは、窓越しの外部は何
も見えず、四角い空間に切られた枠の中には
ただ白い雲が見えただけでした。

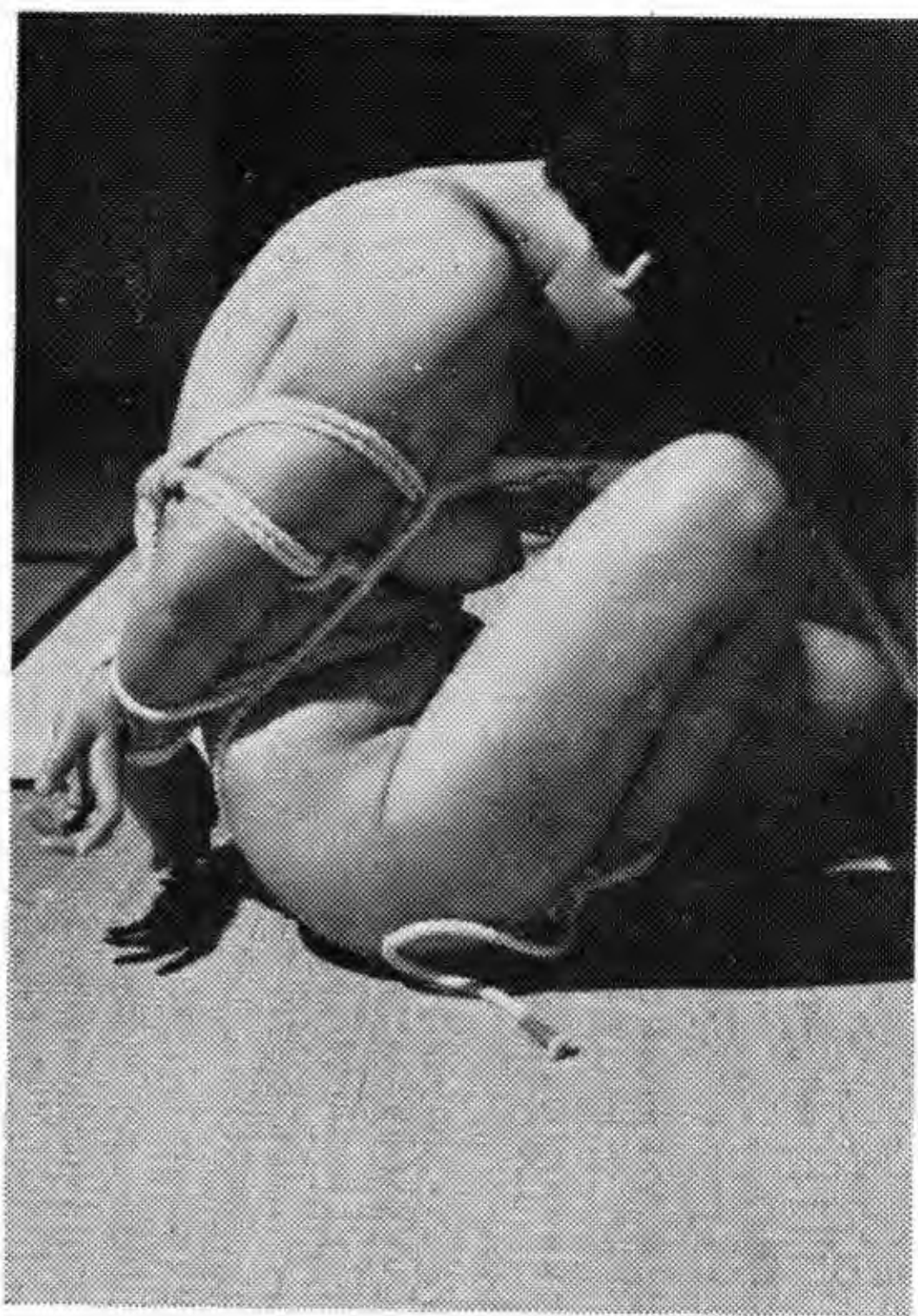
映画のスクリーンのような枠の中に、白い
雲が流れているのを見て、私は夫という抛り
どころを失った自分の浮雲のような運命を考
えて、思わず八流れる雲に身を托してVとい
う題名を口にしていたのです。

八月号での城章夫様の「雲のいざない」は
拝見しておりましたが、散文的な私ではあり
ましたし、それに、あれもこれも書いて、そ
れをまとめるだけの筆力も持ち合わせていま
せんでしたので大変失礼してしまいました。

私は内気で口下手ですから、もしお逢いし
ても、ご満足いただけるようなお話相手にな

れるかどうか、すごく不安です。いや、きっと、ひどく失望されることと思います。

お友達のあいだでも、私はいつも聞き役です。いろいろな話題を面白おかしく提供するような芸当は、とても私には出来ません。ですから、私がもし、お勤めに出るとしても、バーやキャバレーなどのホステスは、どうし



ても動まりそうにありません。ビルの清掃婦ぐらいでしたら適当かもしれません。

上京するようだったら、東京駅のホームまで、お迎え下さるとのご好意、涙の出るほど嬉しく思いました。

上京するのだったら、私は飛行機にしたいと、ふとそう思いつめました。全日空機事故

のニュースを聞いてから、私は真剣にそんな空想をしました。自分の乗った飛行機が千数百米の上空で、自衛隊機に衝突されて、空中でバラバラになって散華する——、なんと素晴らしい死に方でしょうか。

手や足が四散し、内臓までがチリチリになって持物や飛行機の破片と一緒に、山や草原の中に落ちてゆく——、考えただけでも、ぞっとするような刺戟です。

グラフ雑誌で、若い女の人の脚が草むらの中にころがっているのが写っていました。むっちりとした白い太股に、いくつもの深い傷が抉ったようについていて、私もおんなになってみたいと思いました。

衝突した自衛隊機のパイロットが、パラシュートで降下して、軽傷一つ負わなかったのも素晴らしいです。そのパイロットが城章夫様であって、四散する全日空機を横目でにらみながら、にっこりと笑っているのです。

「こんなによくバラバラになったものだな」そう言いながら、私の肉片の一つ一つを、靴で足蹴にしながら、「これは左足だな」と裸のところからちぎれて、灌木の中にころがっている私の足首を、ちよいと棒の先にひっかけて玩具にしているのです。

不思議に血は流れていず、蠟細工のようにその白い足首は、生きているかのように脂ぎっているのです。縛られて、床の上どころがされている私の身体の部分部分も、丁度、飛行機事故でバラバラになった肢体と同じようなものではないでしょうか。

飛行機事故でバラバラになった私の死体の剃毛された部分だけが、抉りとられて草むらの中にころがっていたら、どうでしょうか。

そんな変なことを考えたりしています。

私が飛行機に乗ってみたいというのは、飛行機事故に遭ってみたいからです。それも、飛行場で炎上して真黒焦げになるのや、洋上に墜落して死体も上がらないというのは不満です。自分のバラバラになった死体が大勢の人の目に触れるような所で、事故を起こしてほしいのです。

欲を言えば、バラバラになった私の死体の一つ一つに、△荒尾慶子▽というラベルか荷札をつけて、これは荒尾慶子のお尻の一部とか、荒尾慶子の上膊部とかいうぐあいに陳列して、見物人達に見せるのです。

私が飛行機に乗りた、と思いついたのは「ばんだい号事件」と「全日空機事件」からです。でも、こんな馬鹿げた空想は、誰にで

も申し上げることは出来ません。浅はかな女の独り寝の世迷言とお笑い下さい。

城章夫様、私は貴男様のお話相手としては決してふさわしい女ではありませんし、またうまくお答えする自信もありません。ただ、縄で縛られることでしたら、貴男様のお気に召すまま、私をお導き下されば、どんなことでも、嫌とは申し上げません。

猿ぐつわは、今まで噛まれたことはございませんが、若し貴男様が、それをお望みになるのであれば、私は喜んでそれをお受けいたします。そのかわり、その前に、縛り上げた私に必ず剃毛を施して下さいませ。

縛り上げた私に剃毛を施して下さいますならば、それからあとは、貴男様のお好みになれる、どんな責めを加えられましようとも私は何一つ、不服を申し上げることもしません。責められることが私の喜びでございますから――。

まだ私の一度も経験したことのない責め方であっても、従順で辛抱づよい私の性質は、必ずその責めに順応して、プレイの中に欲びを見出してゆくものと思います。

飛行機が墜落してバラバラになってもよいと考えているほどの私ですから、少々の擦り

傷や叩き傷くらいは意にしません、紳士的な城様は、きつと、そんなことはなさいますんでしょ。私でしたら、そんなにされても一向に構いません。貴男様が、おいやでなかったならば――。

私の方の都合がつかしましたならば、仰せの通り土曜日を選んで、なるべく事故の起こりそうな便を求めて、伊丹空港から羽田空港へ一飛びで参ります。もし無事到着いたしましたら、どうか、貴男様のお好きなように、私を思いきりいじめて下さいませ。

どんな責められ方をするのか――と、そう考えただけで、私の胸は今から、わくわくいたします。大体、一週間ぐらい気晴しに東京方面へ旅行すると、両親に断わって家を出ようと思います。

私は喪服になぞらえて、黒色のシルクのスーツ、黒のパンプス、黒のストッキングをはいてまいります。右手には黒のハンドバッグを持ってゆきます。

日航は事故が少ないので、なるべく事故の多い全日空機でまいります。日がきまりましたら大阪発の時間、東京着の時間、機種便名をお知らせいたします。

伊丹――羽田間五十分の機上で、私の空想

が、どのように翼を伸ばすことでしょうか。

貴男様とのSMプレイが、貴男様の御満足
のゆくよう行なわれましたならば、私の体験
談を書いてみたいと思いますが、果して、貴

男様が私のような者に、御満足されるかどう
か、それが今から心配です。

かさねがさね申し上げますが、私は貴男様
の考えておられるような魅力的な女では、決

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	三五〇円(送32円)
三月分	3冊	一一〇〇円(送共)
半年分	6冊	二二〇〇円(送共)
一年分	12冊	四二〇〇円(送共)

郵便番号
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、
或は地方のため、入手することが出来ないとか、
かいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い
目に、手に入れたたいという御要望をよく承り
ます。そういった方々は、どうぞ是非月極御
予約下さるようお願い致します。毎月製本完
成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下されるのには
大阪市住吉局私書箱第四十一号出版株式会
社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお
払込みの上、何年何月号より何力月分と御指
定下さい。

○六月分以上お申込みの節は、送料、包装
代などは、総べて当社にて負担致します。但
し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分
三十二円の御負担を願います。

○御送金下さる場合は、「現金書留、小為
替、定額小為替、(切手代用は一割増)振替

(大阪四二七八三番)のいずれかをご利用
願います。現金の場合、普通郵便封入は違法
です。必ず「現金書留」にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印
刷完成と同時に、外部から見えないように厳
重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料
三八二円をなるべく毎月十五日頃までに御送
金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者
の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号
から何力月分送れとお書き願います。第一回
分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何
月号からとお書きにならないときは、重複や
欠号をきたします。御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に
△本号にて前金切の判を捺印致します。から
継続お払込み願います。継続のお払込みでも
何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方
は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局
留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際にお
取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構
です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。
は、当方では御指定の局留としてお送りいた
します。数日後その局で御受領願います。
局での留置期間は十日間でその間にお受取り
にならないときは、発送人に返戻されます。

してごいません。平凡で、ありふれた二十
三才になる、夫を交通事故で亡くした一人の
女でしかありません。どうか、そのおつもり
で取り扱って下さるようお願い致します。

東京へ参りましたら、西も東もわからない
お上りさんです。よろしくお導きのほど
お願い致します。

それから、プレイのときの、私の縛られた
姿態は、いろいろの角度から、出来るだけ沢
山、写真に撮っていただけたら、私は嬉しい
です。

一人住居のこの静かな部屋に伝ってくるも
のはといえ、窓の外をよぎる風の音ぐらい
しかありません。地上七階にもなりますと、
あまり風は強くないと思っていましても、や
はり窓の外は十米近い風が、いつも吹いてい
るんです。物干し用に出してありますベ
ランダの金具に風が吹き通して、ひゅうひゅ
うという唸りの音を立てています。

私は今や、この第三回目のお便りを書
き終えて、投函しようか、どうかを考え、そ
して、あまりにも、ひとりよがりの文章に、
読み返す勇氣もなく、ただ、じっと物々しく
風の音を聞きながら、心の動揺をすすめてい
るのでございます。



カット・ドラキュラ

マゾ女のよろこび

まりこは売春婦です

北川 まりこ

夫婦プレイで『花と蛇』の静子の役を演じております、まりこは時々、主人のアイディアによる特訓を受けます。特訓は、ある想定の下に一週間から十日間くらい、ぶっ続けで毎晩、行なわれます。

最近、まりこが売春婦であるという想定でプレイしようということになり、一週間の特訓を受けました。今日は、その時の様子をお知らせしたいと思います。

第一日目

自分が賤しい売春婦であるということを心の底から信じてむようと、徹底的な訓練を受けました。全裸緊縛のあられもない恰好で

板の間に転がされ、足蹴や激しい鞭打ちを受けながら、「まりこは売春婦です」「あたしはパンパンです」「まりこはパン助です」「あたしは淫らな女です」「まりこの体は汚れています」というような言葉を、何百回も繰返し繰返し口にすることを強いられ、つぎに、床柱を背中に負って開股立縛りにされ、「口先だけで自分がパン助です」といっているだけでは駄目だ」と罵られ「売春婦とは一体どんなことをするのか」とか「お客を誘う時の台詞を云って見よ」とか「いくらで体を売っているのか」とか矢継早に質問を浴びせられました。そのような経験のない私は、ただ

雑誌などで得た僅かの知識でお答する外なくその答の言葉尻をつかまえて、更に意地の悪い、顔の赤らむ思いのする淫らな質問攻めに会いました。黙って俯向いていますと「何故答えないのだ」と全裸の肌に赤い縞ができる程、激しい鞭打ちを頂きました。夜の白む頃まで、ねちねちと虐められた挙句、暗室の中に素裸のまま閉じ込められ、今夜までよく読んで暗記しておくようにと、部厚い原稿の綴りを手渡されました。

第二日目

原稿用紙には、主人の創作『売春婦まりこの経歴』というのが、ぎっしり書きこまれて

おり、これを何度も読み直して、自分の過去を暗記しました。夜は再び床柱に生まれたままの姿で縛りつけられ、昨夜と同じ質問に答えさせられ、更に「この商売を始めてから何年になるのか」「今まで何人位の男に抱かれたのか」とか「一晩に最高何人の客をとったか」とか「障りのときも商売をするのか」とかいう質問責めにありました。台本の中に書いてあることをお答えすればよいのですが、とても惨めな気持でした。

第三日目

二日目と同じ全裸開股立縛りの姿で、昨夜の復習と、応用質問にお答えしました。台本に書いていない質問に対しては、その場で自分で考えてお答えしなければならず、その答を種に次々と淫らな質問を浴びせられて、羞かしい言葉も口にしなければならず、辛い思いでした。例えば、今日は何人お客をとったのかと聞かれて、五人と答えますと、一人一人について年齢、恰好、容貌、職業から好みまで云わされ、更に交渉の模様を根掘り葉掘り質問されますし、「外国の男と寝たことがあるか」と聞かれ、その答から「どこの国の男が一番、良かったか」とか「黒人に抱かれた時の感想を聞かせろ」とか、質問が次々と発展

していきます。

第四日目

今までの復習でした。

第五日目

夜になってから、いよいよ実地訓練に入りました。

この訓練は「売春ごっこ」と呼んで、その後も時々、私共の夫婦プレイにとり入れておられます。

手足の自由は許されても相変わらず一糸纏わぬ素裸のままです。暗い廊下の隅に立たされ、お客の役の主人が通り過ぎようとする度に、お誘いしなければなりません。「最低のパン助でも、街角に立つ時は着物位はつけているが、お前は裸パン助だ」と嘲笑され、懐中電灯で羞かしい裸身を照らし出されたり、明るい電灯の下に引っ張ってゆかれて「買ってやってもいいが、商品を、もっとよく見せろ」と云われて、念入りの女体検査を受けます。浅ましい姿勢を強いられたまま、ショートでおいくら、オールナイトでおいくら、とお値段の交渉をしたり、どんなふうにしてサービスするかというようなことを口にすると、とは、女の身にとって、とてもとても惨めな気持に陥るものです。それは死ぬ程、羞かし

い思いです。

第六日目

五日目の復習ですが、主人の気に入るまで何度も繰り返させられていますと、次第に自分が本当に最低のパン助であるかのような気持になってきました。

第七日目

総復習の日です。この夜は、売春婦として始めて主人に抱かれました。お金を握らされた時には、ちょっと惨めでしたが、お床に入ってから、素直に、すっかり売春婦になりました。きって、サービスに勤めました。

以上が、まりこの特訓の報告です。たとえその時だけの、お芝居にしても、賤しい女になり下がることができたような気持になれるひと時のマゾ女の心の底の喜びと幸せをお知らせしたくて仕方なく筆をとりました。「花と蛇」の静子にも、森田組の殿方をお相手にこのような特訓を受けさせ、最低のパン助にまで墮落する深窓の夫人の惨めさと、その底にひそむマゾの喜びを体験させてあげて下さいませ。

—《裸パン助》のまりこより—

連載時代小説

紫 蘭 の 門

(3)

白蘭の丘に打ち伏し

叢林の地に憩いを求め

而して訪うを得べし

紫蘭の門

風 流 極 道 軒

た。うなだれていた顔をあげると、五尺近い垂髪が、さわさわと床板で鳴る。

「手を後に回しな。そして立つんだ」

うらめしように、黒馬を見上げはしたものの、貴子

を救うためには、命ずるままになるほかはなかった。

雅子の左手が、腰のあたりで、ためらったのち背後にかくれ、右手もこれに従う。

「立ちなよ。そのままです」

黒馬が、勝ち誇ったように云う。

左膝を立てて、よろめきながら立ち上がった。



琥珀の肌

座敷牢の赤松材の格子を背後に、^{かけしよく}掛燭にてらしだされた雅子の肌が、琥珀色に輝いてい

「もっと、近く。ほら、胸を、ここへ、押しつけて！」

黒馬が、分厚い自分の胸を左手で打った。

じいっと、その黒馬を睨んでいた雅子は、しずかに一歩、踏み出すと、両手首を背後で交叉したままの姿で、その胸の中に、燦くような裸身を、あずけきったのである。

「そうそう、よい女だ。さあ、もう一度、云

「ってごらん。種彦先生に云われたとおり」

黒馬の腕のなかに、なかば、顔を埋めた雅子は、もう、どうともなれというふうに、

「妾を、縛ってくださいませ。ほれ、このように、ハ、ハダカで、この身をお預けしておりますものを……早く縛って、そして鞭兵衛さま始め、皆さま方で、ご存分に賜ってくださいませ……」

熱い息を吐きながら雅子は、遂に云わされてしまったのである。

雅子が何を云っているのか、両耳にせんをされている貴子には、聞こえなかった。しかし、自分の身代りに、男たちの弄びものになっていることは、わかり過ぎるほど、わかっていた。

(や、やめるのよ、雅子様。この男たちは何

前号まで——天正大判千五百枚を一塊にした大分銅金参千個の行方を秘める豊太閤五夜のロザリオをめぐる、菊亭貴子・久我雅子の二人の女性が、元録屋、利倉屋、劇作者為永種彦、浮世絵師鳥尾芳年たちに、淫虐極まりない責めをうけその白蘭のような肌を悶えさせ、沈丁花にも似た、女体の匂いを部屋中に漂わせる。

ひとつ約束を守るような人間じゃないのよ。けだものなのよ！ 何をしても、無駄なのよ！

叫ぼうにも猿ぐつわが、嚴重に噛まされている身。ただ眸だけを、しっかりと見開いて雅子を見つめる他はない。

貴子の見守るなかで、雅子には、ひしひしと縄が掛けられていった。

首に、輪がとおされて、二筋の縄が乳房の谷から、股間へと通る。背面で青蛇がその縄を受けとり、縛ると、首の輪にとおして、そのしまり具合を試してから、双の二の腕へと分け、前面の黒馬が、受けとって、縦縄にとおして再び背中に回す。まるで、柳行李に縄でもかけるように、二人は協同で、黒々とした縄を琥珀色の肌にかけて行く。時々、くびれた肌を押してみても、

「締まり具合は、どうかな、姫さま。これから、たっぷりと拷問にかけられるこの肌だけれど、しよっぱなから、あまり強く締まりすぎていると、いくら柔らかくたって、駄目もたなくなるからなあ」

など云いながら、縄にそって、指を這わせ雅子の温かい肌の感觸を、たっぷりと楽しむのである。

「さて、どうするか、黒馬の。谷渡か、残陰か、羽交か」

「いいや。陰縛——この姫さまに、穴沢流女責めの極みを、しらせてやろう」

黒馬は、懷から琴弦にも似た細い糸や、釣糸や、たこ糸の類をつまみ出してみせると、

「そこそこへ、両足を」と、床板に三尺ほど離して取りつけられている鉄輪に、雅子の両足首を、がっちり固定したのち、

「どっこいしょ」と雅子の腰を抱えあげて、どさっと、床におろす。

「い、痛い！」

呻きをあげながらも雅子の大きく豊かな尻が、べたっと床板につく。

正面から下半身だけをみれば「W」の型で下方の突起部ふたつが、両膝にあたる。つまり、いぎたない坐りかたであり、公卿の育ちである雅子にとっては、生まれて始めての屈辱的な、淫ら極まる姿態なのだ。

「上半身は、後ろに反らせて」

黒馬は乳首を、ぱちんと指先で、はじいてのち、脇から抱きかかえ、静かに上半身を床に倒す。背筋が曲り腹部が伸びきる。

「あう！ い、いた、いたいわ！」

悲鳴をあげるその背中に、赤狐が高さ一尺五寸ほどの踏台を、さあっと押し込んだ。

「まだ、痛そうだな」

鳥尾芳年が、座蒲団を踏台と背中の間に入れて、背骨の折れそうな痛さを緩和する。

その親切は、勿論、これから始められる陰縛の苦悶だけを雅子の神経に感じさせるためで、その他の肉体の痛みをなるべく少なくしておこうという下心であったが……。

いずれにしても、雅子の、女としてのふくよかさに満ちた前半身が、弓反りに伸びて、一尺高い宙に浮き、男たちの二十をこえる淫らな視線を真向からうける。

（恥かしい、死にたい。貴子姫を救うためになければ！ どうして、このような！）

躰中が、灼熱してくるようで雅子は、豊かな乳房をふるわせながら、早くも身悶え始めた。天井と、自分をのぞき込んでいる男たちの上半身しか見えない恰好であり、自分の太腿あたり近くに数人の男たちが、むらがっているということは、気配で、察せられるだけ。

そんな雅子に、

「ぼつぼつ、始めるぜ。初手は柔らかくやっ

てやるからな」

黒馬の声がすると殆ど同時に、

「キヤアッ！ いや、いやよ、いや！」

悲鳴をあげる雅子であった。

これから、どこをどうされるのか……こんな恰好にされてしまった以上、覚悟している筈であったが、こうも、予告なしに、急襲されては、たまったものではなかった。二本、三本、いや、五本以上の太く骨張った男の手に、同時に襲いかかられたのである。

「い、いやよ！ いや、いや……」

雅子は、激しく尻を振って攻撃を避けようとしたが、緊縛されている身、まったくどうしようもなく、ただ、誰がつけたのか、左右の足首につけられた鈴だけが、チリ、チリ、チリンと無心に鳴りつづける。

「もう、これぐらいのところでよかろう。この女は、貴子姫とは異なり、敏感なこと、並み以上だからな」

鞭兵衛の声とともに、キーンとする疼痛が、頭のとっぺんまで駆け抜けて、雅子は、思わず、四肢を、思いつき踏んばった。

黒馬は、そんな雅子の両膝の間に蹲みこむと、たこ糸を操作して奇妙にして無惨な縛りを始めた。そのたこ糸を陰唇の頂天にくるく

るっと、まきつけ、その一端を、喰いいるように眺めている元禄屋に渡す。

「うーむ……」

大きく息を吐いて、ピーンと伸びたその糸をうけとった元禄屋には目もくれず、黒馬は釣糸をとり出すと、一旦、くるくると、自分の指にまきつけてのち、十分、湿りをくれると、器用に片方ずつ、くびれをつくって巻きつけ、その糸を、今度は、種彦と芳年に手渡した。

雅子が、狂ったように暴れだし、踏台からおちそうになるのを、赤狐や斑猿が抑えつける。つづいて、三本の糸がとりつけられ、さらに、琴弦を、ぐいっと巻きつけられた。

縛りおわった黒馬は、

「貴子姫！」

と、大声で呼びかけ、男達の輪の一方を開いた。貴子の眸が恐怖におののく。雅子の下半身は、まったく想像も及ばぬ無残さであった。

「姫。この琴弦を鞭兵衛親分に手渡す！ すると、この女が一体どうなるか、わかるだろう？ これはど、あんたのことを思っているこの女に、これ以上の苦しみを味あわせるおつもりか」

黒馬の言葉といっしよに、青蛇が、貴子の猿ぐつわを、さあっと解いた。

途端——、貴子の口から絶叫が迸った。

「お、おやめ下さいませ。もう、これ、これ以上はおやめ下さいませ。ロザリオは、確かに妾の邸に。京都の父の邸にございます。すぐに、取りよせまするゆえ、どうかもう、お許しになって下さいませ」

捕われて六日目、始めて、菊亭貴子が洩らした哀願の声であった。

「よかろう！ 筆と硯！」

元禄屋は、昭吉に、筆と硯を持ってこさせると、腋曝の姿で縛られている貴子の両腕だけを解いてやり、その一直線に開かれた足の前に、巻紙をひろげると、

「さあ、書け。豊太閤五夜のロザリオの内、菊亭家に伝来されている丙夜のロザリオを、今すぐ江戸におくらねば、大いに困りますと書け。早く書くのだ！」

元禄屋は、つづいて、

「フン、こんなものは、もう必要なかう」と辛うじて内股のあたりを覆っていた白綸子の湯文字をあらあらしくはぎとり、宙にほうり投げると、貴子の手には筆を持たせた。

蘭麝の香をただよわせながら貴子は、惨め

な恰好で、父である前右大臣正二位菊亭政房に対して、元禄屋の言葉どおりの文面を書きつらねていく。

その間も雅子は、黒馬たちの手で賜られつづけていた。無残にのびた糸は七本になり、斑猿は、とうとう黒馬を押しのとけると、七本の糸の集合する辺りに鼻をもっていき、

「沈丁花の花の匂いよ」

と憑かれた者特有の、狂気じみた声をはりあげるのであった。

江戸は日本橋四丁目公儀金銀両替御用をつとめる元禄屋重右衛門本邸の座敷牢——。

五月の陰雨が、はじめと降りつづく天保三年、夏近い頃であった。

房 縛 (ぼうばく)

江戸の五月は、大川端の水垢離から、始まる。梵天をつくって八百八町の若い衆が、大伝馬船を大川にうかべ、法螺貝が高らかに吹き鳴るなかを、揃いの染絆纏に向鉢巻も勇ましく、「奇命頂礼」と口口に叫んで水垢離を取り、取り終わると町内に帰り、梵天の幣を一軒一軒に配って、その歳の悪気を払うのだが、この行事がすむと例年のように霖雨がく

る。はじめとした雨が降り始め、高く低く連なる江戸の屋根屋根も、すっかり灰鼠色に沈んでしまう。

その灰鼠色に煙った夕空の下を縫う一丁の駕籠があった。垂れのはしから、ちらっとのぞいた友禅小紋が、あたりのくすんだ風景のなかで、ひときわ、乗っている若い女のなまめかしさを、きわだたせていた。

海鼠堀を左手に折れて、京橋を三十間堀へと曲がってものの小半刻、汐留にほど近い柳並木にさしかかったとき、ばらばらっと、躍り出た人影があった。

「な、な、なんでえ！ 江戸は日本町、御公儀御用櫛師、春田和泉様お駕籠と知っての狼籍か！」

駕籠脇の若者が、染め分けの組帯から手を離して身構えたが、五つの灰色の影は、微動だもしないばかりか、含み笑いすら洩らしてへなへなと腰を抜かした駕籠かきを尻目に、中の二人が、六尺棒を肩にするや、息を揃えて駆け出して行く。

「待、待てえ！」

若者は、あとを追ったが、まだ二十才前後の若者の必死の追跡にも拘らず、駕籠との距離はまたたくまに遠ざかり、黄昏のなかで若

者は、舌打ちはおろか、齒の根をばりばりと噛み合わせて、たちすくむ他はなかったのであった。

「ど、どうするか、千登世様を！」

呆然と見送る若者の、小倉の単絆纏の襟に「春田」と白く染めのこされた文字が、常夜灯のあかりに、ありありとよみとれる。

お嬢さまの千登世が、汐留の友人の家に行くのにつき添った春田和泉の一番弟子新五郎は、この瞬間、おのれの失策に為すすべもなかったのである。

「お、お嬢さまあ！」

その絶叫に、答えるものとしては、ただ、野犬の遠吠えだけであった。

一方――

駕籠の中の千登世は何か異常な事態が起きていることだけは、その速度で、はっきりと感じることができていた。が、十七才になつたばかりの女の身、外へとび出すこともできず、ただ、じいっと、吊り綱にすがったまま、はたして、どのくらいの時間がたったものだろう。暗闇から、何か、あかりが見えてきて、急に駕籠の歩みがおそくなり、甃石を踏み、かたんと、とまったかと思うと、別の昇き手が担ぎあげたらし、今度は、生

温く、（家のなかだわ！）と思われる所を、乗せられていく。

（思いきって！）

千登世は、垂れをはねあげると、とび出した。が、そこには――

七、八人の男たちが、手燭を持って、待ちかまえていたのであった。

「ようこそ、春田千登世殿」

ひときわめだつ七尺近い大男が、ニタリツと笑いながら云う。

「こ、これはすげえ美人だ。日本橋小町といわれるのも無理はねえ」

腕をまくって赤狐の彫ものを見せながら、眼の吊り上がった男が近寄ってくる。

「フッフッフ、旦那。本邸では公卿衆の美女二人。ここ別宅では小町娘。いつもは損な役廻りばかりでしたが、今度はどうやら果報につきるような仕事のように……」

赤狐の言葉が終わらぬうちに三、四人が、

「ほれ、ほれ。よい所へ連れて行ってやるかな」

と、ものを云うことも忘れて、たちすくんでいる千登世を担ぎあげると、わいわい騒ぎながら、長い廊下を内庭にでて、数棟ある土蔵のなかでも奥まったところにある、ひとき

わ大きい土蔵のなかへと繰り込んでいく。

「二階だ、二階だ！」

誰かの云うまま、急な梯子段を追いあげられ床に抛りだされる。

「な、なにをなさいます！ 妾は、春田和泉の、櫛師春田の娘でございます。な、なにか人違いをなされておられます！」

震える声で、やっとこれだけ云った千登世は、居ずまいをなおした。

娘ざかりの千登世にとって、このような大勢の男たちに囲まれているだけで、めくるめくほどの怖れにおののくのである。

その初々しさを楽しむように赤狐が、

「人違いではねえってこと。春田和泉に用があつてな。そのために、先ず、お前さん人質にとつたというわけよ」

と、かがみこんで、千登世の頬を指でつつこうとした。

「な、なにをなされます！ あ、アレッ！」

帰して下さい！ 家にかえして下さい！」

百合の花を染めだした友禅小紋の襟を押えながら、必死であと退さるのを、

「そのおべべをひんむいてさ、それ、そこらあたりでちらちらしている……」

斑猿は、あとずさる千登世の割れた膝の間

から、はみ出した純白の湯文字の裾を指さすと、

「その湯文字もいっしょに、お前の家におくり届けてやるのさ」

(な、なんとといったのか知ら、この男)

千登世は、後退することも忘れて、ぼんやりと斑猿を見上げる。

(いま、何と云ったのだろう。確か、妾の着物をお家におくるとか……そんな、そんなことが……。いや！ 確かに云った。この手足が猿のように長い小男は、確かに。ひどい！

ひどい！ ひどいことだわ！)

すっかりと乾いて、わなないている千登世の唇に視線をあわせた斑猿。さらに、

「お前さんを素っ裸に、むきあげるのさ」

事もなげに云い放つと、赤狐といっしょになって、白兎に襲いかかる野犬のような勢いでとびかかると、羅織りに光琳百合文様の丸帯に手をかけた。

「僕も手伝うよ、兄貴」

白豚が、千登世の背後から、文庫くずしの結び目を、慣れた手付きで解いて行く。

千登世の両手が、当たるにまかせてかきむしっていたが、十七才の処女おとめの帯を解き、伊達巻をとり、明石縮緬の長着を脱ぎとるのに

手間ひまはいらない。

またたく間に、長着や帯と同じように白百合の花を六つ七つと散らした友禅縮緬の長襦袢も剥ぎとられ、知多ざらしの湯文字と同じ地をうすもも色に染めあげた肌襦袢姿にされてしまう。

そんな姿を裸蠅燭にてりだされた千登世はもう何をどうしてよいのか皆目わからないらしく、おどおどした表情で、しっかりと胸を抱いて、身体をできるだけ小さくしているだけであった。

「始めての時は、誰でもそうさ。さあ、おいで、あとの二枚もぬがしてやろうぜ」

赤狐の手招きに、大きく首を何度も横に振ったが、齒の根が先程からガチガチと、鳴り続けているのが、男達の好き心をそる。

「こいつてことよ！」

斑猿が二、三步進んで右腕をとり、ぐいとひきよせながら肌襦袢の襟に手をかけて、ベリ、ベリッと破りとる。

破りとられて、前におよぐところを、

「どっこいしょ」

と赤狐が、横抱きにして膝の上にのせると「世話をやかさないってこと」

力いっぱい湯文字を下から、ひきずりおろす。

す。桃色の紐が、いったん、豊かな腰の線でとまるのを、「ほれさ！」と白豚が、無造作に、半分だけむき出しになった白い尻に片手をかけて、豊かな肉をへこませるようにしながら、紐をずり上げてゆく。

ズル、ズルッと三人の男が、力まかせにひっぱったものだから、最後まで処女の肌を守ろうとした湯文字の紐が、プツンと音をたてて付根からとれてしまい、あとは、一糸まとわぬ裸身が、赤狐の膝から床へと、ころころと二回転――。

あわてて起き上がろうと床を支えた千登世の腕を、ぐっと掴んだのは、いつ入ってきたのか、今まで、じいっと無惨な光景を眺めていた昭吉であった。

「お嬢さん、昭吉です。これは、また、よい所でお目にかかります」

さあっと、見上げた千登世は、一瞬、信じられないように、瞳を大きく見開いたが、

「キャアッ！」

と、一言、絶叫すると、狂ったように跳ねおきて逃げ出した。が、その足を、「どっこい！」と、青蛇に払われて、不様な恰好で転げる。再び立ち上がり、走る。再び、けつまらずかされて、横転する。

ぜえ、ぜえと喘ぎながら、壁を背にして、両乳房を必死で押える千登世の、結ったばかりの可憐な結綿の髪が崩れて、飾櫛が、コトンと音をたてて落ちた。

「昭、昭吉さん！」

「フッフッフ、昭吉さんか。お前さんから、そう呼ばれると、つい仏心を出して、救けてやりたくなるが、こう、素裸じゃあねえ」

「昭吉さん、ど、どうして、こんな所に」

「どうしてもこうしても、お前さんをからかうためにさ。和吉さんもいるぜ！」

「お嬢さん、ヘッヘッヘ、いい姿になりなすったねえ……ヘッヘッヘ……」

「和、和吉さん！」

「さあ。もう観念して、お手々を後に回して斑猿の兄哥に縛られるんですよ。暴れても駄目だってことはわかってるはず」

昭吉と和吉にとって、可愛さあまって憎さが百倍の女であった。日本橋小町と謳われる千登世に、五度、六度と懸想文をだして、ていよくあしらわれた上に、昨年から、新五郎という若者とよい仲になっているという。

「新五郎とかいう野郎に拝ませてやりてえやな、この素っ裸をよ」

千登世にとって、この言葉は、何ものにも

勝る衝撃であった。

「いや、いや、いやよ、そんなこと！」

震え声で叫ぶのを、

「じゃあ、許してやるからさ、俺たち二人に縛られなよ。そうすりゃあ、新五郎には黙っておいてやらあな」

千登世の表情から、その哭きどころを握った二人は、千登世をなぶり始めた。

「さあ、素直にこっちへきな……」

和吉は云うと、そばでにやにや笑っている斑猿に、

「おききのとおりで。振られつづけた恨みをここで一思いにはらしてえんで。ひとつ穴沢流の一手を教えてくださいますまいか」

「面白いな。じゃあ、房縛といくか……」

と懐から、まだら縄をとり出して和吉に渡す。赤狐も赤縄を昭吉に渡して、

「二人がかりでやってみな。前後から」

皆がニヤニヤとするなかで、白豚が、千登世の手を捕えると、ぶるぶる震えている白い裸身を昭吉と和吉の間にたたせる。

二人にとってこれ以上の報復はなかった。

「フン、ざまあみろってんだい！」

昭吉は、積り積った鬱憤をぶちまけるように云うと、

「いい躰をしてるじゃあねえかい、ええ。この、こりこりとした乳房は、どうでい。もっと、手をうしろ、しっかり後に回さないと新五郎に知らせるぜ」

自分が振った男二人の前に、全裸の身をさらしだされるだけでなく、この手で、縛られる……という屈辱は、経験した女でなくて、到底、わからない灼けつくような羞恥であらう。しかし、

(新五郎さんに、こんなことを知らせられるよりか……)

ただその一心で、千登世は、昭吉、和吉の二人が、身体を觸るのに任せたのであった。

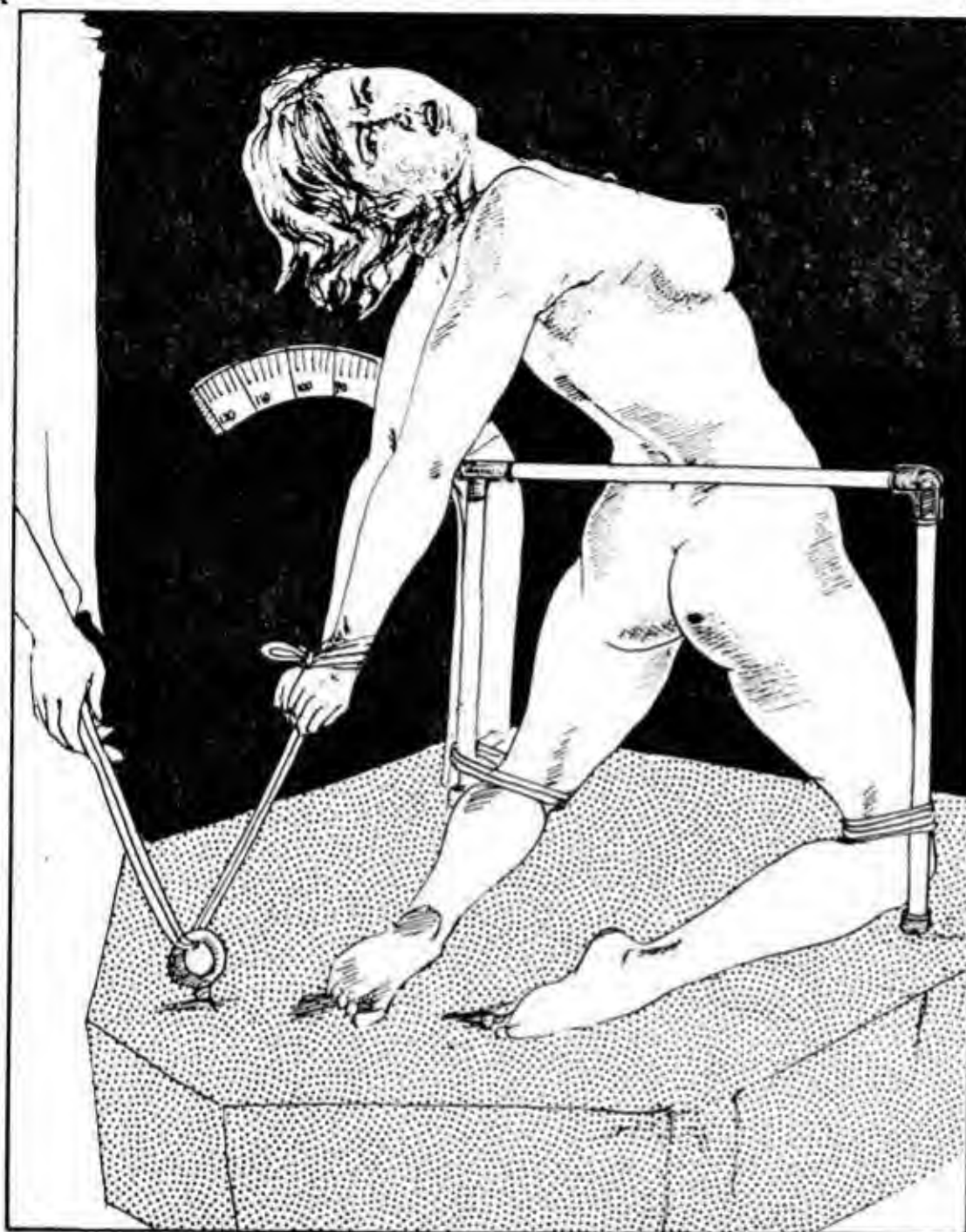
「この縄をこうして、そう、それを前に回して、乳房の下を、そう、二筋……」

「もとにもどして、下腹をきりきりと締めあげて、もう一度、太腿に絡ませて、結び目をここへ！」

赤狐と斑猿の指示どおり、無器用な恰好でああでもないこうでもない、鳥肌だっている千登世の裸身を、いじくりながら、昭吉と和吉は、白い百合のような女身を、房縛という型にしたてあげていく。

房縛——それは、乳房を中心に縛りあげる型であった。まだ、初々しい、爛熟した女に

読者ギャラリー 『軟度測定器』 須坂 旭



比べて、かたい双の乳房の付根に、一筋の赤縄がふかぶかと喰い込み、ほんのりと実り始めた桜桃の実のような桃色の乳首が、つまみあげられて、くるくると二巻き、まるで瓢箪の形に、処女である千登世の乳房が、緊縛されてしまったのであった。

恥かしさを忘れさせるような疼痛のなかで千登世は四人の男に全身をまかせきり、百合の花のような香りを、ほんのりと漂わせ始める。猶も、ああだ、こうだと云う二人に「まあ、大体、よいだろう」

赤狐が云うと、じいっと事の成りゆきを見

守っていた元禄屋が、千登世の着物や小物類をひとまとめにさせると、何やら、鞭兵衛に耳打ちして、

「千登世さんとやら、どうぞ、御ゆるりと、ここで遊んでいて貰いましょう、お相手は、貴女に惚れている僕の番頭共がつとめます」
竜文地の羽織の裾を軽く、たたき、赤狐たちの見送るなかを、急な梯子段を降りていった。

あと見送った鞭兵衛が、

「よいな、青蛇。この女、預けておく。どんなに馴ってもよい。ただし、生娘のままにしておくのだぜ」

と云い、千登世の着物の入った風呂敷包みを白豚に持たせると、元禄屋の後を追った。
「フッフッフ。しめこの白兎だぜ昭吉。ええおい、和吉。その女、どんなに馴ってもよいとお許しがでんだぜ！ さあ、つもる恨みを存分に晴らせ、はらせ！」

青蛇にしては、珍しく陽気な声が、土蔵の中に、ひびき渡っていった。

江戸は日本橋上横町三丁目、春田和泉の家に、白縄の白豚の手によって、娘千登世の着物類一切が投げ込まれたのは、次の日の朝で

あった。

「貴方。こ、これは！」

風呂敷包みを開いた女房の豊香は、その香りが、娘千登世のものであることを逸早く察すると、ふるえる手で、明石縮緬地に百合の花を特別に染めぬかせた友禪小紋の長着を取り、長襦袢を眺め、動転した。

春田和泉、不惑を越えたか越えぬかの年頃であろう。きつとした表情で風呂敷包みに副えられた書面に目を走らせていたが、一言、
「豊香、豊太閤のロザリオを！」
と云って絶句したあと、

「出せ。出すのじゃ！ 娘の生命には代えられぬ！」

呻くように云うと、自ら奥座敷へと走り、中二階に梯子をたてかけて、くるったように登ると、真暗闇のなかで長持ちの奥をかつさぐっていたが、手箱を手に戻ってきた。

「貴方。これは！」

この間に、書面をよみ終わった豊香が、慄えながら、夫に縋りつき

「千、千登世の……。待、待って！」

「待ってる、ひまはない！ こぬがよいぞ」

春田がとび出そうとするのを、

「待って。ね、お願い！ こ、この手紙には

豊香どのが、自ら持参するようにと！」

まさしく――

千登世の湯文字までを、伊達巻、飾櫛、腰紐と、いっしょくたにして包んであった風呂敷にそえられた書面には、

――娘御を帰して欲しくば、豊太閤、丁夜のロザリオとともに豊香殿、おでむきのこと。もし、町奉行などにお知らせのむきは、いかがあいなるや。それは、この湯文字にお察しくださるべく。

黒痕あざやかに書かれてあったのである。

「僕が行く！」

「いいえ、妾が！」

「だ、だ、黙れ！ 娘の生命、ほおっておけるか！」

「いいえ！ 今度ばかりは……ともかくも。もっと、ゆっくり、もそっと、とくとお考えを！」

豊香に、裾をとられた和泉は、そのまま、どおっと転がり、そのはずみで手箱の蓋がとれ、なかから、四十七箇の珊瑚を飾緒で貫いた燦然ときらめくロザリオが、ころがる。

その黄金のロザリオには、

――浅き夢みし酔ひもせず

と刻まれ、あと、33、14、20、21、47と、

春田にも豊香にも何のことか見当もつかぬ符号が、彫られてあった。

「豊太閤五夜のロザリオ」――豊太閤こと豊臣秀吉の、莫大な遺産を秘める五つのロザリオのうち、これで、二つの謎が、慶長三年から二百五十年を経た後に、ほぼ、姿を現わしたことを、大方の読者には、お気づきのことと思う。

爛熟した女

「豊香さん、まったく久し振りじゃ」

指定された汐留に近い柳並木に赴いた豊香を迎えたのが、思いもかけぬ御用絵師の鳥尾芳年であったことが、豊香の不安にときめく胸をいくらか、しずめてくれた。

「ま、ま、話は、あとで。さあ、早く」

せかされて、駕籠に押しこまれながら、豊香は、「娘の千登世は、どこにいるのですしうか、芳年様！」

と尋ねてみたが答はなく、駕籠は「やつ、ほう！」と、とぶように駆け出す。

「安心しなさい、豊香さん。僕とあんたとの仲じゃあないか」

と、駕籠脇で云われて豊香、ほおとした

ものの、(この人と妾と……)と、よくよく考えてみると、再び疑惑がうずまく。

「と、とめて！ とめてよ、駕籠屋さん」

豊香の叫びには耳も籍さず、飛ぶように、駕籠が走る。

(この芳年とかいう絵師は、むかし、妾に懸想していた……それを、拒んで、和泉のもとに嫁いで行った妾……ただ、それだけのこと。妾をうらんでこそおれ、好意を示す筈はない……それとも、別の事情があつて……)

やくざか無頼漢か、ともかくも尋常ではない男たちが現われるであろうとばかり思っていた豊香は、顔見知りの絵師の出現に、

「止めて、とめてよ！」

と叫びながらも結局は、この駕籠に乗って行きつくところまで行くほかは、娘を救う方法はないと、決心をした。間もなく、

「ついたぜ、豊香さん！」

芳年のはずんだ声がして、おろされたところは、鬱蒼とした木立ちに囲まれた数寄屋風の、豪商の別宅とも思われる、玄関先であり、待ち受けていた男たちに、さあっと前後をかこまれると長い廊下を渡り、釣灯籠のある広縁から、内庭にでて敷石を踏み、ものの二町、(広いところだわ)と豊香が思った時

に前方に四つ五つの土蔵が現われ、その一棟が銅の扉を不気味に開いて一同を待ちうけていたのであった。

閤をまたいで一步、中へ入った豊香は、
「アッ！」

と思わず叫んだ。家財道具や宝物を入れた長持、箆筒の類がつめこまれている筈の土蔵のなかには、がらん洞。いや、ゆっくりと見廻すと、奥の方に牢格子が見え、壁には高張提灯、さらに、袖搦み、突棒、熊手、さすまた鉤槍、片鎌槍、六尺棒などが、置き並べられ土間の隅には、板戸やら、大八車の車輪やら木馬のようなものやら、ともかく人情本や合巻で読んだことはあるが見るのは始めての貴道具の数々が並んでいたのである。

ゴクンと生唾をのみこんで、呆然とたちつくす豊香の背後で、

「持ってきたらうな、御内儀」

男盛りの油ぎった声がする。思わず振り返り、それが、二度三度と逢ったことのある元禄屋重右衛門であることを知ったときの豊香の驚きと云ったらなかった。

「元禄屋さん！ な、なんということなされます。千登世を、返して下さい！」

「フッフッフ……でかた次第でな。あんたの

持ってきたものをお出し」

猫撫声でいうのを、睨み返して、

「これです。祖先から、伝えられてきたものです。千登世は、千登世はどこにいますか」
手箱を元禄屋に押しつける。

ニヤツと笑った元禄屋は、ちらつと蓋を開いて中をのぞき、それがまがうかたもない豊太閤丁夜のロザリオであるのを知ると、鳥尾芳年の方に意味あり気に笑って見せると、

「千登世を、千登世は、どこに！」

追いつがる豊香の方には振向きもしないで土蔵から出ていった。

「おっと待ちなつてことと！ 御内儀さんに

は、こちとらでまだ用事があらあな。千登世

さんに逢わせてやろうじゃあねえか」

「千登世は、どこにいるのですか！」

「ここさ。ここにいるぜ。安心しな」

「早く、早く逢わせて下さい！」

必死の思いをこめて、二歩、三歩と男たちに近寄る。

「よかろう。じゃあ、ちつとばかり拝ましてやらあな。その方が、のちのちの為だろうしさ」

手足の異常に長い男が云うと、豊香を、別の土蔵へと案内し、急な梯子段をのぼらせ、

「ちらっとだけだぜ。さあ、眺めな」

梯子段の上部から、二階の床に顔だけを出して、一目、覗いた豊香は、

「キャアッ！ 千、千、千……」

（千登世！）という叫びは、斑猿の長い手で唇をふさがれて口中に押し戻され、同時に、数人の男たちが揺る腕のなかへと落ちこんだ豊香は、そのまま、担ぎあげられると、もとの土蔵に運びこまれる。

「ど、どうして！ どうして、こんな事を！ ひどい、ひどい！ ひどい！」

狂い廻るのをじろっと見下ろした芳年は、

「豊香さん。これでもう、僕等の本性もわかったはずだ。今みた娘御はな、今から、昭吉と和吉の二人が、思う存分、なぐさむとさ。のう、番頭さん」

女形のように色白の顔で、昭吉が、

「御内儀さん。申し訳はありませんが、今から、千登世さんを抱かせて貰います。なあにあのように素裸で、猿ぐつわまでして待っていて下さるんで、ほんの一寸の手間だけで済むというもので……」

「ま、ま、まって。とも角、待って！」

出て行こうとする二人を呼びとめた豊香の瞳に、今、かいまみた無惨な千登世の姿がう

かぶ。

（千登世……）

豊香にとって千登世は、実の娘ではなかった。嫁いで子どもの生まれなかつた春田和泉と豊香は、二つの女の子を貰いうけ、実の娘として育ててきたのであるが、この事実を知るものは二人だけであり、当の千登世も知らない。が、腹をいためた子であろうとかなるうと、千登世は、ここ十五年間、手塩にかけ育ててきた可愛い娘なのだ。

「昭吉さんとやら、許してやって。ね、お願いだから、あの娘だけは許して。お願い」

手を合わさんばかりにして頼みこむ豊香のそばにかがみこんだ昭吉は、急に言葉で、

「じゃあ御内儀さんが、身代りになって下さるとでも云うのかしら、ねえ、和吉」

「そうよ、そうよ。わたしたちはもう、じっとしていられないくらいに氣持が昂ぶつてるのよ。これを鎮めてくださらなくっちゃあいやだわ」

二人は、右と左から、豊香の肩に手をおいて、しなだれかかった。

「どうなの。千登世さんは、わたし達の恋人なのよ。それを、今になって抱いちゃあいけないなんて酷よ」

「でも昭吉さん。千登世さんのお母様が代りになるっておっしゃるようだったら、ねえ。そのあとで、わたしたちが、旦那さまにお願いして、無傷で千登世さんを返すよう頼んでみてもいいわよ、ねえ」

「そうよねえ。だから、その前に、おばさまが、きちんとわたしたちの命令に従うといってくださいさなくっちゃあ」

異様な雰囲気を楽しむように、斑猿たちはてんでに、床几を持ち出してきて、三人を取り囲む。

「芳、芳年さん……あ、ああっ！」

豊香は、どうしたらよいのかわからなくなつたように、十七、八年も昔の友達であつた芳年に訴えたが、芳年は、ニタツニタツとほくそ笑むだけではないか！

（やはり、あの人には、鳥尾という男には何も期待してはいけないのだわ……）

豊香は、この土壇場になって夫の和泉といっしょにくるのであつたと後悔した。が、いっしょにきたとしても相手がこう大勢では、やはり同じ運命に陥つたに違いない。さすれば、あとは、不審に気付いた夫が、なにか救助の手段を構じてくれるのを、じっと、待つほかはない。

(しかし……)

と豊香は男たちを見廻した。どの顔も一癖も二癖もある男たち。とても、約束を守ってくれそうにも思えない。さりとて、どうする?……昭吉と和吉の出した条件をこの際うけ入れるほかはない。そうしないと、千登世はすぐに犯されてしまう!

(なるべく長く、この男たちをひきつけておく。それしか、千登世を救う方法はない)

そう自分に云いさせたものの、現実、いま左右から、江戸紫の塩瀬紬の襟元に手を入れようとさえしている二人の男をみると慄然とする。

「どう、御内儀さん。どちらになさいます。

わたしたちは、どちらでもよいのよ」

「そうよ。わたしたちがお願いしてるのじゃあなく、おばさまが、わたし達に頭を下げて頼むのよ。妾を裸にして下さい。そして、娘の代りに可愛がって頂戴な……って」

「な、なんですって!」

「なにを怒ってるのよ。裸にならなきゃ抱けないじゃあないの」

怒ったように云った昭吉は立ち上がり、「和吉さん。どうやら嫌じゃと云うてのようじゃ。行こう、千登世の方がよい」

「そうするか。あの娘を、あまり待たせるのも悪いしな」

口うらを合わせたように出て行こうとしたから豊香が、あわてて、

「待ってえ!」

「いやだ! 僕等の命令がきけねえようじゃあ、ここにいても面白くねえからな」

「ききます。何でも。何でもお云いつけに従いますから。ほんと! ほんとうです!」

「嘘じゃあないでしょうね」

「……は、はい……」

遂に、豊香は、丸雷を重々しく縦に振って坐り直すと、両手を膝に、うなだれて終わったのであった。

「よくってよ。それじゃあ」

と再び女言葉にもどった昭吉は、

「まず、御内儀さん。わたし達の前で、裸になって見せてよ」

「そのお着物を全部ぬいで、手をついて千登世をたすけて下さいとお願いするのよ」

きとなった豊香は、二人に手を取られるまま、たち上がると、周囲の男たちをぐるりと眺めていたが、さっと柑子色献上博多の単帯の小万結びに手を持って、解いていく。

「手伝いましょうね、豊香さん」

和吉が、はらりと解けた帯をうけとると、斑猿に渡す。

「次は……と、その塩瀬紬」

和吉のはずんだ声のなかで、紋織りの伊達じめを二回りさせてとると、おはしよりが見えて、女らしい色気が、にじみでる。

「腰紐は、わたしにとらせてね、お願い」

和吉は、正絹の縮緬の紐の藤むすびに、しなやかな指をかけると、さあっと解いた。

「藤結びを解いてやるときの気持は、こたえられんよな、まったく」

黒馬が、涎をながさんばかりの顔で云う。藤結び——ゆるまず、たるまず、しかも解くのが頗る簡単。まさしく男に解いて貰うための結び方と云えよう。

「さあ、自分で、お脱ぎになって」

和吉は、腰紐をぶら下げたまま、豊香の次の動作を見守った。そのなかで、そおうとかがみこんだ豊香は、すう、すうと左、右と長着の袖をぬぎ、腰のあたりでその塩瀬紬をうけると、前に回して、ひとつにまとめる。

「おっとっと、立ったまま、立ったまま」

注意しながら黒馬がその長着を取り上げ、昭吉が腋の下に手を入れてたち上がらせる。

「ほう、珍しい図柄じゃあねえか。薔薇の花

だぜ、こりゃあ」

平織り地に紗織りで織り出されているのは数十の真紅の薔薇の花——長襦袢にしては珍しい図柄であった。が、これは、夫である和泉の好みであり、今朝、夫とともにという思いをこめて、豊香が選んで着用したもの。その図柄を、こうも夫以外の多くの男たちの目に曝すことになろうとは、露思わないことであつた。

「目がさめるようだぜ」

「まったくだ。公儀御用櫛師の御内儀ともなると、こうも立派な長襦袢をきやがるものかよ。すげえ……」

てんでに床几からたち上がった男たちは、長襦袢の袖や、裾に手をかけて触っていたが「フッフッフ。匂ってきやがるぜ。女のむんむんする匂いがよ。こりゃあ、伽羅だぜ」

青蛇が、鼻をうごめかす。

「まったく、まったく。さあ、ひと思いに」黒馬が叫び、昭吉が、長襦袢の紐に手をかける。

「ま、まって。お願い」

低く悲しい声が、豊香の唇から洩れた。

「まって。一息つがせて、お願い」

再び云った豊香が、へなへたと床に崩折れ

ようとするのを、

「そうはいきませんことよ、御内儀さん。早く、素っ裸になって貰わなくっちゃあ。わたし達、これでも忙しい身の上なのよ」

両腋に腕をさし入れて左右から持ち上げた昭吉と和吉は、豊香をたたせるやいなや、さあっと、長襦袢の襟を後に、背の方にひきずりおろし、豊香の反抗を楽しみながら、両袖をぬがせ、細紐をひきちぎると、馥郁と匂うその布を宙に、ほうり投げたのである。

「アッ！ アッ！」

むっちり凝脂ののりきった上半身を、まろくして豊香が蹲る。

三十五才の爛熟しきった女の肉が、そこにはあつた。文七元結が切れたのであろう。ほつれた髪の後毛に、裸蠟燭のかけがうつり、うなだれた顔の半面を映し出す。

「こっちを向きなよ、御内儀さん」

青蛇が、あごに手をかけて、裸蠟燭に、もろに顔をさらけ出させる。

妖艶——

と、形容する以外、この時の、豊香の姿態をあらわす言葉はなかった。

大輪の薔薇の風情、さかりを過ぎたか過ぎぬかの触れなばおちんという女そのものが、

生身で、息づいていたのである。

右膝を立て、上半身をそれにあずけ、むちむちとした双の腕で、はちきれそうな乳房を抱いて、男心をそるように留め伽羅の香りをただよわせている豊香の背後から、

「僕の出番らしいぜ、豊香」

進み出たのは、やはり、芳年であつた。

「かなわぬ恋の意趣ばらし……とでも思つて貰うほかはないわ」

と、米俵でもくくる時のような荒縄を手に

「手をうしろに回しな。きっちりだよ」

「いよう、鳥尾先生！」

囁きたたのは赤狐であつた。

「お手伝いしましょうか、穴沢流で」

「フッフッフ、そのうちにな。いまは無用」

と、ことわると、

「豊香。早く回さぬと、赤狐殿たちにお前を渡さねばならぬ。早く、手を回すのじゃ」

「鳥尾先生。それはきこえませぬ。この女を縛るのは、わたしたちの役目」

昭吉までが、別の荒縄をとり出して、豊香の背をつつく。

「わたしもですわ。この女、この縄で」

和吉もまた、けばのある荒縄を手にして豊香の前に回り、その顔を覗きこむと、

読者ギャラリー 『小 休 止』 志 羽 利 也



「御内儀さん。最初のお縄は、このわたしにかけさせてくださいますかねえ」
 がっくりと崩れた鬘から、柳清香の香りがほんのりと漂い始める。

「どうする、豊香。お前さんの裸身を縛るために、こうも多くの男たちが奔めいておる。赤狐殿も白豚殿も、斑猿殿も、それぞれ縄を

しごいておる。誰に一体、縛られたい」
 芳年の言葉も聞こえぬように豊香は、じいっと下唇を噛みしめて、あらぬ一点を見つめていた。

（問題は、千登世を救うことだわ……そのためには……）

双の乳房を両手で覆いながら、少しずつ上

体をおこした豊香は、さも相手をじらすように、男たちをひとわり見廻すと、

「昭吉さんと和吉さん……」

低く、誘うような声で云った。

「やっぱり、わたしたちよね」

昭吉は、ほっとしたように云うと、

「じゃあ、縛ってあげるわ。けど、どうするの。そのまま？ それとも」

言葉なかばに和吉が、

「御内儀さん。きちんと坐り直して。そして頭を下げて、わたし達に、縛って欲しいと三つ指ついてお願いするのよ、ねえ昭吉さん、そうでしょう」

「ええ、そうよ。わたし、一度でいいから、おばさまのような美しい方に、縛って欲しいの昭吉さん——と、云ってほしかったの」

豊香は、やっと、心に決めた。こんなねちねちした男たちに、断じて千登世を任してはおけない！ どうしても、身代りになってやらなくてはいいわ……と。

立膝をおろし、雉色の湯文字の裾の乱れを直して正座した豊香は、そおっと乳房をおおっていた双の腕を前に出すと、床の上に、夫を送り出すときのように三つ指をついた。激しい屈辱感が、胸元にこみあげてくる。それ

を必死で押しこらして、

「昭吉さん、和吉さん。こんなおばさまでよかつたらどうか自由になさってよくってよ。縛って頂戴な。思う通りになさって」

云い終わると顔を真紅にそめて、ぴくぴくっと慄える豊香であった。

「そう。それでこそ、わたし達のおばさまだわよ。さあ、手を回して。回すのよ！」

豊香の右手が、二度ばかり、ためらったのち、背後に回り、左手がややおくれて、やがて、燦めくように美しい背中中で交叉される。

「フッフッフ……」

昭吉は、豊香の肩に、あごをのせるようにして、荒縄を二巻き、三巻きして、きりきりと、とどめ結びをしようと、

「まずは、皆様方に、よく見て頂きましょうね。お立ちになって」

と、ぐいっと、縄尻を持ち上げた。

左膝から床を離れ、湯文字の裾が乱れて、女体の匂いを、再び、あたりにまきちらせながら豊香は、立った。

手燭をまっさきに近づけたのは、芳年であった。

「おおきい。まるで、丘おかのようじゃ。白兎や栗鼠りすが、このかげで棲すめそうなくらいの」

こどもをうんだことのない乳房は、みずみずしくはりきって、何か、こう、ちょっと触れるだけで純白の乳液を迸らせるかのように息づいている。その丘のうえの、乳首はと云えば、熟うれきった桜桃の実のように、今にも摘まれ、食べられるのを待つかのように紅く色づいている。

「うーむ、これは絵になるのう。歌麿よ。歌麿の『婦人相学十体』のうち、誰じゃったかな、あれは……お栄か、お米か、お久か。ともかく、この姿は、絵になるわ」

芳年は、あわてて懷から筆をとり出すと、

「昭吉さん、和吉どん。しっかりと、しっかりと縄をかけて、そう。そして、もっともつと責め抜いて下されい。この鳥尾芳年、一代の傑作を描きあげてみせましょうほどに」

さすがは画かきである。芳年、この女体が稀れにみるものであることを悟ったらしく、熱心に、絵絹に向かい始める。

「さあ、御内儀さん。鳥尾先生がああして描いてくださるんだ。せいぜい色氣の出し惜しみはしないことでしょうな」

斑猿が、長い手を伸ばして、豊香の身を守る最後の一枚である湯文字の紐をとこうとした時であった。

「待った！ その布は、俺がひん剥いてやるぜ」

突然、太い声と一緒に油ぎった大男が入ってくる、つかつかと豊香の前に進み、

「豊香、俺だよ、俺！ 羅卒の……」

一瞬、怪訝な表情をうかべたが、

「アッ！ あなたは、鞭兵衛！」

ピクッとむき出しの乳首がゆれた。五、六年前——両国の川開きの夜、顔をみられたのが最初で、それ以来、執念深く云いよっていった男ではないか！

「な、なんで、こんな所に、貴方が！」

「フッフッフ、いいさまにひん剥かれたじゃあねえか。さまあねえな。この乳房、この腰、ハッハッハ……」

毛むくじやらの掌で、上半身を撫で廻し、「野郎ども、よく見ておきな。いいか、この御内儀さんが、腰のものをとられなすったとき、どんな顔をなさるかをな」

鶺鴒色の湯文字の紐に手をかけると、遠慮も会釈もなく、ずばっと、ひきちぎり、ぽいっと、まるで襦袢布でも投げすてるように抛り捨ててしまった。

「アッ……」

豊香は膝をねじって、必死で身をかがめよ

うとしたが、

「今更、あがいたところがどうなるものでもないぜ、御内儀さん。さあ、白豚！ たっぶり眺めさせて貰いてえ。この裸を縛蝶、穴沢流縛蝶にかけな」

「合点ですぜ」

白豚が四十貫近い巨体で、豊香の右足をがっちりと捕えると、くるくると白縄を巻きつけ、黒馬が同じように左足に黒縄を巻きつけ

「よいさ！ こらさっ！」

掛声をかけながら、一寸刻みに、すんなりと伸びた両脚を開いて行く。

「こうするほうが手っ取り早いぜ」

赤狐が、豊香の脛を後から抱きあげる。

「アレッ！」

ばたつかせる両脚の抵抗も空しく、やがてぞんぶんに、両足首を開かされて、立つ。

その間に、昭吉と和吉が、天井の梁からおりた太い綱に、豊香の首を絡ませる。

一方、青蛇が後手の荒縄をとき、左右の手首に別々の縄を縛りつけると、両手を広げさせて壁の吊輪に、力まかせに固定したものだから、豊香は、「大」の字の形で、土蔵のなかに立往生。首をのけぞらせていると云う無残な恰好となった。

その上に、斑猿が、太腿の肉に斑縄を喰いこませて、ひっぱり、腰のくびれに、麻縄をまきつけた白豚が、その一端を、後方の座敷牢の格子にまきつける。

「いい眺めだぜ、まったく！」

ニヤリッと笑った鞭兵衛は、細糸に物干鉄のついたものを持ち出すと、食べられるのを待っているように熟しきっている桜挑の実にばちんと、はさむ。

「ウッ！ い、い、痛い！」

「何がいたい。ほれ、こちらもな」

左の乳首にも物干鉄をはさむと、その細糸をこれまた、壁の吊輪までのばしてとめる。

縛蝶——毒蜘蛛の巣に捕えられた蝶の、哀れにも美しい姿……爛熟したむんむんする女体を、こうして豊香は、むかしの友人や、恋仇や若者たち七、八人の前に曝け出したのであった。手燭をかがげて蹲まった白豚が

「まだ、残ってるぜ」

と覗きこみ、

「これは、またお見事」

と、真赤になって屈辱を耐え忍んでいる豊香の柔肌に、ゴツゴツした掌を這わせ始めるのであった。

「な、なにをなさいます！ おたわむれはお

よしになって！ お願い。アッ、アッ！」

ぶるんぶるんと、豊香の咲き誇った大輪の白薔薇のような肉体が、妖艶にゆれ、のけぞった豊かな胸もとから、一筋、二筋と汗が、にじみでて、滑りおちる。

白豚の戯れに、斑猿が加わった。

あとまだ、青蛇たちがいる。昭吉がいる。和吉が、淫らな燃えるような目を豊香に注いでいる。そして、さらに、芳年が、叶わぬ恋の意趣ばらしをするであろうし、鞭兵衛は鞭兵衛で、奇妙な、一尺位の棒のさきを、しきりに鼻の油をつけて、こすっている。

「アウ、アウ……許して、もう、かんにん！ かんにんしてったら！ ねえ！ アウ！」

豊香の唇から火のような呻きが洩れ始め、土蔵中に、伽羅の匂いと女体の甘くやるせない体臭が、たちこめ始めた。

その頃——

日本橋四丁目、元禄屋の本邸では、元禄屋が、老中領田下野、勘定奉行肥田若狭、同吟味役佐渡刑部と、春田豊香から取り上げた丁夜のロザリオを囲んで密談していた。

「なんと！ 徳夜叉が、戌夜のロザリオを。それはまた、まことのことでございまするか

な、領田様」

「黒鯢の者が調べてきたこと。まずは、万に一つも間違いはない」

「フーム。徳夜叉と云えば、近頃とみに高名な怪盗……自ら当代家齊さまの御落胤を名乗り御府内一円に神出鬼没」

「フッフッ、その情婦は、絶世の美女と聞き及ぶわ」

佐渡が、ニタニタツとするのを、

「それよりも、どうして奴ほどの者から戊夜のロザリオを取り上げるかじゃ。町奉行ですら手に負えぬと申しておる」

と、思案顔の領田。

「そこはそれ、その情婦のお景とやらを取り押える手もござりましょう。それよりも、まず、これを！」

元禄屋が示したのは、前右大臣菊亭政房からの手紙であった。

「きやつ、断わってきおったか！」

肥田の下唇がゆがむ。

「しぶとい奴よ。どうする、元禄屋」

との領田の問いに、

「なあに。もう一度、やってみるまで。娘の貴子がいまどんな責苦に喘いでいるかを、はつきりと思い知らせてやるまで。それで聞く

ところによりますると、先年、和蘭おらんだから、何でも真をうつすというカメラとか申すものが献上されたとか。それをお貸し頂きとう」

勝算ありげな元禄屋。

「何にいたす」

「真をうつします。貴子の責め場を刻明に撮しとり、肌着・湯文字類を副えまして政房に届けまするわ」

「荒療治じゃの……」

「なあに。この元禄屋、一たび狙った獲物はどんなことがありますようと、絶対逃がしませぬ。その他にも、着々と手は打ってごさいます。御安心のほどを」

「ワッハッハッ。こわい奴じゃのう、その方は。ワッハッハ……」

丁夜のロザリオを、しっかりと手箱に納めた元禄屋は、

「御覧になりまするか、菊亭政房の娘を。公家の女が拷問される処は、また格別でございしますぞ。フッフッフ……」

呼鈴を鳴らした元禄屋は、入ってきた女中頭のお松に何事か囁いていたが、大きく頷くとニヤリとして、

「さあ、どうぞ、こちらへ。丁度よろしいようで」

と、手燭を持って先に立った。

三寸角の赤松材で囲まれた座敷牢のなかで菊亭貴子は、白蘭のような肌から油汗をにじませながら苦痛とたたかっていた。

侍女の雅子の見るに忍びない拷問を止めさせるために、京都の父、政房に心にもない手紙をかかされて、あと、許されると思ったのも束の間。次の日からは、何かを白状せよと云うのでもなく、ただ、遊びの対象として、その高貴な肉体を、元禄屋を始め鞭兵衛たちの思うがままにされ続けたのであった。

今日は、珍しく、鞭兵衛たちが、こないだ、ほっとしたのも、正午までの間であった。

八つ半頃、初めてみる男が三人、つかつかと座敷牢に入ってくると、奇妙な言葉使いで貴子の裸体に迫ってきた。

「旦那サマノオ許シネ。少シ、ナブラセテモラウヨ」

唐人と思われる男たちであった。

ハッと右膝を立てたものの、その足首には枷がはめられており、鎖が、ジャリ、ジャリともの哀しそうに軋む。

「あなた、お茶にしません？」と、妻のお艶が襖の端から顔をのぞかせ、「あらッ、お勉強？」と、さも珍しげに言いながら、入ってきました。日曜日の午後、私が机に向かって考えごとをしていた時です。

言われてみれば勉強に違いないのですが、相撲のとり方についてのべんきょうです。それも、私と妻との取組についてです。

妻を相手の相撲をとり始めて以来、どのくらいに番数になるのか。とにかく今はもう、何にも勝る楽しい遊びになっています。



——我が妻は好敵手——

組 打 相 撲

椿 寿 郎 (カッとも)

色白でデップリ肥り、背丈こそ私より三寸低い五尺二寸ながら、体重は十七貫五百もある秋田女、わが妻お艶。私は、このお艶の性質ばかりではなく、堂々とした身体にも心底からゾッコン惚れこんでいるのです。

相撲をとる場合のお艶はなかなか強く、私は、どうにかして倒してやろうと思うのですが、殆どの場合、軟体動物の吸盤利用作戦のようなお艶の粘り強さに阻まれて、逆に押し倒されてしまうことが多いのです。

今までのところ、どうひいき目に見ても、

お艶の優勢は動かせません。これは亭主として誠に残念なことで、威信にもかかわる重大事です。ので、なんとかして星を稼がねばと思う気持が、べんきょうとなって表われたというわけです。

なにせお艶は、私が出動した後でも、床の間の柱を相手に一汗かく程、殆ど毎日稽古をしているというのですから、勤務にしばらくは私としては、ますます勝目が無くなることになるわけです。

でも、私の本心はそれでいいのです。私はそうした強いお艶が好きなんです。いくら妻の体格が私より優れていても、私が勝ってばかりなら張り合いがありません。たとえ、亭主の威信にかかわっても、お艶には益々強くなってもらい、私の必死の攻撃を、その柔肌で撥ね返してもらいたいのです。

「おれはな、男としても身体はよい方だ。それに昔は柔道で鍛えているから、弱い男ではない。そのおれを、お前は負かすのだから、実にたいしたものだ」

半分以上は実感で、少しは負け惜しみを加えて、私がお艶をほめてやりますと、

「そうね。女同志の相撲なら、わたしはきつと横綱よね」

と、ヌケヌケと勝手に横綱になってしまったのですから、自信のほどが窺えますが、ケロリとして言い、すずしい顔をしているのをみ

ると、こ憎らしい斗志が湧いてきます。

「そこで、おまえとの相撲の新しいとり方を考えたんだがね」

私は、べんきょうの結果を切り出します。

「どんな、とり方なの？」

「ひと口にいうと、組打ち相撲だ」

「組打ちって？」

「つまり、転んだり、土俵を割ったりだけでは負けにしないで、勝負は、相手を抑えつけて動けないようにしてつけるというわけさ」

「プロレスみたいね」

「レスリングじゃない、あくまでも日本古来の相撲が基礎なんだ。禪は必ず締めて、従来のとり口に組打ちを加えるだけだ」

「組み敷かれた方が負けね」

「そういうことなんだが……他のこまかいことは、おまえと相談して決めようと思う」

「いいわよ。あなたの思い通り決めて頂戴」

「まあ、そういうわずにさあ。二人の相撲じゃないか、おまえも少しは考えろ」

「そうねえ。でも、やっぱりあなたが決めてよ。……そうだわ、やってはいけないことも決めといてよ」

「禁じ手か。だから相談しようというのだ」

「じゃあ、まず、乳首を捻る事。あれ、痛いわよ。力がいっぺんに抜けちゃうもの」

「女の急所だからなあ」

「そうよ。男だって急所をやられたら、たま

らないでしょう？」

「そりゃそうさ。プロレスでも反則らしい」

「それに、あなたはよくわたしの髪を掴むけど、あれもいけないんじゃない？」

「うーん。そりゃ、相撲ではマゲを掴むのは禁じ手だが……。でもね、女の黒髪は男には魅力なんだ。おれも掴みたいんだがなあ」

「仕方ないわねえ、あなたが好きなら」

お艶は、手を上げて髪を撫ぜました。

「あとは相撲規則に準じよう」

「決まったの？ じゃあ、そうしましょ」

横綱ともなると、やはり、おおようなものです。

「それから、禪なんだが、今の晒木綿じゃ気分が出ないから、なんとか、お相撲さんのようなのを締めたいな」

「お相撲の禪は売ってませんわよ」

「だからさ、何か似たようなのを探そうよ」ということになって、早速に揃って出掛けることになったのでした。

○

百貨店を歩き廻って、結局見付けたのは洋服の裏地にする布で、ツルツルした艶のあるサテンです。色も豊富で、私のは黒、お艶のは紅色と決めました。

早々に帰って、禪製作の共同作業に入り、帯芯を縫い込んだピカピカの禪が出来上がった時は、二人共、とても嬉しくなりました。

縫製の後始末もそっちのけで、すぐに二人とも裸になり、お互いに手助けし合って締めこんでみました。肌ざわりもよく、滑る布地なので、腹がくびれるほどよく締まります。そうになると、もうそのまま納まるわけはありません。私が、新しい禪をポンと叩いて「一丁やるか」

と、お艶の方をみると、もう既に六疊の間に蒲団を出して土俵作りを始めていました。

○

私とお艶は、蒲団土俵の東西に向かい合い蹲踞してチリを切ります。腰の禪が、晒禪とは格段の厚みと締まり具合で、本物の力士になったような気持ちにさせてくれます。

お艶も、いい気分らしく、歩の進め方から四股の踏み方までが、晒禪の時とは違っているような感じでしたし、見物人を想像しているのでしょうか、時々、辺りを見廻すような仕草をするのでした。

私は、その澄ましたお艶の顔付きが、おかしくもあり、又、可愛いく思われましたが、お艶の目には見えるらしい多くの見物人の見守る中で、蛙のように投げとばされては男子の面目丸潰れ。これは一番、頑張らなくてはならんと、気持を引き締めたものでした。

お艶の蹲踞は、両膝を百八十度開いた堂々たるものです。白い太鼓腹にくいこんだ紅色鮮かな新禪がよく似合い、如何にも女関取

のような顔付きです。私は筋が固いので、蹲居で両膝を一直線に開くなどは、とても出来る芸当ではありませんから、トイレ方式でごまかしますが、こんな大年増の女相撲に負けるものか、と斗志を燃やし、夫婦ということをお忘れようとつとめます。

「あなた、組打ち相撲でもいいわよ」

突然にお艶がいました。私を見下ろすような目が笑っています。

「こいつめ、思い上がってるナ」

と、私は頭に來ました。

「ギューギュー言わしてやるから覚悟しろ」

「さあ、言うのは、どちらでしょう」

「文句は抜きだ。こい！」

二人は仕切りに入り、ジリジリと近寄っておでこ、おでこをつけました。新取組の仕切りです。三白眼のお艶の目が私の鼻の先で睨んでいます。私は、こいつめ！ と思ってグイとおでこに力を入れましたが、体は柔らかいくせに、お艶のおでこは予想以上の石頭で、私の方が痛くて思わず力を抜いた途端、「キョオッ」と変な掛け声をかけて立ち上がったお艶。

ハッと思い、つられて立った私はずうんとこたえるような柔らかいながら凄腕の威力を秘めた重量物みたいなお艶の体当りを喰って、すっとびそうになったが、とっさに両手でお艶の髪を握って辛じてこらえた。これは禁手

外の取り決めだから卑怯ではない。

だが、お艶もさすがなもので、私にむしゃぶりつくようにして、ぐいぐい押してくる。私は反り身になりながら、右腕をお艶の首に巻きかえて、左手で握った髪と共に投げ倒そうとする。だが巨大な軟体怪物の如きお艶の腰はどっしりと重く、ゆらぎはするが、とても倒れそうにはない。

「クソ！」と私が更に力をこめようとした時、凄腕逆襲に見舞われて圧し潰されてしまった。まるで山崩れに遭遇した思いである。新しい禪が、お艶の双差しでの引きつけを容易にしたらしい。

だが、倒れても負けではない組打ち相撲の有難さに、私は必死で、ノシかかっているお艶から逃れようとした。

お艶はお艶で、この優勢に乗じて馬乗りになろうとしている。私は咄嗟にお艶の足を両足で挟みつけ、下からお艶の顎を狙って咽喉輪で突き上げてやった。

「ウッ」というような声と共に、軟体重量物が反り返る。

その機を外さず、私は腰を捻った。お艶がグラリと横倒しになった。形勢一転、私がお艶に馬乗りになれた。両手で肩口を、ぐいぐい押しつけてやる。

「ど、どうだ。マ、マイ、ツタ、カ」
息が切れて、すらうとは言えない。目の下

のお艶の顔が真紅になった。

「ま……まだよッ！」

と言ったかと思うと、押し敷いているはずの私の体がぐぐぐと持ち上がった。そして次の瞬間には、お艶の頭越しに、私は蒲団土俵に落とされていた。

お艶が、全身を反り橋にして私を跳ね上げたのだ。恐るべき力だ。

「しまった」と思ったがもう遅かった。ぐっと思が詰まるような重量の圧迫を受けて私は思わず噎っていた。

○

それからの懸命の撥ね返し策は、総て徒勞に終わりました。へとへとになった私のマイツタという合図を尻に受けてから、ようやくお艶は、私を押し潰す十七貫五百を引揚げてくれましたが、堂々と立ちあがって見降ろす腰から、紅色の禪が今にも落ちそうに緩んで垂れ下がっていました。

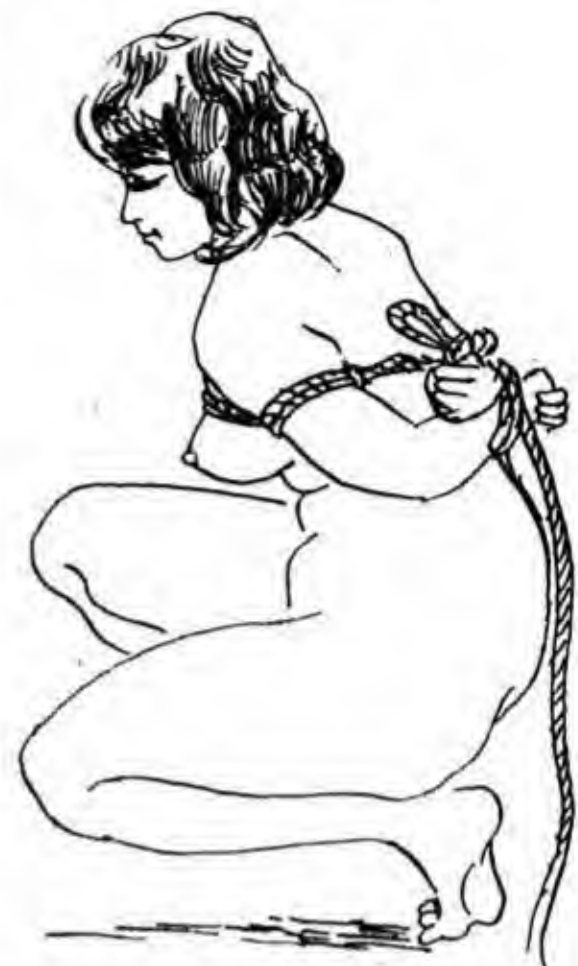
「アラッ」

それに気付いて、急いでたくし上げたお艶は、さも羞かしそうに、はにかみながら、

「お風呂の支度をしなくっちゃあ」

と言い、急いで部屋を出て行きました。そのクリクリ動くお尻を見送りながら、私はつくづく我身の倅せを噛みしめるのでした。

——(終)——



カット・須坂 旭

被虐の旅シリーズ……………

赤
い
森

由利美千子

「ジョン、帰りましょう」

私はジョンを促した。

誰もいない深い森の中に、二人でいることが恐かった。

ジョンは私を抱き、唇を求めた。

ジョンのたくましい腕の中におさえこまれ、私は小鳥のようなものだった。

葉山も日本人にしては背も高かったし、がっちりした体格をしていたが、見上げるように大きいジョンとくらべれば、やはり華奢だった。

ジョンの大きさは私にとって、私自身が囚われ人という、イメージを与えてくれるのに

充分だった。ジョンに強く抱かれると、骨がくだけるような気がする。その痛さが、ころよいのだ。

しかし、接吻以上に進むのには、ためらいがあった。

葉山はまだ、私を処女だと思っているようだが、私がそうではないということは前にも書いた。

木に縛りつけたジョンと唇を重ねた時から私の体の中の「おんな」は、急速に目覚めていた。

縄をといて、ジョンが自由になる手で私を抱いた時、その場へおし倒されるのではない

かと、ふと思った。

それは不安でもあり、いいようなない期待でもあった。

ジョンも一瞬の誘惑を感じたのだろう。

いきなり手をはなすと、

「僕を打って」

と言った。

それはジョンの、いつもの求め方よりも激しいものだった。

「僕は何をするかわからない。縛って……打って……」

ジョンは手首を重ねて私の前に出した。「でも……人がくるわ」

私はこの森の中に、他の人たちが散策しているのが気になった。

さつき、車で来て、他の道へ入っていった人たちの足音さえ聞こえない広い森だが、シンとした中に鞭の音は、ひびくだろう。

「あなたの叔母さんのお家へ帰りましょう」

私は大きな坊やをなだめるように、車をおいた所へジョンをつれてきた。

私自身、この森に別れをつげるのは心残りだった。

ジョンと二人で生まれたままの姿になり、大きな木にかこまれた湿った土の上で、お互いにお互いの体を縛りあって、その縄を相手の体にかけて引きよせて、二人が一つ棒のようになり、ぐるぐる巻きになってみたかった。

そして、切り落とされた木のように、土の上にころがっていられたら、どんなに、いい気持ちだろう。

車の傍で振りかえり、私は名残惜しい気持ちで森を眺めた。

ジョンも又、だまって立っていた。

さつき来た人たちの車が、私たちの車のそばに、おいてあった。

森の中で車をおける広い場所は、そこだけらしい。他に車がない所を見ると、さつきの

人たちが帰ってしまえば、又二人きりになれるのだ。

「もう少し、此处にしよう」

ジョンが言った。私の気持ちが反映したのだろう。

私は、うなずいた。

二度とくることのない森なのだ。

アメリカへは又、何かの観光団体に参加すればこられるだろう。しかし、短い日程の中に入れられるコースでもないし、一般の観光客に喜ばれるかどうか知らないこの森を訪れる機会があるとは思えなかった。

景色が、いいというわけではない。

流れもない。

ただ大きな、大きな木の間に、いくつかの歩きやすい小みちが走っている森……。その小みちが整っているのは人工なのだが、人工的なものを何も感じさせない。そのくせ、林ではない。森とより、いいようがない深さをもっている。

私は、いつまでもこの自然の中に、いたかった。

「まだ時間は充分にある。もう一度、散歩しよう」

ジョンが言った。

私はその誘いに、もう反対することは出来なかった。

もう一台の車の人は、どこへ行ったのか、人影はなかった。

「手を縛って……」

ジョンはもう一度、私の前に両方の手首を重ねて出した。

「私の手も縛って……」

私も同じようにしてジョンの前へ手を出した。

ジョンは笑った。私も笑った。

それが二人の心を、とかしてくれた。

「ジャンケンを知ってる？」

私はジョンにきいた。

彼は知らないと言った。

私は紙が石に勝ち、石がハサミに勝ち、ハサミが紙に勝つことを教えた。

「ジャンケンポン」

彼は無器用に握りこぶしを出した。

紙の私が勝った。

「さあ、ジョンが私を縛るのよ」

私は言った。

本当は、勝った方が相手を縛るのが自然なのだろうが、私たちは、その反対だった。お互いに縛られたいと思っているのだから困っ

たものだ。

ジョンは私の手首をくくると、長い縄のさきを、自分で自分の手首に、ぐるぐるとまきつけて、歯を使って自分の両手を一つに、くくってしまった。

私たちは、二人とも囚人のように縄で、つながれてしまったのだ。

ジョンは自由のきく指で、つまむように紙袋をもつと、

「さあ、行こう」と歩き出した。

紙袋の中には、まだ別の縄が入っている。それを持って、もう一度、森の中へ入ろうというジョンの目が、いたずらっ子のように輝いていた。

「早く」

ジョンは、かけ出した。

手首をつながれているから、私もかけ出すより仕方ない。

ジョンの足の早さについて行くのは私にとって苦しいことだった。

よく西部劇映画などに、手首を縛られて、馬に乗った男にその縄尻をとられ、必死にかけても馬の速さにおよばないと、そのまま、土の上を引ずりまわされる拷問シーンが出て

くるが、それに似ていた。

ジョンの足に私の足が追いつかないのに、手首を強く引かれると、足もとが、あやうくなる。

「止まって……止まって……」

私は叫んだ。

息が切れて、胸が痛い。

ジョンは、かまわず走る。

縄はピンと張って、私の手首は、ちぎれそうだった。

「あっ」

と私は膝をついた。

ずるずると、私は土の上を引きずられた。

私は立ち上がれなかった。かえって反対に両足とも地面に長くのばしてしまった。

ジョンは立ち止まった。

そして私の所まで戻ってくると、ジョンと私の間に、たるんでいる縄を自分の体に一卷きした。私たちの間は、せばまった。

しかし、又しても、人声が聞こえた。

ジョンは折角、一卷きした縄を、もとに戻すと、私をおこし、路のかたわらの木の下へ私を横にして、その上へおおいかがさった。縛ってある手首は、お互いの体のあいだでかくれた。

私たちは、そのまま、じっとしていた。

やがて人声が遠去かり、エンジンの音がして、車も去っていった。

「お互いに、お互いを縛りましょう」

私は言った。

「又、ジャンケンをするのよ」

手首はくくってあっても、手の先で、グー

チョキ、パーは出来るのだ。

私はもう一度、石がグーで、紙がパーで、ハサミがチョキであることを教えた。

今度はジョンが勝った。

私は自由になる指で、紙袋の中から縄をとり出すと、ジョンの首にかけて手首と結びあわせた。

「ジャンケンポン」

又、ジョンが勝った。

私は彼の胸に、ぐるぐると縄をかけた。

紙袋の中には細いのや太いのや、縄が何本も入っていた。

私たちはジャンケンを続けた。

今度は私が勝った。

ジョンは私の足首を一つに、くくった。首も胸も縄がかかっているの、不自由そうに体を折りまげて、指さきと歯を使って、その仕事を終わった。

次に私が負けると、私は縄をとるのに足を動かせなかった。私はピョンピョンと、とんで縄をとり、同じように彼の足首を一つに結んだ。

ジョンが負けると、彼がピョンピョンと、とばなければならない。

私たちは、自分の姿を鏡にうつして満足するように、ジャンケンに勝ったびに縄をまわっていく、相手の姿に満足した。相手をつ縛ることよりも、縛られることに快さを感じる私たちは、こういう方法で、お互いに満足しあわなければならないかった。

首も胸も二の腕も胴も足も、ありったけの縄がまかれた。だんだんに体が固定すると、たとえば指が動いても、相手をつ縛るのが、むずかしくなった。それは無理に、むずかしいことを、しいられる被虐に通じた。

縄が、なくなった。

「もっと……」

いじめてほしいという意味なのだろう。私には、わからない単語を使い、ねだるような表情でジョンが言った。

私はジョンの背を大きな木におしつけた。そして、指さきでジョンの胸もとをゆるめてその乳首を歯でかんだ。

「あ、あ……」

ジョンは悲鳴をあげた。

ジョンは体を硬直させ痛さを耐えている。

私は乳首から唇をはなすと、吸血鬼が、のどをかむように爪先立って、彼の咽喉の下の方に噛みついた。

「ううつ……」

ジョンは咽喉の皮膚をいっぱいにのばしてうめいた。

私は咽喉から胸へ順に歯をあてて、又片一方の乳首を噛んだ。ジョンの胸毛が、くすぐったかった。

私がジョンの胸から顔をはなすと、今度はジョンが私を押した。

私は、うしろへさがっていった。

ジョンが私の背を押しつけたのは、太い木の中でも細い方だった。

ジョンは私を木の前に立たせると、自分はその木のまわりを、ピョンピョンととんで、一まわりした。私とジョンをつないでいた縄のゆとりが縮まった。

ジョンが、もう一とまわりすると、私は木にくくりつけられたと同じになり、身動きが出来なくなった。そしてジョンも又、私とつながっている以上、木に結ばれたのと一緒にだ

った。

ジョンは自分がされたように、私におおいかぶさって口づけした。

口づけされる方は縄をまとい木にくくりつけられ、口づけする方も又、体中を縄で縛られていたのだ。人が見たら、さぞかし奇妙な光景だったろう。

そして唇をはなすとジョンは私の咽喉を吸い、胸を吸った。赤いバラの花をおしつぶしたようなあとが、私の咽喉にも胸にも、肩にも散った。

私たちは時のたつのも忘れて、レッドウッドの一本のレッドツリーと化したように動かなかった。

レッドツリーの森なのでレッドウッドというのだろうが、赤い森という名にふさわしい奇妙な抱擁だった。

深い森の中は真昼間でも薄暗かった。

私は漸く時間が気になり出した。

夕方までに、ホテルへ帰らなければならぬ。この森からサンフランシスコまで二時間位、かかるのではないだろうか――。

私たちに、あしたという日はなかった。サンフランシスコに滞在できるのは、二日

間だけなのだ。

私たちは、それを思うと悲しかった。

だまってお互いの縄をほどいた。木の香りが胸をつまらせた。この森のこの木への愛着が胸をしめつけた。

葉山と旅をしても、これ程、旅先の土地をいとしいと思ったことはない。

遠い外国のせいだろうか。

再び来られないという感傷なのだろうか。

黙々と縄を紙袋にしまった。

ジョンが自由になった手で私を抱いた時、私は、その広い胸を涙でぬらしてしまった。

いじめられることの好きな二人……。

相いれられない二人なのに、一つの木に結ばれて、心まで結び合ってしまったのだろうか。

しかし、別れなければならぬのだ。これは、ただ旅さきの遊びだったのだ。

車は、もと来た道を走って行った。

疲れと悲しさに言葉もなかった。

ジョンはそれを、まぎらすように歌を唄い出した。

きれぎれにわかる英語の歌は、別れた恋人をしのぶ歌だった。悲しさは増すばかりだった。

(今夜、葉山を、すつぽかそうか)

私は、ふと思った。

葉山とサンフランシスコで、もう一と晩、あかすことになっている。ジョンには団体で来た仲間と夕食を共にしなければならぬと言っているのだが、夕食の時間までに、葉山のいるホテルへ行くつもりだった。

(おそくいけばいい)

私は思った。それをジョンも考えたのか、

「もう一度、一緒に夕食を食べようよ。友達に、ことわりの電話をしたら、どうだろう」と彼は言った。

「とにかく、あなたの叔母さんのおうちへ戻りましょう」

私の言葉に、彼は急に明るい笑顔になって目を輝かした。

私も又、心が軽くなった。

(ジョンの叔母さんの所から、葉山のホテルへ電話すればいい)

そう思った。死刑執行の時間がのびたような気持ちだった。もう、ジョンと二人きりで、一軒の家の中にいることが気にならなくなっていた。

叔母さんの家へついたのは、夕方の五時だった。急げば、夕食までにサンフランシスコ

へ充分、行けるだろう。しかし私は電話をとった。

葉山はホテルに帰っていた。私の電話を待っていたのだろう。

「一緒に来た人の、御親戚のお家へ来ているの。どうしても夕食を食べていくようにといわれているの。私ひとりではサンフランシスコまで帰れないの、御親戚の方の車で此処へ来たので……」

私は又、嘘をついた。葉山に本当のことは話せなかった。

「そこは、どこなんだ？ 迎えに行ってもいいよ」

葉山は言った。車はどこでも借りられる。

彼は、このあたりの地理にも通じているだろう。

「でも、そうすると友達も一緒に帰るっていわね。それでは悪いもの」

「大丈夫だよ。日本と違って、そういう点、ドライに処理、出来るよ」

「でも、ここがどこなのか説明出来ないし、折角の好意をはずすようで悪いし……」

「君がそんなにいたいなら、いればいいじゃないか」

葉山は多少、ムツとしていた。

僕のイメージ画集『畜 害 防 止』 室井亜砂路

飼犬にはクツワをつけて…

犬の害がふえて
います。飼犬には
くつわを使用して
飼いましょう。



Asajie



(いつそ、迎えに来てもらって帰ろうか)
私は迷った。

しかし、葉山とは、まだ日本へ帰っても会えるのだ。ジョンとは、これ限り会えなくなる。ジョンが私と一緒に食事出来るのを、どんなに喜んでいるかを思うと、それをふり切

って帰ることは出来なかった。

私は夜おそくとも、葉山のいるホテルへ帰ることを約束して電話を切った。

嘘をつくことの苦しさに、背中が汗ばむ思いで受話器をおくと、傍にジョンが、むずかしい顔で立っていた。

「ボーイフレンドに電話したのか？」

ジョンが、きいた。

「いいえ」

私は言ったが、日本語のわからないジョンが何かを感じたのだろう。

「キミはウソをついている」

それは電話の内容でウソをついたというのか、ボーイフレンドへかけたかときかれて、いいえといったのがウソだというのか、どっちの意味かわからなかった。

「ボクはウソは、きらいだ」

ジョンにそういわれても、私の乏しい英語で、どうして葉山とのかを説明出来るだろう。

葉山は恋人でも夫でもなかった。ボーイフレンドというにはあまりに深い交際だった。しかし、肉体的に通じ合ってはいないのだ。友達といえば友達だった。縄で結ばれた友達——。それはジョンも同じことだった。ただ今日という日はジョンに、よけいウェイトがかかっているといえるだろう。

しかし、いつになくジョンは、高圧的だった。嫉妬が彼の「おとこ」を、よびさましたのだろうか。

「ウソかウソでないか、話してもらおう」

そういうとジョンは、私の上着をはぎとるように、ぬがした。そして、私の腕をうしろへねじると、うしろ手に縛ってしまった。私の抵抗なんかジョンの大きな手と腕の中では何の役にも立たなかった。

「そこへ立つんだ」

ジョンは叔母さんの居間にある瘦身機の前へ私を立たせると、ベルトを私の胸にあてて電気を入れた。

「あっ……ああ……」

私は身を、よじった。

ベルトはブルブルと振動して、私の乳房をこすった。

私はベルトから離れようとした。

しかし、ジョンは私の肩をつかんでいた。

大きなてのひらでつかまれて、私は動けなかった。

ブルブルブル……

ベルトは震動する。

「ああ……ああ……」

私は絶え入りそうな声を出した。

「ウソをついたね」

ジョンは言った。

「ベルトをとめて」

私は、それに答えずに、ジョンに言った。

乳房と乳首を強烈に摩擦されて、私は正常に息が出来なかった。

「これは叔母が痩せるためと、肩こりをほぐすために使っているんだ。こんな使い方をしたと言ったら、さぞ怒るだろう」

彼は笑って言うが、私は笑うところではない。

こんな大きなバイブレーターで責められたのは、はじめてだった。

「かんにんして」

私は訴えた。

「とめて……」

彼はスイッチを切ってくれた。

私は大きな息をついた。

しかし次の瞬間、彼はスイッチを入れた。

「あっ、ああ！」

私は思わず大きな声を出した。

ブルブルブル……

「ああ、ああっ！」

私は、つつしみも忘れ、悲鳴をあげた。

手は後手に縛られ、ジョンの大きな手でお

さえられ、ベルトにかけられている。

それは陶酔に似た快感だった。しかも終点のない快感は体中の血を、さわがせた。

ジョンはスイッチを、とめた。

そして、ベルトの位置を動かしていたが、私の足をつかんでベルトをまたがせた。私はベルトで宙吊りにされるように足を浮かしたが、やっと爪先を立てて、こらえた。

ジョンはスイッチを入れた。

私は立ったまま、体の中心にベルトの振動を受けた。

「あふう……」

奇妙な声が私の唇から洩れた。

ブルブルブル……

振動音にまじって私の切ない声が天井へ消える。

しかし、終点へ到達しない前に彼はスイッチを、とめた。

今度は又、胸だった。

「ああ……」

私は、もうすまいと思っても声をもらし、時には悲鳴をあげ、彼の手の下で体をくねらせた。

彼は、もう完全に、虫をいじめる少年になっていた。

乳房を摩擦されて燃えた体は、さらにパンティ越しにしろ刺戟を与えられ、息もたえだえになるのに又、途中でとめられ、再び乳房を摩擦され、立ってられないほど、くたく

たなのに体をなげ出すことも出来なかった。
ジョンの大きな手で、ベルトの中を、あっちこっちに向けられた。

乳房だけではなかった。胴も腰もベルトにあてられた。

この近代的な瘦身機は拷問の道具と一緒にだった。

アメリカのゆとりのある生活が、ひとりずまいの婦人の健康維持に、こういうものを用意させているのだろうか、それが、はからずも責め道具になってしまったのだ。

「かんにん」

私は英語と日本語と、ちゃんぽんに使ってジョンに、たのんだ。

ジョンが、やっと私を居間の椅子に坐らせてくれた時、私は自分の体がボロボロに崩れるような気がした。

「さあ、話して……」

ジョンは言った。

「誰に電話をかけたのか、どういう友達なのかボクに話して……」

そういうジョンに、私は葉山のことを話した。

拙い英語で、どこまでジョンに通じたかわからないが、一生懸命、話した。

「私はジョンに会う前は、葉山だけ好きだった。でも、私は悪い女なのだろうか、今はジョンが好きだ。だから、ジョンと夕食を食べ

るために葉山との約束をこわった。でも、葉山と今晚、会う約束なのだ。けれど、それは恋人としてではない。友達としてなのだ。でも、それまで、ことわることは出来なかった。私はジョンを好きだけれど、葉山も又、好きなのだ。私は私自身、自分の心が理解出来ない」

そんなことを私はジョンに言った。

「その人に紹介して下さい」

ジョンは言った。

「三人で話をしよう」

「でも……そんな……」

私は、いったい葉山にジョンを何とって紹介したらいいのだろう。

外国人でも、年が若いせいか、ジョンには自分の気持ちを素直に言えた。

しかし、葉山にも同じようにいえるだろうか。

自分のまいたタネなのだ。自分で、からなければならぬ。

しかし、葉山の嫉妬とジョンの嫉妬が、ぶつかったら、何が起るだろう。

私は予測の出来ない会合を、あえてしなければならぬ所へ追いつめられてしまった。

——(この稿おわり)——

「伝言板」

○分譲品録目録は作成が大変遅延しておりますが出来次第発送申し上げます。尚、今暫くお待ち下さるようお願いいたします。○フォトのお申込みは、大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社内箕田京二宛に願います。○御送金は、現金書留、小為替、振替(切手代用は一割増)にてお願いいたします。普通郵便に現金の封入は違法です故、現金の場合は必ず現金書留(封筒は郵便局で売っています)にて御送金下さい。○既

刊の臨時増刊号「花と蛇」第一回分(前篇写真と絵画特集)第二回分(続篇小説絵画特集)第三回分(前篇続篇収録小説特集)のいずれも売切れにて在庫がありません。○旧号に広告してありまして最近号に掲載してないものは在庫のないものがありますので、旧号に依ってのご注文は一応在庫の有無を御照会下さい。○雑誌の予約とお申込は大阪住吉局私書箱第四十一号晩出版株式会社へ願います。



—うれしい新聞記事—

アブ的受感

虹丸虹吉

男はたかだかヤグラの上?!

——「男がエライに決まってる」「何言ってるのよ女が上」——と若い男女の口論。ちやうどはっしとやり合っているうちに、なぐり合いにまでエスカレート。「一千万人の夕涼み」と銘打った上野の納涼大会。ミツのように甘いささやきが充満している場所柄だけに、ワツと人だかり。

事の起こりといえば、納涼大会の盆踊りの舞台。花やいだユカタ姿のお嬢さんがそろいの手踊り——と見上げてみると、あにはからんや、舞台の上は角帯の若い衆ばかり。そこで、見上げていた二十五、六歳の会社員ふう

の男がわが意を得たりとばかり「何をやらせても、男は上手だね。女と比べものにならない」とニンマリ。ところが、このつぶやきを聞いた後ろのお嬢さんが腹を立てた。「女が強くなったんで、仕方なく踊りなんかやるのヨ」

かくして実力行使にまでおよんだのだが、人だかりが出来る、男の方はいかにもきまり悪そうに「もういいよ。女の方が上だよ」と手をひっこめて、すぐ退散。お嬢さんの方は「なによ男のクセに」二百人も集まった「観衆」のド真ん中でミニスカートについたドロを払って、胸を張って、ご退場。見事

上位を実証していた。

(毎日、「赤でんわ」、8月4日)

こういう記事、つまり女上位記事も昨今全くポピュラーになってしまい、無理やり探がし出そうとしないでも、容易にお目にかかれるようになった。となると、大したシゲキも感じなくなるのだが、この記事は納涼大会、盆踊りの舞台というところが面白い。もっとも、もの足りないのは、胸を張ってご退場の前に、勿論舞台上に登場。負けた罰に男の方が、馬になりやがれ、だなんて足でこづかれて、舞台では今や人間馬風景現出となる。ヤンヤの喝采をあげ、三味線の音に合わせて舞台上では男の馬が勝ち誇った女性をのっけてヨタヨタぐるぐる這いまわる。かくて盆踊りがどこかへ行っちゃった、という楽しくアブな納涼大会となった。なんていうのだったらと思った。少なくとも、こんなM小説が存在したら、とっても楽しいのでは?

○

ニクソン頭越し外交なる事件は、ショッキングの上に日本人にとってM的、マンガ的であるから、当分、冗談のうまい方々により頻発することだろうが、早速、Mシンブン「まっぴら君」(5786)なるマンガに登場。

海水浴場で男女の若者が、頭と足だけ出して
いるおっちゃんの頭ごしに接近。いちゃい
ちゃやり出したあげく、顔を、椅子にしちま
った。腰かけられたおっちゃんの「無礼者、い
いかげんにさらせ!!」というセリフが入っ
ている。有名マンガ家だけあって、海水浴を利
用したところなど感心の他ないが、本当に残
念なのは、顔の上に尻をのつけたのが男にな
っていることで、秀抜なアイデアが台なしに
なっている。書くまでもないが、これは女性
の尻でなければ余りシゲキ的ではない。もっ
とも外人なら別であるが。

○

俠客切腹

『四日市の資産家で市会議員の三原啓光氏は
上京中地震に遭ひ生死不明と伝へられてゐた
が、名古屋の俠客青山市太郎（五十一）はき
っと旦那を東京からつれ歸るとして三日朝上京
して搜索の末遂に手掛りなく高崎まで引揚げ
て来たがこの儘おめおめ歸られぬと宿屋で六
日未明小刀で腹を切り重傷に呻いている。一
方三原氏は東京を脱出して既に帰宅してゐた
ので此の報に接し九日店員を見舞に送った』

（大正十二年九月十二日、大毎）

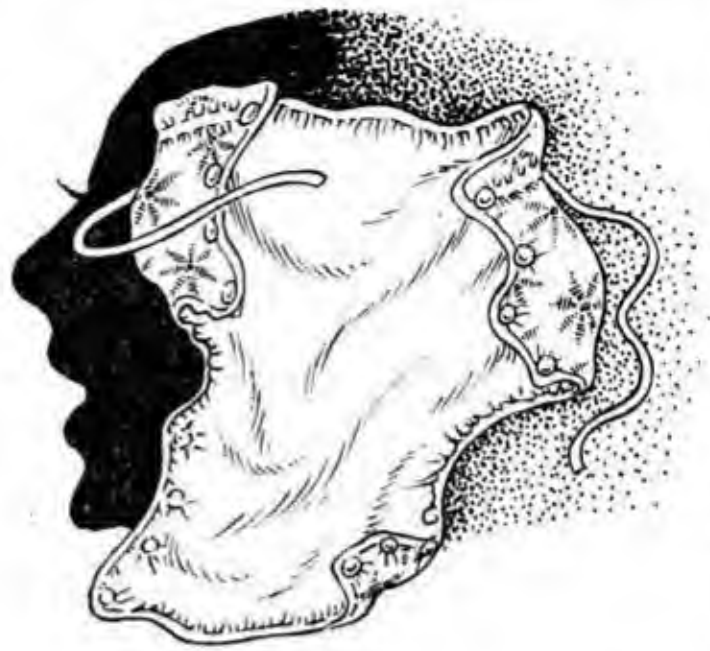
日本人の歴史的恥部、つまり、日本のアジ

ア侵略によつてもたらされたアジア人虐殺虐
待の摘発記事は、最近漸く見られつつあり、
中でも「潮」という月刊誌が連続して特集を
組んでいるが、全くショックである。（その
7月号「大陸中国での日本人の犯罪—百人の
証言と告白」のショックなことは生き埋め、
妊婦の腹さき、首狩り等々、ナチス顔まけの
あらゆる残酷ぶりが語られ、おまけにそうし
たシーンの写真まで二、三挿入されているこ
とで、よくもまあ、このような日本の恥部で
もある陰惨残酷な場面をカメラにおさめて、
大切に所有している日本人が相当数存在した
と驚く他ないし、みにくい日本人ぶりにあき
れる位である—陰部バクロ症的(?)—その
9月号は「朝鮮人に対する虐待と差別」で、
どうひいき目にみても日本人が世界屈指の残
虐性を持った民族では? という何とも情な
い事実を半ば確認したような感じにうたれた
ことではあるが、ここには、大正十二年九月
一日の震災時のあのおぞましい鮮人虐殺の実
録が記されている。

そこで当時の新聞からそういった記事を探
し求めようと、汚い古新聞のほりにまみれ
ながら苦心したものだったが、散逸紙も多く
記事差しとめも厳しかったとみえ（朝鮮人来

襲のデマ宣伝の元凶は当時の内務大臣及び警
視總監等で、全国の新聞はまことしやかにデ
マを書いた筈であるが）所々に「不逞」なる
活字が散見されるくらいで殆ど徒労に終わっ
た私で、一寸ばかり目をひいたのが、上述の
俠客の切腹位のものだったという次第。尚前
述の「潮」9月号にも、三・一運動時の日本
軍隊による民族主義者弾圧、虐殺のグラビア
という珍しい写真が生々しくのっけていて、首
狩り族の如く斬首、みせしめに首をさらした
ものなどで、ヤパン酸鼻残酷、まるで江戸刑
罰史中のスチルみたいに錯覚されるほど。

何ともこっけいなのは、日本人将兵の何と
卑小哀れをもよおすことで、体軀、つらがま
え共に朝鮮民族の方が遥かに立派であること
である。毛唐のサルまねよろしくアジア侵略
をはじめ、毛唐になっちまったような錯覚で
もおぼえたのか、同じ黄色人を弾圧惨殺した
日本人のバカバカしさ、こっけいさ以上の何
ものでもないところを端的に示したものとし
て、特筆すべき写真であろう。言葉をかえて
いえば、まぎれもなく白人への劣等感、そし
て、マゾヒズムは、我々日本人の大多数に、
少なくとも潜在的には内在していると思
えない、好い見本ともいえようか?



(一) ま え が き

オムツマニアなるものを最初に発見したのは、多分「奇ク」であると思われるが、マニアの成立過程については、まだ暗中模索の段階にあるのではなからうか。

告白の件数は決して少なくないようだが、成立の過程まで明るみに出るほど赤裸々な告白というのは極めて少ないだろうと思う。これは、投稿者の表現力の問題でなくて、自分を真のマニアと認めることを怖れるからに違いない。

——マニアの成立を考える——

オムツの残像と

安堵の感覚

岩 手 信 夫

ひとところ「羞恥」が論じられた。大人のくせに、赤ちゃんのようなことをする、恥かしさに悶える心理的マゾヒズムが、その本質であると考えられたのである。しかし、この考え方は、無理やりに当てがう場合にしか通用しなかった。したがって、自分から求めるマニアの心理を説明することはできなかった。次に登場したのが「幼児願望」説である。これは、オムツをしてもらいたいマニアの気持を適確に表現しているので、これこそマニアの心理であると思われた。しかし、これにも無理があった。そもそも「幼児願望」なる

ものは、大人が心理的危機に遭遇したときに示す、幼稚な行動を説明するために想定された、仮想の願望であって、正常な精神状態のときに自覚できる願望ではない。オムツマニアであるために必要な工夫や配慮は重い精神的負担になるが、この負担を甘んじて受ける態度は、幼児の心理とは正反対の前向き姿勢である。あらゆる困難とたたかってまでもオムツを使おうとする積極的姿勢は、大人にとって敗北を意味する幼児的精神への退行願望では、全く説明できない。

最近、かつての「幼児願望」説の提唱者に

よって新たに提唱された「甘え」の願望は、オムツマニアの心理にかなり接近していると思われる。「甘え」の説の重要な点は、日本の社会において「甘え」が対人関係の理想の原理になっている点である。甘えの説によると、少なくとも、男子が女子にオムツの世話を受けることが夫婦間でも成り立つことになる。日本男子の本懐は、男女平等でもなく女性上位でもなく、妻に甘えるという形での絶対的男性上位である。昨年12月号の井上俊彦氏の提唱した「おむつ愛」は、対人関係が甘えで成り立つ日本の社会では、おむつを實際に使うか否かは別として、基本的な考え方として共感を呼ぶに違いない。

甘えの説は、方向としては誤っていないが難点もある。それは、対人関係のなかでのオムツは説明できるが、孤独の状態でのオムツマニアの心理は説明できない。井上氏は孤独の状態でのオムツを自己愛として退けているが、現実には、当の井上氏を含めてオムツマニアは孤独の状態でもオムツを使用し、それで少なからず満足を得ている。この事実がある限り、甘えの説は決め手とならず、何らかの修正が早晚、要求されるであろう。「甘え」と両立し、しかも孤独な状態で強く

感じられる情緒的感覚は「安堵」である。甘えは、対人関係の場に安堵をもたらすことで実感となる。安堵を対人関係の場に確保するための原理が「甘え」である。対人関係の理想を「甘え」とする日本の社会の成員である個人の精神の理想は「安堵」である。甘えは個人に安堵をもたらし、安堵は甘えを可能にする。個人の存在感とは「安堵」の情緒の強さに比例する。丁度、対人関係の親密さが「甘え」の度合に比例するように。

オムツマニアの心理を「安堵」で説明できたとすると、オムツを自分で当てるマニアにも、当ててもらうマニアにも同じ原理が適用できることになる。甘えが日本特有の原理であることは、安堵もまた日本特有の価値を持つ原理であることにはかならず、これでオムツマニアの心理を説明することは、オムツマニアが日本特有であることを暗黙に主張することにはかならない。日本人は、精神の中心にあたる核の部分に安堵が無いと生きられない民族であるから、日本的と考えられているマニアのなかには「安堵」を求めるものがある。これも不思議ではない。

日本的なマニアのなかでも特に癡マニアは注目に価する。このマニアの心理を性的快感

だけで説明することは無理である。たとえば、癡によって性的に反応することが常であったとしても、それは癡に特有のこととは考えられないからである。このマニアの心理は、これらの告白を念入りに調べて行くと、まさに「安堵」であることがわかる。

オムツマニアの心理も癡マニアの心理も安堵であるとなると、両者は情緒的に共通点を持つことになる。癡マニアについて言えることの多くがそのままオムツマニアについても言えることになる。このことは、オムツマニアの生き方を模索するのに大いに有用な示唆を与える。なぜならば、癡マニアの場合は、過去に多くの心理的告白の蓄積があるからである。

私は本稿で「オムツの残像」の存在を仮定し、それに日本人の伝統的心理を投影することでオムツマニアと癡マニアを説明しようとして試みる。論拠としては、本誌の旧号を主として引用しているが、他にも参考にした文献は少なくない。

結論を要約すると、癡マニアは癡を単に愛好しているのではなく、癡にすっかり魂を奪われている。それは狂気であり、病的であり遊びの要素は少しも無く、息詰まるほどの切

実さである。「褌が無ければ生きられない」と、かれらは、幼児が泣き叫ぶように告白する。しかも、かれらはそうであることに満足している。このような褌マニアとくらべてオムツマニアは今のところ影のうすい存在であるが、しかしそれは褌のようになる可能性がある。

(二) オムツの残像

我々の精神の無意識の部分には生存のための重要な欲求が本能として遺伝的に組み込まれている。さらに脳が完成するまでの体験も組み込まれる。これらは一体になって人間の精神をつかさどる魂を作っている。いわゆる「三つ子の魂百まで」と言う時の魂である。三歳までの体験は記憶の対象としてでなく、記憶する主体である魂の方に、組み込まれている。

ここで論ずる「オムツの残像」は普通の意味の記憶でなくて、魂それ自体に組み込まれている「潜在的」記憶である。これは「潜在的」であるとともに「無定形」でもある。だからこの「残像」がオムツの懐しさとして具体的に意識される事は普通には有り得ない。具体化するには何らかの契機によって触発さ

れなければならない。もし、機会が無ければ一生そのまま気付かずに終わるであろう。

オムツの残像を実験的に確かめる方法は、オムツが皮膚に及ぼすのと類似の刺激を与えてみて、気分がどう変化するかを見る。オムツ類似の刺激の内容は、保温、緊縛、蒸れ、あるいは濡れ、巻いたり包んだりすることなどである。

たとえば腹巻と同じものを同じ様に胸に巻くと、全く異なる気分が現われる。胸では明らかに不快であり、恐怖さえ覚える。下腹部では保温と緊迫が明らかに安らぎを与える。この境界は大体において腹のくびれた部分にあり、それより下では腹巻が快く、それより上では不快になる。

また衣服が濡れたときの感じの違いも一つの証拠になる。濡れた靴下や濡れたシャツは極めて不快で、着けていられないが、濡れたパンツは何となく着けていられる。海水浴場などでの経験によると、パンツは、海に入らないでいる時も濡らしておいた方が何となく落ちつく。山などで雨に会ってしんまで濡れるとき、上半身と膝下が濡れた段階が最も耐え難いが、やがて雨水が回って尻まで濡れて来ると不快さは却って遠退く。このように、

濡れた布に対して快感とは言えないまでも、不快とは言い切れない特殊な感覚を生ずる範囲は、細かく調べてみると、膝の至近を除く太腿の大部分と下腹部と、それらの中間に位置する股間や尻の部分に局限されていることが判る。太腿の大部分がオムツの残像区域に含まれるのは何となく奇妙な感じがするが、それは、小さい頃の赤ん坊のオムツが実際にそのあたりまでを、おおっている事実から見て特に不思議ではない。

普通の人ではオムツの残像が時折の特殊な感覚の源泉となるだけでそれ以上には発展しない。ところが、ある種の人の場合はその特殊な感覚に強く引きつけられ、そして自分でそれを求めてその感覚を与えてくれそうな物を身に着ける。かくするうちに感受性が高まり、そして欲求が高まり、遂にはその物を手離せなくなってしまう。

オムツの体験は皮膚に残像として無定形に残るほか、わずかながら有形の記憶としても残る。この記憶は普通は否定的な形で強く意識され、たとえば、オムツの現場を直視したとき目をそらせる力となる。あるいは、大人にオムツを使わせようとする時の全く非合理的な遠慮や反撥の原因となる。夜尿症、それ

も年長者の場合で直る見込みが、さしあたり無い時はオムツを使えば良いと第三者は言うであろうが、当人や、相談を受けた人は何とか理くつをこねてオムツの害を力説したり、あるいはオムツのことなど全く思いつかないフリをするのが常である。このように、わずかながら具体的に存在する記憶が否定的な、しかも極めて強力に作用するのは、オムツを懐しむ態度——それはオムツ時代の、かなり早い時期に現われて次第に強まる——に対する体罰の恐怖を自己の精神のなかに取り込んでいるからと思われる。

オムツマニアの場合、オムツの残像による局所の快感は、右に述べた理由によるオムツ恐怖によって水をさされた形になる。ところが「マニア」と自称する手前「オムツが、こわい」と言うことはプライドが許さない。そこで、夜尿症の話を持ち出してオムツの危険性を客観的に説こうとする傾向を生ずる。

オムツの残像を積極的に発掘し、これを人生に意義あらしめるにあたって、オムツに対するしつけの後遺症とも言うべきオムツ恐怖は、精神的努力によって克服しなければならぬ。これを、羞恥心として美化することは本末転倒である。オムツの残像は、そのよう

な抑圧を取去って素直な気持ちで見つめたときに始めてその甘美な姿を現わすのである。

余談であるが、不幸にして身体を失って病人としてオムツの生活を余儀なくさせられた場合、人々がもっと素直であれば、どれほど、お互いに救われることだろう。

オムツの残像について語った禪マニアは次に引用する会津太氏である。

「わたしは禪が大好きだ。どんな動機で禪が好きになったのか覚えていない。生れた時から、もう好きであつたらしい。親ゆずりだろうか、それとも赤ん坊の時のオムツの懐しさからだろうか」

(昭和42年9月号「愛禪記」より)

会津氏は、オムツの懐しさを意識していたわけではないだろう。禪に病みつきになってからその原因をあれこれと思ひめぐらしているうちに気付いたのだと思う。禪好きが本能であることは有り得ない。そして物心ついてからの記憶には何も心当りが無い。とすれば赤ん坊時代の何かがその原因である。ここまで問い詰めて来れば禪に連想が及ぶのはオムツ以外に存在しない。意識の場ではオムツの懐しさが無くとも股のあたりの皮膚には残像がある。禪を締めたときに感ずる一種の安らぎ

を、会津氏はオムツの懐しさではないかと考えたに違いない。オムツの懐しさが、ふるさとの懐しさのように有形のものになるとは期待できないから、右のようなアイマイな表現でも十分にオムツの残像と禪の関係が立証されたと思ふなければならないだろう。

禪の恥かしさについては、喜多六好氏が、告白している。

「確かに、私と禪の関係は異常である。私は異常なまでに禪を好む反面、それを人に知られる事を異常なまでに恐れる。何故か私自身にも分からない。私はその理由を原因と過程から解明して見るつもりで一文を書いた事がある」(昭和41年12月号「禪履歴書」より)

喜多氏が書いた「一文」が、どうなっているかは知らないが、この恥かしさは明らかにオムツマニアが感じるそれと同じである。禪は締め方が悪いとオムツに見えろと言われているくらいオムツの連想が濃いのである。だからオムツ並みの恥かしさを覚えても、何ら不思議でない。

(三) 禪 と 腹 巻

禪は、それを用いて快感を得たり、それで遊ぶというような精神的余裕を許さないよう

だ。狂気と言うべきか帰依と言うべきか、表現は、いろいろ考えられるが、何やら切実なもの悲しいまでの切迫感がある。病的な執着と決め付けるのは簡単だが執着が余りに純粹無垢なので、そう断定してしまうと二の句が継げなくなる。禪マニアに対して、禪をほどほどにせよ、とは、とても忠告できない。そんな他人の忠告などが入り込む余地はどこにも見当たらない。禪マニアは禪に関する限り幼児と同じである。禪を取り上げられたら泣き出してしまいそうな勢いである。

本誌、昭和36年10月号の告白「ふんどし悦」の結びの一節に、衣軍一氏は次のように言い切っている。

「私にとって『ふんどし』をしない人生など考えられもしないし、もし『ふんどし』がしめられなくなったら死んだ方がましなくらいだ。『ふんどし』こそ私の生きがいであり、『ふんどし』をキリキリ締め上げる時、私は生きている喜びを感じ、この世に人と生れたことを神に感謝するのである」

このような告白を一人前の男が文章にして雑誌に発表するのは、マニアの種類多しといえども、禪マニアただひとりではないだろう。全く無防備な告白である。全く無邪気な

告白である。ふんどしを「対象」として見ていたら、こうは書けまい。ふんどしは明らかに自分自身と癒着してしまっている。この心理は、ある種のぬいぐるみ人形に幼児が魂を乗り移らせてしまうのと似ている。

さきに引用した会津氏は、同じ告白の結びの一節で次のように言っている。

「禪一本きりりとして、裸で大地をふまえてすくと立ったとき、生命の充実感が一杯にみなぎり『ふんどしや、よくぞ男に生れける』の感が深い。わたしには、かくして今や六尺禪は片時も肌身はなせぬものとなったのである」

表現が異なっているにもかかわらず衣軍一氏と会津太氏の心境は同じである。

さきに引用した喜多六好氏の告白の一節に次のような、くだりがある。

「此所は冬になると冷たい西風が強く、保健上からも禪は絶対に離せないものとなった。これをとると下痢や腹痛で調子が悪い」

氏の告白の引用しなかった部分を読むと、禪の保温効果が語られているところから、右の引用文中の保健上とは、保温のことであろうと思われる。しかし、実際問題として禪の保温効果は、大して期待できないから、右の

文中の下痢や腹痛は神経性と考えたい。

着けないと下痢や腹痛に悩まされる、と言えは普通は腹巻を思い出す。腹巻は保温のために着けるものであって、実際に保温作用もかなり大きい。腹巻には顕著な習慣性があった、子どもの寝冷えを予防しようとする配慮が往々にして腹巻無しでは生きられない体を作ってしまうことがある。普通なら快い涼風にも感じて腹の具合がおかしくなるので、最初は夜寝るときだけだったのが、遂には暑い日中も着けざるを得なくなる。これは、温度変化に対する抵抗力が弱くなったからと考えられる。

ところが、一つだけ解せないことがある。腹巻なしでは暮せない人が泳ぐとき腹巻をしているという話は聞いたことが無い。水中では、空気中とは比較にならない程冷えるのに何ともない。ここには、明らかに神経作用が強く働いている。とすると、腹巻の保温効果というものの、実体の全部と言わないまでも大きな部分が「気休め」であると言わなければなるまい。喜多氏が禪をしないと下痢や腹痛に悩まされるのは、気が休まらない心境がストレスとして、胃腸に反映するからであろう。

て、素肌に寝間着を着て寝るのだが、時には赤ふんや花模様のハデな色ものをして楽しむ時もある」

この告白は、禪と腹巻の起源が共通であることを暗示しているように思われる。両者はオツムの残像で不可分に結びついている。

四 存在の感覚としての安堵

禪マニアの告白には、若いころの模様が語られている。会津太氏は「愛禪記」（昭和42年9月号）で次のようにそれを表現している。

「わたしの青春は情熱のはけ口を常に禪に求めたし、時と場所をきらず、湧きあがる血潮も、禪があるというだけで何か安心できて心強く、サポーターとして、わたしには常にかかせないものとなった」

同じことを喜多六好氏は「禪履歴書」（昭和41年12月号）で次のように語っている。

「男になった証拠を禪の中で経験して以来、持て余したエネルギーを禪の中でなければ処理できない習慣になってしまった。その為、帯に白い斑点が出来るのが気掛りになった」この告白で「帯」とあるのは黒い帯を禪として、こっそり用いていたことを意味する。

禪は感じやすい少年を極度に刺戟する。禪

に取りつかれた少年が肉体の成熟を迎えたとき悩むのはこの点である。しかし禪にかぎらずすべての下着がこの年ごろの少年にとって欲情を誘い出す。禪が特に刺戟的であるのは事実であるが、ふとんの重みにさえ感じて放出してしまうほど敏感なこの時期の少年にとっては、どっちも同じことである。

親の目をぬすんで禪をする少年は、普通の下穿きの内部に禪をする。しかし禪をして学校に行くことはできないので、夜、ねるときに使う。こうすれば下穿きを変なもので濡らすことは防げるであろう。こうして禪は、オシメあるいは生理バンドの役を果し、それに基づく安堵の情緒をもたらすことになる。これは禪の本筋ではないが重要な事実である。

禪の境地にとって右のような性の直接的反応は雑念である。だから禪の味が真にわかるためには、禪に対して直接に身体が反応するのを抑えなければならない。これには若さの克服が必要である。青春はその意味で禪を本来の味で楽しめる時期とは言えない。この時期に告白を書いたとしても「ふんどし無しでは生きられない」とは絶対に書けないであろう。禪を締めることに性的快感があることは否定できないが、それが主体ではないこと

を、まず認識しておく必要がある。

フェチシズムだという説明は、少なくとも形の上では当を得ている。しかし、フェチシズムも今のところ、異性のものに執着するとは説明できても、異性と関係ない禪のようなものに対するフェチ心理を説明することはできない。フェチだとしてもそれは広い意味でそうなのであって、単純ではない。禪の感覚が、「それを楽しむ」のではなくて「それが無いと生きられない」ことに注目したい。これは他で代用できない感覚である。このような感覚は人間存在の基盤に関係がある。いわゆる「存在感」である。真の意味の「生きがい」は、自己の存在感の認識であり、俗に言われているように、「何かをすること味わうもの」ではない。何もしないでも生きがいには有り得る。禪マニアの語る生きがいはまさに、存在感の認識という形で状態を指すものになっている。

人間は自己の「存在感」を何を手掛かりとして感じるのだろうか。このあたりは民族の文化の差異が決定的な役割を演ずる分野である。西洋ならば多分、神とか、他の動物であろう。ところが日本では、神も他の動物、動物に限らず山川草木の類までが人間と同じ

読者ギャラリー 『闘 志』 雄松比良彦



側に立っていて、これらと対比して自己の存在を認識することはできない。神も動植物も山川草木も、刀や鏡もみんな人間と同じ心を持ったものと感じられている。このような風土のなかで自己の存在の根拠となるものは自分のまわりに閉じた空間を作る、つまり、囲いを作って閉じこめることである。

言葉としての「安堵」は「堵」すなわち垣のうちに安んずる意である。日本人が宅地の

周囲を囲んでしまうのは、まさしく安堵のためである。鎌倉・室町時代に行なわれた「所領安堵」は、幕府や領主が武家や社寺の所領を保障し、確認することである。政変があるとその直後には必ず所領安堵の沙汰があり、これで安堵の胸をなでおろすのである。

日本人にとって「生きがい」とか「生命の充実感」とかは「安堵」の状態を指す。だから「生きがい」を求める積極的な行動を幾ら

積み重ねても「生きがい」は得られない。

揮マニアの生きがいは、揮をする行動でなくしてしている状態のなかにある。状態は行動にとっての背景となるが、それ自体が主役にはならない。

揮をしている状態は、その状態で行なう行動を手ごたえあるものにする。手ごたえのある感じとは全身に力がみなぎる感じであり、大地をふまえて立っている感じである。これは安堵しているときだけ感じることのできる一種の快感である。安堵の感覚はそれ自体は茫洋としていて、つかみ所が無いが、それは見ることを為すことのすべてを充実した感じを受け取ることで「生きがい」という高等な快感をもたらすのである。

安堵の感覚は好ましいものである。しかしそれだけの理由ではマニアにはならない。揮によって安堵の感覚を知った人が揮を好ましいと思うのではなく、揮に狂気のように執着しこれを失うのを恐れることには別の理由がある。

日本人は宗教の精神には縁が無いとされている。宗教が与えようとする心の救いが余計なことのように感じられるからである。「救ってあげます」と説かれたとき健全な日本人

は「救ってもらいたいわれは、どこにもない」と感じるであろう。日本人には心の核として安堵が存在するからである。安堵の核を持つ人にとっては「みほとけ」も「GOD」も、言葉の遊びに過ぎない。真に恐れるのは安堵の喪失であり、一度味わった安堵の感覚は狂気のような執着の対象となる。これは「日本人の幼児性」と呼ばれているものの一面である。

(五) 伝統の心を通して

オムツの残像のある場所に褌を着けると特異な感覚が生ずる。そして、褌マニアの求めているものが安堵の感覚であることも、どうやら疑う余地が無い。とすると、オムツの残像のある場所に褌を締めると、安堵の情緒が起ころという推論ができる。これは事実によって証明できている。

さて、オムツの残像は無条件で安堵に結びつくのであろうか。それとも、特定の条件が必要なのであろうか。オムツは、ある意味で不快であるから、その残像の中には不快感も含まれている。しかし、その不快感さえも転じて安堵の感覚になるという事実を説明するのに、皮膚感覚だけで説明しようとする無

理がある。皮膚感覚だけでは、褌マニアが視覚的に安堵を強く感じる事実を説明すること也不可能である。

オムツマニアが洋式を排斥して、和式にだけ執着するという事実、示唆に富む。排泄物処理用としてならば洋式には良い点もあって、生活の洋風化が当り前になっている今日としては、特に排斥する理由も無い。にもかかわらず和式に限るとするのは、洋式のオムツが単なる排泄物処理用にしか過ぎなくて、和式がそれ以外の情緒的要素——マニアが求めるもの——を持っているからに違いない。この情緒的要素が、安堵感であることは疑う余地が無い。

ところで、この安堵感はおムツ着用当時の記憶なのであろうか。もしそうだとすると、オムツ一般にあって良いことになるが、実際には和式にしか、その情緒が無いのは何故か。それは、単に材質や形態の差なのであろうか。また、赤ん坊がその材質や形態の差を感じ取って、和式には安堵を感じ、洋式には感じないのであろうか。この一連の疑問には次のような考え方が適切な答になる。

オムツの残像それ自体は無定形の快感——本来不快な濡れや蒸れをまんざらでもないと感じる——に過ぎない。それが特殊な意味を持つか持たないかの違いは、大人がおムツを見る見方によって規定される。もし、排泄物処理用と見ていけば、特殊な意味は生じないであろう。

安堵の感覚とは、オムツの残像に、大人がおムツを見る気持が投影されたときに生ずる情緒的感覚である。大人は、オムツが赤ん坊を守ると見ている。オムツをしてやることで強い満足を伴うのは、このためである。日本のオムツが赤ん坊の立場よりも大人の立場で満足なように使われているのも同じ理由からである。守ってやるという気持を端的に表わすのは、オムツの外側に来るカバーである。日本人は赤ん坊のふとんに防水シートを使うとしないので、身につけるカバーを完全なものにしようとして、凝ったデザインをする。洋式では漏ることを当り前と考えてベッドにゴムシートなどを敷くが、日本式では漏るようなオムツはおムツの精神に反する。それでは、安堵を与えていないと感じられるのである。

褌は、西洋風に考えると単なる陰部のかくし布に過ぎない。とすると明らかにブリーフなどの方が機能的に便利で安全である。褌は

未開人の象徴ぐらゐにしか見えないだろう。まして大の男が六尺の布片に生命の充実感を覚えるなどのことは考えも及ばまい。禪マニアは、もし西洋に生れたとしたら一種の精神病質者として社会から異端視されてしまうであらう。ところが日本では、マニアではない人にも共感を呼ぶのである。禪が特別な意味を持つのは、個人の偶然ではなくて民族文化の背景がある。

赤ん坊のオツムが男の大人の禪に当ることは疑う余地が無い。古語のムツキが今日の禪までも含んでいたことはその傍証になる。また、男の禪に当るものが女の「お腰」であることも疑う余地が無い。昭和41年6月号本誌の亀山順子「ふんどし奥さん」のなかには、女の人の「お腰」を「ふんどし」と呼ぶ方言があることが指摘されている。(この点は、もう少し詳しく知りたいところ)

赤という色は、身体に着けるものにこれを用いられた場合、魔除けの効果があると信じられて来た。赤い禪も赤い腰巻も「赤」の意味は呪術的である。赤い禪の効用を合理的に説明しようとする人は、海でサメに食われなからだとか、危急のとき目立つからだとか説くが、赤の効果は本来呪術的なものである。

禪は古くから赤が主流だったようで、明らかに「守る」ためのものである。したがって禪を着けているのを見ただけでも安堵が幾許かは得られるのである。

日本では、今まで、無事に成人し長寿を保った人が身に着けていたものをつぶして、オシメに仕立て直して使う習慣になっていたがこれは赤ん坊が無事に育つ(昔は死亡率が高かった)ようにとの呪術的配慮からである。いわゆる「古いゆかた」がこれである。このごろでは、それを単なる廃物利用と思って排斥する人が多くなったが、これは思想の洋風化の結果であらう。

ともかく日本では、オツムも禪も呪術的な意味で「守る」もので、それは「安堵」の情緒を満喫させる。もやもやとした皮膚感覚に過ぎないオツムの残像は、このような伝統によって色付けされて安堵感の源泉となる。オツムマニアが洋式を嫌うのも、禪マニアが洋式を嫌うのと全く同じ背景からである。いずれのマニアも日本の伝統のなかでしか存在できないのである。禪にせよオツムにせよ、マニアとして真に安堵を得ようとすれば古式ゆかしいものに落ちつくのは当然と言えよう。余談であるが、洋式ダイアパーなるものが

一部の合理主義者によって推奨されているのは、見逃がせないと思う。これは日本人の意識を、破壊してしまいそうな気がしてならない。この点は、別の機会に論じてみようと思っている。

六 あ と が き

オツムマニアは、禪マニアと同じようになることで生きがいを感じることが出来る。オツムはオツムの残像に対して禪よりも強力に働きかけるから、禪マニア以上の満足を覚える可能性もある。しかし今のオツムマニアは岸につかまったら、ちぎちぎと切れているようなもので、思い切って泳ぎ出そうとは思えない臆病者に似ている。いつでもやめられる様子を付けながら使用することで満足を得ようとしても、それは徒労に終わるであらう。

オツムマニアは、オツム無しでは生きられない状態になってこそ、真に生きがいを感じることが出来るであらう。そして、そうなたとき始めて、禪マニアのように「無しでは生きられない」体であることを、誇らしげに告白できるようになるだろう。私は禪マニアの告白を多数読みくらべて、このような結論を得たのである。

(以上)

S M カメラ・ハントⅡ江口淑子の巻

甘

(かんじゅ)

受

辻村 隆

東映のセックスドキュメント映画『性倒錯の世界』の鼎談が、予測通り沼正三の不参で結局鬼六さんと私の対談の様な恰好になってそれも事前に打合わせをしなかったから、場当たりの、口から出任せのようなSH談義に終始してしまって、カントクさんも内心、かなり御不満だったようである。

SM談義なんて、所詮、改まると喋れるものでなく、リラックスした夜のムードのもとでなら案外、珠玉的な言葉もちろつかせられるものであることを、いやという程しらされた。拙作の、SMカメラ・ハントだって、家人の寝鎮まった頃から机に向かい只管にSMのムードの、あらぬ妄想を働かせ乍ら、大抵

は夜明け近くまで書くのが恒例で、いかに原稿の締切が迫っても、真っ昼間では気が散って、到底書けたものではない。それだけに、改まられると、それなりのものしか喋れなかったのである。

東京から戻って、中四日おいた七月三日の夜、私は大阪での、夜のSMの探訪の約束を果すべく、企画の天尾氏と監督の中島氏を案内して、SMショウを始めたという、清原麻耶の、紫鬼クラブを訪問していた。

紫鬼の表看板は、スナック「チコ」——。自己顕示欲の強い彼女が、案に相違して元気がなく、何となく沈んだ面持ちなので、いろいろ聞き出すと、私が以前アドバイスした

通り、女の見様見真似の、キワモノ的な発想で始めたのが、矢張り忽ち壁に突き当たっての、意気消沈であった。

灯台もと暗しとばかり、阿倍野警察署のお膝もとの場所であったが、スナック営業にボックス設けて、ホステスマがいの女性のサービスをさせたのがすぐバレてお目玉を喰い、派手にSMの新聞広告したものだから、有象無象の好奇心のある客、かなりワツと押しよせたものの、客の中に、羊の面をかぶった狼の、コワイ哥兄さんが混じっていて、女だてらの大それた商法たちまち見破って、仮面をぬいで脅しにかかる。

SMショウの女の子はおそれをなして、行

方知れずとあっては、店全体が、どんより澁んで活気のないのも致し方なかった。

一週間前に連絡してもらったら、何とか、ショウの男女の居所を探し出しますという、甚だ心細い返事に二の句もつけず匆々に尻を上げる。

SMを求めての第一の目的は、こうして脆くも崩れ去った。

私達三人はその場からミナミの歓楽境のド



真中に直行。天尾氏もカントクさんも、夜のミナミには弱いようで、私が頼りである。

次なるお目当ては、前衛的なショウをみせて、アングラ的に根強いファンを握っているKホール——。元の大劇裏にある。

会員組織で、予約しておくと六千円で、のみ放題の喰い放題。しかも眼前近く、生々しいショウが見学出来る仕組みで、芸能人仲間や社用族、接待族に隠然たる人気ありと見受

けられた。

好奇心の強い私は、勿論メンバーの会員の一人であり、やや得意然と二人を案内する。

このショウ、全員真面目に奮闘し、ポルノ的迫力は大いにあるが、惜しむらくはSM的要素に乏しいので、夜は出掛けると、いつも紳士の社長をつかまえて、SM論を一席ぶつのであった。しかし所詮は少数の意見に過ぎないのであろうか——。

ショウは確かに観る者の心を惹きつけ、五彩のスポットと、前衛的なバックミュージックがマッチして、幻想的ポルノの興趣は、弥が上にもファンタジックな夢をかき立て、それはそれで、至極意欲的に演出されていた。

その度毎に、惜しげもなく女の衣服を引き裂き、果ては血を流して激しく襲いかかる男女の葛藤——。

シスターボーイのよっちゃんがローソクを十本近くも束ねて、全身に蠟涙を浴びてのソロの踊りなどに、幾許かのSMの要素は含まれていた。酔余に、めくるめく舞台へかけ上がり、よっちゃんの下半身に炎々と燃えさかる蠟束を近づけ、熱蠟の雨を降らせて、私は嗜虐心をあおり立てたものの、緊縛のないのが些か物足りなかった。

S Mの潜行的なブームは、Kホールの過去のこうした数々のショウを、数カ月の間になり変えて、今宵、眼前にみる男女の裸身の流動には心憎いS Mの要素が盛り込まれてあるではないか——。身分を隠して、中島監督と天尾さんは、映画人の眼で、このショウを喰い入るようにみつめていた。

傍から喋る私に、カントクさんは、さもうるさげに饒舌をたしなめ、只管に、ドキュメントの構成の思索を練っているかのようであった。その真剣な態度は私の目にも、このショウが気に入ったことが、判っきり分かるのであった。

社長に東映の二人を紹介し、『性倒錯の世界』の趣旨を話したが、所詮はアングラ的なショウである。映画での公開は、或は無理かも知れない——。内心のそんな危惧は須臾にしてくずれた。

社長は淡白にうなずき、芸術を前提とした人間赤裸々の本能を追求した、意欲的なものとして描いてくれるのなら、大いに協力しましょうというのである。ポルノ的要素は、本能を追求する時、当然の帰結であり、愛の結実の本来の姿ではなからうかと、彼の言葉に熱が籠ってくる。かくして、ハナシはトント

ン拍子に、まとまってゆく。

私は二人から大いに感謝され、案内の労をねぎらわれて、やれやれよかったとホッとする。話が纏まった欲びからか、俄にグイ、グイ、ウイスキーを傾け出したカントクの中島氏は、本心をいきなり激しく吐露して、東京での、鬼六さんと私の対談内容を、コテンパンにこきおろすのであった。極言して、時間とフィルム浪費であったと激しい口調で、なじるのである。

現実のナマの世相、真の姿を直視して、すべてをリアルに撮りたいカントクと、全国的に私という人間がうつし出される立場から、S Mはプレイなりと断じた意見が真向から対立していた。あの席上、喋った私の言葉にウソはなく、そのS Mの理念は、しばしばカメラ・ハントにも書いてある、常日頃の本心である。にもかかわらず、カントクさんは、S Mの本質を徹底的に追求しようとしているのであった。

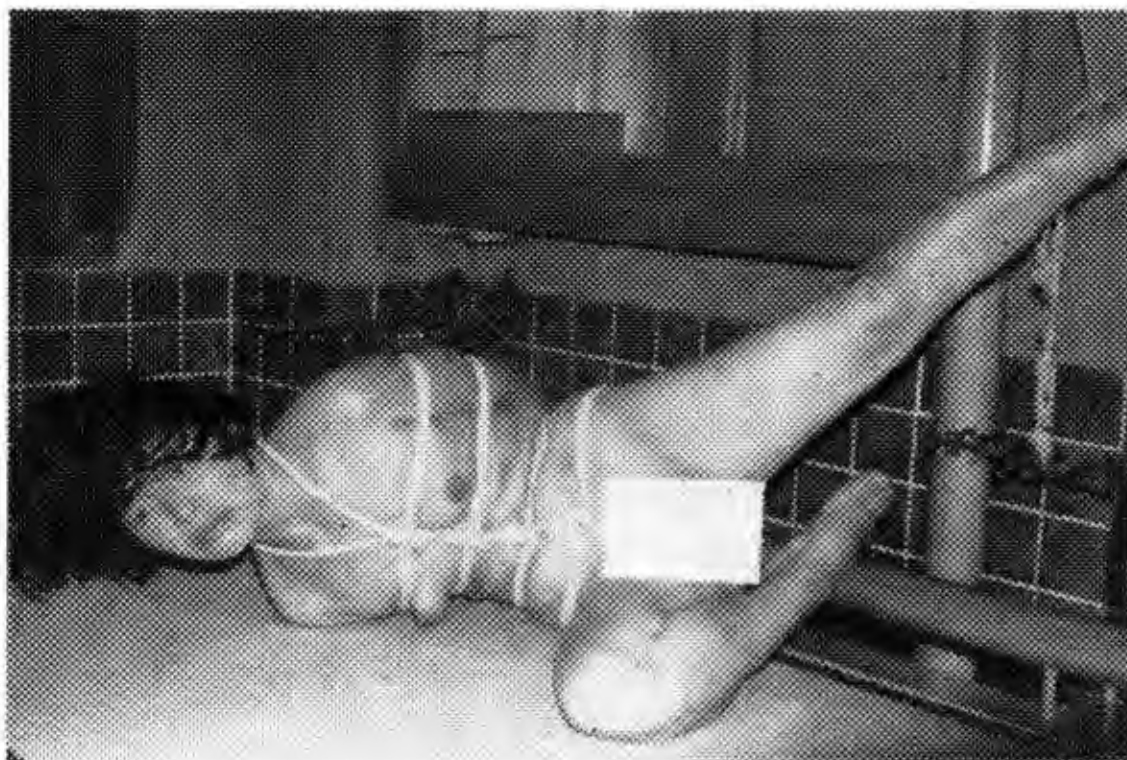
「なあ、辻村さん。もういい加減に、ハダカのつきあいをしましょうや」

天尾氏が見兼ねて、傍から言葉を添えてくれる。それ程にカントクの語気は鋭かった。その意気たるや壮なりと思う反面、私には私



の不満もあったが、言葉には出さなかった。論争すればケンカ別れになるかも知れなかったからである。

「沼正三は言っていましたよ。団鬼六と辻村隆は、懼らく公開の席上では、本心を言わないとね。だから彼は、そんなウソッパチの席上



には出ないんだというんですよ」

このカントクさんの言葉がカチンとくるのである。カントクさん自身ではなく、ヌケヌケとそんな放言をした沼正三に――。

鬼六さんは今やSMプロ作家で、最近は堂々と姿を現わし、東映作品の『温泉みみず芸

者』では、田中小実昌さんらと一緒に、芸者の馬になって、粋客に扮しての出演で、いい度胸である。昔とった杵柄の、英語の手腕を買われて、外人女性相手に演じている程であるし、私にしても、いつの間にかテレビや週刊誌で顔を曝し、私の書くカメラハントにもチョコチョコ自分自身を曝しているから、今更、應じたところで始まらない。

私と鬼六氏に対し、予言めいた言葉を発して、幻の作家といわれる沼正三が、私達の本心云々を楯にして出演しないのは卑怯に思われるのであった。ほかに出られない理由があるのなら兎も角、本心を吐露しないから出ないのだと、まるで私達二人の責任のように、不参加の理由の転嫁が、何とも腹立たしく感じるのであった。

画面に顔を出さず、録音だけで喋るというが、それなら、どんなことでもいえるであろう。彼に出演の勇氣があるのなら、私達と会うのがイヤなら、沼正三、一人だけで自分のMの所信を発表するシーンを撮ればいいではないか。懼らくはそんな勇氣もないだろう。

私は対談の時、いつしか無意識のうちに沼正三、不参の不満を、かなり露骨にぶちまけていた様でもあった。沼正三に時間を合わせ

ムザムザと三日間、東京に滞在していた結果結局現われない彼に、私は半分ヘソを曲げていたのは事実である。最初から鬼六氏との対談だけなら、日帰りでも結構、間に合う筈であった。

所詮SM人士は隠花植物である。潜行する同好者は星の数ほど多くても、さて映画、テレビなどの公表の段階となると、二の足を踏むのが、九十九%の確率をもって多いこの世界なのである。

私の日常性は、謂わば、ジェキル博士である。それをあばく映画の企画に、意外性の面白さがある。ハイド氏の私は、あれこれに顔を出しても、ジェキル博士の私が剔抉されるのは今回が初めてである。これは私にとってかなり勇氣のいる決断であった。鬼六氏の様に、SMのプロではないからである。

それだけに、姿なき幻の作家と称する沼正三の、心なき発言は、どうにも我慢出来ない屈辱に思えたのである。

こんな内心の葛藤にもかかわらず、私は敢えて、中島カントクの言葉に逆らわず、笑って聞き流した。カントクさん自身、SMを始め、異能人間と倒錯の世界に、すぐく興味を持ち、大いに勉強はしていても、異能人間で

はないからである。

それはSMを始め、倒錯の世界に耽溺する人間にしか分らない、微妙なニュアンスの喰い違いであった。

代理人を使って、自分自身、飽くまで出てこない卑怯な沼正三なんか、ハナから歯牙にかけなかったら気分もラクである。私のデーター収集で、沼正三の正体は、ほぼ掴んではいるが、ここにそれをあばいてみたとして始まらないし、箕田氏はプライバシー保持のため削るかも知れない。

強烈なM性の人間には、えてしてこうした陰湿な輩が多い。いかに学究的に立派な人間であっても、心裡に果喰う病塊は救い難い。

ショウの気魄に撃たれた中島氏は、それが誘導弾となって、思わず私に対する不満を爆発させた様であった。倒錯の世界のナマナマしい真実を追求し続ける彼にとって、私の、うわべの浅薄な饒舌が我慢出来なかったのである。

百言を費やしても、一の実行に勝るものはない。私は谷山久美子、渡部好美夫妻の協力を得て、SMプレイの真随を追求する日に深く期するところがあった。

こうした内心の葛藤をよそにKホールのシ

ョウは、SMの要素を多分に盛り込んだ、レズの絢爛なシーンを展開し始めていた。

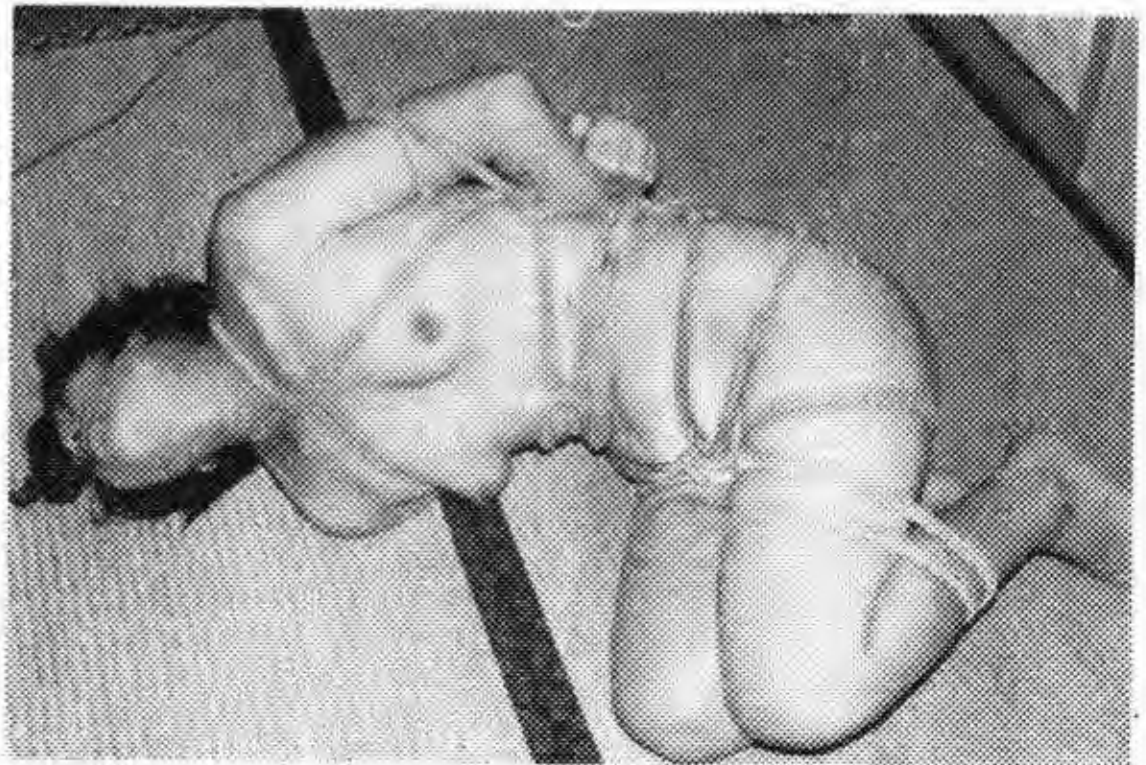
両手足を四方に鎖で繋がれた被虐の女に、Sの女性が激しく襲いかかり、ナイフで、裸身の乳房の谷間から臍下へかけて、一気に斬り裂いてゆく。ドクドクと血汐が噴き出す。この鮮かなトリックに、私は呀っと一瞬みとれる。思わせ振りもなく、いきなり斬り裂くところに、心憎い演出があった。鎖をきまして女は、のたうつ。激しい鞭打ち――。被虐女性の双臀に、胸に、肩に、まやかしかもなく、縄鞭は炸裂し、忽ち皮膚は紅を染めて赤らんでゆく。

氣息えんえんの鎖の女に、S女性の強烈な愛撫の手――唇が全裸の肌を這い、悦虐のゆきつく処、二つの裸身が血まみれになって転げ廻り、頂点を求めて、愛叫一声、ぐったりした女に折り重なって暗転する。

加うるに幻想的なライトと音響効果が、私達を、いつしか夢幻の世界にひきずり込んでいた。

期せずして激しい拍手が湧き起こった。感銘がジーンと私の心臓を刺激した。

社長は私達三人の為に、特に好意的に、今宵のショウに予定のない相対死の、SMの愉



悦と愛虐の本能を追求したものを準備してくれた。ポルノを芸術にまで昇めようとする社長、商売気を離れての好意である。

時間は既に午後十一時に近い。この格別の好意に、天尾氏とカントクさんの感激は一入で、私も又、大いに期待に胸を弾ませるので

あった。

能面にも似た無表情の若い男女が、短刀を互にかざして相対し、激しい一喝の気合と共に、互いに相手突きさす。俄破と飛び散る鮮血！ 紅潮した二人は氣力を振りしぼり血達磨となって求め合う。

更に、止めをさし合った断末魔の喘ぎの中で、神聖な人間本能の最後の営みに没入して

ゆく。被虐の悦楽の極致と悲愴美——。背後に三十三間堂の仏像群が諸行無常に映じ、涅槃の読経が最高のハーモニーを奏でる。

血だるまの若い男女の求め合う交歓の姿を慄然たる思いで、私達は息をつめて凝然と見守っていた。私達の外に残る客は二、三人、そしてショウを終えた、スター兼ホステスの一同も、この凄まじい気魄に、寂として、声

もなくみつめていた。

亡き三島由紀夫が観たら、垂涎の強烈なシヨック・シーンに違いない。

恍惚陶酔の果てに、命果てて強く抱き合った俤、ライトは消える。

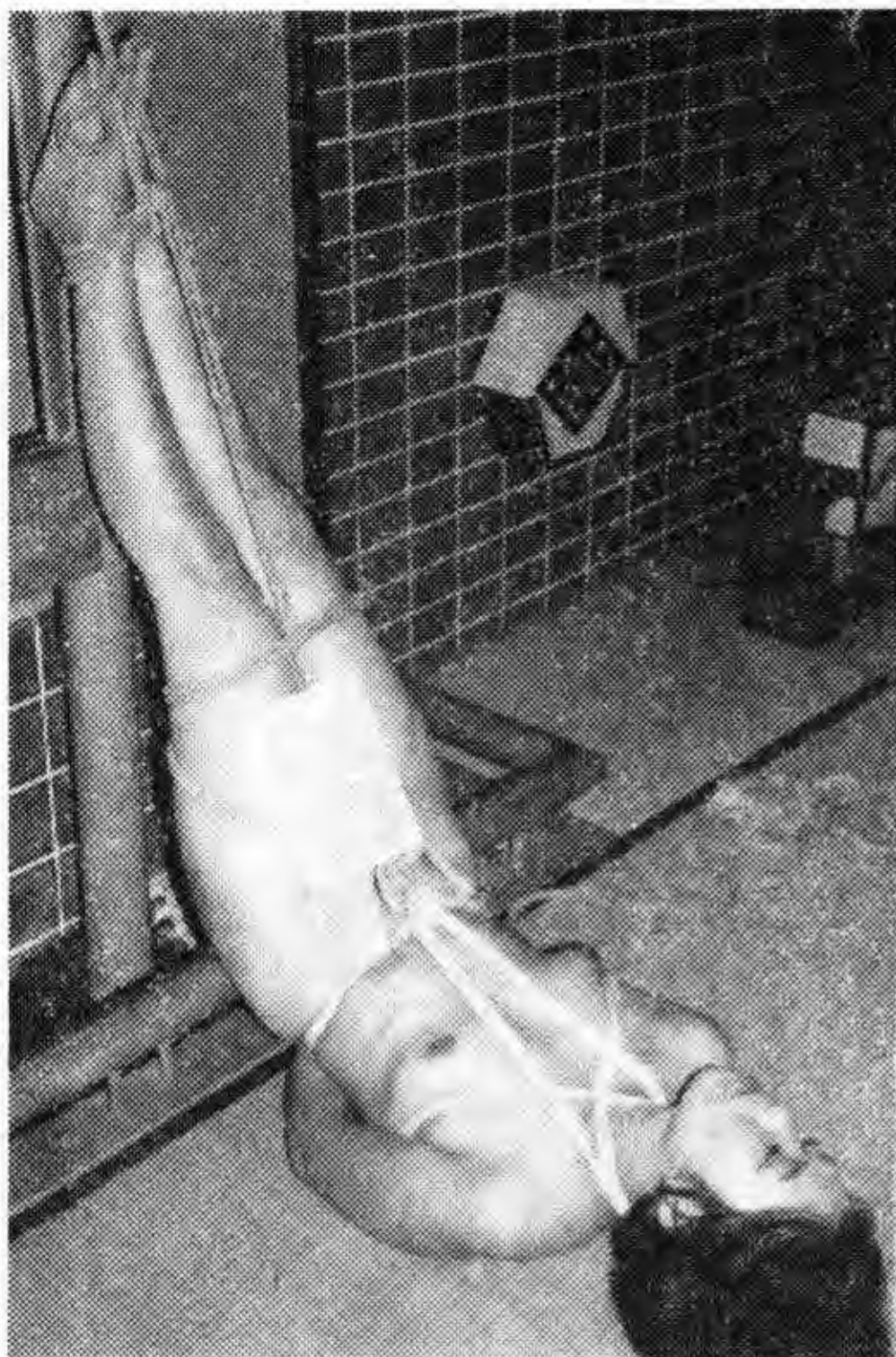
倒錯の世界に潜む希求の心理を、心憎いまでに演出する社長と、演じた若いカップルに私達は心から、惜しみなき讃辞の拍子を、いつまでも送りつづけていた。

旨酒とショウに酔い痴れて、魂を天外に飛ばして私達はホールを出た。映画『性倒錯の世界』で、このシーンを描くことは、もう必須条件の一つに確定していた。

後日、撮影隊の一行が訪れる時の道順を詳しく説明して、未だ宵の口のようなミナミの盛り場で、二人と堅く握手して別れた私は、血糊にまみれ、壮烈な切腹の苦悶の中の法悦境を、まざまざと臉に泛かべて、酔歩漫散、独りよろめいていった。深い酒の酔いが体中をかけ巡り、足許もさだかでなかった。

「辻村さんですね、失礼ですが……」

背後から突然声をかけられ、ギョツとして振返ったそこに、四十年配の、この暑いのに背広をキチンと着こなした一人の紳士が、いんぎんに私に近づいてきたのである。



めまぐるしく脳細胞を攪拌しても、記憶の範疇にない顔に、私は一瞬、戸迷い、不審の眼の色に、紳士はあわてて頭を下げ、

「いきなり声をおかけして、本当に失礼しました。私、田中と申しますが、唯今Kホールで最後まで観ておりました者です。お連れの方が、時々、辻村さんと呼んでおられるし、ショウの内容や、以前テレビでお見受けしたお顔から、てっきり辻村先生と直感したものですから……云い遅れましたが、私、もう十数年来の奇クのファンで、カメラ・ハントは一番に読ませていただいています」

「ああ、そうですか。突然なので吃驚しました。悪いことは出来ませんねえ」

不審の眉を解き、ふらつく足を踏みしめて立ち止まり、相手の出方を促すように数十本目の煙草に火をつけた。いきなり声をかけられた相手が奇クのファンと知っても、私から発言するのは些か不用心であった。

「夜もおそいですが、お近づきのしるしに、少しばかりの時間を戴けないでしょうか」

彼は丁寧な口調で誘ってくる。

「ええ、かなり酔っているのですが、少しぐらいなら……」

「構わないでしょう。か。じゃあ、この近くに知ってるミセがありますので、一寸そこまで、御一緒に……」

彼は恐懼のポーズで、私に先行すると食道街の一面の、バー、スタンドの立ち並ぶ路地の、その一軒のドアを押して恭々しく私を導き入

れた。仄暗いバーは煙と酒でむれ、数人の客が、カウンターのとまり木に腰を降ろしていたが、小さいボックスの席が、三つばかり壁にそって並んでいる。

毛の長い、超ミニのホステスが、私の傍に坐ったが、彼が二言三言、小声で告げると、会釈して立ち去っていった。

改めて名刺を差出したので、仄暗いルックスの灯下にかざしてみると、関西ではかなり名の知れた建設会社の、総務課長の肩書があった。儀礼上、私もTELのみ刷り込んだ名刺を交換する。



「接待に、よくKホールを、利用するんですよ。呑み喰い出来て、中味の濃いショウがみられて、大抵、喜んで貰えます。最近、かなりSMづいて来ましたので愉しくなりまして、今迄は一寸、物足りなかったんですよ。先生も、よくいらっしゃるんですか」

「ええ、時々気が向けばね——ところで、その先生はやめて下さいよ、辻村で結構です」

「ハア、どうも。以後、気をつけます」

素直にいわれて、反って私は照れた。わざわざ呼びとめ、私とこうして相対すると、彼は何がなし気遅れするかのように、し



きりに顎から頬へと、ゴシゴシ掌でこするのであった。偶然に私をみかけて、千載一遇のチャンスと近づいたものの、心の準備もなかっただけに、さてとなると、何から喋っていいか分からない困惑さを示していた。

御馳走になっているし、正体も分かった以上、私の方から、口を切り易く、持ちかけてゆくより仕方があるまい。

「今夜Kホールと一緒にいた二人、東映のカ

ントクさんとプロデューサーなんですよ」

「それはそれは。又、映画に協力を？」

「今度は、どうもかり出されそうです」

『性倒錯の世界』の概要を説明すると、田中洋氏は愉しげに合槌をうち、口調は次第に滑らかに廻り始めた。

「実は私も、SMプレイの真似事をやっているのですが、カメラの方は弱い方でして、現像を出すツテもなし、撮ったことがないので

す。今夜こうしてお目にかかれて、願ってもないチャンスです。一度アレを縛ってプレイした写真をとって戴けないでしょうか」

「奥さんをですか！」

「いや、家内は残念ながらSM気なしです。というより、言い出しそびれて機会を逃してしまった様です。両親や子供も同居しています、今では妻というより、両親の嫁、子供の母の方が強くなりまして、今更そうも言い出しかねて、家庭では全然ノーマルです。SMプレイの相手は、愛人的な関係にある女なんですが……」

「以前からプレイなさっているんですか？」

「そうですね、関係が出来て六年近くなりますが、この種のプレイを始めたのは、三年前ぐらいからです。相手の女は淑子というのですが、プレイにはもう大分馴れまして、可成り強烈にやりまして、それに欲びを見出し、ているようです。緊縛と一連の責め、剃毛、浣腸、鞭打ちなど、辻村さんのハントや、いろいろの雑誌を参考にして、一通りのことはやったつもりです。奇クなどのSM雑誌は、家に置いて、眼についても困りますので、アレの部屋においてあります。辻村さんのSMカメラ・ハントは、淑子も愛読しておるよう

です。御本人のあなたを紹介してやると、きっと吃驚して感激するでしょう。辻村さんとかにお目にかかれるなんて、恐らく想像もしていないことでしょうから——」

「いや、正直いって私も、彼女に猛烈にお目にかかりたくなりましたよ」

確かに私は、田中洋に激しい興味を抱き始めていた。まったくのハナシ、SMカメラ・ハントは、どこにその素材が転がっているか知れない。況してや今、先方からそれを希っているところでは、願ってもないハントのチャンスである。

酔眼で腕時計を覗くと、既に針は午前零時を、さそうとしていたが、私はハナシに身を乗り出していった。矢張り、よくよくの好き者であるらしい。

「でも、こんなに遅い時間にお目にかかれるのですか？」

遠慮のオブラートをかぶせて、探りを入れてみると、彼は謎めいた笑みを泛かべて、

「ええ、いいですとも。何なら今すぐ連れて参りましょう」

「えッ、今すぐここへ」

短兵急に驚いて、田中洋をマジマジとみつめると、彼は照れ臭げに頭を掻いて、



「タネを明しますと、実は淑子はこの店のマダムなんです。この店にも少し出資しているのですが、何とか独りでやっております。謂わば私の隠れ家みたいな存在ですが、別にパトロンというわけでもありません。在り体に言えば、気が向けば時々出会い、偶にはプレ

イするという仲で、アレのプライベートにも深く立ち入りません。相手の一人や二人出来ても、仕方のない世界ですからね」

恬淡に言っているのけて、彼はカウンターの方を振返った。つられて、私も眼をやる。目指すマダムらしい女性は見当たらない。

「さっきまでいたのだが……」

呟きながら彼は立ち上がると、客の傍に侍る若いホステスに、何か耳打ちした。

ホステスからバーテンへ——。バーテンが仕切りの奥へ消えると、入れ換りに、マダム淑子らしい女性がそそくさと姿を現わした。化粧直しでもしていたのであろうか——。

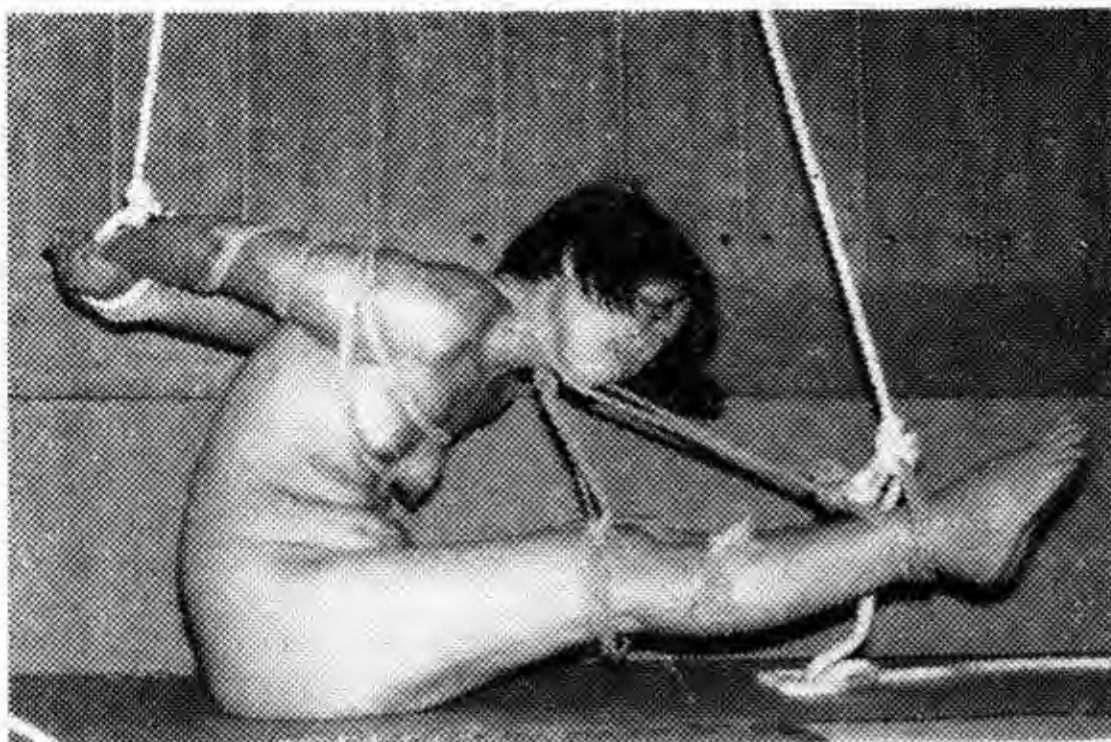
田中洋の入ってきた時から、すぐ彼と私の存在に気付いていても、客商売の手前、わざと素知らぬ風を装っていたらしかった。

カウンターから出てきた彼女は、まっすぐ私達の前へやってくると、私に軽く会釈して彼の傍に坐った。

「ようこそいらっしゃいました。何かお話でもおありなのかと、わざと遠慮しております。さあ、どうぞ……」

切れ長の眼が艶に笑って、マダムはビールを注ぐ。

「この方、誰だか分かるかい？」



田中洋は、謎解きの愉しさを味わった気持ちでマダムに問う。

「さあ、どちら様でしょうか、私一向に……」

「聞いたらアツと驚くよ。一度会ってみたいなんて言ってたじゃないか」

声を潜め、秘密めいた勿体ぶった彼の言葉

に、不審の眉を上げらせ、マダムはしばし、暗いルックスの灯下で私を凝視しては、しきりに首をかしげていた。

「分からないかなあ。ほら、例のSMカメラハントを書いているツジムラ・タ・カ・シ」

「まさか——かっいでいるのでしょうか」

「本当だよ。聞いて御覧、御本人に……」

「本当に辻村さんでいらっしゃいますの」

「私如き者の名前を知っていただけて、光栄ですよ」

照れ臭げに言うてうなずくと、マアといったように、マジマジと私をみつめ、

「どうして田中とお知り合いになられましたの。まるで奇蹟みたいですよ」

「ほんの二、三十分前に、始めてお目にかかったばかりです」

「何処で？」

「路上で……」

「信じられませんわ、そんなこと。お書きになってるカメラ・ハント、愉しく読ませていただいております。でもまさか、その御本人が、今ここに、こうしていらっしゃるとは、まるで夢のようですわ」

言い終わった刹那、マダム淑子は、急に狼狽の羞恥を全身にただよわせて、慌てて臉を

伏せた。私という人間に関心を抱いているということは、とりもなおさず、SMプレイに通じている証拠だと、咄嗟の連想を走らせたからであろうか。

田中洋は私との出会いのいきさつを、手短かにマダム淑子に話してきかせた。

「そうですか——よくまあ………事実は小説よりも奇なりですわね」

彼女は羞恥をおさめて、媚を含んだ、職業意識の笑顔を取り戻した。みかけたところ、二十七、八才ぐらいであろうが、妖艶な男好きのするタイプの中に、きりっとしたマダムの貫録が備わっている。涼しげな縞の着物に身を包んだ肌は、女盛りの豊醇さに溢れ、こころもちケンのある容顔は、Mというより、どこことなくS性を感じさせるのであった。

「辻村さんが、お前とプレイしてもいいってさ」

田中洋は、もう勝手にきめて、マダムの氣を引く言い方をした。

「まあ、私なんかと——どうせ、何か仰ったのでしょ」

「ああ、洗いざらいブチまけたよ」

「イヤね、あたし辻村さんのお顔を、まともに見られないじゃありませんか」

「いいんですか、本当に——」

シャネルの香を真近に嗅いで、肩すれすれにはべるマダムに、覗き込むようにしてきいた。うれきった官能の肌の香に酔って、内心既に大きな期待をかけている私。

「でも私など、とても……」

「思いがけない期待に、すごく興奮しているんですよ」

「あら、お上手仰有って……じゃあ、田中にきて下さい」

顎を埋めてハンカチを弄びながら、マダムは小声で反応を示す。その心なし甘い声には拒否の匂いはなかった。

「私なら勿論O・Kなんだ。そのつもりで前に紹介したのだからなあ。ゆっくりと二人きりでプレイして、辻村さんに写真をとって貰えよ。いつも、そんな夢が叶えられたらっていつてたじゃないか」

「ウーン、でも夢だから言えたのです。まさかそれが、いきなり現実になるとは想像していませんもの」

「願ってもないチャンスじゃないか、永年の憧れが果たされるのだから」

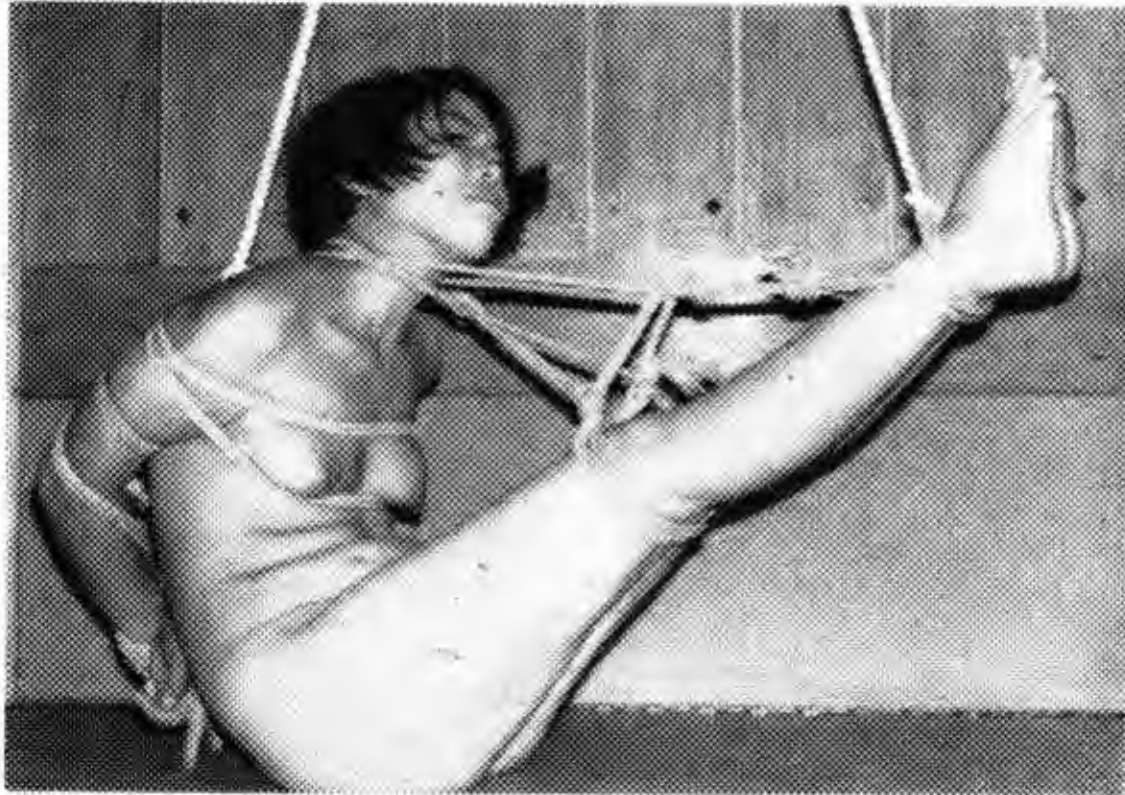
「じゃあ、あんたも一緒に行つてエー」

「一緒にいてもいいけどさ……」

彼は言葉を濁して、私の反応を窺った。

「ああ、どうぞ御一緒に」

かたわらから言葉を添えると、マダムの表情に一時、軽い失望に似た気配が流れた。田中洋は、逸早くその心理を読みとったのか、「いや、オレは矢張り行けないよ。昼間から



会社をぬけられないし、オレが横にいちやプレイも、し難くかろうしさ」

と、物分かりのいいところを示す。

「M性になんか飼育したつもりですから、大概のことなら大丈夫だと思います。ひとつ、プレイのフルコースを御馳走してやって下さい。気が向けばフアックもね。この処、私は大分、忙しくて、御無沙汰だから御気嫌斜めなんです。グッドフアックをしてやって下さいよ。構いませんから——」

「ああ、きかない、きかない、きかない」

マダム淑子は大仰に指先で両耳に栓をすくと、身をくねらせて激しくカブリを振った。本人を前においての傍若な言葉に、羞恥にたえかねて耳を塞ぎたくなったのであろう。そのくせ、心は烈しく燃えているのか、女の黒耀石の瞳は、しっとりとうるおいを帯びて、妖しく淫靡に、キラキラと光っていた。

× × ×

酒の酔いが、田中洋の心を荒々しくかり立て、私も又、酒興の席で、酒の力を藉りて、思わず彼女を抱きしめ、胸に手を這わせていたりしていた。

避けもせず、凭れかかるマダムに、悪徳めいた囁きを吹きかけたあの夜から、三日過ぎ

た真夏の昼下がり――。

心乱れたあの夜の約束通り、果してマダム淑子は現われるだろうか、半信半疑の気持ちで、私はナンバ花月前の喫茶店で彼女を待っていた。

プレイ道具は車に置いた後、近くのモータープールへ放り込み、身軽な、いでたちで、期待に胸を弾ませている。

帰り際、通りの路上まで送って出たマダムは、そっと私の手を握り、

「本気にしてもいいですね」

と振り仰いだ視線は悩ましく濡れていた。

「待っていますよ」

「きつとね」

そういつて別れたのであるが――約束の間は、既に二十分も経過している。

期待が半ば絶望に変わり始め、私は次第に焦つてきた。やはりあれは酒席の戯れごとに過ぎなかったのか――。路上で始めて出会った男の言葉を信じて、ノコノコやってきた私自身が何がなしお人好に思え始めてくる。或は、からかわれていたのかも知れない。やはり余りにも話が、うますぎた様だ。

もう十分――更に十分。

約束の一時は、とっくに過ぎて、そろそろ

もう午後二時に近い。

ほろ苦い失望を噛みしめて、それでも立ち上がりかねていた時、マダム淑子が、ハアハア息を切らせ、玉の粒の汗をひたいに浮かべて、かけよってきた。

「ああ、よかった。遅くなって御免なさい。

或はもう、お帰りになったかしらと思って、ドキドキしていましたのよ。夜のおそいお仕事で、いつもの癖で、目が醒めたら、もうおヒルでしたの。慌てて支度もそこそこに飛んできましたのよ。本当に御免なさいね」

水商売の女性のヒルの一時の約束は、大分苦手らしい様子に、私は苦笑と安堵を泛かべ矢張り約束通り現われたマダムに、あの一夜が、真夏の夜の夢でなかった欲びを覚えるのであった。

余程急いできたのか、整髪もそこそこで、殆ど、素顔に近く、ノースリーブのミニのワンピース姿のマダムに、夜の主人公の面影は偲びようもなく、心なし疲れた肌と平凡さは少し盛りを追った娘という感じで、昼と夜の女の変貌に今更乍ら驚かされる。それでいてムチムチした肉がワンピースからこぼれ、女盛りの色気が、否応なく、私の好き心を、そり立てるのであった。

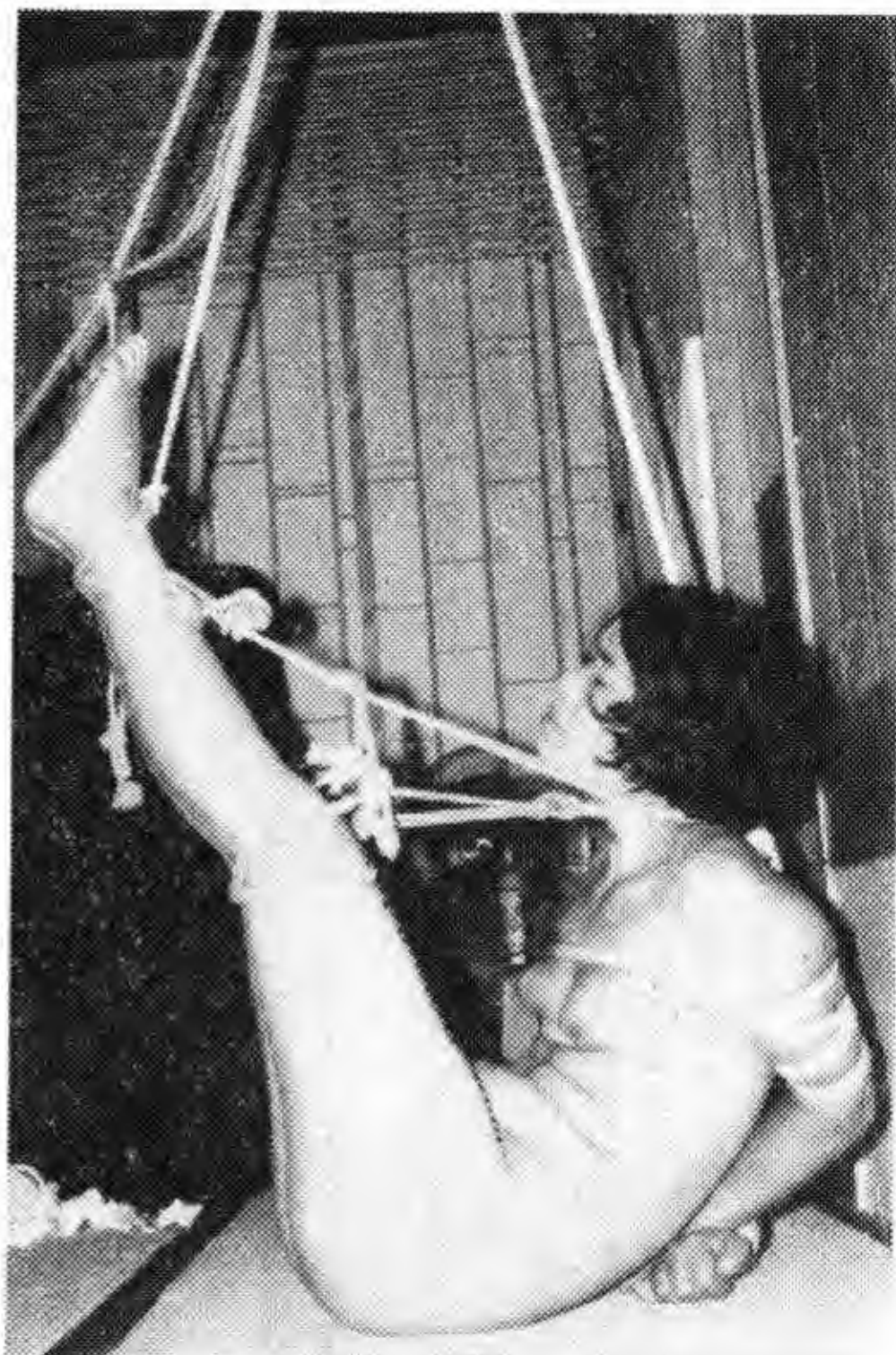


「お食事、おすましになりました?」

女から声をかけられ、首を振ると、

「じゃあ恰度よかった。うなぎでも食べませんか? 元気つきますわよ」

艶にいわれて、チラリと職業上の媚態を感じつつ、リードされて立ち上がった。



肩を並べて千日前を歩き、うなぎ屋へ。

特製のうなぎ井一杯六百元、いい値だが、それだけの値打ちはある。

喰べ終わると女は、さっさと二人分払って暑い日盛りの路上に、パラソルをかけて私を待っていた。この界限、自分の縄張りだといわんばかりの振舞いに、気をのまれた思いで、余り喋る余地もなく振り廻されている。

バーを女手一つで経営して、テキパキとやってのける激しい気性が、こんなところにも覗いていた。

男性をリードしてゆくマダム淑子に、被虐性は感ぜず、むしろ逆に、S的な感覚すらおぼえてくる。

或は田中洋のS性に合わせて、被虐性に甘んじていても、彼女にマゾの男性をあてがえ

ば、結構Sの女王振りを発揮しそうなタイプであった。

いつものハントと些か勝手の違う気分にな心たじろぎながら、私達はモータープールの方へと足を向ける。

車で数分足らず走れば、谷町、上六界限はアベックホテルの林立である。車を出すと、彼女はさっさと助手席に乗り込み、コンパクトを出して汗を押えていた。

「あなたがM性だとは、どうも思えないんですよ」

スタートをきって、正面をみつめ乍ら、独り言のように呟くと、

「アラ、そう見えますかしら。あたし、これでも案外、名前通り淑かなんですのよ。女の子やバーテン、コックを使っておりますし、場所柄、酔っ払いの客も多いでしょ。それでつい調子が、きつくなるのですわ」

「本当に被虐願望を持っていられるのですわうか」

「田中は、そう申します。私自身は判っきり分らないのですが——そうそう、田中は今日、辻村さんのお撮りになったフォト一式、欲しいと申しておりました。それが、田中の唯一の目的のようすわ」

マダムは彼の事を、田中、田中と呼び捨てに呼んでいた。主人といえない立場が、会社式の、こうした呼び捨て名になったのであるうか。彼とか、あの人と呼ぶと、聞き易くとも、呼び捨てにするところに、半分の違和感が、ただよっている。

「それで、プレイのフルコースなんて、うまいこと言っていましたか、あなたは構わないのですね」

「甘受してこいって——」

「甘受？」

「ええ」

なるほど、すべてを甘く受けとめようというのであろうか。徐々にプレイの雰囲気誘導しつつも、何か一抹の圧迫感を覚えつつ、私は、車をデラックスなホテルの、地下の駐車場に乗り入れていった。

マダムは先に車を降りると、ホテルに馴れきった様子で、まるで勝手知ったかのようにエレベーターに向かって、さっさと歩いていった。

× × ×
シャワーを浴びる音が止まると、マダム江口淑子は、バスタオルを胸から巻きつけ、タオルで髪を巻いた姿で、ほてった体を私の眼

前に現わした。

カラッと渴いた感触の、感情の交叉せぬSMプレイの雰囲気、ホテルのこの部屋に入ってから続いていた。今のところ、私と彼女の心の繋がりは何一つなかった。

彼女は敢えて私に何も聞こうとはしない。田中洋の愛人を自認しているだけに、努めて自分の感情を殺そうと、心に鎧を着せて、隙間を見せぬ様に努力しているかのようであった。プレイで全裸を曝し、緊縛され、羞恥を露呈しても、崩れまいとする気構えをありありと感じて、彼女の謂う「甘受」の雰囲気



程遠い隔たりを、そこはかとなく感じるのである。

しかし、彼女の心の鎧を脱がせるのは、私自身の手練ではなかったか——。固い心をほぐしてプレイに没入させてゆく時の醍醐味、それはSMに耽溺したプレイヤーのみが知る筈でもあった。私は内心、期する処があつて、田中洋のいうプレイのフルコースの、先ず第一歩、スープとオードブル的な緊縛にかかるべく、縄をとり上げた。

「いいですか、そろそろ」
事務的な声をかけると、心なし頬をこわば



らせて淑子はうなずき、髪を巻いたタオルを外して、バスタオルを深く取り払った。

しらじらと、輝くような全裸身が私に近づく。剃毛のあとを薄墨色にかけられて、ふっくらと盛り上がった蒼丘にまばらな新芽がよく刈り込まれた芝生の短かさで伸びていた。田中洋の手によったことは、訊ねるまでもなかった。それに愧じる風もなく、彼女は私の指示に従って、部屋一面の、鏡の前に佇立する。

自分の縛られてゆくさまを、じつくりと否定なく観察させるのも悪くない。それは被虐

を希う女の秘められた願望にも繋がっているのではなからうか。

二本の縄を巧みに操り、首縄かけてのオーソドックスな緊縛——私の縄捌きを、鏡ごしに淑子は、熱いまなざしで直視していた。

鏡面に女体を密着させると、あやかしの鏡は、さながら双生児のように、もう一人の淑子を、くっきりと正面に立たせていた。ポーズを移動させる毎に、二人の女が、惜しみなく裸身を私にみせてくれた。ナルシズムに似た、淡い陶酔の色が、淑子の瞳をよぎった。

フラッシュが走る——。カメラ位置を変え

て、慌しく私は右往左往する。

動きにつれて、ゆるんだ臀部の縄を股縄にかえると、深々と喰い込んだ双丘の谷間が、私の目に痛くしみる。

手を添えて俯伏せにすると、腰に手をかけて持ち上げてゆく。股縄を強調するように腰高にさせ、

背後から肉のよじれに、ピントを合わせていった。

かたぶとりの双丘に思わず平手が走る。小気味よい音を立て、淑子は不意をつかれて、バランスをくずして、ごろりと横倒しになった。むらむらと湧き上がる嗜虐心を押えようもなく、片脚を抱えこむと足首に縄を巻き、矢庭にぐいとかかけて、窓枠に高く吊り下げていた。

「あ、あッ、およしになって……」

羞恥のむき出しを察知して、マダムは消え入るような叫びを挙げた。春草の蒼丘が眼前に展開して、めくるめく鮮烈さが、否応なく私の視野に大きく、のしかかってきた。

淑子の表情は緊張にこわばり、蔽うすべのないポーズにカメラを向ける私に、なじるような堅い視線を投げてよこした。

クローズアップを撮り終わってカメラを措くと、膝立ての形で裸身ににじりより、無言の俤、シコシコした乳房をまさぐり始める。

空いた一方の手が、高くかけられた腿から内側へと、じわじわと撫でおろしていった。

堅い表情が徐々に綻んで、淑子の眉間は狭まり、喉の奥底から洩れてくる微かな喜悅の呻きが、必死に保持しようとする渴いた心を

崩し始めていた。

瓦解する心を裏書するかのように女の呻きは急速に昂まり、私の手は、ぬめってゆく。

「ああ、いけない方……いけませんわ」

喘ぎと共に拒否しても、その声は弱々しく拒否に反比例して、女体は、しとどに濡れそぼってゆく。この場合、無言の行動が、何よりも有効であった。乳房をまさぐっていた手が首を巻き、決断の唇を近づけてゆくと、激情にたえかねたかのように、女の方から積極的に吸ってきた。この俣ずると、のめりこんでゆきそうな甘美な感触に、あやしく乱れそめにし心を辛うじて押え、唇を離す。

今はフルコースの序の口に過ぎない。きざす思いをこらえて縄をとくと、佳境を中断され、呆然とした彼女に、矢継早に太縄が、二の腕、手首、胸、腰と、容赦なく犇々と締め上げていった。蒼丘で縄を継いで塊をつくり臀部をしめつけ、膝を折り曲げた両脚に縄が生きもののように伸びてゆく。

これも私好みのポーズの一つであろうか。押し倒されて転がった淑子の吐く息は、甘い情念にあふれ、正しくこの緊縛の肢態で、私の手を期待しているかのようにであった。

フルコースの証拠のフォトをカメラに納め



そっと抱き起こしてかかえると、淑子は眼を閉じ、軽く唇を突き出し、私の愛撫の手を待っていた。縄の塊と股縄が、私の行為を邪魔して、緊縛としてはオーソドックスでも、愛撫には、ふさわしくない。

眺めるだけの御馳走もある。この料理を匆

々に引下げて、私は新たな次の料理へと心を走らせていた。

縛ったり、解いたりの繰返しは、折角盛り上がりとうとする女体の炎を消しているようなものである。にもかかわらず、私は次の緊縛の手段にとりかかっていた。少しでも数多くの、緊縛のポーズに、心を走らせていたからに外ならない。

上半身を簡単に縛り終えたあと、両足首に縄をかけ、窓枠につらなる円柱に添わせて、ずるずると脚の方から引き上げてゆく。しかし、所詮これも観賞用の構図――。

こうした一連の緊縛のポーズをとらせるうちに、淑子のM性は、いつしか快く律動して昂揚してゆくのが分かった。

カメラを投げ出して、寝そべると、首を抱えるようにして熱いくちづけを交す。甘美な愛の滴りが、私の口腔を蜜と化していった。吐く息を互いに、はきかけて、濡れた唇がものいいたげに慄えた。

「どうしたの？」

囁くように、熱い吐息で訊ねる私。

「いいの？ 好きになっても」

「ああ、私も好きになりそうだ、あなたを」
「本気？」

「本気だよ。でもアイラブじゃない、アイライク。分かるかねこの意味が。彼に悪いからね、私を信用して寄越したのに背信になる」

「今は田中のこと、いわないで」

「でも……」

「いや、忘れたいの。ああ、とても足が痛いわ。苦しいの。でも、陶醉してしまいたいそう」

「刹那的に燃えて、いいじゃないか」

「もっと苛めてエ。あたしの心は田中のものよ。でも体は悪女になりたがっているのよ。もっと、きつくしてもいいわ。もっと」

うわごとめいて口走り、淑子は私の両手中で悶え、熱い裸身をくねらせた。

蒼丘を蔽う、大きい縄の塊が、この際、極めて障害になる。にもかかわらず、淑子は裸身のくねりにつれて、その塊の冷たい固さに酔っているのか、心を疼かせて、甘い声を立て始めるのであった。

× × ×

田中洋との約束通り、緊縛プレイのフルコースは着々と進行している。フォートを期待する彼の為にも、私は次々と手を変え品を変えて、女体責めの緊縛の種々相を試み、縛り終わっては、淑子の悦楽の琴線に触れるべく、こまめに暗躍していた。

手錠をかけて、

その鎖に縄を通して股縛りし、余った縄は首にかけて足下へ、降りてゆく。手錠の両手を逆手に高く吊り上げると、連結した縄が、ぐいぐい、しまってゆき、女は肉感的な悲鳴をあげた。

首に掛かった縄

で顔も挙げ得ず、淑子は苦悦半ばする呻き声を挙げて、被虐の境地を逍遙していた。私は追及の手をゆるめない。更に二の腕をしめつけて天井の飾り梁から吊るした縄で引き絞ると、自由を剝奪された彼女は、かなり苦しいこの縛りを懸命にたえて、すべやかな臀部をまるで叩いてくれといわんばかりに、これみよがしに突き出しているのであった。

試みに、平手で二、三度、パシパシと音をさせて軽く叩いてみる。

微かな声を洩らただけで、この程度の平手叩きに対して、苦痛の表情は浮かばず、む



しろ悦虐の喜びめいた、陶醉にひたっていることを確かめ、改めて、細い柔らかな班紐を束にすると、かなりの力をこめて、双臀に発止と打ちおろした。

「あッ！ ウー」

裸身が横揺れして、女は必死にこらえ、手錠で吊られた両手の指先が、刹那、虚空を掴んで躍った。

続けて数度——小気味よい音が臀部に炸裂して、淑子の体はゆらめく。絶叫に似た悲鳴が断続して流れ、白磁の双丘は、みるみる赤味を帯びて、数条の縄痕が糸を引いて、肌に



烙印されていった。

「もっと苛めてやろうか——」

「いいわ、好きなようにして……」

「苦しいぞ」

「苦しくてもいい」

ハアハアと熱い吐息を洩らして、女は喘ぎ

被虐の欲びにのたうって、更に強烈さを求めた。

赤らんだおしりにキスして、このコースを終わると、息つく間もなく、次の手段にかかると。単なる緊縛では面白くない。女体責めの出来る、立体的なものを想定しつつ、女の縄を解いてゆく。

二の腕を引きしぼるようにして締め上げ、背でかたく結んで、肩を通して足首を縛る。

天井から降ろした縄に両手首をつなぐ。

数本の縄を駆使して、かなり強烈な緊縛が出来上がる。

両手を逆手にして、水平になるまで吊り上げ、両足をも吊り上げると、女体は屈曲し、臀部が支柱となって、かすかに揺れる。

二本の吊縄を操作して、女体を前後に上げ下げする。首縄を太腿につないであるので、体の伸張がきかず、淑子は私のなすが俚に、あやつり人形のように、うごめいた。

嗜虐以外の思考がすべて停止し、私の脳細胞の視覚の中枢、後頭葉の内側面は、只管Sのプレイー辺倒に活動していた。

淑子は既に悦虐をこいねがう、Mの化身となつて、苦悩をよぎらせる眉間に、ありありと恍惚が泛かび上がっていた。かなり苦しい

態位にもかかわらず、ヒイヒイ言い乍らも、止めてくれとはいわず、私の手の蹂躪に任せきっている。

手首の縄をゆるめ、ぐいぐいと脚部の縄のみ一方的に引き上げてゆく。体が、ぐらりと傾き、彼女は板壁を背にして、懸命に体を支える。首と腿を連結してあるから、引き揚げにも限度があった。精一杯、高々と足を吊ると、首がひきつれ、うなじにかかった縄が、無惨にも喰い入るばかりにしめつけている。折れ曲った苦しいポーズにたえて、淑子は切なげに私の行動を待つかのようであった。

苦悶の肢態の報酬を待ちうけるように、マダム淑子は、ヒタと陰を閉じて、私の何かを心待ちしている。カメラにこだわら過ぎて、私は若干、サービス精神に欠けていた。鮮烈なポーズを撮りまくる感覚に支配された原因が、田中洋のいうフルコースにこだわっていたのであるうか。近頃の私にしては珍しく、緊縛のポーズを沢山変えて、とっている。それは、淑子を私に紹介してくれた、田中洋に対する。プレイへの報酬につながっているようであった。

李下に冠を正して、瓜田に沓を踏み入れるべく、私は低位置にねそべると、甘い蜜の味

を求めて、顔を近付けていった。それからの行為は、もはやポルノの分野であろう。

桃源境とは読んで字の如く、桃李のみなもと。熟れて豊醇な甘味を存分に味わって、私も亦、その秘境に長々と遊び戯れた。

淑子はキリキリと歯を噛みしだき、苦悶の縄目に身を任す、その緊縛の被虐に酔い痴れて、五感の疼きを、露に曝して、鳴悦をほとばしらせて歓喜にむせんでいた。

口走る、あらぬ言葉は憚って書けない。絶頂を突っ走る淑子の、その時、うわごとの様に洩れる言葉の、はしばしに、

「ひろし……ひろし(洋)」

と愛人の名が、こらえようもなく連呼されていたのであった。

x x x

この縄は、堅くごわついていた。幾度か水を潜ったためである。

その一本の縄が、淑子の上半身を、縛と縛り上げていた。

恍惚の過ぎ去ったあとに、次のコースの、クリスタールが待ち構えていた。

物懶げな眼は、性の飽和のあとの、たゆたう余韻――。

ぐったりした身を私に委せきって、女は為



すが尽に縛らせて、羞恥を抛擲してべったりと腰を落としていた。

「バスへゆこう」

「どうするの？」

「流腸だよ」

「本当にするの？」

「ああ、腸内のものを、すっかり出しきるまで見届けてやる」

うなずくと、思考力を放棄したように、縄尻をひかれて、やつこらさと立ち上がった。のろのろと二人の行進はバスにつづく。

湯は既にぬるくなっていた。縄ごと、バスにドップリとつける。

「入らなァい」

「ウン、入りたいが、撮りたいのでね。あとから……」

「もう、いいじゃない」

「彼との約束さ」

女はカメラに対する執念に、フツと嘲笑に似た笑みを泛かべて、静かに湯につかった。

田中洋にかこつけて、私はカメラを駆使して流腸シーンと撮ろうと、もくろんでいた。

軽便雲台を、入口のかまちにとりつけてカメラを据え、長尺レリーズをひいて準備を終え、引返して流腸器をとり出してくる。数日前、渡部光雄が来訪した時、エネマシリンジ

をやってしまった生憎持合わせのないのが残念であった。近頃の私のプレイには、クリスタールは、まるで必須条件の様に、しばしば登場する。V感覚に、いつしか麻痺した昨今より羞恥の極を求めて、A感覚を好むように

なっていた。三浦純子とのひとときにも、かなり私はその趣向を前面に押し出していた。

振舞いの不自由な淑子を、縄尻掴んでバスから上がらせると、クリスタールし易い、膝立てで上体を屈曲させたポーズをとらせる。洗桶に湯を汲みとり、石鹸をとかして攪拌し、即席の浣腸液をつくり上げる。

「彼からされたこと、ある？」

「ええ」

「たびたび、された？」

「そう、四、五回ぐらいかしら」

「どう、いやな気持？」

「最初のうちはネ。でも、なれちゃった」

「彼はA感覚を好むの」

「サドの『悪徳の栄え』を読めといわれて、理解出来たわ。お客の話で、ホモの連中ばかりかと思ってたけど、そうでもないのね」

「分かってるんだなあ」

「田中に教え込まれたのよ。頭あげていい？こんな恰好で喋るの苦しいわ」

「じゃあ、実行だ」

レリーズを足許に引き、ポンプ一杯に液を汲み上げて注入してゆく。その刹那に、私の心は異常に騒いだ。神経の緊張を覚え、私は立てつづけに注入をつづけてゆく。淑子の反

応は少なく、従容として受けている。クリスタールの行為自体、彼女のリビドーを昂めるまでにはゆかなかったようであった。

カメラアイに入り易いよう、姿勢を変えさせて、バスに向かって股一杯に開き、上体がかめさせる。

五〇ccのポンプで六回、未だ三〇〇ccの注入しか終わっていない。エネマなら、一挙に一〇〇〇ccぐらい注入出来るのにと、もどかしく感じ乍ら、嘴管の操作をくり返す。

「未だ終わらないの？足を一杯に開いているので、お湯の中へ体がのめり込みそうよ」

「じゃあ、これくらいで、よそう」

大体五〇〇ccぐらいの注入を果たして、じっと注入後の変化を観察する私。

「出そうよ」

「ここですれば、いいじゃないか」



「ザブザブ、湯を流せばいい」

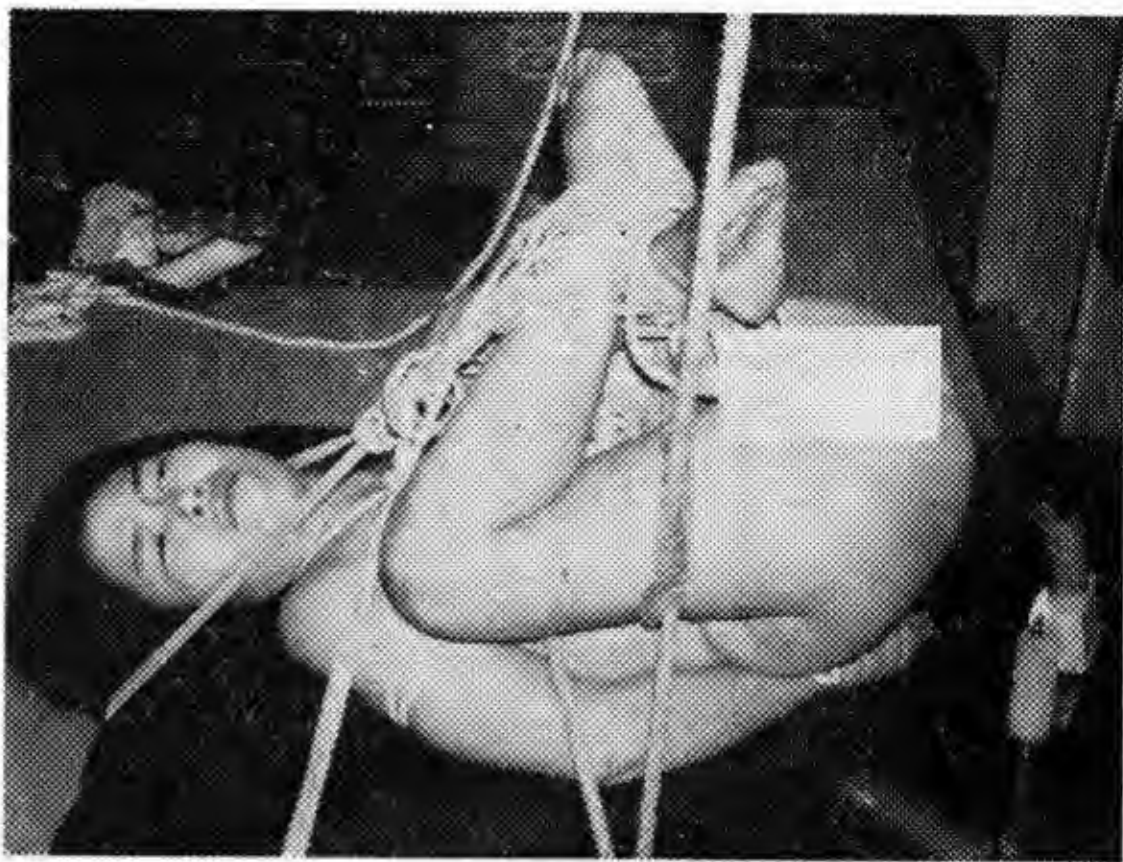
「ウン、意地悪いわなで、トイレへ行かせて」

「みたいなあ」

「トイレでみればいいじゃない。ああ、少しおながが痛くなって来たわ。もっと我慢するの？」

「限界ぎりぎりまで」

「あのね、うちのお客さんに、汚物崇拜症っていうのね、ヘンな人がいるの。浣腸した私に、顔に跨がって、腰かけて欲しいというの



「じゃあ、いいや。トイレへ連行しよう」

カメラを雲合から外し、肩にかけてトイレへ直行すると、しゃがみ込んで決定的瞬間にカメラを構える。

待てしばしもなく、激しい吐瀉の音と共に、白い陶器に褐色の飛沫が散った。

流石に愧じて、肩でコックを押し、一挙に流してゆく。田中洋の飼育の結果は着々と現われて、初めての出会いで、私は排泄のシーンを余すところなくカメラに納めた。

「もういいわ」

うなずいて、ペーパーを長く切ると丁寧に潔めてやる。縛っているとはいへ、払拭の行為は、フェミニスティックなマゾの行為に、どこか似ていた。

再びバスに引返すと、私はクルクルと、ランニングとパンティを取り去り、余り広くもないバスに淑子と二人、身を沈めた。飽くまで自由を奪った尽で、体を洗ってやり、とりわけ、クリスのあとは、幾度もシャンプーで洗い潔めるのであった。湯を一杯に吸った縄は、かたく解き難い。

やっこのことで解き放つと、二の腕に、手首に、縄痕が赤々と染め上がっていた。

自由になった淑子は、いそいそと私の背後に回って肩を流す。しばしのためらいのあと前面に回ると、石鹸の泡を一杯に立てて、巧みに洗うのであった。田中洋が、いつもそうさせるのか、至極、当然のように洗い終わると、両手をうなじに回し、自ら唇を近づけてくる。(男殺しのテクニック) フト、そんな感懷を抱いたが、私は淑子の能動的な行為の為すが尽に任せていた。

彼女の自由を奪っている間は、私の思うようになるが、一旦解放されると、何がなし彼女にリードされている自分を発見する。主体性を保つには縛るに限ると、かなり執拗な女の唇を離して、女体を押しのけるようにして立ち上がる。

軽い失望の眼の色を無視して、私はバスから上がる。裸身に扇風器を当てていると、後を追うように淑子が私の背後に立つ。

既に女の心は、濃厚なファックに傾斜しているかのようであった。

「ねえ、横にならない？」

「いや、この尽でいいよ」

誘いの言葉を外して、私は煙草をふかす。

よ、真剣な顔で……」

「本当はやってみたいのだろう。あんたには幾分Sのけもありそうだから」

女は淫らな笑みを泛かべて、チラリと片眼をつむった。

「まだ、いけない？ 出そうなの」

相当のフィルムを費消したが、後もう一息SM的なセクシャルなプレイに耽溺してみたかったのである。

独りシートに寝そべる淑子は、確かに焦燥を感じていた。その傍に転がれば、当然の結末は火をみるよりも燎らかである。木石ならぬ身、それはそれでいいとしても、私にとっでは、今一息、私自身の手で、女体の深奥を探究したい気持、しきりであった。

「疲れたかね」

「ええ、少し」

「ここへ来ないか」

「どうするの？」

「この部屋の手摺に縛って、あんたを飲ばせてやりたい」

「芯から好きなのね、縛るのが……辻村さんは、縛ると、セックスとどちらが好き？」

「どちらも……」

「じゃあ、ここへお出でなさいよ。あたし、疼いているのよ」

「こちらへこいよ。縛って苛めたくて、ウズウズしてるんだ」

「あーあ 負けたわ」

淑子は憶却そうに立ち上がると、のそりと私の傍に近づいてきた。

「ここへ仰向けに寝るのだよ」

「こう？」

大きく大の字に寝そべると、私の情熱を刺激するかのよう、わざと、だらしなく足を大きく開く。触れなば落ちん風情に女は欲情している。彼女にとって、M的な被虐の行為に甘んじるのも、所詮は変形的な前戯の如く考えているらしかった。

男は一回しか勝負出来ない。勿論、年齢の差によって、大きい相違はあっても、時間の制限が、焦れば焦るほど萎縮してゆく時の方が多かった。SMプレイを有効に使って、さてその一回を、どこで果たすべきか。それが私等中年層の課題でもあった。

淑子の両手を手摺に縛りつけ、両脚を開股させてこれも手摺へとつなぐ。

そこで私は、いよいよバイブレーターの力を借りることにした。

靴ごと身近く引寄せ、小型パイプを始め、グラインドするアラビア人形、尖端が取替え出来るパイプなど、各種をとり出すと、手始めに小型パイプを選んだ。

ピクツとして女は身をよじり、それ



が、心待ちした愛悦の手段と知ると、忽ち体を震わせ、精一杯の声を張りあげて、喜悅に咽び泣き始めたのであった。

その声に抑圧をかけるべく、赤いローソクに点火すると、口中深く突っ込んで咥えさせる。再び、パイプは、小刻みに震動をつづけ

る。

アラビヤ人形のリモートコントロールのボタンを押すと、微かな電動音を響かせて、アラビヤ女は巧みなグラインドを始める。

乳房を愛撫し、グラインドに任せて、私は淑子の喜悅に狂奔する痴態を、冷静にみつめていた。

女は貪婪である。幾度かアクメを彷徨し、激しく肉を燃焼させても、すぐ又、次のアクメの上昇を希って狂奔する。

単調な縛りにあきたらず、私はいよいよ最後の大詰め、緊縛へと思索を練っていた。

縄を解いても、ぐったりして起き上がれない。それ程に幾度か歓喜の絶頂を彷徨しても女には余力が残っている。半ば抱きかかえるようにして、元の居間へ引返す。二本の吊縄は依然としてその俛で、数多い縄が、奮斗のあとを物語るかのように散乱していた。

上半身に素早く縄をかけ、重い紫檀の机を吊縄の下へ移動させると、彼女を机上にねかせつける。

海老責めのポーズにして、雁字搦目に縄をかけると、机の足へ、ぐいぐいと引っ張り、膝頭が乳房を圧するまでに屈曲させ、かなり苦しいポーズをとらせた上、ゆっくりと太い

ローソクに火を点じた。

人間燭台——双丘に蠟火は、ゆらゆらとゆらめき、じじじと蠟燭が融けて、溢れた蠟涙が、ツツと白蠟の円柱を伝って、底辺の空隙を埋めてゆく。

熱さに耐え切れず女は呻き、ぎゅぐゅと身動き出来ぬ女体を懸命にねじる。

ローソクを取り上げて傾けると、ポタポタと、容赦なく熱涙は、敏感な皮膚に尾を洩いて流れていった。

淑子のひたいに、じつとりと脂汗が浮かんでいる。

凹地を平面に埋め終わって、フツと吹き消し、しばらくして、そっと取り出すと、鑄型ならぬ肉型が、奇妙な、いびつをみせて出来上がっていた。

フーツと大きな溜息を吐き出し、

「熱かったわ」

と、女は淫靡さを一面に泛かべて、ポツリといった。

「みせてやろうか」

奇妙な、いびつの肉型を彼女の眼上でかざすと、すっと薄眼を開き、チラリとみやって彼女は、さしたる感慨も催さず、そっと眼を伏せた。

「余り興味なさそうね」

「どうってこともないでしょう」

ボソと答えて、背の下になった両手が痛み出すのか、しきりに身をよじるのであった。

「痛いのか？」

「ええ、机がとっても堅いでしょう」

「少し、ゆるめてあげよう」

無理もないと、のしかかるようにして尻をあげさせ、両手の縄の結び目をといてラクにしてやった。緊縛も痛みの方へ心走らせていては、快楽は半減してしまうからであった。

どの様にでも、自在に出来る、むき出しの双丘——。

散った蠟骸が、その周辺にこびりついていて、私を、私は一つ一つ、丁寧に、はがしてやったら、最後の一縷のチャンスを求めて携帯用の詰替容器にいれてきた、油性の強いコールドクリームを、たっぷり塗ってつけた。その作業だけで、中枢神経は騒ぎ始め、俄に激しい意欲が、もりもりと湧き上がってくるのを覚えるのであった。

「呀ッ、い、いたッ……やめて——」

激痛を覚えて、淑子は俛ならぬ身を激しくよじる。

あきらめた指先が、ぬめつくコールドクリ

ームにまみれていた。どうしてこんなことになったのか、自分でも分からない。アブの極致を求めて私は、いつもそうした不快の羞恥と屈辱に挑戦しようとしては、自ら敗退してゆくのであった。

「お願い……。じらさないで……」

哀願の口調で淑子は叫ぶ。

海老縛りの、強烈に引き絞っていた、交叉した両足をとき、吊縄に足首を左右一杯に開いて吊り下げると、男にとって、いな私にとって、一回残されているチャンスを活用すべくこの決適な緊縛のポーズに向かって挑んでいたのである。

ファック…ファック…(fuck…fuck…)。

ラブ・ジュースが一杯だ。

× × ×

緊縛のフルコースを辿り、ラブ・ジュースのデザートで終わった時、私も淑子も、心身共に消耗していた。

延々三時間半に亘る奮斗に、私は心底から疲労を覚えた。

裸身を大の字にノビている私の姿が、唐紙一杯の大鏡に、敗残者の様に映じている。

「疲れたね」

傍に寝そべる淑子に、上を向いた俤、声を

かける。

「ええ。こんなモーレツなプレイ始めて……でも、すっかり甘受したわ」

筋肉が痛むのか彼女は、そっと、二の腕や膝関節を揉んでいた。

「在りの俤、彼に報告する？」

「そのつもりよ。いけない」

「いいよ、フォトがすべてを証明している」

「田中は、いったわ。私と田中、そして辻村さんと誰かさん。こんなカップルで、SMプレイのスワッピングがしてみたいって」

「となると、交換の相手は、あんたになる」

「おイヤ？」

「嬉しいね」

「でも田中の好きになりそうな女の方、連れてこないでね。移り気だから、その人、好きになったら困る、ワタシ」

「ブスじゃ、彼が気に入らないだろうしね」

「フフフ、こんなこと心配していたら、プレイ出来ないわね」

「あんたはよくよく彼に惚れ込んでいるんだな。ヒロシ、ヒロシと夢中で叫んでいたよ」

「ウソッ。云わないわ」

「その時、女は夢中で、好きな男性の名を呼ぶということだ」

「本当にいったの？」

「ああ、呼んだよ、ヒロシって」

「いいわ、やはり田中に惚れてるんだ。辻村さんには悪いけど」

「悪くないさ。あんたは確かにプレイを甘受した。プレイを甘く受けとめるか——いい言葉だ」

マダム淑子は、小声で羞かしげに、

「ねえ」

と身をくねらせて、ぐいと体ごとすりよせてきた。

とても、とても……。淫乱ではないが、余りの好き心の女に、私は途方にくれて、身を引いていった。

あきらめたのか、伸ばしてきた手を引き、

「じゃあ、近いうちに又、会ってくれる」

と、猥らに囁きかける。

「彼にきいてくれ。あんた、私にそういわなかったのかい——」

幾許かの懼れをなして敬遠すると、

「ウーン、意地悪。もう帰さないから」

およそ名前にふさわしくない、マダム淑子は、激しい眼で、私を掻き抱いてゆすった。

——(おわり)——

懸賞応募創作

悩ましきミニの妖精

工 月 洋

紺色のミニスカートの包まれた二十才位の娘が、私の目の前で会食の膳を並べだした。その若い娘が、ヒップを私に向けて前屈みになり、膳の遠くの方に皿を置いた時だった。紺色のミニスカートから、純白の幅の細いパンティが現われ出た。

私は、岩山の中から紫水晶を見つけ出した時のような、心ときめきを感じた。だが、すぐに、その紫水晶は見えなくなってしまう



カット・春川ナミオ

た。でも私の脳裡には、純白の幅の狭いパンティが、むっちりしたヒップに喰い込んでいく様が、写真のように焼き付けられていた。娘が皿を並べるたびに、ぷりぷりした若い娘のヒップのあたりで、ミニスカートが上下した。私は、また、ミニスカートの中が現われはしないかと、そこから、瞬時も目を、そらさなかった。

私は、同じ課の者と共に、この社員会館で

会食することになり、部屋の片隅で、寛いでいる時、食膳を作りに来た会館の女社員の魅力的な箇所を拝見できたのである。同じ課の者の三人は煙草を燻らしながら、雑談に夢中らしい。私は、娘の背後から、ヒップとミニスカートの突き出ている太股の辺りに、目を注ぎ続けていた。彼女が膳の遠くの方へ皿を置きだしたのだろう。すうっと、紺色のミニスカートの上がりだし、待ち焦がれていた純白の幅の細いパンティが、姿を現わしてきた。その時、白いむっちりしたヒップの山の部分が、擦れたように赤くなっているのを見した。

「ねえ、キミ」

私は思わず声をかけた。娘は、ふりかえって、何ででしょうか？ という表情で頭をかしげた。

「何故、ヒップの先が赤くなったの？」

と、尋ねたかったが、その後は、もう、ミニスカートの中は現われなかった。

「あのう……キミ、綺麗だね」

「そうですか？」

娘は、八重歯で、にっこり微笑した。私はさらに、

「君のミニの中は素晴らしいね」

と、言いたかったのを、やっとのことで我慢した。

その日は、私は、何か大変良い目に遇った気がして、心が晴れやかになった。その為か会食後のマージャンの時も「今日の係長さんは、感じが冴えていますね」と感心されるほど好調だった。

○

私が夕方、道を歩いていると、ガソリンスタンドから、黄色いミニスカートの包まれた娘が飛び出して来た。

いまにも、パンティが見えそうな超ミニスカートの。私は思わず知らず、その娘を追っていた。何かの拍子に、ミニスカートの中が見えはしないかという期待に、胸をときめかしながら……。

ピンクの太股の上のヒップが、歩くにつれぷりぷり動いていたが、遂に、ミニの中は見えず、娘は、バス停の方へ去ってしまった。

ミニの中は見えなかったが、せめて、あの魅力的なミニスカート姿だけでも、いつまでも眺めていたかったのに……。私はその時、今後、こんな姿を見つけたら、写真に納めておこうと心に決めた。

早速、カメラは、いつも持って歩くことに

した。

町中には、ミニの娘が氾濫しているので、撮りたいミニの娘を見つけることは、そんなに難しい事ではなかったが、カメラを顔の所へ持って来て、ピントを合わせてから撮影することは出来ないで、右手で、カメラを腰の辺に位置させて撮影した。辺りの人からは、写真を撮っているように見えてはいけな

いので、なかなかうまく、ミニ姿が写真の中に入ってくれなかった。

しかし、何度も何度も撮っているうちに、なんとか、うまく撮れるようになってきた。小さいカメラの方が、そんな撮り方をしやすいので、ポケットに、オリンパス・ペンという小型カメラを忍ばせておき、機会あるごとに撮ったおかげで、失敗も少なくなったのでカラーで撮ることにした。

○

休日には、カメラをポケットに忍ばせて、繁華街や公園の辺りを徘徊しては、ミニ姿を求めて廻った。

テレビによると、最近、ストッキングをガーターベルトで留め上げている者は、殆どなく、パンティストッキングを穿いている者が多いそうだ。ミニの下が、パンティスト

ッキングで防備されていると思うと、ミニの下に魅力は感じられなかった。

そのうちに、夏が近づき、ノーストッキングも見かけるようになって来た。外見からはストッキングをガーターベルで吊っているのか、或は、パンティーストッキングを着けているのかは判別し難いが、被写体の第一条件はノーストッキングという事にした私は、風呂屋の行き帰りの娘に、ノーストッキングが多いことを発見し、そんな場所での、魅力的なミニ娘を探し、写しまくった。

○

家で、秘かに、焼き付けのできたカラー写真と並べてみた。壮観であった。ミニも色とりどりで、太股の出方も様々だった。どの写真にも、撮った時の思い出が伴っていた。でも、もう少しというところなのに、パンティが見えないのが残念だった。そんな写真の中で、一番、魅力的な写真を選び出した。

それは、先週の日曜日、午後四時頃、郊外に近い風呂屋の辺りで撮った、風呂へ行く娘の後ろ姿であった。えんじ色のワンピースから、白いむっちりした二つの太股が剥き出てもう少しで、パンティが見えそうである。すべすべした若い女の精気が薫ってくるようだったことが思い出された。

ったことが思い出された。

画用紙を取り出して来ると、その写真と同じ姿を色エンピツを使って描き上げた。但しミニだけだ。写真より、少し短かく描き、双丘に、ピンクの細い幅のパンティを喰い込ませて仕上げた。

さらに、えんじのミニのワンピースは、そのままの着丈で着せて、その娘が股を広げたところの前姿も、想像して描いてみた。勿論ピンクのパンティを喰い込ませることを忘れなかった。

その絵を、私の顔にすり付けてみた。そして、私は空想にまどろんだ。

「どんな気持がしますか？」

鈴を鳴らすようなミニの娘の声だ。

「うん、とってもいい気持だ。それにいい匂いもあるね」

「そうですか……よかったら、股で顔を挟んであげましょうか」

「是非、そうしてくれ」

そこで、私の脳裡に浮かんでいた娘の姿は消え、眼前には、なまめかしいミニの絵と写真があるだけだった。今のような空想が現実になってほしい思いで、私の心は一杯になった。

○

繁華街で、白いミニのワンピースのぼつちりとした感じの娘を見つけた。むっちりとした、うす桃色の太股が、妖精のように元氣よく動いていた。可愛らしい足先は、サンダルで包まれていた。ストッキングを穿いていない。

私は、急いでカメラを取り出し、さりげなく二枚ほど撮った。

むちむち動くヒップと太股に魅かれて、四米ほどの距離をあけて、憑かれたように追って行った。しばらく行くと、一度、ぼつちりとした目がちらりと振り返り、濡れたような赤い唇が小さく開いた。いかにも私を誘っているようである。私は、もう一枚ヒップを中心に撮った。

彼女は百貨店に入り、女性用化粧室の中へ入った。私も、その後を追って化粧室の戸を開けて、はっと、我に返った。男性の私が入れる筈はない。

その写真を焼き付けた後、彼女が白いミニのワンピースをはぐり、うす桃色の太股を広げてトイレに跨がっている処を画用紙一ぱいに描き上げた。斜め下から見た角度にして、少し黄色い染みの付いた水色の網の月経帯を

ぴっちり締め付けるように穿かせた。

それで私の顔の上を、ぴっちり覆ってくれたらなあという願いをこめて描いたのだが絵の娘は動いてくれなかった。せめて少しでも叶える為、私は、その絵を、私の顔に被せた。そして、夢想の世界に入ってしまった。

「苦しくありません？」

「いいや、もっと押し付けてくれ」

「これでどう？」

「もっと強く頼む」

「じゃあ、これではどうです？」

彼女は、私の顔の上で腰を振ってくれた。

「うん、最高だ」

そこで夢想は終わった。絵の娘はケロリとしているようだ。何だか空しかった。

○

私は、予てから習得していた女装姿で、魅惑のミニ女性を撮影することにした。こんどは化粧室までもついて行けるだろうと、胸をときめかせた。

知り合いの娘に出合うこともあったが、こちらが女装故、むこうは、私が誰であるか気が付かないらしい。知り合いの娘のミニ姿を撮る時は、特に心がときめいた。写真に納めてしまうと、なんだか、その娘を自分のもの

にしたような気さえた。でも、そんな娘のミニの中を垣間見る機会には、なかなか巡り会えなかった。

そんな頃、以前、怪我をした時、病院で私の手当てをしてくれて知り合いになった若い可愛らしい看護婦が、ピンクのミニスカートに包まれて、繁華街を歩いているのを見かけた。赤いサンダルを履いた足には、ストッキングを着けていない。

私は、素早く写真に納めると、心をとめかしながら後を追った。今度こそ、ミニの中が見れるチャンスがあるような予感がした。お昼頃だった。その娘は、小綺麗なスナックに入って行った。私も後を追って入った。客は少なかった。若い看護婦はカウンターに坐った。その娘の側に私も坐った。意外にも娘は、ぐいぐいビールを飲み始めた。彼氏と待ち合わせているのでもないらしい。

私は、勇気を出して話し掛けてみることに心を決めた。

「あら、お久しぶりですわね。その節には、たいへんお世話様になりました。その後も元気ですか」

予てから練習済みの女性用の声を使った。若い看護婦は驚いたように、私の方に、眉の

濃い、ふっくらした顔を向けて、しみじみと眺めていた。私が誰か判らないらしい。私が女装故、無理もない。

「おわすれですか。工月ですよ。あの節には、右太股と右手の怪我をして、貴女にお世話をかけた者ですわ」

と、右腕を捲って見せた。

「そうですか」

若い看護婦のみずみずしい唇は、元氣なく動いた。

私は、娘にビールを勧めながら、怪我のその後の様子と病院での経験を話した。娘は、確かに私が当病院の患者だったと納得したのか、彼女から進んで最近、扱った怪我の話をしだした。かなりビールと話が弾んだ頃、

「実は私は男性なんですよ」

と、女装を打ち開けた。

若い看護婦は驚いたような好奇心に満ちたような、ぱっちりした目で、まじまじと私の顔を見ていたが、

「感心しましたわ。うまく女性になれていますわね。そういえば思い出しましたわ。貴方は私の担当でしたわね」

娘の白いふっくらとした頬が綻んだ。そんな若い看護婦の様子に、私は、勢いを得て、

ミニスカートに魅かれていることや、その姿を下から見たいと願っていることを話してみた。

「まあ……そうでしょうね。近頃の男性は可哀想ですね。いつも、ミニ姿に挑発され続けているのですもの」

看護婦は、同情したような表情だ。

「そうなんです。ミニスカートは大好きですが、そのため心が悩まされるのには困ります。殊に貴方のような美しい人のミニだと堪まりませんよ」

私は笑った。

「そんな貴方の心を、看護してあげましょうか。私、アパートに、友達と一緒に居ますのよ。そこでなら、ちょっとだけ見せてあげられるでしょうよ」

ビールの為か、少し呂律は乱れていたが、若い看護婦のぱっちりした目は生々と輝いていた。

願っても無いことである。幸運がとび込んできたのだ。看護婦の気が変わらぬうちにと急いで、彼女の勘定も払ってやり、すし折りの手土産を作らせてから、タクシーで彼女のアパートに駆け付けた。私を彼女の叔母ということにしよう、と彼女は言った。アパート

の部屋に入ると、

「お帰りなさい」

若い娘が迎えてくれた。病院で見たような顔である。

「叔母にお会いしたから、お連れしたのよ。疲れていらっしゃるようだから、少し休ませてあげようと思うの。いい？」

友達は頷いた。

私に枕を出してくれてから、看護婦は、ちよつと片目を瞑ってみせた。彼女の叔母である私は、眊を横たえた。

彼女は、私の顔の前で前を向いて坐った。

すべすべした白い両太股の間から、純白のパンティが眩しいように覗き見えた。

若い看護婦は立ち上がった。娘の匂いと化粧の香が微かに漂って来た。ピンクのミニスカートの中の純白のパンティから、むっちりした滑らかな白い肉柱が突き出ていた。私は自然に溜息が出た。私の生理が異常を示したのを感じた。

暫くして彼女は、また私の近くにやって来て、後ろ向きになり眊を前に曲げた。むっちりとしたヒップに密着した純白のパンティがピンクのスカートから現われてきた。私は思わず彼女のヒップに向かって手が出かけた。

とたんに振り向いた彼女が言った。

「私、買い物をお願い出したわ。叔母さんも、一緒に行きませんか？」

仕方なくアパートから出ると、私は彼女に千円を塵紙に包んで渡した。

「今度は、ミニの中に顔を入れさせてくれませんか」

「いいえ。私、もう、あんな事したくありませんわ。今後は絶対に、ここへいらっしゃらないように」

と、言うが早いか、若い看護婦は、小走りに、アパート内に入ってしまった。

私は、ポカンとして見送るより仕方なかった。

○

それから、十日位後だったろうか。バーで馴染みの絹子に、先日の看護婦の話をした。勿論、病院名も看護婦名も言わなかった。

「そうなの、最近の若い子は大胆ね。飲み代を奢らせたうえに、千円も取ったのね。私達が顔負けするわ。ねえ私達が見せてあげようか。看護婦よりサービスは良いわよ。よかつたら、一人二千円でやってあげるけど」

私は勿論、願ってもないことだと告げた。「でも条件があるのよ。私の条件はね、貴方

読者ギャラリー 『想念』 岡 たかし



を拘束した姿にしてから、してあげると言うことよ。いいこと？」

私は承知した。可愛い絹子に拘束されるのなら、むしろ嬉しい気がした。

約束の日、私は、いそいそとして絹子のマンションを訪れた。

赤い絨毯の上のえんじ色のソファに二人のミニ姿の若い子が坐っていた。私は、間もなくこの若い子のミニの中に接しられるのかと思うと、胸が躍り始めた。やはり来て良か

ったと思った。

絹子の、ぼけの花が咲いたような唇が動いた。

「私の条件を受けてくださるわね」

拘束するという条件を、念を押されると私は少し心配になって来た。だが、馴染みの絹子のことだし、取り越し苦労をしていたら望みは果たせないと思い、了承した。

「まず、手を後ろにしてちょうだい」

私が言われた通りにすると、いつのまにか

私の後ろに回っていた若い子の柔らかい手が触れてきたと思うと、冷たい堅い物が両手首に喰い込んだ。

「お客さんにもらった玩具の手錠よ。……さあ、しゃがんでごらんなさい。ちょっと、あれも、もって来て」

あれとは何だろうと思っていると、赤いワンプイスの若い子が、生ゴムで作られた防毒マスクのような物を取り出して来た。

「工藤さん、口を開けてちょうだい」

いきなり、生ゴム棒が、口の中に突き入って来た。それから、両唇をぬめりとした生ゴム板が押えつけて来たかと思う間もなく、生ゴム帯で両頬を締め付けられ、後頭部でピシッと留められてしまった。

口を内外からびっしりと拘束されると、息をするのも苦しくなったように感じた。

「工藤さんが、私達に噛みつきでもしたら困るので、留めたのよ」

絹子は、私の仮名の工藤という名しか知らない。生ゴム嵌口具で締め付けられ、後手に手錠で繋がれて、しゃがんでいる私を笑顔で眺めながら、

「この人、面白いでしょう。こんな姿にされてまで、ミニの中が見たいのですって」

白いミニのツーピースに、ぴっちり包まれた絹子は、他の二人の若い子に向かって、笑いながら言った。

「それでは、やってあげましょうか。……工藤さんは、そうして、しゃがんだままにしていらっしゃいね」

赤いワンピースと、紫のツーピース、白のツーピースの三人の娘は、私の前で、横に並ぶと、いっせいに、ミニを捲って見せてくれた。

赤いワンピースの若い子の、すべすべした小麦色の股肌には、ピンクの網のパンティが密着していた。月経帯だ。紫のツーピースの娘には、幅の狭い純白のパンティが嵌っていたが、肌に張りが無いのが、残念だった。白いツーピースの絹子は、ピンクのパンティを穿いていたが、嬉しいことに、あめ色のストッキングをピンクのガーターベルトで留め上げていた。

「私、暑いけど、わざわざガーターベルトを着けてあげたのよ。工藤さんは、これの方が好きなんだろう」

私は口中和両唇を生ゴムでぴしりと拘束されているので、言葉で答えることはできないので、頷いて見せた。

「今度は、ミニの中に顔を入れさせてあげようよ」

絹子のむっちりした白い太股が近づいて来て、目に、くっつくように近づいた。すべすべしたピンクのパンティがピンクのガーターベルトの許で息づいており、甘ずっぱい香りも薫って来た。

絹子のミニスカートの中で、しゃがんだ姿勢の私は、生ゴムで締め付けられた顔を左右に振ってみた。すべすべした感触が顔を撫でた。

「擦ったいわね」

絹子のむっちりとした両太股を抱き締めたかったが、後手に繋いだ手錠がそうはさせてくれなかった。生ゴム嵌口具を装着されているので、唇で絹子の肌を触しむことも出来なかった。

他の二人の娘も、同じようにしてくれた。

「次は何をしてあげようかね」

ちょっと絹子は首を傾けた。そんな姿も、あどけなくて、可愛い。

「工藤さん、寝転がってごらんなさい」

手錠で後手にされると、寝転がるのも簡単にはできない。仰むけになると手錠の鉄が痛いので、横向きに寝転がった。そして、今度は

何をしてくれるのかと、期待に胸を膨らませた。

「上手に横になれたわね。工藤さんは、いい子だね」

絹子が近づいてきた。あめ色のストッキングの奥でピンクのパンティが蠢いていた。絹子が白いミニスカートの裾を広げたかと思うと、ピンクのパンティが覆い被さって来た。

柔らかく弾力はあるが、私の顔は押し潰されるのではないかとさえ思えた。絹子は私の顔に腰掛けたいらしい。息をするのも苦しかったが、絹子の体温を吸った甘い薫りのする空気は美味しかった。私の顔を圧する絹子の弾力ある重量のもとで、私は恍惚となった。

他の二人の娘も同様にしてくれたが、絹子の時が一番快かった。赤いミニのワンピースの娘の、ピンクの網の月経帯で顔を押し潰された時、その子が、

「あら、おじさんたら」

という言葉に、私は初めて興奮しきっているのを自覚させられた。

「工藤さんも苦しそうだし、私達もお仕事があるので、今日は、これで、お終まいにしましょうね」

私は両手も使えず、唇も使えなかったので

何か物足りなかった。三人分の六千円も惜しいような気さえした。

次の夜、隣室で、一人子の、小学四年生の女兒が熟睡した頃、私は妻の太股に、昨夜の感激を再現しようとしたが、やはり、妻では心のときめきは薄かった。

○

暫くして、また、絹子のいるバーに出掛けた。絹子に、また、先日したようなプレーをしてくれないかと頼むと、

「きつと、また頼まれると思ったわ。でも、この前より程度の高いのを望んでいるのですよ。……ほら、図星でしょう」

絹子は、意地悪っぽく笑った。絹子が、私の気持を見透かしているようなので、気圧されたようになりながら、

「そうだよ。今度は両手と、唇を使わせてくれよ」

「そう、いいわ」

絹子のみずみずしい唇は案外あっさりと承知してくれた。私は今度は両手と唇を使ってミニの中を満喫できそうだと思うと、ぞくぞくと嬉しくなって来た。

「でも、千円値上げよ。いいこと？」

「承知した。でも、この前のように三人も居

なくてもいいよ」

「判ったわ」

楽しそうに絹子は応じてくれた。

○

約束した日に、私は、わくわくしながら、絹子のマンションを訪れた。

この前、赤いミニのワンピースの中で、ピンクの月経帯を嵌めていた若い子が今日は緑色になったワンピース姿で迎えてくれた。

「今日は二人だわよ」

絹子の、ぼけの花のように、ぼっちりとした両唇が動いた。

「それから、両手、両唇も自由にしておげる約束だったわね」

絹子は、私の要求を忘れていない。そんな絹子が、いっそう愛しくなった。

「マミさん、あれ持ってきて来て」

この前の時のようなゴムの猿轡なら、使わない約束だかと思っていると、やはり、生ゴム製の物を、緑色のミニのワンピースの娘が持ってきた。彼女が、それを置く時、ちらりと緑色のミニの中から、あめ色のパンティが覗いた。

「工藤さん。これを穿いてくださるわね」

「今日は猿轡は付けない約束だったろう」

「こんな大きい物は猿轡になりませんわよ。……工藤さんの腰に穿いてもらいたいよ。穿いてくださるわね」

私に断わることを許さない調子である。私は、それを手に取ってみた。生ゴムで作られていて、貞操帯のような形をしているが、内側に、太い生ゴム棒と極く細い生ゴム棒が付いているのが不可解だった。

「この太い棒と細い棒は、どうするのかね」「考えてくだされば、どうするのか判る筈ですわ」

私は、その使い方は判ったが、
「でも、こんなのは嫌だな。今迄こんな物を穿いたことはないし」

「なるほどね。そりゃあ、穿いたことはないでしょうね。でも、これを穿いてくれないのなら、今日のプレーは止めにするわ」

「じゃあ、細いのはだけは堪弁してくれよ」

「駄目ですわ」

絹子は、きっぱりと否定した。

仕方無いので生ゴム帯を穿きに掛かったが棒がとても痛かった。特に細い棒の方は厳しく感じられた。

「そう。工藤さんは良い子だわ。どう？ 案外、良い物でしょう」

絹子のぱっちりした目は、楽しそうに微笑んでいた。

「動く痛いよ」

「そうでしょうね。でも、それがいいのよ。」

それはね、こんな物を作っておられるお客さんに譲って頂いたのよ。でも、それを少し私が改良した処もあるけど」

「改良ではなく、改悪したのだろう？」

その言葉に、二人の娘は笑声で応えた。

「マミちゃん、あれ持って来て」

「まだ、あれがあるのかい」

私は、あれと言う物が気味悪い物のような気がした。緑色のミニのワンピースに包まれた鼻の高いマミと呼ばれた子は、電線の付いたスイッチを持って来た。

「それで何をするのかね。あまり非道いことはしないでくれよ」

「非道い事ではないのよ」

絹子は私に構わず、私の腰をびっしりと拘束している生ゴム帯に電線を装着した。

「このスイッチを押すと工藤さんの体に電気が流れるのよ。工藤さんが、ヘンな事したら電気を流すってわけよ」

絹子の声は弾んでいた。

「ちょっと試してみるわね」

途端にビリッと衝撃を受けた。

「矢張り、非道いじゃないか。電線は除けてくれよ」

「貴方がヘンなことをしなければ、電気は入れないわよ。だから、いいわね。肌を軽く噛むのは良いけれど、非道く噛んだら、電気を掛けるってわけよ。手でだって同じことよ。だから、工藤さんがヘンなことさえしなければ電線は少しも恐ろしいものではないのよ。承知してくれるわね」

絹子の、ぼけの花が咲いたような唇が懇願した。私は承知せざるを得ない気がして、頷いてしまった。

「いい子ちゃんね。それではプレイ開始。工藤さん、坐って頂戴」

何気なく、坐ろうとすると、電線付き生ゴム帯が私の体を締めつけた。私はびっくりして、ゆっくりと慎重に、赤い絨毯の上に坐り直した。

「ふっふふ、ちょっと可哀相みたいね」

「でも、これから、たとえ喜ばせてあげるのだから、いいわよ」

そんな事を愉快そうに話しながら、二人の娘は、私を見下ろしていた。やっと坐り終わった時、えんじ色のミニのワンピースに包ま

れた絹子が私の目の前に来て僅かずつ、えんじ色のミニのワンピースを上げだした。どんなパンティが現われるか、期待して待っていたことが始まりだした。だが、なかなかパンティは現われ出ない。ノーパンティかなと、ミニのワンピースと白い太股との境を見詰めたが、ミニは一センチ位までしか上がっていないので確かな事は判らない。何も無いような気もするし、或は何かあるような、気もする。少しずつミニが上がっていった。そして現われたもの、それは意外にもパンティの代りに、ぬめぬめとした生ゴムの巾広いT字帯だった。

「貴方だけに、生ゴムを穿かせているのではないのよ。わかった？ だから辛抱してね。もっとも、私の生ゴム帯だけだぞさ」

「辛抱するよ。辛抱するとも」

私は絹子の、生ゴムT字帯の紐を触ってみた。柔らかい感触は堪まらなかった。私は両手で絹子の太股と共に抱き締めた。跳ね返るような弾力が感じられた。えんじのワンピースの中は、若い女の温かさ、柔らかさ、滑らかさと甘い薫りで満ち満ちていた。絹子は生ゴムT字帯とえんじのワンピースしか身に着けていないようだ。そんな心遣いが、いっそ

ナミオM画廊 『服従宣誓式』 春川ナミオ



う私を有頂天にさせ、恍惚とさせた。思わず太股に唇を這わした。その時、ビリッと痛烈な衝撃を受け、我に返った。

「マミちゃん、工藤さんは、まだ、非道いことはしていなかったのよ。電気を入れたのは気の毒だったわ」

優しい声を後にして、絹子は離れた。

「マミちゃん、今度は貴方がやってあげなさ

いよ」

マミちゃんの緑色のミニのワンピースの中は生ゴムパンティが、びっちり嵌まっていた。そのワンピースの中で太股を抱き締め、めめめめした生ゴムパンティの端を引っばろうとした時、ビリッと激烈な衝撃を受けて、私は、ワンピースからとび出した。

「また、電気を入れられたのね。工藤さん、

へんな事をしたのでしょう」

絹子がからかうような様子で尋ねて来た。

「いや、べつに……」

「べつにじゃないわよ」

マミちゃんと呼ばれる子は、きつい表情で私を見詰めた。

「あまり、電撃を受けると、役に立たなくなるかもね」

絹子の、みずみずしい唇は囁いた。

「いいえ、却って若返るわよ」

マミちゃんの語気は、きつかった。

○

その後、暫くして、また絹子のいるバーに行くと、意外にも絹子の方から、プレーの誘いを掛けて来た。私は、嫌な予感を感じたが、もともと好きなこと故、承知した。

「それなら、今晚よ。もう直ぐ店も終わるから、それ迄、待ってね」

絹子の積極的なには驚くばかりだった。店が終わり、連れだって、絹子のマンションの近くまで来た時、いきなり、私の両手首に冷たい鉄輪が喰いついた。

「何をするんだよ」

「ねえ、工藤さん、それ掛けさしてよ」

「でも、人通りで、こんな物を掛けられてい

るのは体裁が悪いよ」

「人通りは殆ど無いじゃない」

私は仕方なく、前手錠の両手を、開襟シャツの下に隠した。

「今日の絹ちゃん、ちょっと、おかしいんじゃないかい？」

「いいえ、いつもと、同じよ」

絹子は、いつものように、ぼけの花の咲いたような唇を綻ばせて言った。

マンションの絹子の部屋に入ると、ほかに誰も居なかった。

「今日は特に良いことをしてあげるから、まず下を全部脱いでベッドにお上がりなさい。あら、御免なさい。手錠付きでは脱げない？そう、脱げるわね。では、脱いでベッドに乗って頂戴」

私は、期待と不安の混じった気持ちで、言われた通りにして、前手錠のまま、絹子の柔らかい豪華なベッドに上がった。

絹子は、えんじ色の洋ダンスから、木綿紐を取り出して来ると、私の両足に別々に木綿紐を括りつけた。

「どうするんだい」

と尋ねても、

「まあ、私に任せなさい」

と、言いながら、木綿紐を括り付けてしまった。

「足を拡げて頂戴ね」

絹子の優しい声には、逆らえなかった。絹子に依って、私の両足は大の字にベッドに括りつけられた。それから、手錠を外してくれしたが、直ぐ、その両手もベッドに大の字に括り付けられてしまった。非道い事になってしまったと私は流石に心配になって来た。

「心配することは無いのよ。工藤さんを喜ばせる為にやってあげているのですから」

私の心の不安を見透かしているような絹子の言葉だった。絹子は、さらに、まだ何かを洋ダンスから取り出して来たようだ。

「口を開けて頂戴」

私は、もう破れかぶれだった。絹子の言うままに、口を開けた。いきなり、口の中に、なんとも言えない味の、柔らかい物が飛び込んで来たかと思うと、ゴム棒も突き入って来た。大の字に固定された私は、それから逃げる術も無かった。唇にめめりとしたゴム板を押し付けられ、頬を生ゴム帯で締め付けられ後頭部で、ピシッと留められた。あの生ゴム嵌口具を嵌められたのだ。

「口に入れてあげた綿花は、私の生理を処理

したものよ。私、今、月経中なのよ。それは特別サービス品だから、よく味わってね」

こんな特別サービス品は遠慮するよと言いたかったが、もはや強烈な生ゴム嵌口具を嵌められた現在、それは叶わなかった。

絹子の柔らかいが弾力のある手が、私の腰の辺りにも、何か装着しだしたらしい。やはり、生ゴムの感触だ。あの生ゴム男性用貞操帯だ。なんとも言えない恥かしさだった。だが、絹子の手は容赦なく、たちまちのうちに装着されてしまった。私は全身をびしっと拘束されて惨めな思いに沈まされたが、可愛い絹子によって、こうして捕えられてしまったのだと思うと、痺れるような被虐の快感もないことはなかった。

十字軍の妻が、愛する夫から女性用貞操帯を装着された時は、今の私のような気持ちにさせられたのではないかと察しられた。

私は両手両足を大の字に拡げた形で、木綿紐によって、ベッドに仰向けに固定され、口は生ゴム棒付き生ゴム嵌口具で締め付けられさらに、腰も生ゴムの男性用貞操帯で抱束されてしまったことになる。

「工藤さん。こんなにされて、さぞ喜んでいらっしゃるでしょうね」

絹子の声は楽しそうだったが、私は喜ぶどころではなかった。しかし、美しい絹子に虐げられていると思うと、痛烈な歓喜が沸き起こって来るのも否定できなかった。

「さあ、貴方が望んでいる私のミニの中を見せてあげましょうね」

絹子もベッドに上がって、中腰になった。

黒色のミニのドレスの中では、むっちりした白い内股にピンク色の網のパンティが蠢めいていた。

「私、月経帯を着けているのよ。貴方は、こんなのが好きなんでしょう」

私の顔の上に、月経帯に包まれた匂うような柔らかい肉体が落ちて来た。すべすべした弾力のある重さは快かったが、少したつと苦しくなってきた。なお、それより苦しかったのは、鼻を押しつぶすように覆われたため、呼吸が出来なくなったことだ。ここだけは自由な頸を、しきりに動かして、月経帯の下で呼吸できる位置を探し求めた。やっと、甘ずっぱい香りを含んだ空気を僅かずっ吸い込むことができた。生ゴム嵌口具を嵌められているため、口から空気が吸えないのが、うらめしかった。

軀全体にも、柔らかいが重い圧力が掛けら

れてきた。絹子は、ヒップを私の顔の上に置いたままで、寝そべったらしい。

そのままの状態で苦痛に慣れかけた時、私の顔を、圧しているヒップが大きく動きだした。また、呼吸困難になった。私は必死に頸を動かして、空気の得られる隙間を探し求め辛うじて月経特有の薫りを含んだ空気を、極く僅かずっ吸い込むこめるようにはなったが気が遠くなりそうだった。

「あら、息が出来ないようね。御免なさい」

優しい声がして、鼻を圧し潰していた月経帯が離れていった。私は餓えたように、息を吸った。

暫くすると軀の上の重しも取れたので、ほっとした。絹子はベッドから降りたらしい。「工藤さん、もっといい事をしてあげますわよ」

私の大の字にされていた両手を解いてくれた。それでも、まだ、ぐったりとしていた私が両手を動かそうとする前に、絹子の柔らかい手が、私の両手を後ろに組ませ、それに、堅い手錠を喰い込ませてしまった。それから両足を解かれた。

「さあ、ベッドから降りていらっしやい」

後手であり、しかも、腰に生ゴム棒付き生

ゴム帯を締めあげられているので、軀は動かしにくかった。痛みが走るのを我慢して、やっとの思いでベッドから降りると、絹子は私を引っばるようにして、バス兼トイレの中に連れ込んだ。

私は堅いタイル上に跪かされた。口枷を外してくれた。ほっとした途端に絹子の両膝が私の顔を挟むようにして固定してしまった。

「聖水をあげるわよ。口をしっかりと開けて」
絹子の声と共に、生暖いしぶきが降り掛かった。

私は反対に口をしっかりと閉じた。だが、聖水は鼻にも入り、目にまで入って痛かった。

もう、これ以上、絹子の許には居れないと思った。絹子はセックスの女王になっている積りだろう。だが私は、いくらなんでも、こんなにされるのは嫌だ。

私は口実を作って、お礼をした後、早々に絹子の許を引き上げた。私は、もうこんな絹子とのプレイは金輪際、御免だと思った。

だが、別れ際に絹子が囁いた。

「工藤さんは、また、きつと私の許に来ますわよ。その時はもっと喜ばせてあげるわね」

私は、その言葉が、妙に耳の中に残って消えないのである。
(おわり)



— 乳房を抉り取る —

都内の洋画封切館（STチェーン）で見た「ソルジャーブルー」と云う作品は、顧名思りへ青い制服を着た騎兵隊Vの物語だが、最大の見どころがラストの15分間。へこの残酷シーンを眼をつぶらずに御覧になれば「SO

ンミ村事件」の皆殺しを想わせる、徹底した先住民（此処ではアメリカのインディアン）に対する「殺戮場面」が、圧巻と云おうか、凄惨であった。

こんな興味本位の暴虐場面が、果して、許されるべきかどうかは別として、宣伝パンフレットまでが——婦女暴行、虐殺——を売物

南彦造（カットも）

最近の洋画と残酷

— 女責め図絵の系譜 —

にしていた。

物語は1860年代のアメリカ中西部——コロラド附近——西部開拓史を血で彩った、白人とインディアンとの戦いだ。

なかでも酷かったのは、1864年——コロラドのサンドクリーク附近の戦いで、シャイアンの一族600名が虐殺されると云った事件の再現シーンだ。この映画は、その史実をモデルにしたと云うから、どぎつい描写にも意味がある。

○

西部劇の内容も変わったものだ。苦い歴史の想い出を監督ラルフ・ネルソンは、冷静に

描き上げ「フロンテア・スピリット」なるものを批判しているのだ。ラストのタイトルがふるっている。監督は、最後の締めくくりとして△この事件は、アメリカ西部開拓史上、拭い去る事の出来ない、恥すべき行為であった▽と結んでいる。

戦争を回避すべく白旗を掲げて、駆けつける酋長の一行に、騎兵隊指揮官は、非道にも砲撃を開始させたり、△豚だ！▽と、嘔鳴り△野蛮人だ！▽と蔑視して憚らないのだ。白人指揮官の傲慢なる態度と、無力に等しいシャイアン部落の婦女子との対決は——いったい、どっちが正義なのか？——と疑問を抱かせる。

主演の女優——キャンデイス・バーゲンや男優——ピーター・ストラウスも「いったいどっちが侵略者なんだ？」と画面で、投げ掛ける科白の小気味よさ！

△白人の中にも「良心」はあったのだ▽と、作者は云いたのであろう。

個人と集団とのギャップそれは、何時の世にも見られる悲劇だ。個人的には立派な男も存在しているのに個人が集まって集団ともなれば、個々のちっぽけな「良心」など云うものはケシ粒のように、吹き飛ばされてし

まう。政治という巨大な激流の前に押し潰されてしまふ、小さな「良心の叫び」が、何時迄も印象に残る。

こうした矛盾を、此の作品は、切実な問題として味あわせてくれる。それは、その尽、我々に「ベトナム戦争」に於ける「アメリカ軍」を連想させるのだから皮肉である。

戦後派の日本の若者は戦争の現実を知らないから、戦争を体験した者ほど感銘は受けまいと思うけれど、中年以上の太平洋戦争参加者なら、この作品の意図が、痛いほど分かるに違いない。

よくよく考えれば、西部開拓時代と云うアメリカに於ける「戦国」の様相は、我が国に於ける「戦国時代」その儘。あの下剋上（げこくじょう）（家が主人を殺す）と云った、知性も何もない勝者だけの天下——を想わせて、慄然とせざるを得ないのだ。

しかも、そうした未開時代の野獣性は、現代のような宇宙開発時代に到るも、少しも変わらないのだから、文明とは何ぞや？——とあきれてしまふ。

○

さて——その殺戮・暴行・強姦——の場面だが——シャイアンの男たちを絶滅しておい

てから、騎兵隊の男たちは、部落のテント内に避難していた、老幼婦女子の群れに襲い掛かり△焼き打ち▽の暴虐に出る。

テントに火を点けられては堪ったもんではない——悲鳴、叫喚、逃げ廻るもの——火に追われて、穴から匍い出す蟻のように、右往左往する女子供たちを、すかさず攻撃する騎兵隊の面々は、恐怖に立ち慄む少女の首を馬上から、バサツと、なぎ払う——血しぶきをあげて素ッ飛ぶ少女の首が、まるで、西瓜か南瓜のように、地上に転がって——二転、三転する。

美女と見るや、飛び掛かり、上衣を剥ぎとる。たちまちに、プリプリと躍動する両の乳房が、明るい太陽に、見事に露呈し、まばゆく反射する。

その茶褐色の健康そうな乳房に、武者振りのつく白人の男は、更に、恥知らずな行動を開始し、下着の最後のものまで剥ぎとり、堪能するのだ。

驚嘆みに、たわわな乳房を握る男の、むくつきき五本の指——ギャッ！と悲鳴とも号泣ともつかぬ、奇矯な叫び声をあげて、のけぞる茶褐色の女の、異常な姿が——美しくも哀れだ。

それでも、なお——無情にのし掛かって行く白人の逞しい容赦ない暴虐の下で、成熟した手足が、パタパタと無力なあがきを繰り返す——だけ。何ともはや／＼無残な残酷絵図だ。

○

また、ある男は、酋長の姉妹かと想われる——眉眼美わしき婦人に挑み掛かった。

すると、他の男たちも寄ってたかって、逃げ惑い、抵抗するこの女を、手取り足取り、——上衣の布を破り、下着まで引き剥がして——たちまち素裸にしてしまう。

女の生命の部分は、修正して見せないよう消してはあるが、完全ではないから——チラチラと翳が、散見して、美女のポリュームをいやが上にも昂揚せずに措かない——魅惑となって展開する。

しかし、それだけでは済まない。——全裸にしてしまったので女体の魅力は倍増した。女の隠された部分が暴露されて、見れば見るほど豊かな女の肉体で、プリプリと、まろやかな重みを見せて伸縮する乳房は、男にとって堪まらない見物だ。

抗う美女の悩ましさ。女の必死の瞳が美しい。盛り上がった円い肩から二の腕の辺りに

かけての肉付きが、やはり女盛りの成熟さを見せて、男たちに迫る。

腋毛の、たわわな黒さが痛々しい限りだ。内外を問わず、人間の腋肌は、日翳だから女体の中で一番白く、キメ細やかで美しい。思っで見れば——なるほど頷ける雪肌であった。女は男に腕を逆にとられ、最早、集団の暴力に抗し切れず——救いを求めるだけの呪号へと変わって行く。

女が前踞みとなり、羞恥を隠そうとすればするほど、幅の広い腹部から両側の骨盤高位の、蜂の胴のように細くくびれた辺りにかけて、幾条もの横皺が走った。

円々と窪んだ——果実の臍を想わせる、腹部の中心が、瞬間的に縮むと、その横皺の山脈の幾つの中に深く没し去った。見えるのは、よく肥えた下腹部の美事に盛り上がった円丘を一面に蔽い尽している、たわわな黒い翳のみだった。

その翳も、映倫の規定により、修正を加えられてはいるが、よくよく眺むれば——そのたたずまいの成熟さが想像出来る程度の修正で、見る者にとっては有難い光景だ。

しかし、この美女の最期も、苛酷の極みだった。

逃げようと必死で抵抗するのを、四、五人掛かりで、地上に転がし、前の方に位置した男は女の両手を広げ、手首を掴んで押え込む——恐怖に戦く両眼を、カッと見開いた女はそれでも顔を左右に振って、男の攻撃から逃れようと腕く——頭髮が海藻のように流れ、乾いた砂上を、まるでブラシをかけるように匍い廻る。

他の男は、後手に廻り、パタつく女の足首をとって左右に捻げる。

蛙のように大地に引き伸ばされながら、それでも、男の攻撃から逃れようとして、女は抗い、獣のように咆え、必死で呪号しながら抵抗しつづける。

だが最後に、最も淫らな残酷野郎が、いきなり、隠し持ったナイフで、鮎パンの形よろしく盛り上がった一方の乳房を掴むと、根元からザクザクと切り取りに掛かったのだ——女の絶叫！

前代未聞の／＼乳房抉りだ。

観客は思わず「ヒエーッ」とか、ふッと溜息まじりの歎声だ。かつて、此処まで描いた映画監督が居たであろうか？

邦画の映画製作者たちは、こぞって税関や映倫の検閲について不満を持っている。映倫

では、検閲ではないと云うが、税関のように法律で、規制したり、映倫のように（倫理規程）なるもので、尺度を計る以上——やはり（検閲）ではないか？——と、思うのだが、『邦画に辛く、洋画に甘い』と、カットの部分について非難しているが、確かに同じような構図だったら邦画の場合には（上映禁止）ものであろう——と思われる。それは凄まじい光景の連続であった。

その他の場面を拾ってみても——テントの支柱に両手首を縛り上げられたノーマルなポーズではあるが、（吊り責め）の全裸体が正面きって映し出される。

豊満この上ない美事な乳房が、観客の眼を奪い、曝き出された、腹部から、下腹部にかけてのグラマー振りが、見物であった。

そして、此の場面でも、修正した部分の、たまたまいの不十分さから、チラッと散見出来て、残酷そのものであった。（1970年度、アプロ・エンバシー作品・ブエナ・ビスタ配給・デクニカラー・パナビジョン・1時間52分）

——黒人女が責められる——

電話交態魔を描いた（アニメ）と、SE

Xウエスタンの快作と云われる（続・アニメ）及び、西部劇にSEXをハレンチに、ぶち込んだ刺戟篇（新・アニメ）は、食傷気味だった（アニメ）ファン（の）願いを見事に擱んだ。

監督のR・L・フロストはアメリカの南北戦争直後に材をとり（黒人女メイド）に対する男たちの凌辱（や）白人女への同様な私刑（の数々）を描き出しているが、思わず「ハッ」と呼吸を呑むようなサド・マゾの分野を開拓している。

宣伝の解説によれば（新・アニメ）はSEXの面白さの中に、残酷趣味を加えた西部劇にあらず、性部劇女残酷史なり——と謳っていた。

出演者は「ラブ・キャンプ・セブン」のセクシー女優（マリア・リース）と、黒人女優（ローダー・スペイン）で、共に肉体美が売物だ。

物語は1865年——南北戦争の終わった頃のアメリカ・テネシー州のテーズウエルの町が舞台だ。

南軍のハリス大尉（ジョン・ササン・プリス）に率いられた兵隊は、終戦も知らずに、忠実

に上官の命令を実行していた。

一軒の酒場では、手向かう男を射殺し、女たちを駆り集めての（酒とSEX）の満喫だった。

そんな描写は、軍閥はなやかなりし頃の、日本兵と変わらぬ、乱痴気振りだ。

その頃——折り悪く、町を通り掛かった、ネルソン中尉（北軍）と、許婚者のフェイス（マリア・リース）と、召使いの黒人女のナンシー（ローダー・スペイン）の三名が捕えられる。

激しい拷問と凌辱だった。（北軍の金貨輸送隊の所在を教える）と、云うのだ。

ネルソン中尉は、男だから、その拷問の方法にさして特色はないが、美人の許婚——フェイスと、見るからにグラマーで、素晴らしいポリュームの黒人女性（ナンシー）に対しては、長い間SEXを断っていた兵隊どもだけに、その凌辱の方法も、男本能むき出しの荒々しさだから、すさまじい。殊に相手の女が黒人であった場合——かくも凄惨な、修羅場と化すのであろうか？

黒人女とは云え、教養もあるナンシーが、酒場のカウンターに担ぎ上げられるや、まっ

たく動物的な悲鳴だ！ 見栄もなく激しく抵抗するのを、猫が鼠を弄ぶように、手取り足取り、上衣を引裂き、下着を奪い、たちまち裸にして終まう。そのナンシーの抗い振りがあまりに手強いので、押えつけていた男は、振り廻される始末で、思うように目的を遂げられない。

戦地の兵隊や、遊侠のならず者どもが、ひよわい女達に加えたリンチの生態も、かくあるのか？——と想うばかりの描き方なのだがその演出のリアリティには、兜を脱がざるを得ない。

また見ている方で、妙な気分させられるような出演者の熱演も、また見物だ！

特に選ばれただけあって、メイドに扮するローダー・スペインの黒い肌が惜しげもなく画面に曝け出されると、黒人女性特有の八逞しいばかり動物的な、野性の魅力が、一枚加わるのだから、乳房と云い、あぶらぎった太腿の魅惑と云い、ビヤ樽を想わせるヒップのラインが、ブルンブルンと躍動して、まさに正視するに、忍びない「黒人侮辱」の場となるのだ。

「ブラック・パワー」の台頭しているアメリカでは「上映禁止」のセンセーションを巻き

起こしたとか？——とにかく、黒人女に対する「輪姦」と「暴虐」に関する限り、白人とは、対照的に「非情」で「残酷」で「SEX欲」まるだしの、赤裸々な阿鼻叫喚の「地獄図」を現出するものであった。

○

観客の反応を拾ってみよう。西部劇が、何時の間にか猛烈ピンク映画になってしまった（十九才・学生）とか。西部劇ではないモレツ強姦映画だ（25才・会社員）。洋画ファンの女性に見せちまおう！ その反応が見ものだ！ 彼女のセックスが騒ぎだてるだろう（30才・セールスマン）。とか、とにかく呼び物の暴行場面では、かなり、強烈な興奮に悩まされ続けたようだ。

週刊実話16号で、淀川長治氏は「これがSEX映画の代表でなければ、何をさして代表と云うのだろうか？ 人間問題・社会問題をふんだんに取り入れ、まさに人間の本性を抉った作品だ」と独特の痞高い論評だった。

この映画の、女性観客層に与えた影響も大きい。変な欲望にかきまわされ、思わず膝が自然に開いてくるみたいな感じになってしまった。（BG・23才）と云ったものや。あのシーンを見ていると、自分もそのグループに

犯されているような錯覚に落込んだ（主婦・30才）など、倒錯味旺盛な映画であった。

（原題・THE SCAVENGERS・1時間45分・NCC配給）

——女性自身のピン責め——

「アニマル」シリーズの意外な好評に、氣をよくしたアメリカの独立プロが、フロスト監督に負けるな！——とばかりに、またも「西部劇」にあらず「性部劇」に、アタックしたのが——ウィリアム・ヘニガー監督の「女狩り」だ。

この映画を見てみると、日本のピンク映画もどきの、サディスティックなSEX場面の連続なのに——まず愕くであろう。だが——しかし、製作費に於いて、2、3百万円也の邦画ピンク物と違って、珍しく——100万ドルを売り物にしている大作だ——と云う。その宣伝に釣られて見た。しかし、やはり「キワ物」的ムードは免かれぬ。これも南北戦争直後のアメリカ西部を舞台に展開する巨大なSEXドラマで、殊に「四大SEX場面」が「売物」だった。

その「一」は「輪姦」その「二」は「リンチ」その「三」は「女の局部にピン責め」その「四」は「娘の

読者ギャラリー 『颯り問い』 宮城昌子



肉体提供」である。

(一)四のハイライト場面は、従来の洋画に

もよく見られるケースなので、さて置き——
 ③の『ビン責め』は珍らしく、リアルで興奮

させる。

場面は——酒場女（サマンサ・ウォーシントラ）の局部にウイスキーの大ピンを、ぶち込んで責めたて、最後には殺して終う——と云う——大久保清・顔負けの——空前のハレンチ描写だ。

過去の洋画でも、私はいろんな異常サデイズムVやハマゾヒズムV作品を見て来たが描写のリアルさに於いて、この映画の右に出るものはない。

南北戦争が終り、新しいアメリカが生まれても、荒れ果てた人間の心には暴力とS・E・X・Vしか残らない——と云う空しさは、現代

にも、通じるであろう——テーマは立派だ。それだけに演出者の気魄も分かるし、出演者の熱演は、人間同志の持つ無法さを、むき出しに、していて、残酷——そのものであった。

○

物語は八街はずれの酒場V——無法者のボス・パート（ステイプ・リバード）の部下三人は、仲間を殺されヤケ酒を飲んでいた。酒場には若くて美しいマダム（サマンサ）一人が彼等四人の相手をしていた。

酔った四人は、美貌でグラマーなマダムに眼をつけ、彼女を襲おうとする。

マダムは、危険を感じ乍らも、「誰が払うの？」

と、無銭飲食はさせまいと詰る。

ボス「お前さ！ お前が払うんだよ！」

と淫らに尻を下げて、ニヤニヤ笑って近づく。マダムは、男の野心を知って、思わずカウンターから逃げようとする。ボスは、そんなマダムの疑惑と恐怖に満ちた顔を、残忍な眼付で、あざ笑ひ乍ら、女の胸元を、掴んで引き寄せようとする——ボタンが切れて、コボレ出る、立派な乳房——うまく後退し、破れを合わせる隙に、カウンターを乗り越え

たボスは素早く、マダムを抱き上げる。

なんとも意味の分からない奇声をあげ、両手足を、バタつかせて暴れるマダム——ボスは、そんな女のはかない抵抗など相手にもせず、軽々と物でも置くように、カウンターに乗せる。

他の三人の仲間は入待ってましたVとばかりに、頭の方に位置した男が、チラつくマダムの乳房を、無雑作に露呈する。必死で破れを掻き合わせようと暴れるマダムの両腕とった男は、無遠慮にも一層、大の字なりにマダムの体を、押えたので、鳥肌たったバストから円い肩の脂肪層まで、小きざみに震えているのが分かる。堅い感じの乳首は、無念げに宙を睨んで、男たちの眼下にあった。

一方、マダムの足の方に陣取ったボスと、残る二人は、長いスカートを捲り上げ——ブルマーを脱ぎ奪りニヤニヤと含み笑い——動けぬよう、力まかせに、両足首も左右に固定した。

カメラの位置が、マダムの顔の方なので、下の辺りで、何事が行われているのか?——よく分からぬが——マダムは胸を反らせ、腰を振って逃れようと、ヒイヒイ泣き続ける。そんな断続が——女に加えられる男の酷い仕

打ちを暗示して居り——男をして異常なサディズムの境地へ追い込んで終う。

一方——マダムをカウンターに押えつけていた前の男は、悲鳴をあげ、体を振り、顔をそむけるマダムの苦悶の姿態に、リビッドしたのか?——いきなり、顔を伏せ、苦痛に喘ぐ女の唇を吸い、乳房を弄び、はては乳首まで吸いに掛かる。キヤーツと悲鳴をあげたのはそんな激痛のためか?

とにかく——女性の部分に暴虐の限りを尽している男たちの喜悦に歪む眼尻と淫らな手の動きだけは見えるのだ。すっかり胸元に、翻転されたスカートの向こう側で——とにかく男たちの眼が、興味深い目的に注がれ、何らかの作業を、続けていた。時折——断末魔の悲鳴をあげて、マダムは、金切声で動物的な、最後の抵抗だ。僅かでも動かせる部分は両手指は勿論、顔、首、肩、両足の十本の指に到るまで反りかえし、折れ曲って、下半身に加えられる、痛苦の連続に耐えている様子なのだ。

やがて、見るべき物を見——するだけの事を総べて堪能し尽したボスは、棚のウイスキーを掴んで、ポンと蓋を取った。鉄砲飲みしてから、細身の口の方を動けぬマダムの隠れ

た部分へと持って行く。

ヒエーツ! 疳高い動物的な悲鳴が、マダムの唇から進出した。どうやら、ビンの攻撃を受けたらしいのだ。マダムは本能的に泣き許しを乞う。予想だになかった攻撃だ。殺される危険を感じたのであろう——不遠慮な兇器を、奪い取り——ボスの後頭部めがけて一撃したが——そこは男と女の、腕力の差で——忽ち、奪い返された。カウンターの角でピンを叩き割ったボスは——その俎——割れて尖がったビンの先を——マダムの神秘の部分めがけて、突き刺す。

断末魔の女の絶叫が、その暴力の、如何に惨虐無比であるかを——証明していた。

いや! そうした、私刑の歴史はあったのだ。古今、東西を問わず八力の強い者が弱者を制しVそれが男であった場合——女に対する仕打ちの殆どが、かようなものであった。強者が正義であった。強い男には、どんな非道も、人間性を無視した暴虐も許されていたのであった。

そして、その一つの実例を、この作品は、オーソドックスに描いて、見せてくれたのである。

恥部から血しぶきを吐いて、断末魔の苦痛

に悶えるマダムを、ボスの無慈悲なピストルの一発が、憎しみをこめて、射ち出され、マダムの心臓部を貫通した。

乱暴な男たちは最後まで、哀れなマダムの生存を許さなかったのだ。(原題・THE WICKED・DIE・SLOW・10巻・1時間29分・NCC配給)

私の体験より

SEXに対する責めVの数々——それは最も禁忌すべき、人類のタブーなのだが、男の考え得る仕打ちの殆どがSEXに関係せぬものはないのだから——男の業の深さは推して知るべし——で、少しでも減少せしめねばならぬ——と云う、男の努力も、また悲願なのだ。

女性のSEXを尊重する美談の数々は、その時代と場所を問わず、清々しい限りだ。

○

太平洋戦争の最中であつた。南方占領地で「特務機関」と云う——内地で云えば「特高警察」のように原住民から恐れられていた兵士がいた。彼は後天的サディストVとでも云うべきなのだろう——職務には、非常に忠実であつたから、スパイ容疑の現地人男女や

白人の混血などを捕えては、拷問にかけたよう、現地人の憎悪は酷く、結局——敗戦後「戦犯」として「処刑」されたが——そんな彼も、私の知る処では「美しい人間愛」の持主で、僅かだが——一部の混血や、原住民から身内のように慕われていた。

彼に云わせれば「大和魂」とか「武士道」と云つたものは、所謂「人倫の道」で、西郷隆盛の「敬天愛人」こそ「正義」であり「人の道」である——と説いていた。

その一例として——白人混血の女スパイ容疑者を逮捕した時のこと——彼は、この妙齡な美女を前にして、決して手荒な拷問に掛けようとしなかったので、周囲では、彼が「女スパイに惚れている」からだ——と語り、彼に取調べは許さず、他の兵隊に交えたのだ。

彼女の立場は逆転した。忽ち、素裸に剥かれて、凄惨な性的拷問Vに掛けられた。

彼女の象牙の肌は赤く腫れ上がり、その尽——部屋天井から「逆吊り」に、されたのだ。瀕死の彼女に、炊事用の「巨大な大根」が用意された。

その大根の使用目的はいわずもがなであつたが——八の字に太股を拡げた彼女が、まさに引裂かれようとした瞬間——沈黙の尽、取

調べを見守っていた彼は、拷問中の兵隊に云つた。

「彼女は我々の拷問を嘲うに違いない。まして女性の「生命の部分」を破壊するような行為があつたとしたら、日本軍の恥辱ではないか」と、きつく、たしなめたのであつた。

彼の意見で「混血女性の秘部」は守られたが、なお厳しい拷問は続行された。彼が興味本位の「女責め」を中止させ「女体の尊厳」を守り抜けた裏には、彼の「誇り高い知性」と「教養」の裏づけがあつたのだ。

○

彼は、「鬼の特警」と、現地人の間では、恐れられた存在であり乍ら、貧しい者や、病人、困窮者には、よき「相談者」であつた。

彼は「忠良な兵士」ではあつたが、実は「理想に燃えたヒューマニスト」でもあつた。

彼の職務は「スパイ狩り」ではなく、現地人の「保安秩序」が主要な目的だったから、仲間といえど「女の弱味」につけ入って「肉体を奪う」と云つた悪代官的な行為は、厳に取締っていたようで、彼が「盛り場」の「巡察」などに行けば、現地人の笑顔が断えないのであつた。彼にとって「悪人共」の存在は「日本人」/「現地人」を問わず許されなかつ

たのだ。

組織的な敵スパイ網の発達した南方占領地では何時、何処で、何を日本兵はしたかVと云うことが、その日の中に知れ渡るほど早いのであった。——しかも、それは恐ろしいほどの隠密さで電波のような速さだったから——愕く。

○

シンガポールの陥落（昭和十七年二月十五日）直後のことである。私は△南方映画工作要員Vとして、現地に派遣された。

もとイギリス領植民地だったので△親英分子Vも多く、油断も隙もない土地柄で、私たちは△常に敵に包囲されたV形であった。

私は、現地の人が好きだったから、勝者と敗者の区別なく——平等に交際したつもりだし、私の名前が、中国人と似ている処から、華僑に△貴殿は、広東か、福建か？Vなどとよく訊かれたものだった。

そんな——ある日。私は△華僑街Vの雑貨店で買物をしていた。店の主人公や奥さんは大歓迎で、親切丁寧であった。

用心深くて、人前になぞ、姿も見せぬ、美しい娘さんまでが店頭に出て来て、品物を説明してくれるのだ。

当時——日本人に対しては秘蔵している高価な品物など、見せよう筈もなく△掠奪同然の値段Vで、買って行く者もあって、華僑は日本人客には、いちおう警戒心を持っていたのだ。

○

酷い奴なんかになれば——店の娘に悪戯したり、強姦するのがオチだ。無礼を難詰すれば、逆にダンピラ（日本刀）を引抜いて、振り廻し、金品を脅し奪る——など、文明の風上にも置けぬ輩もいたのだから——用心するのも無理からぬことなのだ。

私は、不思議なほど親切な歓待が心配になった。

と云うのは——親切に事よせ、日本人を謀殺する、抗日テロの暗躍もあったし、軍当局からは△現地に近づかぬようV警告もあった矢先だ。

しかし、彼等の眼の中には△真実Vの輝きが、あったように思えたし、警戒せず、相手になつてゐると△私の友人が、良い品物を持っているから、取り寄せましょう。奥の部屋で待っていて欲しいVと、云うのだ。

危い！——とは思ったが、運を天に委せて、店の奥に入つて行つた。

中国風の調度品の飾られたカラーフルな私室であった。

勝手の知らぬ部屋のたたずまいは、なるほど怪奇で、何時どこからピストルの弾丸が飛んで来るか分からない——無気味さだ。

私は落着かぬ気持のやり場に困り——歓待の笑顔を見せる娘さんに△どうして私の人格を認めるのか？Vと、たどたどしい英語で語りかけた。

娘は、黒耀石のような瞳を円くして、ニッコリと頷く——△綺麗な眼だなVと、瞞めると△あなた！信用してるネ！Vと日本語で答えた。

間もなく、主人公も帰り、予想外の買物が出来たのだったが——今度は、金がたりないのだ。返事に戸惑っていると△持つて帰りなさいVと、有るとき払いの催促なしだ。

まさか、品物に、危険物の仕掛けでも？

と、余計に心配になるので△とにかく、後刻とりに来るVと確約すると、主人公は笑顔で△貴殿の住所、氏名、職業など、すべて分かるとるからVと、真顔で云ったのだ。

私は着任して、まだ——一週間にも満たないのであった。だから現地人が知る筈はないのだが愕いたことには△△私の寄宿先がトム

ソソ路の5号地であり、仕事の溜り場は、オ
ーチャー路のクリスタル・アーケードに近い
パピリオンだVと、返答したので、一層愕い
た。

お蔭で、現地での私の行動には慎重さが増
した——青天の霹靂とは、まさに此の事だ。
△すべて筒抜け！Vと云う気持が、若い私の
心構えを慎重にさせたのだ。私が華僑精神を
見習うようになったのは、此の事があってか
らだ。そして、以後——何処の現地に赴任し
ても、華僑とのお交際は断えた事がない。

——低俗に就いて——

今回は△印象に残る洋画の、異常なSEX

「伝言板」○本誌では、寄稿家執筆者投
稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会に
は一切応じておりません故、御安心の上
御送稿下さるようお願い致します。尚手
紙の転送なども原則として取り扱いは
致しておりません故御諒承下さい。
○如何なる理由に拘らず直接発行所への
訪問や電話は固くお断り致します。御用
件はすべて書面にてお寄せ願います。
○編集者に面会を求められる方は、住所
氏名職業を明記の上、用件を附してお申
込み下さい。電話番号、連絡場所など
を御返事申し上げます。予告なしに突然
訪問されてもお逢い致しかねます。

描字V△サド・マゾの世界を取り入れた刺戟
的な西部劇の残酷場面Vなどに就いて拾って
みたが、ノーマルなドラマ構成に飽いた観客
へのサービスとして、抬頭し始めたこれらの
△残酷Vをやはり△来る処まで来たものだV
と云った△低俗化Vとして、歎く△洋画ファ
ンVの数も、少なくないことに、私は気付い
た。

△低俗Vとはいったい何か？ 映画・雑誌・
新聞・TVも含めて、この△低俗Vと云う問
題について△考えてみるV必要があるのでは
ないだろうか？——と私は思った。

つまり△サド・マゾVを扱えば△低俗Vで
あり△SEXVを扱えば△わいせつVときめ
つけられ——すべて△人間性Vに立脚したも
のは、世の識者の指弾を受けているのが現状
だ。例えば、私のように△女の責め図絵Vな
ど描いている輩は、やはり△低俗Vの域を出
ないであろうし——だから、私の最大の悩み
は△低俗Vから△解放Vされたいことだ。

従って△低俗Vの中の、一ツのジャンルで
苦しみ、悩み、作品を昇華させて行こうとす
る地味な努力と研鑽の結晶が、やがては△低
俗Vから、抜け出して行かれるのではないか
——と考える。

百万ベンの理屈より、実際に耽溺して、そ
の中から△物の真理Vを掴んで行こうとする
姿勢のある限り、将来の夢が開けて行くと思
うのだ。

土佐の町人絵師——絵金の、あの凄惨なム
ードが分からねぬ俚にやはり問題になって来た。
都内のデパートでの「展示会」での反響を
拾ってみれば△現代のイラストにも通じるも
のがあるVとか△彩色の妙は、現代人の遠く
及ばぬ処だV△意味の分からない構図もある
が、異常なムードに魅きつけられたVなどな
ど——受け止め方は万人万様だが——幕末の
動乱期にふさわしい絵金の作品を、何とか認
めようとして来ているのは事実だ。

美事なのは△絵金Vと△絵金のオリジナリ
ティVだ。——故伊藤晴雨氏の画業も、故高
橋鉄氏の文獻も、志す処に必死で取組んで行
った生涯の結実であり、だから△尊敬V出来
るのだ。

現代の若者たちは△一ツのことに心から打
込んでいる者を尊敬し、また、そうした人に
なりたいV——これはTVのアンケートだ。
と、すれば、現代の△低俗Vに、体当たり
する若者たちの△将来Vに期待しようではな
いか。

(終)